早乙女貢

忍法かげろう斬り

徳間文庫

徳間文庫

早乙女 貢 作品

おれが天一坊《全二冊》
見習い同心獄門帳
残映
新選組銘々伝
八丈流人帖
忍法かげろう斬り

カバーイラスト＝西のぼる
カバーデザイン＝池田雄一
カバー印刷＝近代美術㈱

早乙女貢
忍法かげろう斬り

徳間文庫

さ
7-7
580

忍法かげろう斬り

早乙女 貢

徳間文庫

9784195992630

ISBN4-19-599263-X

C0193 P580E (0)

1910193005807

定価580円(本体563円)

不知火の海を縄張りに、鍛えに鍛えた忍びの業を命の綱と頼む一匹狼の忍者《鷹》。仕事を引き受けるか否かは黄金次第。知恵伊豆と契約を結んだものの、伊豆の御威光などは屁とも思っていない。それでも、あるときは、ぼるとがるの鉄砲密輸にからむ加藤肥後守の陰謀を暴き、またあるときは、千姫御乱行の真相究明のために江戸の闇を疾駆する——非情に見えて非情にあらず、忍者・鷹の活躍を描く痛快時代小説！

徳間文庫

忍法かげろう斬り

早乙女 貢
1926年
ハルビン生まれ

徳間文庫

忍法かげろう斬り

早乙女貢

徳間書店

忍法かげろう斬り

早乙女貢

徳間文庫

徳間文庫

忍法かげろう斬り

早乙女貢

徳間書店

目次

不知火（しらぬい）の忍者　5
ふたり千姫　44
まぼろし大名　61
くノ一湯女（ゆな）　79
大納言発狂　98
渦潮の忍者　120
姫売り公卿（くげ）　137
辻斬り将軍　154
女歌舞伎（かぶき）　171
くノ一御殿　190
幻の連発銃　209

御朱印紛失 226
闇公方 242
怨霊根来塚 258
白蛇の女 291
色絵皿 322
忍びの果て 340
風魔の姉妹 373
甲賀毒草譜 406
三成の亡霊 439
解説 縄田一男 471

不知火の忍者

1

女は微かに呻き声をあげた。かれの手がゆるやかに下腹から胸へ逆撫ですると、かたくなに横たわったままだったからだをよじって、あえぐように声を洩らした。はじめて登楼った家であり、はじめての女であった。危険な日常の中で、性の快楽をもとめるには感情のまじわりは戒心すべきことである。かれには、またその望みもない。若い軀にあふれるものを吐きだせばそれでよかった。

女は、こうした商売をしているにしては、まるきり愛嬌がなかった。他の女たちのように、往来の男たちに媚を売ろうともせず、ぼんやりと立っていたのだ。

とりたてて、美人というのでもない。むしろ、普通の、歓びをもとめる男たちには、好まれ

ないかもしれない。その日蔭の花のようなところが、かれのいまの気持ちには適っていた。

「登楼るぜ」

と、言い、かれは長い柿色の暖簾を肩でわけて入った。女はふしぎそうに見た。

あら……と思いがけなかったように、眼を瞠り、馴れた調子の男のあとから入ると、脱ぎ捨てた草履をはたいて、手に持ち、

「お二階よ」

と、眼でさした。

女が意外に思ったのは、駈け上がるように早かったにもかかわらず、この客が足音を立てずに梯子段をのぼったことだった。

安普請だから、子供でも上がり下がりにギシギシいやな音を立てる。客の中には、その音で興を冷まされたと怒る者さえいた。家ぜんたいが、古く、建てつけが悪くてなっているからそのいやな音が枕元へひびいてくるのだ。その梯子段を、男は音もなく上がった。まるで、影がのぼっていったようであった。

岡場所——という言葉はまだなかったが、御法度をおかす街中のこうした隠し売女の客は、きわめて直截なものである。部屋に入ると、まるめた蒲団を長く延ばす。枕を二つ置く。それだけの支度だった。女は帯を解いて横になりからだをひらく。笑顔を見せるのは、まだマシな方である。

一切の修辞がなかった。男のもとめるものははっきりしている。こうした場合、情緒はうすい。男は女の肌を貪るためにくるのだし、女は、肌の切り売りをしている時間だ。かわいていた。男の獣欲だけが、空間を占める。それに応えて、なにがしかの鳥目にありつく、それだけのことだ。が、この客と女の場合は少し違った。

女は長襦袢になると、もの憂げに客をふりかえった。

「灯は？」

「どうでもいい」と、客は投げやりに言った。

「おれには、どっちでも同じだ」

その言葉の意味を、どうとったのか、行燈の燈芯を細めただけで、女は身を横たえた。

煤けた行燈の仄明りのしたで、女の肌は異様なほど白く見えた。まだ荒れていない。かれの指が、胡頽のような乳首に触れても、顔をそむけて、凝然としていたが、くびれた胴から腋窩にゆるやかに撫であげると、耐え得ぬような声を洩らしたのだ。

惚れる気はなく、惚れられる気もない。女体が潤えばよかった。白い下肢が悶えてひらくと、かれは熱い裡におのれを容れた。

それまでの無愛想な態度を詫びるかのように、女は燃えた。まるで燃え易いおのれの軀を熟知していて、意識的にそれを拒んでいたようであった。禁を解いた肌は火のようになり、男の胸の中で狂いたった。

その客にとって、女体のこの変化はわかっていたようである。冷たいほど表情が変わることなく、放ち果てた。

「あ……もっと！」

それきりで、客が離れると思ったのか、女は、さらにしがみついた。すでに何度か気を遣っていて不足はなかったはずだ。

豊かな乳房を波うたせて、女の手は男の下腹をまさぐり、まだ萎えることなく、逞しくそそり立ったものを摑んだ。

「――大きいのね……好きよ」

商売女が、こうした態度に出ることは、めったにない。それだけ、素人臭さがあった。女は、商売気を離れて燃えたのだ。

「おねがい、もっとして」

濡れたなかに導こうとする。

そのときだった。男の冷たい横顔に影が走った。きらりと、眼が光った。ふっと、灯を吹き消した。行燈はたたみ一枚離れたところにあった。息は、ひとすじの箭のように奔って、あざやかに吹き消したのである。行燈障子の破れ穴から、燈芯がゆらぐのが見えたのを最後に、魚油くさい闇がすっぽりとかぶさった。

「あれ、どうしたのさ」

女の声を剪るように、突然夜気が哭いた。

礫が飛んだ。しゅっと闇を裂いて奔ったものが鈍い音を立てて柱に食いこんだ。

「……」

まるで、そのおかえしのように、柱の上に貼ってあった、何かの護符が剝がれ、ひらりと落ちてきた。

枕元である。闇の中だったが、男はその白片に書かれた字を読んでいる。

〝信〟

――たった一字。

一瞥すると微かに舌打ちをきかせて、男は身を起こしている。

「帰る」

「あら、もう？　ねえ、又来て下さいまし、ねえ、きっと」

女は商売用ではなくとりすがって、お名前だけ、聞かして、と言った。

闇の中で手早く帯をしめなおした男は、他人事のように答えた。

「鷹と呼ばれている」

上がってきたときと同じように、足音もなく消えた。枕元に一ト切れの女遊びにしては過分な豆板銀が残されていた。

〈――せっかくのところ、邪魔をしたようだ〉

どこかで声がした。聞き馴れた声だった。鷹は歩いている。その耳に、追いかけてきた声である。姿はない。ただ声だけが聞こえてくる。鷹も歩きながら応えた。

〈いつものことだ、邪魔でないときがあるか〉

突っぱねた。それに媚びるように声はついてくる。

〈そう怒るものではおざない、好きであらわれるのではない、あの方の命令じゃ、文句があれば、あちらへ申してくれ〉

〈よく嗅ぎつけるな〉

〈江戸の内ならばな……それより、おぬし、忍びの身で、なにも銭出して女を買うことはあるまい。女にはいくらでもモテルおぬしではないか〉

鷹は苦笑した。

〈おまえにはわかるまい〉

〈わからぬ故、問うておる。娘でも人妻でも寝ているところを犯すのはおぬしも自在ではないか、何も銭を出してまで女を買うことはあるまい。つまりは損……〉

〈銭を出すからいいのだ、生業を忘れることが出来る……〉

所詮、宮仕えの忍者などには、この気持ちはわからぬ、と、鷹は思った。

乱世には大名の抗争の中で暗躍をほしいままにした忍びノ者も、世の中が治ってくると、その活躍の舞台を失った。数百年の長い乱世の劫火が熄むや、世間はその安らぎに、人間の暮らしの喜びを見出して、二度と劫火を招こうと思わない。

嘗ては天下の権力をめざして鎬を削った群雄も、信長から秀吉、そして家康と権力が移り、徳川将軍も三代目となって定着すると、その権力構造の中に、おのれの寝ごこちのいい塒をこしらえて安逸を貪るようになる。

忍びノ者は、乱世が生んだ落とし子でもあった。人が人を疑い、血が血を呼ぶのが日常の中では、裏切りも常態であり卑劣という言葉はなかった。ただ勝てばよかった。如何なる手を用いても、勝つことが正義だった。

夜の闇を利用し、反間細作に腐心するのは勝つための方略であり、その行動の手として忍びノ者を輩出させた。

伊賀甲賀が由来、忍びノ里として重宝されたのは、京に近く東国への要衝に位置して、何処へゆくにも、道が通じていたからである。そのくせ、地の理は容易に他国者の侵入を許さず、ために山岳跋渉など飛翔跳躍疾走などの特技を錬るにも適していた。忍びノ者を培養する条件は揃っていた。

伊豆に興った風魔の忍びも又、別の意味で要求に適った。当時関東十州といったように、坂東の草深い土地は戦火の絶え間なく、荘園のとりあいにはじまって武辺者の勢力争いが凄じかった。伊豆や箱根の山中は耐忍してのワザを習得するのに恰好の地であった。

ついでにいえば紀州の根来、大和のそれも、それぞれ年月をかけて忍びノ者という技術者を作りだすのにふさわしい環境があった。

鷹——この不知火忍者は、忍びのワザにかけては他流に劣らぬ卓抜したものを持ちながら、一般に知られなかったのも、辺土に在ったことと無関係ではない。が、しかし、それだけにはとどまらない。辺土に在り、無人の小島や海をおのが縄張りとして鍛錬した不知火一族のワザは同業の者に驚異の眼をひらかせたのである。

乱世には、供給に困るほどの需要があった忍びノ者も、天下が泰平になると、しだいに淘汰されていった。

世の中は生業をもとめる者には非情に出来ている。個人の希いと大勢とは常にバランスがとれないものだ。

関ケ原の戦さにはじまり、慶長元和の大坂ノ陣によって、歴史の流れは決定し、巷には大量の武士があふれた。いわゆる牢人（浪人）であった。大坂方に属したことで取り潰された大名家の武士はおよそ二十万人。半分ほどは再仕官が出来たとしても十万人の牢人が職を失い、妻子を抱えて彷徨したことになる。

兵法にすぐれた者は、仕官は容易だが、そうでない者には、道は閉ざされた。忍びのワザは、公然のものではない。

〈透波〉あるいは〈乱波〉

といわれ、

〈軒猿〉または〈かまり〉

などと罵られた忍びノ者も、その情勢の除外者ではなかった。いや、もっとも影響を強く蒙った。

封建の規律の中では必要ないとされたのは当然である。周知のように、服部半蔵の伊賀者たちが、お広敷番、黒鍬ノ者など少なくとも表向きは下級役人の地位に編入されたように、大量の忍びノ者は自ら転職を余儀なくされた。

それだけ、幕府も、諸大名も――譜代・外様の別なく――泰平の幻想を抱いた。

それが幻想にすぎなかったことは、これから以後の不知火忍者の動向が示す通りであるが、忍びのワザを売って生業とした者たちが、あるいはワザを捨て、あるいはそのワザを生かして、糊口の資とするしかなかった。

残ったのは、殊にすぐれた者たちであった。

柳生流兵法が、一兵法から出でて大名にのし上がったように、一流の腕があれば変革期には道はあるものだ。忍びノ者の場合、特にそのことがいえる。

徳川氏は天下を奪うために、多くの忍者を必要としたが、今度は幕府を存続するために、忍びのワザを捨てることが出来なかった。

封建の政治もまた奇妙な矛盾を孕んでいる。命令出来る立場にありながら、地方に蟠踞する勢力の内情を探索する必要が、忍びノ者を派遣せざるを得ない。だが、痛くもない腹をさぐられる方では、憤慨する。痛い腹なら尚更だ。

忍びノ者は、発見されたら、そこには〝死〟が待っていた。指嗾者からしてみれば、使い捨てのワザが必要だった。そして、それは、幕臣であっては困る。もとより身分を隠しての行動ではあっても、家臣として抹殺されていれば、分明なことだ。逆探知されれば、わかってしまう。

そこに、使い捨てても苦しくないワザ者を需める理由があった。

もともと家臣ではない。埃の出ようはないのだ。報酬が、かれを行動させ、仕損じても幕府

の〝手〟である証拠はない。

狡智な為政者は、常に言質をとられぬ。冷静な計算が、部外者を一時的に〝雇う〟ことで大事を処理するのである。

2

その冷徹な為政者、松平伊豆守信綱は小用を足しながら、

（来るかな、彼奴）

と、鷹の面影を描いていた。

呼ぶほうも時間を選ばないが、呼ばれるほうも、気随である。そこには、主従の持つ淫靡なものはない。金がすべてを淡白に割り切った。

お庭番は、その卓抜した忍びノ者に指令を伝えるのに役立つ。御朱引内といわれる江戸府内では、どこに潜んでも見つけ出す。縦横の連絡をとりながら、鷹を探しだすのだ。

前述のごとくである。

鷹は、しかし、その指令を受けてもあらわれないことがある。伊豆守は、何度かすっぽ抜かされた。

「気がのらぬ」

と、鷹は言う。

「忍びのワザは、気がすすまねば、日ごろの十が一も成らぬものよ」

だが、忍び細作の必要があればこその頼みである。気分しだいで、諾否があっては、行政にさしつかえる。時には、幕府の屋台骨をゆるがすほどの大事がある。

「気がのらぬか、のせろ」

強引にくどくことがある。

「左様だな、のせるか」

めったに笑ったことのない鷹が、こう言って皓い歯を見せる。

「黄金の光りが、おれの気を変えるかもしれぬ」

けろりとして、鷹は値上げを要求する。それは、指令を受けたときの気分によるものだった。その意味では、この日のように（銭を出して）女を抱いている最中に呼び出しが来たことは、気分が悪いにちがいなかった。

（気まぐれなやつめ）

時には、腹だたしくなる。

松平伊豆守信綱は、幕府草創期の為政者の中でも剃刀のような頭脳をもつと聞こえ、才智比類なく、冷徹にして果断に富み、御用部屋でも、かれが入ってくると、おのずと空気が冷たくひきしまるのをおぼえるといわれたほどの男である。

智慧伊豆――

誰がつけたのか明らかでない。三代将軍家光が、戯れに称ったという説もある。同輩の慢れ

が生んだ称かもしれぬ。ともあれ、それほどの男が、この不知火忍者〈鷹〉には、時々、手を焼かせられるのだ。

（彼奴など、使わぬでも）

と、思うことがある。

他にワザ者を探して使ったことがある。が、そのいずれも、失敗した。老巧な忍者もいたし、非情のゆえに役立つと思われた忍者もいた。が、その時々に於て、性が合わなかったのかもしれないが失敗した。

虫ケラのような忍者の死は、何ほどの痛痒もない。御用部屋の用金からすれば、たとえ捨て金になったとしても、知れている。困るのは、時機をはずすことだ。

ものごとには、総じてタイミングがある。幕府にとって由々しき大事に際会し、内奥をサグリ、その処置をするには、時宜を得た方法の如何が、行政の手腕となる。一日半日の違いでも、大事を惹起することがあるのだ。

〈鷹〉の性格と行動が、智慧伊豆にとっては、したがって痛し痒しの場合が多い。

（来るのか、来ないのか）

焦々して待たされる。

あらわれるのも、意表を衝かれることが多い。変装に巧みな忍びノ者である。まるで、伊豆守を嘲弄しているとしかとれないような態度を示すことがある。

（若いやつだ……昔の忍びノ者はああではなかった……）

血なまぐさい時代の人間には、その血の臭いがつきまとう。眼つきも悪く、表情もけわしく、忍者が歩いていると、眼のある者にはそれとわかった。したがって、忍びの七方出といわれる窶し七体も、その表情の険悪さを糊塗できるものが選ばれている。訛りが国の手形といわれるように、人間の顔は、その生活が年月によって刻みこまれるものである。

〈鷹〉にはそれがない。若さの生気と、生来の横着さと、そして自信に充ちた行動が、表情を陰惨なものにしないのであろう。嘗て乱世の忍者は〝魔性〟と恐れられ、〝人外の化性〟と嫌悪された。

泰平は、世間を明るくする。世間の表情自体が時代によって変わるのである。ひとり忍者のみが、険悪な形相であれば、本来の役目は果たせなくなる。

その点でも、不知火忍者〈鷹〉は、この時代にふさわしいといえた。

老いは若さをとり戻せないが、若年に老いを演じさせるのは少なくとも、その反対よりは容易である。病み疲れた者に壮健な行動は難しいが、元気を失うことは、食を絶ちあるいはおのれを痛めることでも、そこに至る。

（どこから、あらわれるかな、彼奴）

伊豆守が指令を発したあとで、小用に立ったのは、用便を済ませておかないと、突然あらわれることがあるからだ。

いつぞやは、小便をしているとき、小窓に顔が出た。

ぎょっとして小便が止まった。天下の伊豆守が厠にいるとき、いかに何でも、咫尺のところ

に顔を出すことはない。

「きさま！」

かっとなったが、鷹はけろりとして、

「呼んだのではなかったか」

と、嘯いた。

伊豆守の権威は、鷹に関するかぎり、力を持たなかった。

そのぬけぬけとしたところが憎い。が、さらっとしている点、憎しみを持続させない。忍び ノ者には読心術がある。人の心を知り、心を探る。そのワザの一端かもしれないが、また、かれの人がらでもある。

又、いつぞやは、疲労が重なっていたせいもあって、指令を発したあと、一眠りした。気がつくと、枕元に影があった。

あるときは入浴中であった。湯殿の係りの女をからかっているうちに、湯槽の中に鷹がいた。湯が一滴もなくなり、かわいた湯槽の中に鷹が坐っていた。そのときほど腹が立ったことはない。伊豆守は女中を裸にした上で、悪戯をしていた間のことなのだ。

こんなこともあった。若い妾を抱いていた。伊豆守はあっさりと済ませるつもりだったのだ。ところが、そういうときにかぎって、女は長い。いつになく溺れた。女体のふしぎさは、ある日突然、目ざめるのである。

男を知らぬ未通女の冷たく硬い肌を徐々にほぐしてゆき、おのれのものに適合させた上で、

喜びを知らしめることが、男の冥利である。この突然の歓喜が、その夜きた。女の喜びはまた男の喜びでもあった。手塩にかけてそこまで到らしめたのを、やめるのは業腹だった。伊豆守は溺れた。二人とも息もたえだえなまでに貪りあった。始末をするのは、もとより女である。伊豆守は、女がかれを拭ってくれているものが、肌ざわりのいい柔らかい布であるのを知った。

「揉紙はどうした？」

と、言いその布を見たとき、ぎょっとした。

葵の紋が見えた。紫の帛紗であった。将軍秀忠から何か下賜されたとき包まれたもので寝所などに置いてはいない。

ちゃんと衣裳部屋にあるはずのものが、寝所にあるというだけでも不思議なのに、女はそれで、かれの秘所を拭いた。伊豆守は仰天した。葵の紋所は、それだけで絶対の権威であった。

「なんということをしてくれたぞ、この品はどこで」

女は手をのばしたら、触れたのだと言った。伊豆守が（親切に）手渡してくれたのだと思った、と言った。

「手渡した？……」

誰かが、手渡したのだ。伊豆守はそのときまで、〈鷹〉を呼んだことを忘れていた。

そんな度々のことが、伊豆守を用心させるようになっていた。

案の定、〈鷹〉は意外なところからあらわれた。伊豆守は屋敷の中に文庫を持っている。そこには、夥しい書物と書類があった。三百諸侯の家系や重だった家臣などを金と組織にもの

をいわせて調べあげた成果である。むろん、それは日々、書き加えられ朱訂されてゆくものであり、かれの頭脳そのものといえる。

伊豆守は、ふっと、調べることを思いたち文庫に入った。すると、うず高く積み上げられて、足の置場もないほどの中に、その影が坐っていたのである。

「鷹か……」

伊豆守は驚いた声を出した。

「いつ来た？　いや、どうしてわしがここに来ることがわかった」

「それくらいわからぬでは、忍びはつとまらぬ」

伊豆守は手燭をかかげてみた。するとふっとどこやらから風が流れて、灯がまたたいた。それは、〈鷹〉の姿を見きわめようとする伊豆守の心を制していたようである。〈鷹〉はおぼろな闇に包まれていて、そこに影が見えるだけであった。

「今度の仕事は、いささか面倒だが……」

「かまわぬ、それだけのものは貰う」

「遠い。九州だ」

「……」

「行くか。肥後と肥前じゃ」

「肥後というと熊本だな、加藤清正の伜がいる。何が起こったのだ」

「まず、手附じゃ」

伊豆守は懐中に手をさし入れた。機密費である。前払いで渡すつもりで指令を出したときから用意していたのだ。とり出そうと手をさし入れ、はっとした。金包みがなかった。

「貰うたよ」

けろりとして〈鷹〉はおのれの懐から小判の包みをとり出し、膝の前に置いた。

「きさま！」

「この重みでは、三百金」

「そ、そうじゃ、いつの間に……」

「話を聞こう。用向きしだいでは、返す」

また手燭の炎がゆらいだ。

手燭の仄明りのなかに、その男の影はなかった。声だけが聞こえてくるのである。一間と隔っていない。その距離で顔を見せようとはせず、しわしわと忍び声が笑った。

〈肥後の加藤が謀叛したのか？〉

「いや……まだ謀叛かどうかは、明らかではない」

伊豆守信綱は、手近の冊子をとりあげて、ぱらぱらとめくった。

ここはかれの頭脳というべき、秘密の文庫であった。近習と雖も、かれの眼のないときに入るのは許されない。

〈謀叛かどうかを探れというのか〉

三百両の小判包みが、二人の間にある。仕事が気に入らねば、返す、とかれはくりかえした。

この男の言う言葉に嘘はない。たんなる出まかせで、その場の気分で言っているのではなかった。多額の金は要求はするが、そう金にきたなく執着することはなかった。そのさっぱりした性格は、信綱も好ましく感じているのだ。

「実はな、加藤家より、婚姻の願書が来た」

と、信綱は影を見つめながら、事務的な口調で話した。

「当主肥後守の嫡男豊後守光正と肥前大村の妹姫との婚儀じゃ。肥後は五十二万石、大村は二万七千石、あまりにも釣合いがとれぬ」

〈……それで〉

「肥後ほどの大家ならば、家老どもでも三万石五万石、いかに九州の名流とは申せ家老以下の家が、嫡男の婚儀の相手とはいぶかしい」

〈その豊後守が、姫を見初めたのであろうわさ〉

「歳相当ならば、な。豊後守は十四歳」

〈おれもそのころには、女を知った〉

「姫は九歳じゃ」

「……」

「ま、年齢はよい、三つ四つでの婚姻も多い、世上では政略と誹るが……まあ、ないことではない。肝腎なのは、身分差よ。それと」

〈外様ということだろう、両家がな〉

嘲るように、〈鷹〉は言った。

〈身分のちがいすぎる外様大名同士の婚姻が奇妙ということか。裏に何かある、臭いがする、そいつをサグルのに三百金か〉

「一応、願書は受理した。すぐに行け」

〈気がすすまぬ〉

冷たくカビ臭い空気が、ふっと動いた。

「待て、嫌だと申すのか」

〈くだらぬ仕事だな。餓鬼の嫁とりなど〉

「三百金では不足か」

返事はなかった。また風が動いた。文庫の戸が開閉する音が聞こえ、信綱は背後をふりかえった。それから、気がついて膝前を見た。小判の包みが無くなっていた。

3

当時――寛永という時代では、交通の不便もあって、江戸からすれば、九州というと、気の遠くなるほどの辺土だった。その九州もまた、西端の肥前の大村は、代々、鎮西の住人でこの地に住んだ、有馬氏と一族で、遠く先祖は藤原ノ純友に出るという。

天領長崎には奉行が置かれていたが、隣接する大村家が、事あるごとに長崎を管掌するよう

命じられる。関ケ原の際、近隣の諸大名小名が小西行長の要請で西軍に与力しようとしたとき、大村民部大輔純忠（有馬修理大夫晴純の二男）が事理を説いて本国に返して東軍に味方した。その功によって本領安堵され、以後、外様ながら、幕府の信任を得ていたのである。

いま――

この大村城下へ至る嬉野街道を、五月の風をまいて西へ走る影があった。

満月、濃淡の緑に、包まれた小径である。その影は、近よれば歩いていると見えた。すれ違った旅人は、一町のかなたにその人影をみとめて、言葉をかけようとしたら、突風のような風が面を打って、砂埃から顔をそむけた。振りかえると、その影はすでに二町のかなたに遠ざかっていたという。

忍びノ者が通常、〝歩く〟というのは、一日三十里から四十里である。〝飛ぶ〟といえばその倍はゆくという。

翠嵐に包まれて走る影のあとから、一つ、また一つ――追走する影があった。その二つとも、華やいだ女小袖なのが、遠目には、さながら花吹雪の塊が飛ぶかに見えた。

「――待って、鷹、そんなに急がなくても」

すぐ後ろからくる女が、漸く追いすがって、

「九歳の花嫁御寮は、逃げやしまいし、待っておくれ」

「朱鷺か」と鷹は舌打ちした。が、足は止めぬ。ややその歩調を遅くしただけである。

「追いつけぬなら、来るな。たかが餓鬼の婚姻の秘密のサグリ、おれ一人で充分だ」

「でも、一人じゃ無理だよ、肥後と肥前と、両方を一人でサグルのは」

「足手まといよりはよい」と、鷹はまた次の女に濃い眉をしかめた。「百舌鳥、おまえまでがくることはなかった。やり損じるとしたら、お前らのせいだ」

ひどい、と百舌鳥と呼ばれた女は首をすくめ、舌を出した。十六七であろう。朱鷺は一つ二つ上か。

「鷹は不知火の忍びでも、一二のワザ巧者だけれども、くノ一はできない。そうだろう。あたしたちでも役に立つ」

「どうせ女めらがやれる忍びは、それくらいのことよ。ならば、二人して、先に肥後へゆけ」

その語尾を、ふと、口に溶かして、鷹は膝を折ると、地べたに耳をつけた。

「馬だ」と、片膝立てて言った。「早馬だ、西からくる」

そこは峠だった。北に虚空蔵山、南に遠目山が聳え、その間を道は東から西へ走っていて、西の涯は大村湾の紺碧に消えている。その彼杵の浜辺を南すれば、五里ほどで大村の城下に至る。

鷹の耳は正確だった。早馬は残照を浴びて野面をひた走りに峠へかかってきた。馬上にあるのは旅姿の若い武士だ。狂ったように飛ばしてくる。

「はて、まるで、気が狂ったみたいだぞ。よほどの大事が出来したか」

「鷹、あれは、きっと、大村家中だよ、今度のことに関りがあるに違いない」

朱鷺が言った。そうよ、と百舌鳥も口を添えた。

「あいつ、摑まえて、話を聞いたら……」

そのとき、異変が起こったのだ。

峠のかかり鼻で、突然銃声がした。二発。

鷹たちは傍の疎林の中に身を潜めていたのである。銃声は偶然ではない。このものに憑かれたような早馬と無関係ではない。かれらの眼前を、汗を吹いた騎馬は砂埃を蹴立てて通りすぎた。

と、鷹が走りだした。騎馬のあとを追ったのだ。

「あ、鷹」

女たちもあわてて鷹を追った。

疾走する騎馬が峠から東へ急斜にかかったとき、どうっと、馬上から武士が転げ落ちるのが見えた。

草むらの中へ転がり落ち、斜面をすべって武士は、やっと木の根にしがみついた。打ちどころが悪かったのか、もう、動きが、苦しげだった。が、これは、落ちたときの衝撃というよりは、弾丸のせいだった。

「大村の家の者だな」

鷹は近よって、冷やかに見下ろした。

眼前を疾走するとき、鞍の紋章を素早く見てとったのである。

若い武士だった。ねっとりと油汗が額に浮き、もはや断末魔だった。その胸から鮮血が噴き

出している。

「この傷では助からぬ」鷹の言葉は冷たく聞こえた。「死ぬしかないな」

「――し、死ねぬ！」若侍は苦悶のうちに呻いた。

「江戸へ行き着くまでは……こ、これを、御用部屋へ届けるまでは……死ねぬ！」

哀切な最後の言葉にも、鷹の濃い眉は、ひくとも動かぬ。若侍の手が、最後の力をふりしぼって懐中から油紙包みをつかみ出した。がそのまま、がっくりとなった。

鷹は油紙をひらいた。奉書紙に封された書状だ。表書きが松平伊豆守殿、となっている。鷹はためらいもなく開封した。

素早く読み下した鷹は内容の意外さに首をかしげた。これは先に出した加藤家との婚姻願いを自ら、取り下げようというものだったのである。

――先般御允許賜わりし肥州との婚儀の件、忝けなく存じ候えども、当家の姫未だ九年、輿入れには些か尚早、依って両三年延引仕り度、此之段別而御配慮を忝けなく願上仕り候……

尚、右之条条構えて不肖寺田主水の存意に御座候、微忠の程御汲取被下度――

「――せっかく御允許のあった婚儀を両三年猶予してくれというのか、面妖だな」

寺田主水の名は知っている。大村家の家老である。他に山崎刑部というのがいる。刑部の方が宿老としての勢力があるが、陰険狡智の評があった。この若侍は、寺田主水の密命を受けて江戸へ走る途中だったのであろう。

鷹は件の書状を元のごとくに納めて、死体の胸に突っこむと、朱鷺と百舌鳥を促して、雑木

林に隠れた。

走ってくる者があった。五六人の男たちであった。鉄砲を抱えた者が二人、足ごしらえも厳重で、一人は抜刀している。

「や、もはや死んどるばい」

「見てんしゃい、やっぱ俺の鉄砲の腕は大したもんやろが」

「なんば言うとな、ぽるとがるの鉄砲のおかげたい」

そんなことをがやがや言いながら、死体の懐中に手をつっこみ、容赦なくさぐった。書状をとり出して中を改めた。かれらには内容は推測されていたのであろう。

「思うた通りたい」と、一人が言った。

この一団の中に、頬がこけて、月代をのばした蒼い顔があった。その男は足軽ふうの連中の中で、着る物も違い、ひとり水に油が混ったように、べつの空気をまとって見えた。

「榊先生、わざわざ来て頂いたのに、徒労でござしたな」

「ふむ、おれァいいが、こいつが哀れなものさ、船載の鉄砲玉喰って死んだら、お釈迦さまのところにァゆけねえ、成仏しねえだろうぜ」

「ははは、そぎゃんですたい、榊竜馬先生の太刀先なら、成仏したでっしょうばってんが」

その笑いに応えるように、ふいに榊は袖を翻した。白光が一瞬、空を切った。鉄砲足軽の手にあった封書は、数葉の切紙となって宵風に舞った。

かれらが、立ち去った後で鷹がしたことは、哀れな密使の胸に小柄を突きこんで、鉛玉をえぐり出したことであった。榊の言葉で、この犠牲者を成仏させようと殊勝な気持ちになったのではない。

「ぽるとがるの鉄砲か？……」鷹は、血まみれの鉛玉を掌に転した。

4

その三日後に、鷹は大村城下大手町の閉門屋敷に忍びこんでいた。寺田主水の屋敷である。大門は青竹を打たれ、鉄砲と槍の足軽が出入口を固め、夜でも篝火があかあかと焚かれて犬の子一匹、往来を許さなかった。鷹はこの厳重な眼をくぐって入っている。

格別、夜を飛んだのでも潜ったのでもなかった。少し前に、一人、裏門から入った者がいる。警固の足軽だった。

「中で妙な音がしちょる？」と、かれは同僚に言った。同僚はときどき腰の瓢箪をかたむけては、酒で眠気をさましていた。

「なに、どげんしたと？」

「ちょっと、様子ば見てくる」

御苦労なことばい、と、酔眼をしばたたいて、同僚は思った。千々岩のやつ、そこまで一所懸命にせんでもよかとィな、と思った。その千々石某が、縛り上げられて失神した状態で、露路から発見されたのは半刻ほど経ってからである。

千々石某に扮した忍びノ鷹は、寺田主水の寝所の床下に入っている。主水は髭も剃らず、髪も梳かぬ重病人のような姿で、寝ていた。横になっていたが、眠れないのであろう、ときどき寝返りを打ち、それから、胸苦しげに呻いたりしていた。その呻きが止んだのは、何か声を聞いたからである。

その異様な声は、頭の下から聞こえた。

〈おぬしの手紙を読んだ〉

「――誰だ？」

〈誰でもいい、敵ではない〉

「……」

〈信用することだ。それから返事は、短くせい、声も低く、な〉

「誰じゃ、おぬし」

それには答えず、

〈せっかくだが、使者は殺られたぞ。虚空蔵峠でな、おぬしが婚儀に反対しているのは何故だ、その理由を聞きに来た〉

主水がその床下の声を怪しんだのは当然である。

「源三郎が殺られたと……どうして、それを」

〈この眼で見た。鉛玉もここにある。源三郎というのか、あの若侍の心ノ臓に近く、左様、五分ほど離れてな、骨を砕いていた玉だ〉

「――誰だ、一体……」

〈理由を聞こう、手紙の内意は豆州に伝えてやる〉

この警戒厳重な屋敷に忍びこんできたというだけでも、尋常の者でないことはわかったのである。寺田主水は、それに気がつくと喜びの声をあげた。

「忍びノ衆か、大公儀から遣わされてか」

〈聞くことに応えてくれ、理由だ。猶予を願い出る理由は？〉

「確たることはない」

〈……〉

「ただ、誰が見ても、不釣合じゃ、それに、この縁談は主君のお考えではない。山崎刑部がひそかに肥後と話を進めてのこと。何がゆえに刑部が励んだか、わからぬ。が、かような不釣合な縁は、如何に考えても、姫君にも当家にも、幸いとはならぬ。わしはかように考えて、主君を諫めた。が、刑部を信じなされた主君は、わしの意見に耳かたむけなされず、賜うに閉門を以てなされたわ」

主君丹後守純信はまだ若い。奸悪な者の心を見抜くことはできないのであろう。

〈わかった。調べてみよう〉

「待て、おぬし……」

〈騒がぬことだ。まかせろ〉

鷹はその足で、山崎刑部の屋敷に行っている。

だが、侵入は容易だったが、秘密をサグルことはできなかった。すでにワザは放たれていた。朱鷺が刑部の夢をとらえて、吐かしめんとしていたのである。

秘香を以て意識を溷濁させ、眠りにおとして、夢幻の快楽を与える。香に加うるに百歩蛇と蛭の粉末が効くという。これを乳鉢で摺り潰し、天日に乾かして剝ぎとり、さらに粉末にするものである。朱鷺はこの添加物を用意していなかった。ために効果が減じたのであろうか。刑部はだらしなく口をあけ、涎をくっていた。饒舌っていた。が、言葉は聞きとれなかった。あるいは、叙上の添加物はこの弛緩を止める作用があったのかもしれぬ。

朱鷺はいらだった。忍びに焦慮は禁物である。それを忘れた。

〈もっとはっきりお言い、もっと！〉

朱鷺はおのれが影に溶けることを忘れた。

「言ってやろう、何が知りたい？」

ふいに背後にその声を聞いた。言下に白刃が夜気を巻いて落ちた。凄絶の太刀風だった。朱鷺は反射的に身を転じて逃がれたが追いすがり踏みこんできた二ノ太刀に帯紐を切られ、はらりと、着物がひらいた。

不知火忍者の帯は麻芯を通し、上下に細い針金が通してある。鋏子が触れたくらいでは切れぬはずであった。

朱鷺の乳房が夜のなかで異様に白く浮かんだ。

「次は、その乳をぐさりとゆくぞ」

勝ち誇ったような榊竜馬の声をぶち切ったのは、ひゅっと夜風に哭いて飛来した礫である。卍手裡剣が、だっだっだっと、連打してきた。一つはその鍔に当たり、蒼い火花を散らした。

〈朱鷺、逃げろ！〉

〈あっ、鷹、いいところへ〉

〈ばかめ、愚かなまねをする〉

このやりとりは、榊の耳に聞こえぬ。単に異様な風の声としか聞こえない。忍びノ者は、おのれのなかまうちだけに通じる〝忍び声〟を持つ。風声百韻とも称い、風の多様な声に擬して、なかまだけにわかる会話が出来た。したがって、たとえば、伊賀者の群れで、風魔忍者が独特な対話を為すことも可能なのである。

鷹の手裡剣うちがなかったら、剣鬼榊竜馬の剣先から逃がれられたかどうか。朱鷺は命からがら逃がれもう大丈夫と思ったとき、はじめて恐怖を感じた。

鷹に抱かれたいと思った。が、鷹はこの不知火一族の頭首の遺孤朱鷺には、同志以外の感情を持たぬようであった。彼女を抱きかかえて家老屋敷を脱すると、隠れ家にもどって、貪るように眠った。当座の隠れ家、というより仮の巣は浜辺の破船だった。

「善は急げと申しまする。大国肥後と当家の御縁組は、御家にとって、まことにめでたいこと、急ぐにこしたことはござらぬ」

寺田主水が松平伊豆守に嘆願書を出したことを知った山崎刑部は主君丹後守を説得して、婚

儀を急がせた。近習の源三郎は暗殺したが、他にどんな手を使ったかしれぬ。一日も早く輿入れさせてしまうに如かず、と既成事実を作ることを急いだのだ。

そのことを慮って、主水はひそかに血気の若侍四人に言い含めて、輿の護衛を言いつけていたが、肥後へ入る前に、この四人は、榊竜馬の凄剣に仆されてしまったのである。

国境の関まで肥後の家老、矢代左馬之助が出迎えたが、これは礼を失せぬためではなく、一刻も早く、姫をおのれの掌中にしたいためであった。

「矢代さま、これは一体、どういうわけなのでございましょう、お輿入れの姫をもてなす狂言としては、些か異様ではありませぬか」

こう抗議したのは、雪姫の護り役としてついてきた千枝という娘。あの源三郎の妹だった。源三郎の非業の死を知ってしかし、一層、雪姫を守護する決意を固めていた。

「異様とは、何事を申される」と、左馬之助はとぼけた。刑部と眼を見合わして、にやりとした。

雪姫が招じられた熊本城内、奥深い一室は調度什器は華美なものが揃えてあるが、窓には鉄格子がはまり、廊下には見張りが立って、一種の座敷牢にひとしかった。

千枝は怒りをこめて抗議した。

「これでは、まるで、人質ではありませぬか。智君はいずれに在しまするぞ、肥後守さまにお目通りを！」

「黙れ、これでよいのじゃ。雪姫には危害は加えぬ。大村の家が、潰れるも立つも、われらの考えしだいのこと、じたばた騒いでは不幸なことになろうぞ」

鷹が熊本城に忍びこんだのは、百舌鳥の手引きである。

すでに百舌鳥はこの広大な城内の地ノ理に通じている。如何なる名城でも、忍びノ眼からすれば、必ず欠点がある。いや、名城ほど欠点があるのだ。名城とは難攻不落の要害で、多勢の敵を迎え撃つ機構は上手の手から水が洩れやすい。清正の手になるこの雄大な城郭もその雄大なゆえに、意外な穴があった。盲点は城士にはわからぬものだ。死角は、それを必要とする者によってサグリ出されるものである。

熊本城はいうまでもなく、忠広の父清正の造営になるものであった。その起工は、慶長の初年で三年、四年説があるが、手を初めたのはどちらかにしても、後世見るように規模雄大に天下の名城と称される大々的工事は、関ケ原戦以後のことではないかと思われる。

以前は肥後半国二十五万石であったが、戦後は一躍五十二万石の大々名になっている。その豊かな財政と、おのれの夢をのせて、無双の名城をこしらえたのだ。それはまた、徳川氏の要請と合致するものがあったのではないか。つまり、日本列島の南端に位する薩摩への押さえとしての城として。

むろん熊本には、隈本と称した時代から城はあったが、ずっと規模の小さなものにすぎなかった。

清正がこれだけ（現代で見ても）壮大な城廓の構想を得たのは、やはり朝鮮に出兵して、実

戦からのものであろう。いわゆる〝高麗陣〟からの教訓が大いに役立ったようである。

城は茶臼山の丘陵地帯を利用して作られているが、何度も改築され、大きくなっていったことは、肥後国志に〝総て三里三町十七間と云。始は二里十三町ありし云〟にあるのを見てもわかるように、当初は、三分の二くらいのものであったらしい。

茶臼山丘陵の高いところを本丸、二の丸、三の丸、これを擁護する幾重もの曲輪を構えた上、一ノ天守台、二ノ天守台、三ノ天守台等々、その他地形の変化の、起伏に応じて高低十数段の石塁を築いた。

これらのものを区劃するに広狭長短、縦横の濠をめぐらして、さながら迷路を成している。これを抜けるには、大小数えきれぬほどの桝形の個所がある。

桝形は城廓には必ず存在する関門で、いつでも、これは塞いで木戸にすることが出来るのである。つまり、敵が攻めこんで来た場合は、ここで、阻む。誘いこんで、みな殺しに出来る。現存の地図では、これが破壊され（後世泰平になり、城主も細川氏に代ったので）少なくなっているが、築城当時は多かったのである。

こうした概観だけでも、その規模の壮大さ、堅固さが想像されよう。城廓構築にまず、考えねばならないのは水ノ手だ。飲料が籠城の死命を制するのはいうまでもないが、それに備えて、城内には深浅百二十カ所ある。その深さも、土地の高低により三丈五尺から十二丈に及ぶというのだ。したがって湧水量の豊富さも、あらためていうまでもない。

当時の主要建築物は、天守二、曲輪丸外のものも含めて矢倉四十九、櫓門十八、城門二十九

などである。殊に高麗門は、朝鮮から移築したと伝えられていた。

雪姫が押し込められていたのは、西の出丸である。

この西の出丸は、時代によって呼名が違い、二の丸と呼ばれたこともあって、史家に混乱が見られるが、茶臼山の地形を案じると、東部に高く、西部に低い。

こうした地形は、たいてい西向きに作られる。西面になるのが普通である。高い方を搦手にするのは常識だ。

ところが、現代――つまり後世になって東方から南方に城下町がひらけたので、南の方を大手に解するようになっているが、当時は西面だったのである。細川家記に〝追手、西の方、正面也〟とある。本丸は東部の高台に置かれ、二の丸、三の丸と漸次、西下してゆくように作られ、藤崎台下段の最西端が、城の西のはてをなしている。

この西方に、本廓とは空濠をもって一線を劃して、西の出丸を設けたのは、清正の深謀遠慮であった。本丸の正門、数寄屋丸御門とつなぐ一筋の隘路は、イザとなれば、たちどころに塞げるものであった。即ち、出丸は、ここに敵を引きつけて、緒戦を長引かせるためのものであった。

この西の出丸は、清正の戦術を物語るもので、

〝清正公、熊本御城、当時の奉行丸を築出されて、御自慢有しと也。其御詞（言葉）ぞ、自身遠所に居る時、敵来て此城を責（攻）めんに、此出丸を百日にて、えいやっと骨を折って取べし、其内どこからにても懸（駈）くべくは、との給（曰）う也〟

とある。

この西出丸に、雪姫は閉じこめられたのである。西出丸の巽櫓。

矢倉という字をあてればわかるように、もともと、矢を置き、また、ここから狙撃するところだが、突兀としてそそり立っているので、入口に見張りを立てれば、脱出は不可能と思われた。その上に、万一を慮って、鉄格子をこしらえたりしていたが、すでに百舌鳥は、単身、これに挑んで、ヤスリ傷をこしらえていたのである。

「あの部屋は、わざわざ雪姫のために作ったのさ、だから、窓の鉄格子に細工していたのよ」

百舌鳥は得意そうに言った。たしかに雪姫と千枝を救いだす方法を案じていた。

縄梯子を伝わって窓から入り、雪姫を背負った鷹は、暗夜を利用して屋根を滑り、濠を泳ぎ渡った。

「熊本くんだりまできて、人助けをすることになろうとは思わなかったぞ」

苦いもののように鷹は言った。雪姫と千枝が信頼の目差をむけるほど、鷹は戸惑いを感じるのだ。

「朱鷺と百舌鳥なら、世話焼くに恰好だろう。おれは、まだ用がある」

山崎刑部と左馬之助の肚裡の中を知ることであった。恐れ気もなく、鷹は引きかえしている。城というものは、どこでもそうだが、外廓が一番きびしい。中へ入ってしまえば、存外に抜けているのである。殊に本丸の奥御殿などは、かえって誰も近寄らないから、我が家の庭を歩くようなものだった。

「――矢代、大村の姫は如何なったぞ」

「はい、寝んでおられまする」

主君忠広に問われて、苦しい嘘を言った。刑部が先頭に立って捜索している。城下か近辺に隠れているならば、時間の問題なのだ。

「刑部の差配にてぼるとがる船より新式鉄砲三千挺、買付けております。丹後守はこの由を知らぬげにござりまするが、御当家と婚姻ととのえば、いや、雪姫がこちらの人質になっておる以上、否やは申されますまい」

「それがつけめなのじゃな」

「徳川の天下を覆えすためには、かほどの手段は当然のこと。鉄砲の次は大砲を、嘗て大友宗麟に献上したという国崩しとやら銘うたれたほどのもの百門も需めれば、天下諸侯多しと雖も、われに敵対する者はなく、喜んで与力となるは必定、天下は目前にござりまする」

〈見えるか、片眼で〉

どこかで、こう言うのが聞こえ、びしっと何かが右眼を打った。血が噴いた。左馬之助の右眼は打ち砕かれていた。

加藤肥後守忠広は仰天して立ち上がっていた。この嘗ての猛将清正の伜は、癇癖の性だった。才能も豪勇も、父清正に数段、劣る。家臣の統御と、敬慕を蒐め得なかったところに、かれの悲劇がある。

左馬之助はさすがに乱世の気丈さを残していた。その右眼を、砕いたものを、すさまじい血

の中からつまみ出した。銃声はしなかった。小石か、と思った。激痛に耐えかっと左眼を開けた。指先に血みどろにまみれていたのは、鉛玉だった。

〈ぽるとがるの鉄砲三千挺の代わりに鉛玉一つ、有難く納めておけ〉

それきり、鷹の声は消えた。

雪姫と千枝が潜伏先の満願寺からふたたび逃走したのは、刑部も含めた役人数十人が押しかけたときである。固くしめた山門を中へ飛びこんだ奴が開けて、どっと雪崩れこんできたとき、千枝らしい女が、雪姫を背負って走る姿が、かれらの眼を奪った。

「や、あそこだ」「逃がすな」「捕えた者は恩賞にありつくぞ」慾も手伝って、わらわらと追った。ところが、女のくせに、千枝？　の足は早い。役人たちは、樹間を数町も走らされた。

「向こうへ廻れ、絶対に逃がすな」

刑部は、汗みどろになって指図した。

「大丈夫です、後手が、ふさいで居ります」

小頭が、得意げに言った。手は廻っていた。千枝が漸く立ち往生するのが見えた。

「ははは、それ見ろ、いよいよ、これで年貢の納めどきだな」

勝ち誇った刑部が千枝に迫ったとき、千枝がぱっと雪姫を捨てて、はね飛ぶのが見えた。槍の者が、数人で突きかけた瞬間である。千枝にそうしたワザがあるとは、予想のほかであった。

が、それにしても雪姫を捨てるとは。千枝の姿は、呆気にとられた役人たちの頭上に、はらはらと、木の葉を散らして、梢から梢へ飛び移り、姿を消した。朱鷺か百舌鳥かわからない。

「とにかく、雪姫を」

駈けよった役人たちは、愕然とした。雪姫の衣裳をまとった仏像だったのである。

「しまった、謀られたぞ」

「忍びの偽体じゃ。急げ」

あわてて引きかえそうとした前面に、ぴゅぴゅッと風をきって飛来した礫。手裡剣が的確に、役人たちの眼に突き刺さった。仰天した刑部は忍び装束に身を包んだ男を見た。その手に、忍び刀が閃いた。

「来い、おれが相手になってやる」

不知火ノ鷹であった。瞬時に、その軽捷な姿は、役人たちのなかにあった。悲鳴が奔り、絶叫を噴いて、ばたばたと、倒れる役人たち。残りの者は、浮足だって、どっと逃げだしたが、そのときを待っていたように榊竜馬が姿をあらわしたのである。

「――待っていたぞ、鷹」

これまで何人の血を吸ったかわからぬ兇刃が、その手にあった。痩せこけた蒼い顔の眼は、蛇のような光りを帯び、その口は奇妙に赤く血を塗ったようであった。

「雑魚を相手にしていても、なんにもならぬ。おれを殺れるか」

自信が言わせる言葉だった。

「死にたくてあらわれたのか、馬鹿な」

「忍びのきさまこそ、姿をあらわしたのは、死の運命に摑まれたからではないか」

「……」

「いつぞやの晩は不覚をとったが、忍びが陽光のもとに姿を見せたときは、死神にとらえられたときだ。覚悟するがいい」

榊は西日を背にしていた。絶対の有利である。

ぎらぎらと熾烈な夏の陽は榊の背を灼き、もろに鷹の姿を浮き上がらせた。

眩しい陽光の中で、榊の姿は一個の影となり、そのことを、榊自身充分の自信で刀をふりかぶっている。

鷹は動かぬ。その眼は、半眼に閉じられ、すでに観念したものの如く、微動だにせぬ。

榊は一歩進んだ。間合六尺。勝利を目前にして吐く息も熱く、次の瞬間、黄いろい陽の中に噴きあがる鮮血に舌舐めずりした。ずるずると右足がのびた。爪先が土を蹴って躍り上がる。

一瞬、鷹の剣が閃いた。

赫奕たる太陽のすべてをその剣に蒐めて、榊竜馬の双眸を灼いた。かっと煌いた一瞬であった。鷹の姿は視界から消えた。影は、夏日に燃えるかげろうとなって、消え、榊が狼狽の瞠目した刹那、凄じい気合とともに、かれは脳天から顎の下までたち割られていたのである。眼玉はひらいたままだった。おのれの頭頂から噴き上がった血の飛沫の高さに驚愕したように——

肥後熊本の加藤肥後守忠広が五十二万石改易となって出羽へ流されたのは、この寛永九年六月のことである。大村丹後守純信はお咎めなしとなって安堵したのは、刑部一味の工作が判然としていたからであろう。

忠広が配流地に着いたころは、秋の気配が山野に見えていたが、江戸はまだ暑い土用の日がつづき、鷹は酒に浸りながら、暑い九州のことを想い出していた。

ふたり千姫

1

ものに動じない男が、思わず聞きかえしたのである。不知火ノ鷹は眉をひそめて、命令者を見た。

「――千姫を殺す？」

将軍家光の懐刀として利れ者である松平伊豆守信綱の言葉とも思えなかった。犀利な頭脳をうたわれるこの男には、無駄な言葉がない。愚劣な冗談など弄する男ではなかった。

「――勿体ないが」と、さすがに声にはいつもの的確で強いひびきはなかった。「お命を頂かねばならぬ……」

「主すじの殺しには、伊賀者は使えぬというのだな」

「このことは、外にはむろんのこと、上様御一統内にも、秘密を保たねばならぬのだ、御政道のため……」

「将軍家の実の姉を殺させるとはよくせきのことが」

「おぬしはそのようなこと、気にかけぬでもよい。依頼をうけるか断わるかだ」

「……」

「いやか」

「気は進まぬ」と、鷹もはっきりと言った。「いや、将軍の姉だからというわけではない。おれには将軍も乞食もない。生業につとめるだけよ、だが、弱い女を殺すのは、な」

「弱い女か……その女が、人殺しもする、放置しておけぬのだ」

これは冗談ではなかった。

「そちも市井の噂は耳にしていよう。千姫さま御乱行のことを」

「うむ」

「御乱行も、淫猥なものならば、まだ眼をとじ、耳をふさいでいることもできる、お立場ゆえにな。だが、多くの者を殺めるとなると、天下騒擾のもとになる」

徳川千姫のことは、いまさら詳述することもない。家康の孫、二代将軍秀忠の娘に生まれ、政略のため、六歳で、秀頼に輿入れした。

愛のない結婚である。秀頼が亡びたのち、坂崎出羽守事件などもあったが、本多忠刻のもとに再婚した。この夫にも先立たれて、千姫は落飾し、天樹院と号して、余生を読経三昧にお

くっていたのである。

その千姫が御殿に男を引き込み、淫楽の果てに、秘密の洩れることを恐れて、抹殺している。まだ噂の域は出ないが、火のないところに煙は立たない。その実態が証拠だてられてからでは遅い。松平信綱が決断したのは、

「外様大名がこの噂を利用して、謀叛の烽火をあげる恐れがあること、判明したからじゃ」

その故だった。

「なるほど、将軍家光公の実の姉が、そんな乱行をしているということになれば、人心が公儀から離れるな」

「いま一つは……」と、信綱は言いよどんだが、

「あの手が動いておる」

「――闇公方か」

「はっきりわからぬ。が、千姫さまの御乱行、あの御方の恣意とも思えぬ。伊賀者のサグリでは、物に憑かれたごとくに、男をもとめられておると……忍びの秘術には、女子を淫に堕す方法があるとやら申すではないか」

「男でもな……」

「もともと御発明の御方だ」

と、信綱は忠実な家臣らしい、真摯な態度になって言った。不知火ノ鷹は冷静に聞いている。自由な立場にある鷹には、身分の高下は問題にならぬ。

「左様な淫らがましいことをなさるはずはない」

「――というと、たんなる噂だと思うか」

「実態はわからぬ。心とからだは違う。怪しの秘術で、身も心も、闇の手に囚われているかもしれぬ」

「そうであればいい、そう思いたいのであろうが」

鷹は皮肉に、含み笑いを洩らした。夜に生きる忍びノ者には、いかに貞淑の聞こえ高い女でも、裏では何をしているか、深夜一人でいるとき、どんなに淫らになるものか、よくわかっていた。

人間というものが、秩序の中では、いかにも世間体を大事にし、その反面はだかになったとき、より人間的であろうとするか。むしろ反動的に、赤裸々な面をさらけ出す。実直であればあるほど、律義であるほど乱行が多いのと同じだ。多勢の家臣の中で旦夕を送っていれば、抑圧されたものが奇妙なほど変態的にあらわれる。そういう事例を、いやというほど、目のあたり見てきている。松平伊豆守信綱のようには、頭から信じられないのだった。

「人間は変わる。おぬしの思っているような千姫ではないかもしれん」

「無礼だぞ、鷹」

「無礼は承知の上だ」と、昂然と言い放って、

「将軍の姉を殺す、よかろう、引き受けた」

信綱が何か言おうとしたとき、鷹の姿は消えていた。

2

千姫は褥の上で、からだを崩していた。二合は入る朱盃に口をつけ、とろりとした目差しで、女たちの踊りを見ていた。

侍女を男ぶりに仕立て、阿国歌舞伎を模して、色恋の伊達引きの真似事をさせている。隆達小唄を歌わせ、鼓や三絃を弾かせたりしていたがその愉しみにも、千姫は心から入れないようであった。

「なんぞ、面白いことはないかえ」

千姫がこう言いだすと、あとの望みは決まっている。

老女の松坂ノ局が拝揖して、

「かしこまりました。ただちに手配いたさせまする」

「待ちゃ。品物が悪うてはならぬ」

「は……」

「町者は面白うない。武家でも、じゃ。身分がようて、若く、綺麗でなくては」

「――難しい御注文でございます」

「わらわに心あたりがある」

千姫は謎めいた微笑を洩らした。

松坂ノ局は、年寄として地位は高いが、まだ数ヵ月にしかならない。旗本の後家で手蔓を得て女中たちの束ねをするようになった者である。

彼女は破格の抜擢に感泣して、千姫の命のままに動いている。

（むりもない、お姫さまは、まだ三十歳前……）

二十九歳という女の独り身を、同性として理解した。

男を知らずに過ごした女は別として、はじめに秀頼、そして忠刻と、二人の夫を持って、後家になっている。

坂崎出羽守が落城騒ぎのなかで、千姫を犯したという話も、あの当時流れた。それが事実とすると、三人の男を経て、落飾する運命になったのだ。それも忠刻が死んだのが元和五年だから、千姫はまだ二十二歳だったわけである。

以来、ずっと後家を通していることになる。身分のある者には世間の知らない苦労がある。おいそれと三人目の夫を選ぶというわけにはいかない。

千姫が本多に嫁したとき、十万石の化粧料がついた。持参の年金である。忠刻の死による離別で、本多家からふたたび十万石は収公されたのだが、その分は、天樹院となった千姫の食扶持になったのは疑いない。

十万石といえば、中くらいの大名である。数千人を養うに足る額だ。千姫の生活が、栄耀栄華なものになったのは当然であろう。

徳川家康が天下をとるためには、豊臣家を叩き潰さねばならなかった。その秀吉の遺児秀頼

の妻に押し付けられ、秀頼とその母淀君の心を獲った。いうなれば、徳川将軍家の存続と発展のために、幼時から尽くしたのだ。

将軍家光としても、この姉には、したがって、済まないという気持ちがある。忠刻が存命であればまだしも、また寡婦になったことを、憐れむ心は、尠くない。

ある程度の放縦な行為は黙視する気持ちは、したがって将軍はじめ幕閣にある。

落飾したといっても、尼になったわけではない。

本来、女は尼になり、男は坊主になる。剃髪と同義語であるが、身分の高い者には、いろいろ便法がある。

千姫の場合も、表むき、落飾の儀式を行なって、剃刀を髪にあてただけで、剃り落としてはいない。先端を長さ三寸、一つまみ形式的に納髪しただけである。

自慢の黒髪であった。

尼にならないでも、籠居して、公式の席へ出さえしなければ、それでいいのだった。以来、千姫は、一切、知人との往来を断った。ここ数年、千姫は誰とも会っていない。

（無理もない……千姫さまはまだお若いのだから）

松坂ノ局は、二十九歳という年齢を思い、三十歳の峠を目前にした女の焦りを考えた。

（お慰めするには男しかない。踊りでも歌でも、慰めにはならぬ……）

その男も、しかし、近頃では、千姫の要求が、難事になっていた。

（はじめは、眉目うるわしい若者であればよかったが……）

それだけの条件なら、探すのは楽だった。町人でも農民でも、自由に選べた。金をやって連れてきた。理由は何んとでもつけた。そういう男たちも、事情を明かされると、むしろ喜んだ。年増女といっても高貴の上臈、豊満な無双の肌に溺れることが出来るのだ。嫌だという者はいなかった。

が、そうした男たちでは、千姫は楽しめなくなっていた。愚かで白痴的な美男など、所詮、憂き心を霽らすことにはならない。

「身分ある者を……」

家康の孫娘としての育ちでは無理もなかった。

千姫の相手にふさわしい男といえば、かぎられてくる。

「酒井讃岐の弟がよい」

千姫は謎めいた微笑をたたえたまま、こうはっきりと名指した。

「えっ、讃岐守さまの御舎弟を？　でも、和泉守さまはもはや御壮年にて」

「三弟の忠重じゃ、まだ任官しておらぬ。漸に角前髪を落としたばかり、月代の青みの匂うがごとき美男ぶりという」

「まあ、そのようなことを、誰がお耳に入れましたものか」

「誰でもよい。よいな、命じました」

そして、また、微笑した。

3

酒井讃岐守忠勝は後に大老にまでのぼった幕閣の要人である。当時、まだ老中職にもなかったが、すでにその勢力は加判衆（後の老中・若年寄）を圧していた。

三弟忠重はまだ十九歳。若さがあふれていて、美貌も際立っていた。どっちへ転んでも部屋住みの気楽さが、こうした若さを冴えたものにする。

その日も、遠乗りに出かけた帰り、薄暮の中を、ここちよい疲労を感じながらもどってきた。少し前から、酒井家の門前を、一人の虚無僧が、低く、奏しながら歩いていた。曲は虚空鈴慕である。五月の爽かな夕暮の中で、もの哀しい尺八の音が流れる。

〈――おかしいね、あの梵論字さん、さっきから門前を往ったり来たりしている〉

〈そういえば……あら、また引き返してきた〉

辻に立って立ち話しているように見せていたのは、不知火くノ一の朱鷺と百舌鳥である。千姫御殿に侵入するのは、女性の身で割合、容易であった。老女松坂ノ局が、酒井家のことを調べているのをサグリだしてきたのである。

〈ひょっとすると……〉

虚無僧はそうした二人に気づかぬもののように歩いてきたが、馬蹄の軽やかに土を蹴る音を聞くと、ふっと振りかえった。

だけではない。忠重を認めると、道のわきに寄って、件の尺八を腰に差して、別の尺八をとりだした。

何気ない動作である。尺八によって、音のいろが違うのであろうか。

忠重は、通りかかってちらと、虚無僧の方を一瞥しただけであった。口取り草履とりなど、小者数人を従えて門前にさしかかった。

そのとき――ふいに、虚無僧は、尺八を水平にあげた。口をつけたままである。

ふっとひと吹き――

刹那、栗毛の馬の尻に向かって、何やらキラリと光るものが飛んだのを、朱鷺は見た。

「あ、あの梵論字が！」

百舌鳥が走りだした。

馬ははげしく嘶き、棒立ちになった。忠重は仰天して前壺にしがみつく。背中の主人を振り落とさんばかりに、栗毛は狂ったように走りだす。

驚いたのは、家来たちだ。

「若殿さまーっ」

馬を追う者、邸内に注進する者。突然のこの椿事に、酒井家から家臣たちが追っとり刀で走り出たときは、狂い馬も、虚無僧も、そこらにいなかった。

馬はおそろしい勢いで走ってゆく。幾つかの町を過ぎた。二、三頭の騎馬が、横丁から出て来て追った。さらに、前面にあらわれた数人が、大手をひろげて立ちふさがる。馬はそれを見

て、走る勢いを弱めたが、なおも、狂い廻っている。追いついた騎馬の者が、その狂奔をおさえようとしたとき、栗毛はたまらず、横倒しになった。

馬上の忠重も、その勢いで投げ飛ばされた。

地上に叩きつけられ、二転三転、砂埃の中を転る。

「若殿が大事じゃ、お手当てを」

馬から降りた者、手をひろげた者、多勢で、忠重を介抱するようにして、駕籠へ乗せると、どんどん走りだす。いいところに駕籠があったものだ。手際がいい。

〈朱鷺さま、早く〉

〈鷹は？〉

〈大丈夫、黒玉を〉

くノ一ふたり、走りながらの会話だ。路地から路地へ抜け、道を先廻りする。逆に忠重を乗せた駕籠は、遠廻りして走ってゆく。走跡をくらますためらしい。

大名小路の細い道にさしかかったとき、あたりが異様にキナ臭く、煙が流れてきた。

「火事ではないか、いかん、引き返せ」

ふりかえると、背後にも、濃煙がむくむくと渦巻き流れて、たちまち、駕籠と一行を包みこんでしまった。

「どうしたことだ、これは」

宵闇だけでは、視界が閉ざされるということはない。濃煙に包まれて、しかし困惑したのは、僅かの間である。やがて宵風に払われて薄れてくると、ほっとして一行はまた先を急いだ。

「背後に気をつけろ、酒井家の者に見咎められては」

「これだけ遠廻りしたからな、まず安心さ」

駕籠が担ぎこまれたのは、千姫の御殿であった。

4

千姫は忠重を見るのははじめてであった。

「この者が、忠重か……」

千姫は侍女たちを遠去けて、凝っと見守った。若い男の体臭が、匂いたつようであった。

駕籠で運びこまれた忠重は、侍女たちの手によって、裸にされ、風呂に入れられたのである。はじめ気を失っていた忠重は、すっかり諦めたように、いや、この運命の変転を興がっているように見えた。

「ここはどこだ」

「ほほほほ、女護ケ島と思召せ」

「わたしを何とするぞ」

「ほほほほ、お姫さまの想い男、さようにトガるものではありませぬえ」

「お姫さまとは？」

「いまにわかります。たんと可愛がって貰いなされ」
侍女たちは嫉ましげですらあった。
忠重はすっかりおめかしされて、一部屋に送りこまれた。そこには、雪洞の柔らかくなまめいた明りのもとに、錦の夜具がのべられ、くくり枕が二つ並んでいた。
屏風も、唐紙も、二階棚や千鳥棚の什器調度、すべてが豪華だ。
「忠重どのか……」
四季の群れ花に舞蝶の唐紙が音もなく開くと、一人の女性が入ってきた。
白綸子の寝衣を着、桃色の扱きを前に垂れ、髪をほふり髪に長く背にすべらしている。妖艶な大輪の緋牡丹を見るような感じの千姫だった。
「そなたは？」
「わらわは、ほほほほ、わらわを知らぬか、千じゃ」
べったりと千姫は、忠重と膝がつくように坐り、顔をさしよせた。
「千……天樹院どのか」
「そのような抹香くさい名は忘れてくりゃれ」
「したが……」
「千と呼んでたも」
千姫の息には酒の臭いがする。攫ってきた男と一夜を倶にするのに、勇を鼓舞してきたのか。
「かような真似をしたのも、そなたに恋してのこと、さ、抱いてたも」

ぐいと襟をひき剝いて、豊かな乳房を見せた。
やにわに、女の肩を抱きよせると、はげしく口を吸い、手を寝衣の中に突っこんだ。
褥にのめりこむように倒れたとき、女は哀しげに、悲鳴を洩らしている。
何も知らぬ若者、と思って、その青い芽を摘む楽しさを期待していたのに、その狎れた手は、たちまち女体を濡らし、狂わせた。
若さに不審を感じただけではなかった。中年の技巧というにも長けすぎていた。
女体は狂い、二十九歳という熟れたからだが、しとどな汗にまみれた。
「あ、あ、忠重、忠重どの……」
何度も、あの強い快感のうねりが来、女体はとろとろにとけるようであった。手足がしびれるほどの陶酔のなかで、千姫は、男の名を呼び、もう、眼も霞んでいた。
「千姫、そなたは、こうやって、男を弄び、そのあとで殺す……」
「あ……ああ、もっと！」
「その悪業も、これが終わりだ」
忠重――いや、あの濃煙の中で入れ替わった不知火ノ鷹は、枕元の水さしを傾けてたとう紙を濡らした。それを、恍惚の千姫の顔にべったりかぶせる。こうやって、胸を圧せば、痕跡を残さずに、窒息死させ得る。
天樹院の死は、事件になっては、幕府が困るのだ。
馬乗りになって、ぐっと押そうとした刹那、顔に乗せた濡れ紙が、ぱっとはね上がり、逆に

鷹の顔に、べったりと貼りついた。

「あっ、何を」

手のうちから、女体がすり抜ける。

「ほほほほ、ほほほほ」

狂ったような笑いが、頭上を走った。

「おのれ……千姫ではないな！」

「千姫さ、千姫が乱行した」

その声は欄間にあった。身軽く、その高みに飛び乗った女が、くノ一のワザを心得ていることは、あきらかだった。

あり得ることではなかった。

（千姫ではない！）

千姫がいつの間にか、くノ一に変じている。いや、くノ一が千姫に変じていたのだ。何ということであろう。すっかり、千姫の乱行と信じこんでいたゆえに、さすがの不知火ノ鷹も、目くらましされていたのである。

欄間に、乗った女は、けらけらと笑った。

「千姫だよ。若い男を嬲って次々に殺す。ほほほほ、千姫のしわざさ、酒井の弟では失敗したようだけどね」

「うぬ！　きさまは」

「風魔の……」

「薊だな」

幕府に雌伏している外様大名たちに、幕府不信の感情を盛り上げさせるだけでなく、有力旗本たち内部からも、その機運を盛り上げようとしての、この恐るべき反間のワザだったのであろう。

ほんものの千姫にとって替わり淫楽と殺人で不評を招く、その計画のために、直接に接触する老女などを更迭したのか、くノ一薊の巧妙な変化は、千姫になりきっていた。

千姫――いや薊の口から、するどい笛の音が発せられた。薙刀を手にした侍女たちが十数人、足音荒く走ってきた。この中の何人かは同じ風魔くノ一であろう。

「にせ千姫のいのちは貰ったぞ」

はらりと撒いたマキ菱に、侍女たちがひるんだ隙に、宙を飛んで、鷹は薊に迫っていた。

薊は天井を破って天井裏へ。鷹もそのあとを追う。凄絶な死闘がはじまった。遊びではない。影は影を追う。殺気が充ちた天井裏に、刃が鏘然と火花を発し、勁烈な声が、闇を裂いた。天井裏を、二匹の雌雄の鼠が追い追われる如く、一抱えもある梁の交叉するなかを、走った。屋根へ出た。かさをかぶった月の仄明りのもとに、薊は立ち止まった。

「鷹、お前はあたしを殺せない」

「なに！」

「風魔の水遁のワザを見るがいい」

薊の裸身が宙に躍る。地上に叩きつけられるかのように落下したが、池中へ落ちて、はげしい水煙をあげた。蓮の花が咲いている池であった。

「しまった！」

つづいて鷹が池へ飛びこもうとしたとき、

「鷹！　千姫さまが見つかった」

百舌鳥が屋根の上を滑るように走ってきた。

「なに！　千姫だと」

「ほんものの千姫だよ」

百舌鳥は、昂奮で息をはずませている。

「侍女に化けていた風魔を白状させたのさ。千姫さまは持仏堂の須弥壇のうしろに閉じこめられていて、死にかけていた」

「そうか、惜しいことをした」

「え！　千姫さまが死んだ方がいいの」

「薊だ、風魔くノ一……悪運の強いやつだ」

鷹は呆然として呟いた。これで千姫の悪い噂も消えるだろう。謀略の黒い手は引っこむに違いなかった。

残念げに、鷹は、池の面を見た。幾つかの赤い花がつぶれて散っていたが、とろりと、もとの静けさにかえった池は、すでに風魔くノ一薊の波紋も消して、蓮の葉を浮かべていた。

まぼろし大名

1

その湯殿は母屋から離れていた。火の気と湯気を嫌ったのであろう。竈がついていて、沸かせた湯を桶で風呂の中に注ぎこむようになっている。

「如何でございます、湯加減は」

と竈焚きの男が声をかけた。

「――丁度よい」

女の声が答えた。

竈焚きの男はそれを聞くと、背後をふりかえって合図した。茂みの蔭から、一つの影があらわれた。袴を穿き、きちんとした身なりの武士である。

無言で、竈焚きへ、頷いて見せて、用意のものを与えた。金包みらしい。

「……」

竈焚きはぺこぺこしながら、倒してあった梯子をたてかけた。

「大丈夫か」

影は、声をひそめ、梯子を二、三度、たしかめてみてから、昇った。

丁度、明りとりの湯気ぬきの窓から中が見える。

まだ暮れたばかりで、漸く宵闇が人影をおぼろにしたところであった。このあたりの夜は早い。上野のくに小幡の城内である。

織田左少将信良の城の奥御殿の湯殿であった。

中の女人は、この不埒者の眼には気づかないのであろう。サーっと湯の音がした。

のぞき見の武士は夢中になって、首を伸している。中をのぞいていると、その足場も、醜悪なおのれの姿もわからないようであった。

「おい！……」

うしろで、声がした。それを竈焚きの声と思ったのである。叱ッ、と、手をうしろで振った。だが、うしろの者は梯子に手をかけた。

「何をする！」

これは、湯殿の中に聞こえぬように声をひそめたのである。竈焚き？　は、のこのこ、梯子をあがって来た。

「おい……」

あっと思ったとき、その男のからだは宙にあった。襟がみをつかんで、ひき剝がされ、投げ飛ばされていたのである。梯子が軋んだ、男は遠くの草むらにドサリと投げつけられている。打ちどころでも悪かったのか、そのまま、うずくまって呻いている。

竈焚きは、すでに地面へ這っていた。当身を喰っていたのである。

すると、この男は？　図々しく、独りで高見の見物としゃれこむらしい。

無双窓からのぞいている眼を、女は知らない。むろん、最初の眼も気づいていない。

若い女であった。金網の壁行燈で燈油が燃えていた。その炎のゆらめきは湯気に包まれた女の肌をおぼろに妖美なものに見せている。

まるで湯疲れしたように、女はぼんやりと湯槽のかげに坐っていた。無双窓のところからは、灯のかげになっていて、ゆたかな胸の双つの丘や白い腹部のなめらかさなど見えながら下腹のつけねのあたりは、仄暗く、おぼろだった。

（うすいな……）

陰毛のうすい女は夫に先立たれる、と聞いている。かれは、この城に来た目的を思った。

女は、城主信良の正室にちがいない。

まだ二十歳をやっと越したくらいではなかろうか。三歳になる嫡男信昌がいるが、とても子持ちとは見えぬ若い肌であった。

女は片膝を立てた。下腹をすべって茂みのふくらみを、他から隠すように、掌におさめた。

無双窓の眼は、はっとした。かれがのぞいていることを気取られたか、と思ったのだ。が、そうではなかった。湯気のなかにあらぬかたを見ている夫人の眼は虚ろであった。手が動いていた。右手である。はじめはゆるやかに、そこをなずっているようであったが、はっと、女体は前にのめるように動き、微かな声が洩れた。

指頭は泉に溺れたのか。夫人は、しだいに息あらく、上体をゆらめかしながら、何やら、低くひとりごちている。

それは、誰かに訴えているようでもあり、うつつの呟きのようでもあった。

湯気に遮られて、声はくぐもり、はっきりとは聞きとれなかったが、その悶えがはげしくなり、乳房がぶるぶる揺れるほどあらあらしい動きになると、

「あ、あなたさま、あ……静は、静は」

もはや声をころすことも出来ないほど、欲情が、けものめいた激しさで、女体を狂わせていた。

湯気も、ためにうす紅く染まるかと思われる情炎であった。はっ、はっ、と熱い吐息に、髪が揺れ、おくれ毛が頬に貼りつき、半ばひらいた口からは、生臭い息が洩れた。

そのもの狂おしい、欲情の虜囚となった女体は、ぬすみ見る男の心をかなり動かしたようであった。

（はて……異なことよ）

影は口の中で呟いた。

（夫ある身が独り慰めするとは……）

そうした眼があるとは知らず、夫人はその美しいからだを悶えさせて、指を動かしているのだった。

もう片膝を立てているのも辛いように、がくっと、身を倒すと、左手が湯槽をしっかり摑んだ。あえぎが一層、はげしくなった。ひーっと、悲鳴のような泣き声をあげて、全身をふるわせ、果てた。自ら身を倒して簀ノ子の上に仰臥すると、右手は乳房を愛撫しはじめていた。左手の指は、なお、谷間ふかく沈み、泉の深淵にうごめいているのだった。

そこまで見とどけると、のぞいていた影は、無双窓から剝がれた。

その前に、夫人は虚ろになった眼に、ひら——と白いものが宙に舞ったのを見ている。

それは、恰も、白鳥か、小鳩の舞いおりるに似ていた。

が、夫人の顔の上に落ちてきたのは一葉の紙片であった。柔紙の一枚——それはまだ、この湯気の中なのに、濡れていなかった。

「あっ……」

夫人は醒めた。突然の珍事であった。それがしかし、何を意味するかは、まだ恍惚の余韻が揺曳している彼女の頭では、判然としなかった。

そのころ、すでに影は御殿を忍び出ている。

三日月が破風のとがった先にかかっていた。夏の夜の月を仰いで、

「妙なものを見たぜ、若妻の孤り遊びか、こいつァ妙な判じ物だ」

こう呟いたのは、不知火忍者〈鷹〉だった。

2

御城主さまは重い病気なそうな、早う御本復をお祈りしておりますわい。
どこにいっても、領内の者たちはそう言った。水垢離をとっている者もいたし、食断ちをしている者もいた。
侍ではない。一般の農民である。
これほど領民に慕われている領主というのは、珍しい。鷹は、むしろ疑問に思ったほどだ。
「普通なら、たいてい殿さまというのは恨まれているはずだけど」
と、朱鷺が言った。
「御年貢がゆるいのかしら」
百舌鳥も首をかしげた。
領主と農民の年貢の比率は、普通六公四民である。五分五分ならいい方で、ひどいのは七公三民というところもある。
鷹が聞き出したところでは、信良は四公六民と、善政だった。
だけではなく、氾濫する河川の堤防を築き、飢饉の歳には年貢を免除したこともあるという。
「――良すぎる」

と、鷹は不審を解けなかった。
「これほど民のことを思う領主など、聞いたことはない。何か裏があるのではないか」
為政者もそうなら、人の裏を探る忍びノ者も、性格が素直ではない。善意というものを信じられない。
その左少将信良の病気本復祈願は仰々しいほど、大がかりに行なわれていた。
城内の一角、神殿に注連縄を張り、供物を盛り、祈禱が行なわれていた。病気退散、悪魔調伏のゴマを焚く。
ものものしいのは、この大修法を妨げる者あれば平癒は期し難しとして、穢れ多き者の一切介入を許さず、竹矢来をめぐらし、日夜、武装した足軽が警戒していることだった。
百日祈願と称い、百ヵ日の間は、近よることは誰もできない。医者もいけない。通力が損じられて、無効になるというのである。
「鷹、あそこに忍びこまないと」
「容易ではない。番士どもも、あの警戒ぶりは尋常ではない」
お座なりの警戒ではなかった。異様なほど忠実に、緊張している。忍びのわざは、弛緩を利用して発揮される。弛緩させるには、つけこむ虚が要る。
それがなかった。ここにも、鷹は、従来と勝手が違うことに、戸惑いをおぼえた。
「――でも、それじゃ役目が果たせないじゃァないか」
朱鷺がふくれっ面をした。

「三百金の報酬を返さなきゃならなくなるよ」

——松平信綱の指令は、意外なものだったのである。

この小幡の織田家から信良の隠居願いが出された。まだ四十そこそこの、いわば働き盛りのはずの信良が隠居するということもいぶかしいが、同時に提出された家督願いの嫡子信昌は僅か三歳。

まだ乱世の余波が残っている寛永という時代である。後の世の泰平をもて余すころと違い、人気は荒く、儒教が徹底していない。治政のレールが敷かれていない。松平信綱らの苦慮もそこにあったわけだが、各々大名小名、それぞれに内政の実をあげるのに大童な時代であった。こうした時代の、この願書が幕府の御用部屋の眼を光らしたのは、当然といえる。

「——それだけではないな」

と、鷹は密命を受けたとき、信綱に皮肉を浴びせている。

「それだけじゃ、他意はない」

「あるさ、相手が織田だから、あわよくば改易……」

「鷹！」

「おれに隠してもしかたがあるまい。おれは金さえ貰えばよい。織田であろうと豊臣であろうと、おれには関りのないことだ」

「上州へゆけ」

「気がすすまぬが。しかし、大公儀のやり方は、ちとあくどいな。豊臣家はうまく亡ぼした。あとは徳川家にとって目の上の瘤といえば織田信長の裔がいるだけだ」

「口が過ぎるぞ、鷹」

「なァに事実を言っているだけさ。おれは別に非難しているわけじゃない。金で雇われて、人の秘密をさぐる、そんなおれを肚裡ん中では蔑んでいるだろうが、おれは大公儀とやらの狡さを蔑んでいる。おあいこだ」

「行くのか行かないのか」

「どうするかな」と、鷹は焦らしてから立ち上がると、こう言ったのだ。「織田信長の孫の顔を見にゆくか」

3

その信長の孫、信良の顔は見ることができなかったのである。隠居願いの実体を探るには、信良の心底を突きとめねばならぬ。

信良は、幼名勝法師といい、信長の子信雄の子である。信雄は信長の命を受けて、伊勢略取のために代々国司として名声のあった北畠と強引に養子縁組をして、のち養父を謀殺、伊勢を乗っ取った。が信雄は、信長ほどの覇気はなく、家康と秀吉の間にはさまって、体よく棚上げされてしまった。天正十五年には正二位内大臣という高位にのぼったが、名誉だけで実力はなくなっている。

信良はその三男であるが、上が早く歿ったので、家を継いだ。いまは従四位上左少将である。

隠居願いが出されたということは、常態では、重病か老衰だ。それが治癒する望みがあれば、早まって、隠居願いは出さない。

（いったい、何の病気か？）

鷹はそれを探ろうとした。

だが、病名もはっきりしない。ただ、重病だという。病名がはっきりしていれば、医者の選択もあるが、それがわからない以上、神仏に頼るしかない。

（亭主のことはやはり女房に聞くしかない）

と、鷹は思った。

（あのからだにな……）

若くしてほどよく熟れた肌だった。湯気に包まれてほんのり赧らんだ美しさが眼に在る。

その夫人お静ノ方は七日ごとに、愛宕権現に参詣にゆく。

当時、戦国時代の流行がまだつづいていて、愛宕信仰は後世よりも盛んだった。

信仰には時代の要求ではやりすたりがある。たとえば、お稲荷さまなどが江戸の町々にやたらと眼につくようになったのは、中期以後である。

城からは、愛宕の森まで、およそ一里ほど。お静ノ方は女中たち供侍に守られて行くのである。

途中に橋が幾つかある。その一つ地蔵堂前の地蔵橋にさしかかったとき、

〈――殊勝だな、お静どの〉

そんな声が聞こえた。乗物の中でお静ノ方はぎょッとした。

〈七日ごとの参詣、御苦労なことだ〉

「……！」

〈さぞ、信良どのが喜んでいることだろう〉

まさか、そんなところで声が聞こえようとは思わなかった。

乗物は動いているのである。声もまた同じ速度で従いてくる。

乗物わきには侍女が多門として警護していたし、供侍たちもいる。六尺も二人、前後にいるのだ。

これだけの供の者がいながら、その声の主はどこにいるのか。まるで耳の傍で饒舌っているように聞こえるのである。

〈そなたの貞節には感じ入った、信良が病ゆえに、孤りで慰めているか〉

「だ、だれじゃ！」

思わず口走った。声が低かったのはそれでも圧えたのである。

〈あとで、わかる〉

そう言ったのが最後でそれなり、あやしの声は途絶えた。

お静ノ方の狼狽は尠くなかった。幻聴かと思った。この日頃、疲れている。心もからだも疲れている。そのせいだろうと思った。

そうではないことを知ったのは、いつものように愛宕の森に着いて、参籠したときである。いつも昼ごろ着いて二刻の参籠をする。四時間の祈願だ。格子戸をぴたりと閉めて、ひたすら織田家の繁栄と安泰を祈るのだが、祈っているお静ノ方の耳にふたたびあの声が聞こえたのである。

〈――ここでは祈るだけか〉

「え!?」

〈湯殿でのようなことはせぬのか〉

「あっ、そ、そのようなことを」

愕然としたお静ノ方の眼の前に、ひらと白いものが舞いおりてきた。

白鳥のような――一葉の紙である。あの湯殿のなかに降ってきたのと同じ懐紙ではないか。

ぎくりとして、声を失った。その紙は彼女の自慰への諷刺だった。

驚愕に声も出ないお静ノ方は、いつの間にか背後に男が立っているのに気がつかなかった。

ふいに、背後から抱かれた。

うしろにのけぞるように倒れかかったのを支えられたかたちで、口を吸われていた。

ふり離そうとしてもがく胸に手がさしこまれている。乳房を摑まれていた。小大名ながら、正室としての立場は夫以外の男の手など知らない。

それをふいに摑まれたのだ。驚愕はいうまでもない。

(湯殿の中のことを見られた……)

それが自縛した。四肢が萎え、動顚して、自分がどういう立場にあり、何がはじまったのか、混乱してわからなくなっている。

いうまでもなく、その不埒な男は〈鷹〉である。鷹がそのときお静ノ方を抱いた気持ちの底には、目的のためだけでなく、恣意が含まれている。忍びノ者より人間としての情欲がなかったとはいえない。

そこには湯上がりの美しく赧らんだ肌の記憶があった。

鷹の手と唇は、お静ノ方をたちまち情感の湯の中に惹きこんでいる。混乱の中での情欲は、嘗て夫にも与えられたことのない昂奮であり、陶酔だった。

4

〈――信良は急死したという噂がある〉

鷹は陶酔でとろんとした女に囁いた。

〈ほんとうか、信良は死んでいるのではないか〉

「あ、ああ……」

〈言え、信良は、すでに……〉

「あ……いいえ、いいえ、そんな」

はっと醒めて、お静ノ方はかぶりを振る。その双眸に涙がいっぱい盛りあがっているのを見

たとき、鷹は異様な感動を受けた。

「お願いでございます。どうか、哀れと思って……」

〈……〉

「子供のために……見逃がして下さいまし」

鷹の目的をすでに見抜いているのであろうか。思わず、鷹は緊張した。女体を蕩かすのが目的だった鷹が、そのとき、情感のうねりのなかで、思わず放ち果てていた。

美しいだけではなく、お静ノ方は聡明だった。いま織田家にサグリを入れる者は、大公儀の黒い手しかない。織田信長の血を引く名家を取り潰さんとする権力に必死に抗している姿が——嫋々たる風情だけに、一層、憐れを催したのである。

鷹は返事に窮した。かれは無言で身を離した。

「お願いです！」

お静ノ方は必死ですがりついて、

「大公儀の御法度では、嗣子のお届けしないうちに主人が歿ればお取り潰しとか。信昌はいまだ三歳、まさか、まさか、あのようなことが起ころうとは、誰も思うてみなかったことでございます」

「あのようなこととは」

「は、はい……洪水から田畑を守るための堤防工事に、自ら立ち働いて、材木の下敷きになってとうとう……」

「死んだか！」

織田信長の孫ともあろう者が、農民のために材木を担いで傷死する。

大名の身分では考えられないことだった。そこまで領民の為を思う大名がいるだろうか。

鷹は立ち去った。

そのまま〝巣〟へ帰ってきた。

「おい、もどるぞ、江戸へ」

「あれ、もう？　何か摑んだの」

「よいのだ」

「三百金だけの仕事はしたのかえ」と、朱鷺も眉をひそめて、「まさか、お静ノ方の色香に瞞されたのじゃないだろうね」

「そうかもしれぬ。それでもよい」

「鷹、それでも不知火一族か。忍びの稼ぎも、一族の再興のためだということを忘れたのかえ」

「今度のことがなくとも、三百金の仕事は、出来る。が、いまおれが事実を告げたら、信良の苦衷が水の泡になる」

「でも、人のことなど」

「人のことだからだ」

鷹はうるさそうに言い捨てた。

「鷹がその気持ちならいいけど、実は闇公方の手が動いているらしいんだ。ここの次席家老の吉田源五左衛門というのが、闇公方の手先になって策謀している。念流の使い手の佐々十太夫とか物騒な連中が乗り込んできているよ」

「去のう、邪魔が入らぬうちにだ」

鷹は〝巣〟を出た。

一歩出て、はっとなって四辺に眼を走らせた。夏の夜の厚く広い闇の底に、ひたひたと迫る影が幾つかあった。

「来たな」

鷹は闇を睨んで、

「朱鷺、百舌鳥、走れ」

「でも、鷹が」

「もはや用は済んだ、無益の殺生……」

徳川幕府を倒さんとして策謀している闇公方が、名門織田家の改易騒ぎを利用せんとして魔手を伸ばしてきたのであろう。

闇が裂けるように、数人の影が飛びだしてきた。その手の白刃が炉の火に映じた。槍が伸びた。身を翻す鷹に、矢が束になって飛んで来た。

その一矢二矢が、袖と袴をうしろの壁に突き刺した。

「観念せい、幕府の忍び。死ぬる前におれの名を念仏代わりに唱えるがいい、佐々十太夫だ」

その言葉に鷹は、あらためて、佐々の顔を見た。あの男ではないか。お静ノ方の入浴を盗み見ていて、鷹に叩きつけられた男。

鷹はにやりとした。

「まだ、懲りぬと見ゆるな」

「なに？」

「近ごろは、女の湯浴みを盗み見することはないか」

あっ、と、佐々は声をあげた。

「きさまが!?」

「そうだ。妙なところを見たよ。へっぴり腰で、女の湯浴みをのぞく……」

「黙れ！」

「女も女、お静ノ方の」

「くそ！」

念流の剛剣が風を巻いて落ちてきた。これに影を斬らせて鷹の姿は宙に飛んだ。が、十数人の敵が囲んでいる。

鷹がその次にしたことは、おのれの周囲に火炎玉を爆発させたのである。次々に火が起こった。おのれをその火の中心に置き、さながら火焔不動となって、燃え上がるかに見えた。だけではない。鷹はおのれの装束に火が移るのを拒まなかった。ぱっと燃え上がった火に、十太夫も吉田源五左衛門も愕然となったとき、その炎が巨大な火の柱となって天に冲するかのように

はね上がるのが見えた。

その火明りの中に、燃え上がる火袋を、うつせみとなして、跳ね抜けた影があたかも、かげろうのたゆたう如く、十太夫の眼にうつった。それが、かれがこの世でものを見た最後だった。鷹の凄剣は刀を持った右腕を切り落とし、包囲の輪の外に出て闇に消えた。あとには虚しく、残火が音を立てて夜を焦がしているだけであった。

数日後に訪れた大目付岡部淡路守は昨日信良が歿ったと聞かされた。すでに信昌の家督願いは出ていた後ではあり、織田家の存続は許されるにちがいなかった。

正式には、家督願いの認可は将軍に目通りを許され、言葉をかけられ引出物を賜うことによって成立する。願書だけで受理されるのは、よほどの場合である。謀叛の意志がないことが明白となったことで、織田家は名跡を保つのが許されよう。

鷹は、江戸へ戻る道すがらお静ノ方の切ない眸を思いだしていた。

くノ一湯女

1

湯女は客の垢を掻くだけが仕事ではない。女歌舞伎が、踊りを見せ、所作を演じるだけが目的ではないように、裏がある。肌を売る。形態は違うが、現代のソープランドと思えばいい。そのために繁昌した。

はじめは湯帷子で客の世話をしたが、度々の手入れがあって、売春を取り締られると、小部屋を作らない代わりとして、腰のもの一枚で上半身裸を許された。むろん男の客が戯れ易いようにとは言わぬ。

〝湯気あつく衣濡れ候いて……〟と口実をつけている。それもはじめは白無垢の二布だったのが、いつの間にか、燃えるような緋縮緬にしてしまっている。

どんな布令でも、老中が代わったり町奉行の更迭があったりすれば、しぜんと取り締りの手は弛くなる。

湯女風呂の二階に小部屋がひそかに建て増しされ、客は、垢を掻くのもそこそこに、目あての湯女を抱いて二階へ上がる。

その赧ら顔の〝天狗〟と呼ばれる男も、ほかの客と同じだった。おのれの大きく膨れあがった一物を女の手に握らせて、動かして見せた。

「この通りじゃ、ははは、セガレが催促しおるわい」

「あら、いやだ」

「何がいやなものか、男のこれが好きで商売している湯女が、何を言うぞ」

「……」

小部屋に入ると、もつれて倒れた。

「早う、これをとらぬかい」

緋縮緬の腰布をひき千切らんばかりに手荒く剝ぎとって、腰屏風の向こうへ投げた。濡れてあざやかな色に映えている腰布は、ばさっと腰屏風にひっかかった。

行燈の明りがうす朱く女の肌を染めて、客の欲情をさらに煽った。

「いつから、この店に来ている？」

「……」

「前には見なかったぜ。これまで何人の客をとった？」

「知らないよ」

湯女には惜しい美しい肌を横たえたのは不知火くノ一の百舌鳥だった。

「うふっ、いい肌だ」

「……」

「他人には抱かせたくねえ肌だ」

天狗郷右衛門は、ぱっと帷子を脱ぎ捨てた。

帷子には背中に大きく天狗の面が染めぬいてある。袖口には針金を入れて寛闊仕立てとし、裾には鉛をくけこんで、歩くたびにぱっぱっとはねるのを粋とした。

近ごろ市中を荒しまわっている町奴の風俗だった。

ことにこの男、一方の棟梁（頭領）でもあった。大身の旗本や大名家に渡り中間、若党などを斡旋している、いわゆる人入れ稼業、口入れの元締めだ。

「お前のような美い女がいるなら、毎日でも来るわいの」

「毎日では垢の出るひまがないでしょ」

「ははは、わざっと泥水かぶってくるわい」

鶯泣かせの郷右衛門、といわれたこの男がどうしたことか、女体に蔽いかぶさったとたんに、ものの十と数えないうちに、浅ましい声を放って、果てたのである。

百舌鳥は、さめた顔でにやりとした。

「あっ……あっ、いいぞ、いいぞ」

郷右衛門はいかつい顔をとろとろに弛めて、唇の端からだらりと涎を垂れた。

「いいかえ、いいかえ……」

百舌鳥の腰と手が動いている。掻巻を腰のあたりまでかけているので、どうやっているのかわからない。

不知火忍法くノ一秘奥巻之伍ノ下に〈うろにて心とるノ条〉とある。うろとは、空洞か有漏か。有漏とは梵語で煩悩を称う。煩悩あるが為に過失を漏泄し、あるいは正道を漏出する故にいう、とある。

空洞とは、掌中のそれを称い、また股間の窪みを称う。下肢をひたと合わせて、蟻の門渡りと内腿でかたち作る空隙の意でもある。別称スマタと。即ち膣も肛門も用いずして、陽物を快感に導く。

百舌鳥が若くしてそのワザを会得したのは、くノ一に似気ない潔癖感からであろう。

用いるに淫羊藿と山芋に蛞蝓の摺り混ぜの粘液を以てする。北越かまいたちはこれを混じるに黒百合の根の煎汁を利用するというが、南国不知火一族の伝承では、南蛮の草木を併せて、常には粉末を携行し、事前に唾もしくは酒で練るという。

その考証はさておいて、天狗郷右衛門は、あまりの快感に、その偉軀をよじらして、恍惚となった。

「う……ごくらくじゃ、ああ、ごくらくじゃ」

〈――喜八にもごくらくを味わせてやろうよ〉

夢幻の中の囁きだった。郷右衛門の眼はすでに虚ろになっている。

「き、喜八？……」

〈喜八さ、おまえの輩下の〉

「う、うむ……」

〈どこにいるの？　喜八は〉

「……」

〈喜八よ、喜八は、どこ？〉

百舌鳥は勢いこんだ。

が、とろんとなった郷右衛門は、うわうわと、分厚い唇を動かすだけだった。故意に秘めているのか、真実知らぬのか、百舌鳥は焦々としてきた。

と――

〈およしな〉

どこからか、不知火の風声が聞こえた。百舌鳥の耳にだけ聞こえるのである。

〈だめさ、それ以上……〉

〈――でも、知らないのかしら〉と、百舌鳥は応えた。〈親分だから、輩下の行方は知っているはずだけど〉

〈焦っちゃ駄目、ばれるよ〉

〈でも〉

〈あたしに任せるがいい、別の手があるのよ……〉
これは朱鷺の声であった。

2

事件は数日前に起こった。
小姓組番頭二千石の旗本筧弾正が殺された。下手人はわからない。屋敷に近い牛ケ淵に斬殺死体が浮いていたのである。
これが同じ旗本でもずっと身分の軽い者だったら、それほどのこともなかったろうが、何しろ二千石といえば大身である。
それが変死とあっては、家名は潰れるし、世間は騒いだ。一つには、この事件、物奪りではないし、ただの私怨にとどまらない。
というのは、この筧弾正は当時、市中をふるえあがらせている旗本奴の名だたる者だったからだ。〝旗本奴〟というのは、徳川幕府麾下の旗本八万騎（実数は二万たらず）の中でも、不平不満の暴れ者たちが、徒党を組んで、
「公方の尻押し」
と叫んで、無頼の所業に日を送っている連中だった。
〝奴〟とはいうまでもなく、奴隷、奴僕の称で、高身のいわば四民の上に立つ身が、わざと、身をやつし、格式を崩して、異風を誇った。
異風とは、傾く——かぶき者と称われた一派だ。
芝居の歌舞伎も、アテ字で、もともと出雲ノ阿国などの歌と踊りや所作が、現実諷刺の男舞い、男装つまり異風からきたものである。
その芝居のほうは、女歌舞伎、野郎歌舞伎となって〝芝居狂言〟で定着はしたが、こちらのかぶき者はつまり、その桃山時代の後半からの異形が売り物の、無頼漢の代名詞になっている。
この旗本の不平というのは、
「われらの旦那（家康のこと）が、天下の将軍とならっしゃったのも、三河以来、我が父祖の働きではないか」
徳川幕府の政策は、家康、秀忠と将軍職が二代にわたる上、きわめて巧妙な懐柔策でこれまでの敵を服せしめたことである。
いわゆる外様大名の政策だ。
本来、敵であった豊臣恩顧の大名、もしくは石田三成のシンパなど、すべて叩き潰す力の政策をとらず、本領安堵を認めたから、加賀の百万石や、薩摩の七十七万石、伊達の六十二万石など、大大名が、威張っている。
旗本たちは一万石以下。
まるきり身分が違いすぎる。敵が好遇されて、祖先の血を流した旗本たちが、この低い身分とはどういうわけだ。

その不平不満だった。

天下が泰平になると、身のまわりを意識するようになる。

そのことが、ことごとくに面白くなかった。

大名に喧嘩を吹きかけたり、日常の役目を無視したり、定められた格式を守らず、わざと、汚ない格好をしたり……そうした反抗が、将軍には向けられないから、大名や、お役目大事の保守的な旗本や、泰平に馴れて、肥えてきた商人たちに向けられた。

その一方、商人たちは自衛手段として無頼の浪人に小遣いをやって用心棒にする。

いわゆる人入れ稼業の、人足元締めが、形式化してくる大名旗本の格式から、一期半期の奉公人を必要としてくるに及び、それらの口入れをやるようになって、町の博徒としての勢力が扶植されてくるのだが、その中の著名なのが、幡随院長兵衛や、放れ駒四郎兵衛などだ。

その親分たちのもとに、関ヶ原や大坂役で敵対し取り潰された大名の家来たちが浪人となって、頼ってくる。浮浪の徒が、一宿一飯の仁義から、子分になる、というふうにして、増えてきた。

これが町奴である。

旗本奴と町奴は、したがって、乱世から泰平の世への移行に伴う、過渡期の生んだあぶくのようなものだった。

今日のヒッピーなどにも共通したものがある。戦後直ぐにはいなかった連中だ。なまじ生活が楽になったところから、ああした風俗が出てくる。

満ち足りたがゆえに、旗本奴が出、満ち足りないところから、町奴が出る。この両者が、泰平の江戸の街でぶつかるのは当然のことだった。

そうしたさなかに、筧弾正が殺されたのだ。

「――下手人は、喜八と称う男らしい」

と、松平伊豆守信綱は言った。

「内々調べたところ、筧弾正は性粗暴にて、前日に、中間を無礼討ちにしたという」

「……」

「なんでも腰の物を汚ない手で摑んだとか、些細なことを怒っての無礼討ちでな。それを傍で見ていたのが、若党の喜八だ。筧に向かって唾を吐いて逃げたそうだ」

「――なるほど、するとなかまの仕返しというわけか」

気のなさそうに、そのとき、不知火忍者ノ鷹は吐き捨てた。

「つまらねえ主従の喧嘩だ。御老中が乗りだすほどのことはねえ。若党一人を探すのには、ちゃんと町奉行ってェのがいるじゃねえか」

「事は小さく見えても、与える影響は大きいのだ。斬られたのは二千石の旗本だぞ、一刻も早く、若党喜八めを捕えて処分せねば、大騒動になる」

「火焙りにでもするのか」

「近ごろ、町奴どもの跳梁、目にあまるものがある」

「旗本奴もな……」

「町奴を、一掃すれば、旗本奴どもも自粛する」
「さて、どうかな。とにかく、おれは御免蒙るぜ。若党一人を探すのに、おれに多額の礼金出しちゃア、そちらの損だろう」
「町奉行では日数がかかる。十日二十日と過ぎては、大事になる。一日も早く探し出さねばならぬのだ」
「いやだな」
「天下の御政道を示すためだ。身分ある者の無礼討ちは認められている。御法からいって、筧には手落ちはない」
「その御法が間違っているのさ」
「黙れ、御政道に容喙するまい。その方は、ただ、金のためにワザを売る。そうであったろう」
「そのつもりだったが……」
「拒むな。もっとも、その喜八が下手人かどうかも判然としていないのだ。その日、筧は市中で町奴らと大喧嘩している。事の真相糾明のためにも、この役目、引き受けてくれぬか？」
「そう言われると弱い。よかろう、幾ら出す」
鷹は折れた。金の交渉になると、後へは退かない男だった。

3

あたしに任せるがいい——と、くノ一の朱鷺は言った。
天狗郷右衛門を、それ以上、うつつにするのではなかった。すでに、この〝梶の風呂〟に入ってから三日になっている。
そのあいだに、朱鷺は耳と眼を働かして、喜八の馴染の女を見つけていたのである。
喜八という男はさっぱりしていて、この鎌倉河岸でも、どの湯女、という噂はなかった。
気がむけば、どの湯女風呂にでも行き、いろんな女を抱いた。
客の中には、これと思う湯女にばかり通い詰めるのと、手当たりしだいに、その日そのときの気分しだいで、湯女を買うのと、二タ通りある。
喜八は後者だった。
「人間いつかは死ぬものさ」
それが口癖で、
「女に惚れねえことよ。好きな女が出来ると、御身大切で、イザというとき弱気になる。それじゃア男一匹、ちゃんとした生き方は出来ねえ」
そのためには、女に惚れない、惚れられない。それが男の生き方だと、常々言っていた。
そんな男に、意外と、惚れる女はいる。

（いるはずだよ。そいつを探せば……）

と、朱鷺は、湯女に狙いをつけたのだ。

百舌鳥はなかまの連中から、居場所を聞き出そうとしたのだ。その分担で、二人は、いやいや湯女に扮しているのであった。くだらない男に抱かれるのもしかたがない。が、肌を汚すのは阿呆らしいから、くノ一のわざを用いて、早く果てさせてしまう。指先一つ、薬の一塗りでと、それは容易であった。

「――ねえ、扇さんえ」

と、その夜、朱鷺は、古参の扇という湯女に近づいた。

どちらかというと、平凡な顔立ちだし、内攻性なのか、この湯女、あまり売れない。

この夜もお茶引きだった。ぼんやりと外を眺めていた。

「昨夜はどこへ行ったのかえ」

「――どこって……」

「居なかったろ。裏口からこそこそ出ていってさ、暁方に帰ってきたろ」

「ええ、あの……伯母さんが、伯母さんが病気で」

「毛脛の伯母さん？」

「違うよ。そんなんじゃない」

「どうだかね……まあいいや、一杯お飲みなさいな」

さされた盃をものうい手つきで飲み干したものの、冴えない表情は変わらない。

「ねえ、扇さん、おまえ、一体どんな男が好き？」

朱鷺は、からだをすり寄せて、ねっとりと情熱的な眼で見た。扇は狼狽した。

「どんなって……」

「ほほほほ、隠さなくったっていいじゃないか、好きな男が……」

「あたし、男はきらい」

ぷいと、扇は横を向いた。

「そうかえ、あたしも、男をきらい」

さらに朱鷺はすり寄って、扇の手をとった。

「ねえ、ほんとに、男っていやね」

「……」

「女はやっぱり女同士のほうがいいよ。ねえ、扇さん、あたしゃ、ここに来たときから、お前を見て、死んだ姉さんにそっくりだと思ったのよ。姉さんは、そりゃ、あたしを可愛がってくれてね……」

朱鷺は手をとり、指に頬ずりした。凝っと蠱惑的な瞳を投げたまま、そっと指を噛んだ。

扇は、手をひこうとしたが、胸が熱くなり、からだ全体が、ぼうっとなって目の前に靄がかかってくるような気がした。

（あたし、どうしたのかしら？）

朱鷺の大きな眼の中に吸いこまれそうだった。

朱鷺は、手を舐めたり、指をチッと嚙んだり、腕をさすりあげたり、その手を、そっと襟からすべりこませて、乳房に触れた。

「い、いけないよ」

「扇さん、いいじゃないか。たまには、女同士で、ね……」

いけない、そんなことは、と言いながら、扇はいつか、朱鷺に抱きすくめられ、その場に倒れていた。

屏風と障子の向こうには、男女の睦み声が聞こえている。嬌声と、三弦と、甘い声が……それと、たった一杯飲んだだけの酒が、どうしたのか、からだ中をほかほかさせ、血が騒いでいる。まるで、淫虫が血管の中を荒れさわいでいるようで、朱鷺の手に乳房を揉まれ、唇を吸われると、抗う手も弱く、陶酔に落ちこんでいった。

〈——ねえ、お前、女より、やっぱり男が好きなんだろう?〉

朱鷺の使う秘薬は強烈に、扇のからだをとろけさせている。

湯女の中には、あちこちの風呂屋を渡り歩いたたたか者が多い。

柳の下に立って、男の袖を引くしがない夜鷹よりは、一応、おもてむき垢すり女という隠れ蓑があるし、客の選択が出来る。

嫌いな客なら、必ずしも、とらなくてもいいのだ。その点、吉原の遊女よりは自由であった。その上、遊女には年齢の制限があるが、風呂屋女にはない。したがって、落ちぶれ浪人の妻女や娘などという掘り出しモノがあるかと思えば、すれっからしの女から、トヤに入った者まで雑多なのであった。

朱鷺の強烈な媚薬と技巧で、扇は夢うつつになりながら、あ、あ、とからだを弓なりにそらして、

「やめて、もう、やめて……」

口走るしたから、その甘美な官能の淵に惑溺しているのだった。

〈喜八はどこへ隠れているの?〉

「あ……」

〈昨夜、逢ったのね、どこで、どこで逢ったの?〉

たまらずに、扇はとうとう答えていた。

「せ、誓願寺の納屋で……」

〈そう、でも、男よりも、女同士のほうがいいでしょ、もっと、もっと、よくなるよ〉

朱鷺はさらに、扇を狂わせた。喜八の居場所を洩らしたことを、忘れさせねばならないのだった。

4

誓願寺は神田川の内にある。後に移転したが、当時は広大な境内を擁して数千坪に及んでいた。

その庫裡のすぐ裏にある納屋には寺男が住んでいる。伝蔵というこの男が湯女の扇の遠縁に当たるので、匿って貰っていたのである。

「――喜八さん」

と、翌日、扇は口実をもうけて誓願寺の裏門から入ってくると、

「扇。大丈夫かおめえ、こんな真っ昼間、跟けられたらどうするんだ」

「昨夜、へんなことがあったのさ、それで心配で」

「昨夜？」

「ええ、あたし……なんだか、へんなのさ……寝言を言ったみたいな……」

「寝言だって？　おいらのことかえ」

「ええ……だから、心配で……」

「しっかりしねえ。いま見つかったら、打ち首どころか主殺しで逆さ磔刑の上、獄門だあな……」

「逃げましょう、これからすぐに」

「これからったって、おめえ、路銀もねえし」

「それは、あたしが何とかするから」

「一緒にゆくか。よし、地の果てまでも二人で」

「喜八さん！」

二人はしっかり抱きあった。

その戸口に影がさした。

「正しく獄門になるぜ」

「だ、誰だ！」

「誰ってこともねえさ」と、編笠の浪人風の男が投げやりな口調で、「おれの詮索よりも、早くここを逃げ出すことだな。扇が血相かえて走ってきたので、町奉行所の下っ引に尾行されたようだ。間もなく、この辺は鼠一匹出入りできねえようになろう」

ああ、どうしよう、扇はさらに喜八にしがみつく。浪人者は、その間に帯をときはじめていた。

二人が唖然としている前で、編笠を脱ぎ中着まで脱いだ。むろん大小もである。

「これを着ろ」

「え？」

「おれが入ってくる姿は下っ引きが見ていた。いまなら、不審に思われることもなく、通れるはずだ。河岸っぷちに女がいる。葛西船が用意してある。それで大川へ出てしまえば、大丈夫だ。浦安辺で待ち合わせするがいい」

「だ、旦那……恩に着ます。扇、あとから来てくれるか。女にゃ惚れねえつもりでいたが、おめえの真心にゃア、女ぎらいの喜八も負けたぜ」

「待っていて、喜八さん、木更津には知りあいがいる、そこで一緒に……」

甲斐甲斐しく喜八の着替えを手伝うのを、鷹は、静かに見守りながら、

「武士姿も案外似合うぜ。おれも町奴の方が似合いかもしれねえ」

町奉行所の役人と旗本奴たちが駈けつけて来たのは、喜八が出ていって小半刻も経ってからであった。

同時に町奴のほうでも多勢で駈けつけてきたのである。誓願寺の裏門前でばったりあった群狼は、たちまち刀に反りを打たせて睨み合いになった。

「やつらだ、殺っちまえ」

「下郎めら、血祭りにしてくれるぞ」

手に手に白刃を閃かして激突せんとしたとき、馬蹄の音を響かせて、駈けこんできた騎馬がある。

「鎮まれ、鎮まれ！」

大音声に叫びながら、抜き打ちに、馬上から旗本や町奴の重立った連中を斬り下げる。その刀の閃々たるさまは、さながら稲妻の如くに見えたという。十数人が倒されて、どっと両方が退くや、騎馬はたちまち駈け去ったが、その紋所が、松平伊豆守のそれだと、人々は話しあった。あとに残された死体も、実は峰打ちだったのである。

当の伊豆守信綱は、その騒ぎのとき、れいの土蔵で書物を調べていたが、何気なくあけた頁に、真新しい紙がはさまれているのを見て、はっとなった。

喜八事、御朱引内には既に無之、

金二百両は喧嘩仲裁賃に受領仕候。

と、あった。

「鷹め！　おれに化けて……呆れたやつだ」

信綱は舌打ちした。意表を衝かれることに腹立たしさよりも、感心させられてしまうのだった。湯女風呂から、三人の女が忽然と姿を消したわけだが、天狗郷右衛門はあの快感が忘れられず、連日、朱鷺の姿を探しまわっていた。

大納言発狂

1

房術四十八手の裏表という。男女の行為の多様な体位は、忍びノ者の発想にかかるとする説がある。欧米の古い画譜や古代インドの石像、又はオリエント文化の所産である壁画などの悦楽図を考察しても、せいぜい十三くらいの姿態を見るにとどまる。

男女の赤裸な行為には新しいも古いもないが、説をなす者は、忍びの身は、女体を抱く場合も、常に四辺に注意を怠らない。すなわち、さまざまな体位も、常に視野を塞ぐことがなく、虚を衝かれないという。忍びノ者が女体を随喜させるワザに長けているのは当然であるが、またそのために、四十八手の性技を会得もしているが、その濫觴とするには、些か牽強の譏りを免れない。

それにしても、不知火忍者〈鷹〉がその旅の途中で抱いた女は、全身が性器といいたいほどの、ぬめりとした肌と生き物のように微妙な動きを見せる秘所とを持っていた。

鷹がその女を発見したのは、箱根の関所を越して三島へ下ろうとする途中、山中城址の鳥居わきであった。

女は、全裸であった。文字通り一糸もまとっていなかった。草むらの中に倒れていたのである。

深更。

鷹は関所を脱けたのだ。松平信綱の密命を受けての急ぎ旅である。普通なら女にかまう閑はない。全裸だったことが目を惹いた。草むらの中に白いものが動いていい、そこから甘酸っぱいような肌の匂いまで立ちのぼっていて、若い鷹をとらえたのである。

「どうした」

追剝ぎにでもやられたのかと思った。

抱き起こしてあたりを見た。どうしたのか衣類はない。腰を蔽うものもない。

「寒い！」女は呻いた。「抱いて下さいまし」

寒気は羞恥を感じさせるゆとりを失わせていたのであろう。若い肌であった。鷹ならずとも、この若いからだの顫えを見捨ててゆけるものではなかった。が、しかし、その同情と、その心に含まれる好色の情は、男の泣き所でもあった。

やはり、鷹たる者、この異様な情景そのものに、不審を感じるべきであったろう。

「こうか？……」

鷹は草むらに踏みこみ、裸身を抱いた。

肌は冷えきっていた。寛永八年二月のはじめである。春とはいえ足柄山にはまだ根雪が残っていた。

「ああ、有難うございます」

「……」

「うれしい！　もっと、もっと強く抱いて」

「む……寒いか？」

「は、はい、ああ、このまま、もっと……人心地がついてまいります」

「衣類はどうした、剝がれたのか。追剝ぎか」

「はい、あの……」

女の手は、鷹にしがみついていたが、妙なほうに動いてきた。

女は息をはずませ、鷹の股間をさぐってきたではないか。それは淫らというよりは死人のように冷えきった肌を温めるための本能的な動作のように受けとれた。まだあどけなさを残した女の容貌も、それ以上の不審を起こさせなかったのである。

鷹がおのれの勃起と情欲を圧えるには、女体はあまりにも美しかった。誘われるままに、たけだけしくそそりたったものを、そこにあてがうと、女の指は、おのれの裡にゆっくりと入れた。

だが、鷹を容れた女の部分は、まれでかれを待ちかねていたように、熱く潤んで、さざ波のように動いた。粘膜の微細な部分が喘ぐように鷹のおとこを刺戟し、甘美な官能の昂まりを齎した。

しかし、女の肉襞に放つ悦びはなかった。鷹がその頂きにのぼりつめる一瞬を狙った影の、四辺に潜み寄ることを察知したからである。

（またか！）

一瞬にして悟った。これが、かれを討つ罠だったことを。あまりにも巧みに仕組まれた罠だったのだ。

（ぬ！　殺られてたまるか）

鷹のからだは、突然、蠕動を熄めて跳ねあがった。

女の手は背から剝がれ、これをとらえようとしたが革足袋に掌を蹴られただけである。一条の白濁の液体は女の裡で放たれることなく、夜気のなかに奔り、くノ一の両眼を盲させるが如くに音をたてて面に飛沫いた。

「逃すな！」

闇が哭いた。

ひゅッと鷹を目がけて幾つかの礫が飛んだ。これに空を剪らせて、鷹のからだは一転二転、草むらに沈むと見え、その草気を蒐めて颶風に乗るや、ざわざわと樹々の梢が揺れ騒いだ。

全裸のくノ一が正気にかえったのは椿の花一輪、ぽとりとそのゆたかな胸乳の上に落ちてき

たからである。

「あっ……あいつは」

「――逃がした」

と、姿をあらわした一人が言った。双眸ばかりが夜に光る黒装束の群れであった。およそ五、六人。頭巾を通し熱い息が洩れる。手に手に忍び刀を握っていたが、その鈍い光りもすでに虚しく見えた。

女は美しい顔を歪めて舌打ちすると、

「だらしがない、それだけの人数で、逃がしてしまうなんて」

あのたおやめぶりは、どこかへ消えて、きびきびした動作で、女は素早く同じ装束をまとった。

「風魔ともあろう者が、おのれの土地で、あんな他国の忍びに翻弄されるなんて、羞しいじゃないか」

「三人、追っている。駿府へゆくまでにはあるいは」

「駄目さ。あたしがからだを任せたのに。みんな、ワザが落ちたね」

女忍はいまいましげに吐き捨てるように言った。

「こんどの仕事は、報酬だけじゃない。徳川家をひっくりかえす企てを助けるんだ。やっと風魔の存念をとげることが出来るというのに」

「誓って」と、何人かが同時に言った。「彼奴を仆す。仆さいでか」

やがて、この黒い一団は黒風となって箱根路を西へ、山神の魂魄と化したように、草木をなびかせて走りおりていった。

2

駿府の城主は現将軍家光の弟で、世に駿河の大納言と尊称する徳川忠長である。

甲斐、駿河、遠江の三国を併せ領して五十五万石、権大納言従二位に昇って、三家の上に位し、江戸参覲の西国大名は、その往復に伺候を怠らなかったといわれる。

忠長は幼名国松、家光の竹千代といったころからの、仲違いの挿話は世に知られているが、たった二つ違いで、将軍と、その臣下に差別される運命が、この驕慢の性格には、隠忍できなかったようである。人間の運命は、どこで歯車が狂うかわからない。持って生まれた性格と資質は必ずしも、運命に支配されたものではあるまい。

国松のころから明敏の才をうたわれた忠長が、二つ歳下に生まれたところに、その悲劇性があったのか、それとも、弟として生まれたことが、ことごとに兄を意識し、凡庸の兄を凌ぐ器量を発揮して、周辺に、

「この御方こそ三代将軍に」

という幻想を抱かせたのか。あるいは言う、母なる浅井氏の寵愛が、弟の方に熱中したのは、ひとえに、竹千代の乳母春日局への対抗意識から出たと。

そのいずれにせよ、忠長がおのれを自認し、将軍の地位を羨望するだけではなく、野望を起こしたことは無理もない。

幼年に於て天才と称された者ほど世の中を甘く見るのである。

嘗て、五十五万石の大身に封ずるとの幕命を伝えた青山大蔵少輔幸成が、その栄封を賀すると、忠長は憤然として、色をなし、

「おれほどの者に過分な封土と思うてか、天下人の子に生まれて、たかが五十五万石ほどで喜べるか」

と、席を蹴って立ったといわれる。

去秋には、忠長は父なる秀忠に書を呈してさらなる加増を乞い、然らざれば大坂城を預けられんことを、とまで言った。

忠長にして、疎漏があったとすれば、大坂城を望んだことによって、秀忠、家光はじめ御用部屋の猜疑を深くしたことではあるまいか。余談になるが、嘗て、黒田如水孝高は、その苦難の果てに、智謀を磨き、天下を狙う一人と目されたものだ。豊臣秀吉の帷幕となってからも、その才気は屢々秀吉を懐疑させた。

れいの天正十年、中国に於て、信長弑逆の報に接したとき、孝高は、秀吉の膝をつと突いて、

「いよいよ、天下がお手に入りますな」

と、笑った。その笑いは口もとにあり、眼は笑うどころか、凝っと秀吉の胸中を探っていた。

秀吉は狼狽した。秀吉は、天下を奪るまで一度も天下への野望を口にしたことはない。常に、信長公の御為とか、復讐とか、御子の為とか、いつも大義名分をそらしていた。その巧みさが、かれの同輩や、先輩たちを安心させていたのである。狡智といえば狡智だが、大半は人がらであろう。そうした秀吉を、孝高は、かねがね、

「お手本にしております」

と言っていた。誰でも、本人でも、それは追従と聞く。が追従ではなかったのだ。事実、そうやってきた。そして、やはり天下への野望も抱いていた。秀吉も、うすうす気づいていたが、孝高の失敗は、あくまで隠し終せればよかったものを、才あまって、ついに、あらわしてしまったことである。

嚢中の錐は、いつかあらわれずにはいない。が、この場合、あらわれたときは、最後である。革命で得た天下は、革命で失うものだ。秀吉も充分、それを知っていた。黒田孝高の上に、鉄槌が落ちるのは、時間の問題だった。才人は、これを逃がれた。すなわち、頭を丸めて坊主になり、家督を伜の吉兵衛長政に譲った。如水と号した。水の如き、清らかで平らな心境とは天下への野望を捨てたことを物語る。こうして秀吉の鋭鋒を躱したのである。秀吉が家康の野望に気がつかなかったのは、家康があくまでも嚢中の錐に蓋をして、ひそめていたからだ。忠長は、それをあらわした。乱世の余燼さめやらぬ時代、父でも兄弟でも敵にひとしかった。いや、むしろ肉親ほど、憎みあうケースが多い。忠長の思慮の浅さが、かれの立場を悪くしたというべきであろう。

「――謀叛の企てがある」

と、松平信綱は言った。

「大納言御一人の叛心ならば、さしたることはない。が、外様の諸侯にして、この企てに加担している者も尠くないはず。その真意を事前に知らねば、手の打ちようはない」

大納言忠長も、成功の可能性のないことなら蹶起はしない。とすれば、諸大名（主に外様）たちが、烽火に呼応する密約が出来ているはず。

誓詞を交わしているはず、というのである。

「なるほど、おれがその誓詞を盗み出してくるのか」

「鷹でなければ出来まい」

鷹自身も思った。大役であった。天下の大名の存亡に関ることだ。容易なことでは、誓詞は見つけられぬ。

「難しそうだな」

拒絶の意思表示ではなかった。難しいから、やり甲斐がある。報酬も大きい。鷹は承諾した。

（駿府城か……忍びこんでみる価値はある）

駿府へは、思いがけなく、楽に入れた。

大納言忠長は留守だった。

浅間山に猿狩りに行かれたとのことであった。駿府を北西へ五里あまり山頂に浅間神社がある。大井川の上流である。寸又峡の少し手前だが、全山神領となって、殺生禁断の場所となっている。この山に猿狩りとは、また思いきった行動だった。

江府の鎮守山王も、猿をもって神獣としているし、この浅間の猿も神獣になっている。古くから、この山中で猿を殺すことは、大いに忌まれている。村長らが泣いて連署歎願したが、忠長は一顧もせずに狩りをした。

双連山と高山の間の沢には小猿郷の名があるほど、猿が多く、この日の猿狩りでも思いのほか獲物が多く、その数、千二百四十余という。

「恐ろしいことじゃ、いかに御領主だとて祟りがござろうぞ」

山人たちはおぞ気をふるったが、事実、忠長はこの狩りの帰途に、何の咎があったか、御輿舁を手討ちにしている。こうしたことは狂気の一つに数えられるのだ。いかに大名といっても、そうやたらと手討ちに出来るものではない。

この留守城に鷹は忍びこんでいた。

要害の城であった。家康が政権を秀忠に譲って以来、歿するまで十年間を過ごした城である。天正時代に初の改修を、のちに慶長にも隠居城にするため再び改築している。

三百四、五十間のほぼ正方形で、濠は三重にめぐらされ、外濠の出入りは四ヵ所の橋を通じ、中濠も四橋、内濠は三橋で漸く本丸に至る。

忠長の御座ノ間は、家康が用いた白鑞ノ間にちがいなかった。

主君の留守とはいえ、秘密を蔵した殿中の警戒が厳重なのはいうまでもない。鷹は、しかし、

この日、御座ノ間周辺の間取りや、警戒ぶりを探るのにとどめた。

（あせることはない）

忍びにとって、焦慮が最も禁物であった。

ついでに戸袋の内や手文庫などを検したが、密書は探し出せなかった。鷹はしかし失望も落胆もしていない。大納言忠長が、そうしたものを軽々にそこらに蔵っておくはずはない。

しかしその部屋を確かめたのは、暗闇の中でも探り入ることが出来るためであり、逃げ道なども頭に入れておく。それに、天井裏や床下を利用する忍びは、大事をなす前に〝道をつける〟という。あらかじめ侵入していて、警備陣の裏をかく道をつける。たとえば、内側の止め金を毀したり、甘くしていたり、釘を抜いたりしておくのである。

鷹は御座ノ間の天井にそれを施そうとして、はたと迷った。

一見、普通の格天井の如くに見えるそこは木ではなかった。

金属で貼られていた。

（これか、白鑞とは……）

徳川家康が、白鑞を用いて、嘗て太閤秀吉が黄金ノ間をこしらえたのに対し、これを近臣に誇ったと仄聞したが、その白鑞の天井には、極彩色で花鳥が描かれていた。金属に描いてあるのだ。絵具も日本の顔料ではなく、南蛮の油性のものであろう。

（この部屋には天井から侵入出来ぬな）

鷹はそう思っただけである。

3

たしかに、忠長の行状が、その日を境にして、急激に狂の色を増した。

猿狩りの帰途、六尺を手討ちにしたことは異様であった。浅間様の祟りではないかと世上の噂を裏書きするものであった。

〔元寛日記〕に左の記事がある。

――御輿舁之何事か御心に障るや、御小刀を抜かれ、前なる間戸より御手を出され件の男が臂の辺りを突かる。六尺驚き、阿と云て輿を捨てて逃走る。即ち誅すべきの由仰られ、供奉之衆これを誅す、是御手づから人を殺さるゝの始め也――

尋常ではない。あるいは忠長自身にもこの殺人の動機は判然していなかったのではないか。

写本の〔ふうま記〕（異本北条五代記と称されるもの）には、――はんしんのうちなるをめざめさせるには血をよばんことひつじょうなれば、はかるにしゅうを以ってす、非礼のきわみ也――とある。計るに醜を以ってか、臭を以ってか。後者であろう。野史ではこれを六尺の放屁に怒ったとしている。風魔が〝計った〟とすれば、忠長に臭気をあびせるのは風魔忍者であろう。

忠長は激怒して、刀を抜いた。血を見た。

もともと身分高い者ほど、臭気や血の色などには無縁である。忠長はおのれの刀で血を見た

とき、すでに浅間の祟りにとらわれたといっていい。忍びのこうした細作は、多分に俗世間の信仰などを利用する。

——若し浅間の御祟り歟と諸人之を囁く。是より後御心むらの事出来して、或はお手討、或は奥方に於て女中を御打擲有ること度々也。多くは御酒狂歟——と取り沙汰されることになった。

こんなこともあった。

忠長は、浅間山で獲った猿の大きなやつ五十匹の皮を鞣して毛皮にした上で、罪囚五十人を選んで、裸にこれを着せ浅間山に放った。

「逃げ終わせたら、許してくれようぞ」

そして、〝猿狩り〟をした。

隙間なく勢子に山を取り囲ませた上での残忍な遊びである。

さすがに鉄砲は使わなかったが、弓組をして、これを追わせ、忠長自身も弓に矢をつがえて、逃げまどう囚人猿を射殺して楽しんだ。

殿中での淫乱ぶりも、すさまじかった。

奥女中たちを裸にして、文字通り酒池肉林の宴を張っては、好みの女を衆目のうちで犯し、肯じない者は斬った。

あるいは、座敷に豆を撒き、これを裸の女中たちに拾わせ、百粒に満たぬ者は、下肢をひろげさせて、その花芯に、他の者をして豆を投じさせたりした。

「豆では面白うないな、投扇興を」

と途中で変えた。扇を投げるのである。

忠長も、扇をひらいて、女の股間へ投げようとした。が、その扇の面に、何やら字が認められているのを見た。墨のあとは、まだ濡れていた。いま書かれたばかりのようであった。走り書きである。何気なく読んではっとした。

〈誓詞に御用心〉

ただの一行。

余人には、何の意味かわからなかったろう。

だが動揺は大きかった。書いたやつは、まだ、そこらに居るのではないか。

忠長の太い眉がぴりりっと顫え、ぱっと扇子を閉した。もう遊興の気持ちは失せ、不安と怒りの眼を吊りあげて、あたりを見まわした。

「汝ら退れ」

女たちを追い払った。その形相のただならぬさまに驚いた女中たちが恐畏のさまをあらわにして姿を消すと、忠長はいらだって立ち上がった。が、また坐った。天井を見上げた。その眼の中に曲者の姿は見えぬ——と、

〈——大納言に申し上げまする〉

通常の声ではなかったが、女ということはわかる。風の吹き抜けるように鋭くほそく、錐のように、忠長の耳に突き刺さった。

その声は不遜なものを含んでいなかった。あの注意書の主であることは、すぐに合点がいった。忠長は、天井に眼を走らした。

〈公儀の忍びの手が侵入しておりまするぞ、御油断なく〉

「な、何者だ、そちは」

〈風魔の薊……御安心を。蔭守りに参上しておりまする〉

「余の身を？　頼まぬぞ、左様な……」

〈さる御方よりの御依頼にて、輩下一統御城内要所に張り込ませてありますれば、御安堵を。さりながら、不知火ノ忍び、なかなかのワザ者にござりますれば〉

さる御方とは――

忠長はその人を思いだした。忠長に天下人たる資格があるとそそのかした男である。家光の治政は徳川家の将来に禍根を残す、と非難したのもその人である。

4

（黒幕がいる！）

鷹も、その〝影〟に気がついていた。

忠長は単純で、多少増上慢というだけだ。それ以上でも以下でもない。そのかれを教唆して天下を狙わせる黒幕の存在だった。

不知火の忍びが探り出しても、正体はつかめない。ただ、蔭では、その人の力の偉大をもって、

〝闇公方〟

と、呼ばれていることを突き止めただけである。

忠長を決断させるべく、風魔を使嗾して血狂いに導いたのも、その人であろう。

だが、いま鷹のするべきことは、忠長の叛心に同調した大名の誓詞血判を盗み出すことであった。

（誓詞といえば熊野の神文だ、烏牛王の誓文をしたやつだ）

烏牛王に誓文したことをたがえれば血を吐いて狂い死ぬことになる、と信じられていた。

（叛意は外様大名なら、誰でも持っているはずだが、やりそうな連中といえば、出羽佐竹（義宣）、会津の加藤（嘉明）、……筑前の黒田（忠之）……こういったところであろうが）

あらたに誓詞を齎す。と、忠長はそれをどこへ蔵うか。それによって蔵い場所がわかる。

鷹がそれをこころみたのは、三日目の朝だった。

その日、連日の酒色に壮軀のなまりを感じたのであろうか、忠長は早くに起き出でて弓を引いた。

小姓一人が佩刀を捧げ、一人が矢渡しをする。春の朝の爽かななかで、小気味よく弓弦が鳴った。

そのとき頭上で、声がした。鳶であった。意外な低さで、ゆるく、輪を描いている。忠長は

興にかられて、的矢ながら、狙いを定めた。
矢羽は爽涼の気を裂いて飛び、鳶の羽を貫いた。
「当たったぞ！」
まるで、夢の中の出来事のようである。
空飛ぶ鳥を射殺したのだ。猿狩りとはわけが違う。忠長は歓喜に声をあげた。
鳶はばさっと、落ちてきた。的矢は翼にからまっていたが、忠長は喜びのあまり、深く考えようとしなかった。
ただ、その鳶の脚に結えられた牒に目が止まったのである。
「なんだ、これは」
小姓が結びを解いた。
延べ広げて一瞥したとたん、忠長の顔色が変わった。それは烏牛王の誓詞に墨痕鮮かに認められた誓文であった。
——神かけて御味方たること誓詞仕る云々、とある、佐竹義宣の花押にも間違いはなかった。
「——ふむ、佐竹も、その気か」
忠長には望外の事だったようである。
弓を捨てるや、忠長は御殿へ戻った。小姓に命じて踏台を持って来させて天井の一部を開けた。それは孔雀の華麗な絵の部分であった。

服部半蔵など伊賀者を使嗾して、闇にこれを跳梁させ、天下を奪うことに成功した家康は、おのれがその手を喰わないために、頭上を合金で守るという意味も、白鑞張りの意味に含まれていたのであろう。我国固有の銅合金で、銅のほか鉄・アンチモン・砒素を含み、その含有物の多寡によって、鉄しろめ、羽しろめ、伊予しろめ、などある。
ともあれ、この白鑞天井に細工があろうとは、誰も気のつかぬところであった。
孔雀の部分をあけて、小姓は筥をとり出した。むろん、天井裏はその筥のおさまる部分が囲われているのであろう。鼠や忍びノ者の手が届かぬ工夫がしてあるのに間違いない。
忠長は件の誓詞を納めさせると、天井を元通りにし、腹心の御宿源心を呼ばせた。
「出羽の佐竹が味方を申し出て来た。真実か公儀の策略か分明ではない。風魔の者に命じて佐竹の真意をただせ」
鷹は、勝った、と思った。
佐竹の誓詞が先に渡されていたとすれば、為にするところあっての偽物と睨まれたはずである。佐竹は謀叛になかま入りしていなかったのだ。一人でも味方の欲しい忠長はこの手にひっかかった。
源心の依頼を受けた風魔の薊は、
「手に乗せられましたぞ」
と口走った。
出羽に行くどころではない。その神文誓詞を蔵った場所を見張るのが肝要。すでに忍びノ手

が奪いにかかっていること間違いございませぬ、と言った。

白鑞ノ間を守るべく配置した薊は、この間、小半刻を経過したことに疑念を抱いた。彼女が敵の立場なら、すでに密書は盗み出している。

薊は天井裏に上がった。そこは二重になっている。すなわち白鑞張りの部分と普通の天井裏板との間に三尺の空間がある。筥を納めた部分である。格天井の一つ一つが箱状に区切られて、忍びたりとも容易に侵入出来ない仕組みになっていた。

孔雀の絵の個所を歩数で辿った薊は突然闇の中に、光りが走ったのを見た。

刹那、巨きな掌が口をふさぎ、別の手が股間をおさえたのを知った。

大納言忠長が、その男を見たのは、その少し後であった。はじめ、異様な装束に身を固めた男が、屏風の端にうずくまっているのを見て、風魔かと思った。

「御謀叛のこと、もはやこれまでにござるな」

その男は頭巾の中でしわしわと嗤った。

「なんと！　汝は何者じゃ」

ぎょっとなった忠長の面前で、男の影は宙を翔けた。

孔雀の白鑞天井がはずれ空筥とともに女体が落下してきた。両手両足を縛された全裸の薊であった。

その背中に、まだ墨の色も濡れ濡れと一行——

〝誓詞八葉頂戴〟

と、あった。

駿河大納言御発狂。大国の政治なり難しとて甲州へ蟄居〝病癒るまで養生せよ〟〔徳川実紀〕と大御所秀忠の下命で五十五万石を召し上げられ、家老の鳥居淡路守成信の所領、甲州へ幽閉の身となったのは、それから間もなくのことであった。

狂人扱いしたのは、将軍舎弟の謀叛と聞こえれば天下の騒擾は必至だからである。一味加担した大名八家が、何れの国かは判然しない。松平信綱の手に誓詞は入らなかった。鷹が持ち帰った烏牛王の紙はいずれも署名の部分が切り取られてあった。

忠長の正室は江戸で人質のかたちになった。その上屋敷を管理するのは淡路守である。病癒ゆるまでというのも、所詮は、世間体である。

三枝伊豆守守昌、屋代越中守忠正、興津河内守直正などが交代して甲府を守るという名目で、看視役となり、駿府は、渡辺監物忠、松平壱岐守正朝ら大番頭は駿甲両府にかわるがわる勤番せよという人事の評定が終わって、自宅に戻ってきた松平伊豆守は、そこに胡坐をかいて酒を飲んでいる鷹を見た。

「——御謀叛連判状はとうとう入手せなんだな。きさま、よくそうやって、酒など啖っておれるものだ」

「大納言発狂となれば、それで御政道は全きことではないかな」

「きさまの仕業ではないか、鷹」

それに答えず、鷹は、おぬしも老中に出世できるだろう、安い買い物だったな、と言った。

忠長の心情を哀れと思う気持ちが、大御所秀忠にはあった。秀忠にしてみれば、家光も忠長も同じ子なのだ。甲府で病気治療というふうに設定したのも、その間に改悛の情が見えれば、なんとかしようという気があったのではないか。だが、豪気の忠長は、凝っとしてはいなかった。府中に善光寺を建立したり、土木の構をおこしたりしたことを、咎められた。また、――加藤肥後守忠広（五十二万石）の除封のこと（六月）があったが、その際、城に拠って反逆の噂が流れたのを、「是非、忠長をして城請取りの上使に」と申し出て、家臣たちにも、武装を命じたりした。これは、叛乱を疑われた者の言動ではない。逆心をさぐられるのは当然だ。また、忠長の気持ちにそれがなかったとも言いきれないのである。そうしたことどもが、秀忠薨去ののちに家光の疑心を深めるのに拍車をかけたことも否めない。

かくて、忠長の運命は、さらに一歩死へ近づけられたのだ。

十月二十日、松平越後守光長並に在府諸大名を召して、忠長を上州高崎の地へ幽閉せしめるむね、布令出されたのであった。忠長へは、牧野内匠頭信成、内藤伊賀守忠重、横目井上筑後守政重をして、その上意を伝えられ、安藤右京進重長に預けられ、その旅立ちの日には、勝山という愛馬一匹、持槍一本、近習士わずかに守られただけで、配所へ向かった。従二位ノ大納言、駿遠五十五万石の太守が哀れにも痛ましい姿であった。

その翌年十一月十八日、伊豆守信綱は老中並に出頭していたのである。蓋し、家光の意を体して、忠長という叛臣の巨魁を仆したことに対する恩賞の意味が含まれていたことは、疑いない。

（安い買物だったな……）という鷹の言葉だけが、耳に残っていた。

渦潮の忍者

1

現代人の常識からすれば、一笑に付されるようなことでも、昔の人は疑問に思わなかったようである。早い話が神仏の信仰などでもそうだが、文字通り鰯の頭も信心だし、筆者の若いころ、実際にてんかんを起こした男に、頭に草鞋をのせれば治るという言い伝えを信じて、あれは汽車の中だったが、乗客が寄ってたかって、靴を頭にのせるのを目撃した。

てんかんというやつは、草鞋や靴など乗せなくても、水を飲ませて、静かに寝かしておけば、三十分もすれば、おさまるものだ。

それも気休めだろうが、医学が遅れていた時代、信仰の力で健康を取りもどそうとするのも、やむを得なかったし、人智で解決のつかないことを神の摂理に頼ろうとするのも、当然かもしれない。

田圃で男女が交媾すれば、実りがよくなると信じたのなど、解放的な農家の間取りをきらった男女の、考え出した智恵かもしれない。とすれば、船に女が乗れば船霊さまが怒って、海が荒れるという言い伝えは、どういうところから来たものか。漁師が舟に女を連れ込まないための巧妙な規制だろう。

「海へほうり込まにゃ、嵐はおさまらへんで」

一人の女をとらえて水子たちは叫んだ。

淡路から阿波へ通う回船だった。

黒雲が渦潮のかなた西の空から湧き出したと思うと、見る見る頭上を蔽って、ざーと降ってきたのだ。波浪は雨を受けてささくれ立ち、凄じい牙を剝き、それに応えるように、熄む気配もなく、暗天から大粒の雨が叩きつけてくる。二百石ほどの船は、帆を漸くおろしたものの、ギシギシ帆柱がいまにも折れそうに悲鳴をあげ、船体が木の葉のように翻弄されている。

「船霊さまのお気を鎮めるには、ほうりこんだだけでは治らんけんど」

と、船頭が言いだした。

たった一人の女乗客こそ災難だった。殊に、若い娘となれば、荒くれ男の眼が血走ってくる。

「わしらがマワシて拝む方がええけんの」

「ほなけんど、七人でマワシたら娘っこの肌は毀れてしまうけん」

否定する者もいたが、こんな機会にしか若い娘の無垢らしい肌を嬲ることが出来ないと思うと、慾望が剝き出しになって、

「だいたい、ほういうことも、当たらんでもないわの、ほりゃア、まあ、抱いて見るけんど、わしが一番で」

と、船頭は、六尺褌をはずしにかかった。

その間に、数人の水子が娘をとらえ、帯をひき千切るようにとり、みるみる裸にしてしまう。

娘は、男の手に肌をまさぐられたことがないらしく、ひいひい悲鳴をあげて、逃がれようとしているが、赤銅の肌の逞しい筋骨の船乗りたちだ。仁王様か地獄の鬼に摑まったにひとしい。

大波に弄れて高々と揺り上げられるかと思えば、波間へずーんと突き落とされる。そのたびに、船はバラバラになるのではないかと思われた。

乗客たちも、もう生きた心持ちがない。お題目をあげている老人もあれば、真蒼になって、帆柱にかじりついている者もある。武士も町人も農民も雑多な乗り合いだった。

船頭たちの決議は、海上へ出れば、船頭より偉いものはいないのだから、しかたがないが、それでも、乗客の反対があっては、楽しめるものも楽しめなくなる。

残りの水子たちが、乗客を牽制している間に、とうとう女を全裸にしてしまって、

「こいつは生処女らしかけん、船霊さまも、喜ぶだろぞえ」

喜んでいるのは自分なのだ。豪雨も揺れもおかまいなしに抱きついて、下肢をこじあけ、おのれの熱く硬くなったものをあてがった。

未通の肌である。ましてや、揺れ動く船上だ。容易に入らない。船頭は叩きつける豪雨に顔をしかめて、ふとい指を突っ込み、こじあけようとした。

とたんに、

「ぎゃッ」

と、悲鳴をあげた。

指先にするどい痛みを感じた。一度は気のせいかと思った。が、二度目に突っこむと、がぶっと嚙まれて、飛び上がり、

「わあっ、こ、この娘ッ子、歯が生えとるけん」

荒くれ男が、指をふって、飛び退いた。

「どうしよったぞ」

「歯じゃ、歯が生えとるけん」

「阿呆かいな。あそこに歯が生えとるなど聞いたことないわい。ほんなら、わしが」

と舵取りが代わった。

「船霊さま、堪忍しとくなはれや」

と、娘のそこをふとい指でなずった。ちくり、とした。何か、棘でも刺さったかのような、

（まさか……）

気のせいだろうと思い、片手抱きにしながら、ぶすっと入れたとたん、がぶと噛まれた。歯が立った。

船頭よりも凄い声をあげて手をひいた。その指先からタラタラと血がしたたって見えたが、それも一瞬で、雨が叩きつけてきて洗い流した。

白昼だったが、空は暗灰色に閉ざされ、凄じい雨しぶきで、視界もさだかではなかった。

その男が転がるように離れたのを見て、水子の一人が飛びついてきた。

もう慾情ではやり立っていて、少々のことでは制駁出来なくなっていたのだ。

この男は、さっきから雨の中に、おのれのものを突き出し、恥も外聞もなく、浅ましい手つきでしごきたてていたのである。

2

雨と風と波浪と——一つ間違えば鳴門の大渦潮に巻きこまれる場所だけに、船乗りたちも、狂信的になっていたのは否めない。

船霊さまといえば絶対だったし、積荷と水子と乗客と、みんなが迷惑を蒙っているのは、たった一人乗り合わせた娘のせいだということなれば、これを強姦するのも、何やら神示めいて、良心の苛責がない。

が、女のほうにしてみればたまらない。

わあわあ泣き叫んで逃げようとしていたが、最初の船頭の手が、そこに触れたときから、ぴたりと泣くのを熄めていたのも、あとから考えれば、おかしなことだった。

ともあれ、三人目の男は、なまじ指をつかわないだけに、悲惨だった。かれの灼熱したものは、がぶりと噛まれて、血を奔らせたのである。

雨の中で、両手で、股間をおさえて、のたうちまわった。

「藤次が、咬みきられよったけんの」

さすがに、残りの四人も、異常なことに気がついた。

「一体、どうしたことじゃ。あの娘は化け物かいの」

その娘の姿もはっきりしない雨の中である。

「愚か者が、あの通りだ」

舳に立った男が面白そうに笑った。これは不知火ノ鷹だった。娘はまだ裸身だったが、鷹に抱きついていて、船頭たちの前にいるのは、檻の中に入れられていた白豚だった。

忍法は一種のめくらましでもある。処女肌を蹂躙できる昂奮で眼がくらんだとき、すでにかれらは被術者としての条件を備えたといえる。加えて雨と波と、揺れと——

「——おかげさまで助かりました」

娘は雨しぶきに面を打たれながら礼を言った。

「災難だったな。間もなく、雨も小やみになるだろう」

鷹は西の空を見た。ぼうっと明るくなっている。船は大分流されたようだが、渦潮にさえ巻きこまれなかったら、心配はない。

「阿波の者か」

「はい、あなたさまは、阿波は、はじめてでございますか」

「はじめてだ」

本土と離れた島だけに、阿波蜂須賀藩は外様大名の中でも、幕府の眼を放されぬところだった。

(面倒な土地らしいが……)

その面倒さは、漸く雨が熄み、波浪がおさまってから、船が徳島の港に入っていくあたりから起こった。

船番所から、小舟が近寄ってきたのである。

「お調べだぞう」

船が港へ入ってからでは、逃げられる恐れがある。海上に在るうちから調べるという念の入れようだった。

「大分やられたようじゃけんど」

役人は、ずたずたになった帆布や、積荷の箱が割れたり、水浸しになって、使いものにならなくなった干物の束などを見て眉をしかめた。

「客の中に怪しいやつはいないか。手形をみんな出してみろ」

鷹は藍玉を買いにゆく商人といういでたちだった。手形もちゃんと大坂の隠密組織から渡された、完璧なものである。

「よしっ。御城下に泊まったら、いつでも呼び出しに応じて来ねばならんけんの」

威すように役人は言った。

ところが、人数と帳面と合わせてみて、おや、と下役人が、首をかしげた。

「こりゃ合わん。一人不足じゃ」

頓狂な声をあげた。

「やい、みんな、もう一度、面を出してみろ、数えるけんな」

やはり一人、不足。

鷹はとぼけた顔をしながら、あの女は泳げるのか、と、心配になった。港までかなりある。娘は、役人が船へ上がってきたとき、反対側から、舷側をすべりおりたのである。むろん、あわてた役人たちが、船の中から外廻りまですっかり調べたが、女の姿はなかった。すでに数町の先を黒い点となって、泳ぎ去っていたのだ。

(あの女……ふしぎだの)

手とり足とりされて犯されかけたときの娘は、まるきり、非力な、いたいたしい姿だった。それが役人の眼を恐れて海中へ潜り、必死に逃げるとは。

ところがその娘とは徳島城下へ来て三日目に新町川の河岸でばったり逢ったのである。

たしか、船の中では、農家の娘というような質素な身なりだったのだが、そのときは、派手

な小袖に、化粧も派手やかな町娘になっていて、また鷹は眼を驚かされたのだ。
それだけではない。
「おお、あのときの……」
と、鷹が声をかけると、
「存じませぬ」
にべもない返事だった。
「どちらさまか、存じませぬ。お人違いでございましょ、御免なして」
と、小走りに駈け去ってしまった。

3

難しい事件だった。
鷹が松平伊豆守信綱から依頼されたのは、蜂須賀藩内の奇妙な事件からだった。
藩主阿波守忠英は二十三歳。その側室お幸ノ方と世嗣鶴千代君が、同時に病死したということだった。
「――ないことではあるまい。だが、流行病などにてあれば、他にも病死者があるはずじゃ」
と、信綱は、この事件を難しいと見て鷹に捜査を依頼した。
蜂須賀藩は外様の雄藩であり、幕府でも万一を懸念した。幕府直属の伊賀者を潜入させることは、もしも痛くもない腹を探られるとしたら、徒らに憎しみを増すだけのこと。
だが不知火ノ忍者たる鷹ならフリーだから、見つかっても斬り捨て御免で、幕府の御用部屋では、知らぬ顔をすることが出来る。
そのために、
「高くつくが、おぬしは、われらの役に立つ」
と、信綱は、黄金の効用を十二分に知っていたのである。
その秘密を探るべく、鷹は潜入してきたのだ。
(――あの女は、何者なのか)
信綱が今度の事件を知ったのも、大坂の町奉行へ一人の女から訴えがあったからという。
「世嗣鶴千代君並にお幸ノ方は、毒殺されたらしい、と申す」
二十五万七千石の太守の身辺である。これは看過出来ないことだった。
その訴人者が女だというとすると、あの女の素振りの怪しさも、充分、探る意味があった。
その次の日。
鷹はまた、その娘を見かけたのである。今度は寺の境内だった。
大安寺という寺だった。側室の墓がある。住職から聞きだすつもりで行ってみたのだ。そこに、あの娘がいた。墓に花をいけ、手を合わせている姿は、敬虔で、あのような行動を見せる娘とも思えなかった。
「また逢ったな」

ずいと鷹は出ていった。

「あっ、あなたさまは」

「藍玉商人……ははは、わしのことはどうでもいい。そなた、お幸ノ方とは、どういうつながりなのだ」

「いいえ、あたくし……」

娘はかぶりを振って、

「ただ、おいたわしいと……」

鷹が、その刹那、背後に風を剪る殺気に気づいて、娘を倒すや、つと身を沈めたのは、忍びの本能的なものだった。

飛来した礫が、ぐわっと、墓石に当たって砕けた。異様な爆発音とともに、異臭があたりにこめ、一瞬、鷹は視界を閉ざされている。

「何やつ！」

隠し持った忍び刀を抜いた鷹の面前へ、二つの影が躍りかかった。

「くたばれ」

「幕府の犬め」

影は頭上を飛び、白刃が閃き、鏘然と嚙みあって冴えた音を発した。

鷹が血ぶるいして身を起こしたとき、二つの死体は折り重なるように仆れていたのである。

「あの女は……」

濁煙はしだいに霽れていったが、すでに小袖姿は、またかき消したように消えていた。

4

徳島城は、多くの大名の城の中でも殊に要害を以て聞こえていた。

この城の特色は平山城でありながら、多くの河川によって天然の要害をなしていることである。蜂須賀氏は、阿波施政の中心は山城にあっては成り難しとしてこの渭津にある渭山の城を改修して居城とした。

徳島という地名も、この改修が成ってからという。その様相は、現在も石塁、濠など遺構が存在しているので、往時の面影を知ることが出来るし、寛永四年、幕府の隠密が秘密裡に調べあげ作製された図面がある。これには詳細な説明がついている。

それをここに述べるには紙幅が足りないが、脚下に内濠を臨む平山城の周辺を侍屋敷が固め、寺を巧みに配して万一の際の出砦とし、町屋は川に沿って藍やその他物産の搬出搬入に便ならしめるよう集散を考慮してあり、こうした作りは非常に珍しいといえる。

また、他国からの潜入者にとって、これほど、難しい城はない。

鷹は、この難しい城に潜入していただけでなく、本丸の城主の御殿に入りこんでいた。

藩主阿波守忠英は若い。噂によれば側室は五人を数えるということだった。

その夜も、寵愛のお葉ノ方を抱いて歓を尽くしていたが、その枕元を何か走ったので、はっとなって、顔をあげた。

「――あの、何か？」

「いや……」

かさこそ、という音は足もとでした。振りかえった。そのとき、ふと枕元の灯が消えた。

恟ッとしたのは、灯の消えたあとの金屏風が、ぼうっと淡く、妖しい微光を放ってい、そこに、白い綸子を着た女を見たことである。

「ああ、お幸……」

忠英は、思わず叫び、お葉ノ方が、悲鳴をあげたのにも拘らず、にじり寄ろうとした。

「ゆ、幽霊……」

お葉ノ方は仰天して、忠英にしがみついている。もしもお葉ノ方がかじりついていなかったら、忠英は、お幸ノ方の亡霊に近づいていたろう。

「お幸……そなた、お幸だな」

ひそりと坐った亡霊に向かって忠英は嬉しそうに呼びかけている。

「なぜ、死んだのじゃ、そちは……鶴千代を供連れして。お幸、お幸、生きて戻ってくれたのではないか、逢いたかったぞ」

忠英のその態度は、あまりにも純なものだったのである。

お葉ノ方をふりほどいて、にじり寄ろうとしたとき、また、背後で、ささッと音がした。振りかえった眼に、白いものが、白い鼠が走り去るのが見えた。

灯が点いた。どうして点いたのかしらぬ。

お幸ノ方の姿は消えていた。

「――夢か？　まさか」

夢ではない。悪夢ではない。もう一度見たい夢だった。忠英はお葉ノ方の肌を抱く気がしなくなっていた。忠英は、お幸ノ方が存命中は、他の側室を殆ど省みることがなかったのである。

それから半刻ほど後――

お幸ノ方は、またあらわれていた。

これは、家老の池田内膳の控え屋敷だった。家禄五千石、江戸家老・江戸仕置として要職にある池田内膳は江戸詰であったが、鶴千代君の葬儀に列すべく帰国していたのであった。

内膳も、女を抱いていた。江戸詰ということで妻は江戸に在り、ここで抱いている女は、さきほどまで、城中大奥で、お幸ノ方の部屋子をしていたお美濃。

丁度、そのとき、内膳は、お美濃を裸にして背後から抱いていた。内膳は以前から、この体位を好んだ。このかたちでなければ、かれは昂ることがなかった。

お美濃は恥ずかしいといい灯を消すように哀願したが、内膳は許さなかった。

「こ、これでいいのじゃ、そちの白い肌がよく見える。ふふふふ、江戸にも、そちのような白い肌の女はいないぞよ」

「まあ、お戯れを」
「よい、よいぞ、ああ……」
年甲斐もなく、うつつの声を洩らしたとき、まるでお美濃の願いがかなったように、ふっと灯が消えた。
「あっ、どうしたことじゃ……」
その闇の中に、お幸ノ方の姿が浮かび上がったわけである。
「ぬ！　お幸」
内膳は、裸の女を押しのけて、刀架の差料をつかんだ。
「迷って出たか」
抜き討ちに斬った。
お幸ノ方は消えた。いや、信じられないほどの軽やかな身ごなしで、斬撃を躱して舞い上がったのだ。内膳の二ノ太刀がさらに宙に走ったが、これはふわりと白綸子を舞わせたに過ぎなかった。蟬が殻から脱けるように、一つの影がかなたへ跳ねた。
あっと、夢から醒めたように、内膳は驚愕した。と、その影とは反対側にも影がにじみ出たのである。
〈内膳、問われずに吐いたな〉
「なに？」
〈良心の苛責か。お幸ノ方と鶴千代をその女に毒殺させて、おのれの妹に寵を集めんとした計

りごとも、これで終わりだ〉
「うぬ！　何者じゃ」
〈さて、きさまのような蛆虫を嫌いな男だわさ、江戸家老の地位にあって何が不足だ、二十五万七千石をてめえの物にしようたあよくねえ了見だぜ〉
〈鷹、こっちはいいよ〉
朱鷺の声がした。反応を調べるためにお幸ノ方に扮していたのだ。生証人たるお美濃をとらえて寝所を走り出ている。
「くそ！　犬め、よくもわしの企みを」
内膳は狂ったように斬りこんできた。その白刃を叩き落とすのは、鷹にしてみればわけのないことであった。
〈悪あがきァよすがいい。じたばたせずに侍らしく、あと始末をつけることだ〉
白刃を打ち落としたままで、一撃も与えなかったのは、身分ある武士らしく、内膳が自裁すると思ったからである。鷹は朱鷺のあとを追って闇に消えた。

丁度、このあたりだったな、と鷹は渦潮を避けて走る船の上で、朱鷺に言った。船霊さまのお怒りを鎮めるために船頭たちがあの女をマワシテ犯そうとしたのは。
「いやな習慣だこと。あたしが乗っている間は、凪でいておくれ」
「だが、あの嵐のおかげで、お道を知ることが出来たのだ。お幸ノ方の従妹だとな。姉妹同様

に育ったお幸の変死が納得できず、大坂へ出て訴えたというわけだ。身元を隠していたのは、池田内膳の魔手を恐れてのことだったろう。舟番所などの小役人にしてみれば、家老の権勢は大変なものだからな……」

そう言いながら、鷹の眼はあの豪雨の中のお道の裸身を描いていた。

姫売り公卿

1

江戸時代の中ごろに、ものは附というのが流行った。何々は、何々、という当て文句で、その淵源は平安朝の閑をもてあました公卿などの、雅びな筆のすさびであるが、泰平な時代がくると又、庶民の間で流行したのだ。

その一つに、早いものは、というのがあり、烏金（烏がカアと鳴けば利息がつく。つまり、日歩の高利金融のことである）とか花嫁の四十八手（何も知らないと思っていた花嫁が、意外に四十八手を知っていた。もしくはおぼえるのが早い、という女の好色度を諷したもの）とかいろいろある中に〝老中駕籠〟というのがある。

老中の乗物が登城する際には、いつも、小走りでゆく。これはイザ事件というときにだけ急

ぐと、世間が動揺する。だからいつもせかせかと走っていれば、特別に目をひかないためだ。

松平伊豆守信綱が日課の遠乗りをするのも、意味は異なるが、狙いは同じだった。民情視察をことさら行えば、世間はそのときだけ容儀をつくろう。いつも馬を走らせていれば、日常の相を見ることが出来るし、行先を不審がられることもない。

その朝――

伊豆守信綱の騎馬姿は、市ケ谷の赤城明神の外に見られた。

春の朝である。靄が低くたなびいている境内には人影もない。信綱は馬を社前につなぐと、わき目もふらず、絵馬堂の方へやってきた。

その耳に、

〈――御苦労なことだ〉

どこやらから、揶揄を含んだ声が聞こえた。

〈吉原の遊女が死んで、老中が出てくるとは……〉

伊豆守は、その声のする方をむいた。が、これは反射的にそうしただけである。忍者は必ずしも、聞こえてくる方にはいない。

だがこの声は、不知火忍者〈鷹〉のものであった。伊豆守と話すとき、鷹は、声を変えぬ。

「耳が早いな。だが、ただの遊女ではない」

〈初見世だというのだろう、初見世に出る晩、首をくくって死んだ。今どき珍しく操の固い女だったな、だが、それにしても〉

声は頭上でしていた。絵馬のうしろに、その影は在るのか？

吉原の遊女歌橋という女が、納戸でくびれて死んだ。市井の雑事の一つに過ぎない。

天上の老中が耳を傾けるほどの大事ではない。

不知火忍者〈鷹〉にしてみれば、密命を蒙るための呼出しも、この雑件に関りがあるとは意外すぎたのである。

「これが残されていた」

信綱は、なおもあたりに気をくばりながら懐中からとりだしたものを、頭に軽くほうりあげた。絵馬のうしろから手が出て、ひょいと摑んだ。

金襴の守り袋。半ば焦げているが、紋所はそれとわかる。

「手がかりはそれだけじゃ。くびれる前に竈に投げこんであったという。実家の恥を曝したくなかったのであろうが、意外なことがわかった」

〈……〉

「京の公卿坊城家の姫であったわ」

〈ほう、公卿の姫が吉原の遊女に……〉

意外はそれだけではなかった。歌橋は姫貞子と年齢なども合致するのだが、すでに死んでいるという。

京の所司代板倉重宗の報告では、このところ、堂上公卿の姫の死亡が多い。むろん、届出によって知ることだが、それが実態は行方不明が殆どだという。貧乏公卿ばかりで、姫の失踪を

恥じて死亡ということにして表面は糊塗する。

堂上公卿はいずれも、伝統と由緒のある家で、家格や体面と、現実の生活水準が合致しない。堂上最高の位にある五摂家にしてからが、大名旗本と比べると、少ない。筆頭の近衛家で、二千八百六十石余だ。むしろ九条家の方が、家領は多いが、それとて、三千四十三石。これが最高である。ついでに書いておくと、三番目が一条の二千四十四石、それから二条の千七百八十八石、鷹司の千五百石とつづく。五摂家がこうだから、その下の清華家になると、八百石が頂点で、以下四百石まで、その次が、羽林家で二、三百石。下のほうになると三十石、四十石というのが多い。

幕府としても朝廷の取り扱いには注意して、公家法度などを明示し、一般の大名武家とは別扱いにしている。

「放置しておけぬ問題だ。鷹、京へ行ってくれ」

〈……〉

「費用は……」

と、懐中をまさぐって、あっと思った。用意してきた金包みが消えていた。絵馬のうらにも、頭上にも、すでに返事はなかった。

2

忍者鷹が、その女たちに逢ったのは、岡崎の宿であった。この寛永の時代、東海道は漸く宿場宿場のかたちを整えたばかりで、後の飯盛女などは公に許可されていない。

「――旦那、お一人でございますか」

風呂場で声をかけられた。背は低いが横の張った卑しい顔をした男である。眼つきが卑しい。下から顔色を窺うようにちらちらする。あいまいな笑いを浮かべているのも、もの欲しげであった。

「どうかな」

「へ？」

「影と二人づれだ」

「えっへっへへ、こいつァやられた」ぴしゃりと額を打って大仰に男は笑った。「面白いことを仰有る。影と二人連れァよかった。えっへへへへ」

おかしくもないのに、そんな笑い方をするのは意を迎えようとする企みがあるからだろう。

鷹は男に構わず、さっと出ようとすると、

「ねえ旦那、レコは如何でございます」と、小指を立てた。短く太い。

「女？」鷹は蔑みをあらわにした。「女を世話しようというのか、それを商売にしているのか」

「ま、そういうふうに仰有っちゃ身も蓋もねえ。実ァね、この岡崎は街道すじで誰知らねえものはねえ岡崎女郎の甘肌があり余っている。この土地で女を買わねえ男は不具か病人……おっと、口が滑りやした。ところが旦那はお見受けしたところ、立派なモノをお持ちの御容子だし、えっへへへ、女嫌いとも思えねえ」

「……」

「いえね、お武家にはそうした御方もいなさるさ、商売女は汚くっていけねえってね。ほんなら、汚くねえ女を、如何でございます。正真正銘、無垢の肌、男が指一本触れていねえ肌なんで」

男の言葉に嘘はなかった。忍びノ者の眼は誤間化せぬ。鷹は女の部分に触れて、処女であることを確認した。指が襞を分け入ると、小さな悲鳴を洩らして身をくねらす。茂みも淡く、ほっそりと葱の白身を思わせる蒼いまでの肌は、生まれてはじめて男に接する戦きで鳥肌だっていた。

忍びノ者の指は剛にして柔である。岩を攀じ、あるいは石をも砕くが、また女の肌に一触れするのみで、年齢を当て、未通女を識る。その指は、須臾にして女の官能を疼かせ、陶酔を招くのである。

「ああ、もう、堪忍して……」

女は身をふるわせて拒んだ。それは鷹を嫌悪するものではなく、陶酔することへの怖れだった。このまま甘美な恍惚境に陥ちてゆくことのためらいだった。

「ためらうことはない、愉しむがいい。おれも愉しむ」

鷹はいつになく、この美しい肌にとろけてゆくおのれを感じていた。京へ着けば、危険が待っている。百舌鳥や朱鷺とは京で逢うことになっている。道中には、彼女たちのうるさい眼もない。処女の肌が初夜からこれほど濡れることは異常といえる。鷹ののめりこみが深く、女もその扱いを嬉しく思って、男のなすままに、快感に身を委ねたのであろう。

女の方は、ただうつつになって気がつかなかったが、その間、鷹は、のぞきの〝眼〟を打ち潰している。

背後に〝眼〟を感じた。

女の肌の上で、放心するかに見えて、忍びノ者は、針のように神経が尖っている。

（見られている！）

それが誰か、視線だけではわからぬ。

誰でも遠慮することはなかった。まぐわいをのぞき見する奴の眼を打ち潰すのは、当然の行為である。鷹は、女体におのれを容れたまま、小手返しに手裡剣を打っていた。

二刀。手ごたえはあった。襖を細目にあけて、のぞいていた者の眉間に、したたかに食い込み、さらなる一つは、鼻柱を砕いていた。

即死であった。気息が絶えた。

鷹は振りかえりも、身を起こしもしなかった。女の柔らかい肌の中に沈み、波にただよう孤舟のような、快感に浸っているのだった。

やがての後——

女は問わず語りに話した。

「これから江戸へ売られてゆくのどす」

肌を合わさぬうちは、恥を口にしたくなかったのであろう。ひとつになって悦びを分かちあった心易さと慕わしさで、女は話した。

「吉原とやら、遊廓に……」

「一人か」

「いいえ、ほかに二人。やはり京から」

「そうか、道理で、品がよいと思った。そなた、公卿の娘だな」

「ま……どないして、それを」

「ほかの二人も、そうか」

「誰にも、言わんといて、おくれやっし。身分ある家の恥やよってに」

女たちを連れてきた女衒は、朱に染まって隣室で死んでいる。女たちは、解放されたことを知ったが、なお、京の両親のことを案じていた。

二、三十両の借金の質に娘を要求して、大坂や堺や江戸の廓に売り飛ばす。堂上のなかに、それを稼ぎにしている者がいるという。

女たちは、解放されたことを喜びながらも、かえって、両親たちが甚い目にあわされはしないかと心配した。心の優しい姫たちだった。

「心配するな、あとは任せておけ」

鷹は、伊豆守信綱へあてて一書をしたため、路銀を渡して、江戸へ逃がした。

娘たちは嬉し涙にかきくれながら、鷹の名をたずねるのを、

「なに、名も無え男さ。一夜の契りの相手だったというだけでいい」

その笑顔が、娘たちが見た最後だった。

殺された女衒には、女体を嬲るより、吉原へ渡す前に、処女肌を高く売りつけて儲けるほうがいい、という計算が墓穴を掘ることになったのか、のぞき見するのがひそかな愉しみだったことも、当然の死にざまといえる。

その三日後に、鷹は京にいた。

3

頭巾にもいろいろある。ほうろく頭巾、投げ頭巾、丸頭巾、山岡頭巾——だが、その侍がかぶっているのは、まるで胡椒のようなとがり頭巾で、眼ばかりが光っていた。

二条の街角で駕籠から降りると、馴れた足どりで、そこから、数町離れた屋形のうちへ入っていった。

黒い頭巾に黒い着物で、異様なほどだが、その夜の色に溶ける姿は、人眼に触れたくないあまりのものであろう。

「――鴉さまが、火急の用とのことで、お見えになりました」
そう取り次ぎから聞いて、この家の主は、もの憂げに振りかえった。
「鴉が……ふん、気分を毀す奴じゃな」
屋形の中は、頑なに武家屋敷の造作を嫌って、豪華な調度で飾られていた。壁代や几帳や、御厨子棚や高坏や――平安朝の様式を室町の世に伝えて、この武家時代にも敢て堂上風を固執している。
堂上衆の中ではもっとも食禄の高い九条家である。当主の九条清貴だった。
いましも、知人たちを集めて酒宴の最中だった。
灯だけは短檠でなく、贅沢な雪洞を幾つもつけて、真昼のように明るくしている。その灯りを見ただけでも、驚かされる。当時、燈火油は高価だった。
臭い魚油でも吝しむ。それを菜種油を使っているらしい。煤が少なく、臭みがない。
酒膳がめいめいの前に置いてあり、誰もが酔っていた。
清貴は、
「投扇興じゃ」
と、いって女を裸にして、扇を打ち当てては楽しんでいたのである。
「乳房に当てても、あかん。あそこや、男の好きなあそこに当てんと……」
扇投げは、八分びらきにして、要を打ちつけるように水平に泳がせるのがコツである。酔っていたが、こんなことを度々やっていると見え、扇はあざやかに飛んで、女の恥部を、ぴしりと打った。わあっと、みんな手を叩いて笑い崩れた。

「おみごとおみごと」
「ははは、これで、あの肌は、麿が毒見すると決まった」
そして、抱き寄せようとしたときだったのである。
鴉は黙って入ってきた。
「あ、待ってんか、ここでは話が出来へん」
あわてて、清貴は立ち上がると、別の部屋へ連れていった。
鴉さま、の頭巾と黒ずくめの衣服は、あまりにも明るい酒宴の場にふさわしくなかったのである。
「何の用や、ふいに来られては、せっかくの楽しみも愉しめへんで」
「そのような悠暢な事を申されてよいものかな、急報でござる」
「なんやて」
「凶報と申した方がよろしかろう。綾子ほか二人の姫、江戸へは着きませなんだ」
「なに!?」
「それもさ、岡崎では田茂次が何者かに殺されましてな」
「すると、殺した者と、姫三人を拐したのは同じ奴……」
「ということでござろう。さりながら、まるきり手がかりがござらんと」
「ええい、田茂次めが、へまをやりよってん。もう、他の者を使うよりあるまい」

「そんなことではない。それをやった奴だ」
　鴉さまの声は沈痛になっている。
「おそらく……あちらの手じゃ」
　清貴はぎくりとしたように、ほそい眼を剝いた。
「伊豆か！」
「まず……伊豆守信綱、こやつが糸を引いているのは間違いない。その手先の仕業であろう……鷹というやつ」
「そやつは伊賀者か甲賀か」
「ではない。不知火の忍者で、ワザがすぐれておる。金で雇われておる」
「ふん、そのような奴なら、金で黙らせることが出来よう」
　ふわふわと鴉さまは、気弱に笑った。
「ところが、鷹めは、ひとたび引き受けたら、損得ぬきでやる男という噂じゃ。田茂次ほどの奴の死にざまが……」
　手裡剣を眉間と鼻に喰って即死していたと聞いて、清貴は言葉を失った。
「そ、そやつ、何とかせい、何としてでも殺すのや」
「殺す……うむ、殺さねばなるまい」
「おぬしも破滅や。町奉行の地位も、財産も、家柄も」
「――わかっておる。考えさせてくれい」

　鴉さまは腕組みして考えこんだ。
　清貴は足音荒く出ていった。
　あとに残った鴉さまは、ふと、背後に誰か来たような人の気配を感じた。
「誰じゃ、あ……」
　眼をふさがれた。口をふさがれた。鴉さまは気が遠くなった。しだいに眼がかすんでくるなかに、胡椒頭巾を脱がされるような気がし、そのまま何もわからなくなった。
　――暫くして清貴が入ってきたとき、鴉さまは前と同じ姿勢で坐っていた。
「おい、どうや、何か方策が浮かんだか」
「うむ……こうなればしかたがない、早く計画中のことをやってしまうことだ」
「なるほど、では、姫を十人、早く京から連れ出してしまえ」
「どこにいる」
「あれ、忘れよったのか。貧乏公卿どもに金を貸しては、姫どもを質にとってあるではないか」
「うむ」
「あの東山の屋形にの。期限は来ぬでもかまわへんで、堺でも室ノ津でも売り飛ばしてしまえば、証拠は残らへんよってに」
「うむ」
「ついでや、どないしても手に入れたい姫、ほれ、堀川の姫、あれをなんとかして手に入れて、暫く余炎のさめるまで、近江の別墅にでもまいって居るわ」

「わかった」
すっと、鴉さまは立ち上がった。
「帰るか、頼むで」
「うむ」
急に口数の少なくなった鴉さまに、九条清貴は不審を感じるには余裕を失っていたのである。事態がこうなっては、もう、他の公卿たちも遊んでいられない。あわてて帰りはじめたが、その中の牛車が一台居なくなっているのに気がついた。
「おや、錦小路さまは、先ほどお帰りになられたはず」
酔い潰れた男を助けて、出ていったのが、そうだと思ったのだが、と、執事や白丁などは顔を見合わせたが、混雑のことで、誰かが間違えたのだろう、ということになった。
その牛車は、夜明け方に発見された。糺ノ森の近くで川の中に落ちていた。牛だけはのたりのたりとその辺を歩きまわっていたのである。

4

姫たちの運搬に当たったのは、堺の広海屋四郎兵衛という男だった。
「さあ、みんな、これで京ともお別れや、支度してんか」
七八人の輩下を連れてきて、姫たちに支度を命じた。

「え、どこへ」
「どこかてええ、お前らは、借金の質や、借金返せへなんだら、身売りするより仕様ないやないか。へへへ、南蛮には連れてゆかへんで、安心しいや」
「まあ、南蛮なんて」
「まんず、堺で色のアレコレ教えてから、室ノ津、鞆ノ津、袖ノ湊と行って貰うよってに、なあに、女かて好きな道や、極楽やで、地獄へ行くよな顔せんかてええがな」
そのとき、嘲るように、声をかけた者がある。
〈その地獄へ行くのは、誰でもない、きさまだろうな〉
広海屋は、眉を怒らして振りかえった。
その顔に、ぱっと、血が飛沫いた。両わきにいた男の肩から噴きあがった血が、広海屋の顔を染めたのだ。
「うわっ、何をさらす」
〈九条清貴と組んで、女の生血を吸っていた奴め、さっさと地獄へ突っ走れ〉
その声は、頭上から聞こえるかと思えば、板戸の内から聞こえ、床板の下から聞こえた。
狼狽の広海屋は、顔の血も拭いあえず、悲鳴をあげた。
「殺れ、忍びノ者を、殺れ、御用部屋の犬じゃ、殺ってしまえ、りゅ、竜斎、早く」
竜斎と呼ばれたのは、七八人の輩下の中でも、ひときわ偉丈夫だった。髪を総髪に垂らし、蛇のような眼が、その過去の血にまみれた行状を物語っている。

「御安心なされ、広海屋どの」

おどり出て四郎兵衛を庇った。その手に片手撃ちの火縄銃が握られていた。

その銃口の前に、鷹は姿をあらわしたのである。

「広海屋、すでに町奉行畠山勘解由も、自白したぞ。いまさら、じたばたしても、すぐに所司代役人がくる、おとなしく観念することだ」

「なんや、くそ！　う、撃て、あいつを」

広海屋の狂ったような叫びで、竜斎は左腕に銃身を支えて、鷹を狙った。

「撃ってみろ、撃てるならな」

ふわっと煙が流れてきた。誰かが放火したのか、硫黄の臭いがあたりにこめ、視界がうすれた。

輩下の一人が、龕燈提灯をむけた。煙の流れる中に、鷹の姿がある。その姿は、光の中に浮かび上がるかと見れば影の如くになり、ゆらりゆらり揺らめいて、近づいた。

「撃ってみろ、火縄の火が消えていないならば」

あっと竜斎は、縄を見た。刹那、礫が飛んだ。さすがに竜斎は銃身でこれを払いのけるや、撃ち放した。

轟音とともに、火が奔り、影が呻きを洩らして倒れるのが見えた。

が、同時に、竜斎は、おのれの胸板を貫いた忍び刀が、鍔元近くまで刺さっているのを見た。信じ難いことが起こったのだ。影は倒れた。刀を投げたのは、その影ではなかった。かれは、げッと血を吐きながら、よろめいて、板戸に縋り、なおも瞠目して、倒れた影に近づいた。抜刀して、よろめきつつ、

「勝った、勝ったぞ、おれが勝ったのだ、幕府の犬め……」

倒れた影の顔を確かめずには死ねぬように、刀を胸に突き刺したまま近づいたのである。

むずと足を腹にのせ、頭巾を切り裂いた。

その下にあらわれた顔は、畠山勘解由ではないか。

あの九条清貴の屋敷に潜入した鷹が入れ代わっていたとは、清貴も気づかなかったし、いまも、目のあたりに見ながら、竜斎には信じ難いのだった。

「阿呆な、こんな阿呆なことが」

それまで立っていたのが奇蹟なように、ばったり倒れた。が、尚、その眼は、驚きに瞠目され、唇は声を失ってもぱくぱくと不審を訴えているのだった。

「広海屋、観念しな。おめえは商人だろう。商人らしく、算盤はじいたらどうだ、どうせこの仕事アおしめえなのさ、あきらめるがいい」

「鷹、この場は、あたしたちが」

朱鷺と百舌鳥が姿をあらわした。十人の女たちを助けるには女手の方が幸いである。

鷹は、宙を翔けるように、堀川に飛んでいる。所司代役人が清貴を捕えるべくはやくもくり出しているところであった。九条清貴が、高飛びする前の土産に堀川光胤の屋形を襲うことは、すでに聞き出してある。それほど清貴が惚れた堀川孝子とは、どのような美女か。鷹は京の大路を疾走しながら、あの岡崎の宿で抱いた姫の素肌を思いだしていた。

辻斬り将軍

1

――将軍さまが辻斬りをなさるそうな。
――昨夜も駿河台で斬られたわ。
――恐ろしいことよの、御当代さまは。

巷にそんな噂が流れていた。

徳川幕府もすでに三代、家光の世である。大坂の両度の陣から戦乱の狂燥が治って、もはや四半世紀に垂んとする。

世間は泰平を愉しんでいた。

大名の参覲交替の制が定められ、外国との往来を断つ鎖国令が布かれたのも去年のことだが、そうした措置も、国内の治安度を反映するもののようにとられて、尠くとも表面的には、世間は平和だった。

大坂の陣以来、浪人者が増えて、食い詰めたあまりの強請り強盗が一時横行したことはあったが、それも近ごろは江戸市中の景気が作用したのか、めっきりと減っている。

江戸城の西ノ丸が過失火を出して炎上したのは先年のことで、その修築に関連して、本丸も大々的に普請をはじめていた。そんなことも、景気に拍車をかけていたのかもしれない。

本丸の天守台に足場の櫓を組んで、白亜の高楼が出来つつあった。

徳川幕府の象徴である千代田城の天守閣である。壮麗な威容は、三代将軍家光そのものでもある。その人が辻斬りをするとは。

不知火忍者の〈鷹〉が、この噂を耳にしたのは、花の季節が終ろうとするころであった。

「まさか」と、一笑に付した。「将軍の身が……」

「あたしもまさかと思っていた」と、朱鷺は言った。見た、と言うのである。その辻斬りに逢った、と言うのだ。

「ふむ、その辻斬りは女を狙うのか」

「このひと月のうちに斬られたのが侍五人に、町人二人、女が三人……」

「朱鷺は四人目になるところだったのか」

「飯田町のね、中橋で……もう少しでお陀仏になっていたよ」

月が出ていた。月夜に狸は浮かれるが、狐は出ないという。夜盗に月夜は禁物のはずであった。

その侍とすれ違ったとき、だから朱鷺は、まさか噂の辻斬りだとは思わなかったのである。侍は一人だった。頭巾をかぶっていた。着流し姿が、すらりとして、壮年の精気を感じたのは、悩ましい五月の夜のせいかもしれない。

朱鷺に〝くノ一〟の身をふっと忘れさせる夜気——そこらの屋敷の中に椎の樹でもあるのか、若葉が強く臭っていた。

くノ一にかぎらず、忍びの眼は、夜闇に冴える。況や月夜である。三間の近くまで来たとき、紋服の葵の紋がはっきりと見えた。見誤りはない。

朱鷺ははっとした。足が止まった。

刹那——袖が翻った。抜き討ちである。朱鷺は、(斬られた!)と、思った。それほど凄絶な太刀風だった。生半な修業では、この一刀を躱しきれなかったに違いない。朱鷺のからだは反射的に跳んでいた。

「おのれ!」

虚しく刃は影を掠めるや、葵紋の辻斬りはこう叫んだ。

「余を嘲弄するか」

二ノ太刀も朱鷺は、辛うじて躱している。

「無礼者、それへなおれ」

辻斬りの奇怪な言葉である。さながら家臣を手討ちにする主君の態度であった。

朱鷺は身を転じながら、また紋どころを見た。葵の紋——

正しく、それは、将軍家光の用いるものであった。

葵紋は徳川の家紋であり、御三家や松平を名乗る親藩などで許された大名も多いが、いずれも少しずつ違っている。

忍びノ者として朱鷺は、その微細な点の違いにも通暁していた。

「——顔は、見なかったのか!」

と、鷹はまだ疑いを捨てきれない。

「ちらっとだけど」

「見たか」

「色白で、鼻すじが通っていて、眉のかたちがよくて、眼が切れ長で……」

家光のはげしい気性は、一つ話になっている。尊大傲慢な点も、とかくの批判があった。後の世になると将軍の権威はゆるぎないものになり、一指も触れ得ぬものであったが、三代目の将軍宣下は元和九年である。未だ大坂の陣から十年と経ていなかった。乱世の兵法大名たちも生残っていた。将軍といっても、家光が一大名にすぎなかった昔もそう遠くなかったのだ。

家光が将軍宣下して後、諸大名を集めて、一喝喰わせた話は著聞である。

「余は生まれながらの将軍である」

と、いうものであった。

「祖父や父は汝らと同等の時代もあった。が、すでに、徳川家将軍職を拝命して三代、余は将軍の子に生まれている。汝ら、余に不服あれば、帰国して弓矢をとるがよい」

青二才の御曹子を軽んじる気風が大名らの中にあったのを、機先を制して、感服せしめたのだ。こうした家光だけに、〝新刀だめし〟の辻斬りに出ることも、あながち異とされない。

「血の気の多い将軍さまだ。お城の奥御殿で酒や女に不自由はなくとも、人を斬りたくなるのかもしれぬ」

「そんな……今夜も又、誰かが斬られているかもしれないよ」

「おれの知らねえことさ」

2

〈鷹〉が知らないでは済まぬ事態だった。次の日、松平伊豆守信綱から、事の真相を探るよう、鷹は依頼を受けていた。

大川の中洲であった。外聞を憚ること、今度ほど大なることはない。信綱の表情はいつになく緊張でこわばっていた。

「――聞いた」

と、鷹は言った。釣糸を垂れたままであった。信綱は背中と話していた。

「御当代さまも、派手にやる。辻斬り将軍とは、外様大名が喜びそうな狂言だ」

「鷹。急ぐのだ、一日も猶予しておれぬ」

「ほう、御老中がそこまで真剣になった顔ははじめて見たぞ」

「冗談を申しておる場合ではない、もしも上様であったなら……」

「斬るか」

と、鷹はふりかえった。

「おれなら斬れる。伊賀者ではそうもゆくまいが、な」

信綱は息をのんだ。

前に述べたように江戸城は、大規模な工事の最中であった。江戸城は一朝にして出来たのではない。我が庵は軒端に富士を見る、と太田道灌が詠じたころから、漸次改築増築されて、徐々に、その威容を整えていったので、年月で区切るなら、大きく四期にわたっていて、この寛永の普請は、その四期目でほぼ完成に近づいていたのである。工事場はどこでもそうだが、資材の運搬などのために臨時の門を作ったり、門限をゆるめたりする。

信綱の調べでは、家光が夜な夜な出てゆくのは、乾の門という。のちに、この門は潰され、地形も変わったが、普通、将軍が出入りすることはない。

「お供が二人、近習の大島友之丞と林左内。二人を問い詰めたが、左様なことはないと言い張る。上様の御刃傷など、絶対にないと申す」

「……」

「だが、上様のお出ましになった夜に辻斬りが現に行なわれているのだ。それに目撃者もいる」

「……」

「辻斬りをなさるのでなければ、なぜ、夜行遊ばされるか、毎夜の如くに何れに向かわれるのか。二人を責めたが、吐かぬ」

「責め方がたりぬのだわさ」

「いや、二人は忠義の者じゃ、それ以上、責めれば切腹する。眉宇に必死の相が見えた。死んでも、口を割るまい」

信綱が将軍家光に忠義なように、近習ら二人も、死を覚悟しているのであろう。

「では、どうすればいいのだ」と、面倒くさそうに、鷹は言った。「上様を斬る？　斬ってはいかんというのだろう」

「もしも、真実、左様な暴戻をなさるならば……」

「斬ってもいいか、いいな。それならひきうけた」

「まて、斬るなどということは」

「心配するな。殺しはせぬ。腕の一本くらい、へし折るかもしれぬぞ」

鷹は、行動の意味を見出したように、釣竿を捨てた。葦のあいだに身をかがめたと思うと、よしきりのように視界を掠めて、闇に溶けた。

家光が江戸城を出たことを聞いた鷹が直ちに〝巣〟を出たのは翌日、日が暮れたばかりのころであった。

（今宵は突きとめてやる）

鷹は風のように走った。朱鷺とは別々の道をとった。家光がどちらにゆくか、およその見当しかつかなかったからである。

これまでの辻斬りのあった場所を考えると、大体の目安はつく。だが、この夜も運が悪かった。佐柄木町の辻までくると、地上でもがいている影があった。

「どうした？」

血が臭った。町人であった。抱き起こすと、ぱくりと左の肩から胸へ、鮮かな斬り口で、もう虫の息になっている。

「おい！　誰にやられた」

「あ……あ……」

「見たのか、殺ったやつを、見たか」

「あ、葵……」

「――葵の紋を？　たしかか、しかと見たというのか」

「将軍さま……なんで、わしらを斬ったりなさるのじゃ……」

怨みをこめて、かっと瞠目すると、そのまま、がくりとなった。尽未来、怨みを残すという激しい表情だった。

そのとき、向こうの角から歩いてくる男が見えた。羽織を着た武士である。提灯を下げて悠々とやってきた。

「何ごとだ」
提灯と月の灯りが、その顔を明らかにした。品の良い顔をした武士であった。
「辻斬りだ」と、鷹は言った。「そこらで誰か見かけなかったか」
「うむ……そういえば、立派なみなりの侍が走っていったな。葵の紋どころだったのでぎょっとしたのだが……そうか、将軍家光公が、辻斬りをしていると聞いたが」
「見たのか、葵紋を」
「将軍家の御紋でござったよ」
そのころには、近所の自身番や長屋の差配などがとび出して来ていたのである。みんな、その言葉を聞いて、顔を見合わせた。
「おぬし、いずれかの家中……」
「いや、浪々の身でござる。西条京之介と申す。そこの石町に住いしておる。いつでもお訪ね下され」
そう言い遺して、何事もなかったように去っていった。

3

妙に、その男のことばが頭にこびりついていた。
「浪人、西条京之介か……」
浪人というものは、もっとあくせくしているし、自然と、顔付きも変わってくる。牢屋に長くいると、顔つき眼つきが違ってくるように、不如意な生活は、人相を険しくする。西条京之介の悠々たる態度にはそれが感じられなかった。むしろ、その悠然たるさまが妙に強く残っていたのである。
その夜、朱鷺の方も、家光の行方を突き止めることが出来なかった。
「あたしに考えがある。一晩待っておくれな」
朱鷺はくノ一としてのワザを発揮したのである。千代田城の奥殿に忍び入っていた。
このところ、ずっと家光は大奥に入らない。中奥で起居している。この日の湯浴みも、大奥の局へ行くためではなかった。
家光は広い湯殿で、係りの女に背を流させていたが、ほどよく湯気のこもった湯殿で、ぼんやりと夢を見ているような気持ちになっていた。
〈上様……上様〉
どこか遠くで、誰かが呼ぶような気がした。
「なんじゃ？……」
〈上様は、今宵も、お出ましになられまするか〉
「うむ……」
〈辻斬りをお楽しみに〉
「うむ……いや、何というたぞ、辻斬りじゃと」

〈御城外で、辻斬りをなさいまするか〉
「なんと申す！」
〈辻斬りをなされました〉
「余が？……左様なことをするものか」
〈では、何ゆえ、夜中にお出かけ遊ばされまするか〉
「それは……」
ふっと、醒めたようであった。頭痛がした。何だか悪夢を見ていたような気がした。家光は、湯槽に入った。係りの女中は、ひっそりと羽目板のところに控えている。家光は、湯の中に肩まで沈めると、「誰じゃ」と、咎めた。
返事はなかった。家光はまた夢幻に引きこまれていた。
〈夜中に、何処へ……何をしに行かれまするぞ〉
その問いつめてくる語気が、家光には、乳母の春日局のようでもあり、伊豆守のようにも聞こえた。
「なぜ左様なことを問う」
〈上様が辻斬りなどなされるとの噂がひろまりましては、天下の大事。なにとぞ、真実をお洩らし下さいまし〉
「話せぬ」
〈上様、征夷大将軍の御身として、それではあまりに……〉

「申すな、将軍とて、人間じゃ、余は……」
それまでだった。そのとき、はげしく板戸を叩く者があった。ふっと、家光はわれにかえった。湯殿の中には係りの女中が二人、死んだように突っ伏していただけである。
「上様、上様の御身に変わりはないか、これ、お湯殿ノ者、返事をしや」
家光の入浴があまりに長いので、心配になって駈けつけたようであった。そのとき朱鷺は、手足の関節をはずし、湯気抜きの高窓から外へ——
（将軍とて人間……か。人間だから辻斬りをするとは、話が合わねえぜ）
鷹は朱鷺から話を聞いて、嘲ったが、やはり、何か胸にひっかかったようである。
「その、人間将軍のしゃっ面を見てやりてえ」
鷹は、乾の門に近い馬場でその夜、あらわれるのを待った。どこへ行くのか、あの二人の近習に守られるようにして出て来た。むろんお微行である。番士もそれを知っているが、見て見ぬふりをする。
鷹は家光たちのあとを跟けた。朱鷺がそのとき気がついたのは、番士の一人が、お濠端を歩きだしたことだ。
（あの男、どこへ行くんだろう）
朱鷺は、そのあとを尾行することにした。一丁ほどで街角に女たちが二、三人立ち話していたが、その女が、番士の姿を見ると、そそくさと駈けだした。

入っていったのは湯女風呂「あけぼの」だ。それがどういうことなのか、朱鷺にはわからない。湯女風呂に客引きの湯女が戻っていっただけのことである。

朱鷺は、それだけ見とどけると、すぐに家光と鷹のあとを追ったのだが、湯女風呂の裏から出た男がある。これは西条京之介であった。

4

——家光は恟ッとなった。

道の真中に坐りこんだ男がいた。一塊の岩石か何かのように見えたが、これは忍者鷹だったのである。

「何者だ！」

近習二人は刀の柄に手をかけた。

鷹はじろりと家光を見上げた。

「お手討ち、いやさ辻斬りしなさるがいい」

「なんと！」

「将軍さまの辻斬りですぱっとやられりゃア、末代までの光栄だってね」

「……」

「どうした、辻斬り将軍」

大喝するや、鷹のからだは一跳した。白刃が家光の顔面を襲っていたのである。頭巾がはらりと、切れた。家光にまぎれもない。愕然として、刀の柄に手をかけたまま、たたっと、あと退る。

それをじろりと見た鷹は、「ふむ、似ている」と、呟いた。

「上様、御用心」

大島と林は真蒼になって抜刀した。

「慮外者め、うぬは、うぬは……」

「安心しな、辻斬りでなきゃア、何もねえことさ」

ぱちりと刀をおさめて鷹は一転、露地へ消えた。

むろん、消えたのではない。闇に溶けただけである。家光がこれから何処へ行くのか。それをつきとめたかった。家光のいまの様子では、辻斬りのあの凄絶な刀さばきは、望めない。

家光は、突然あらわれた男に驚いたようであったが、近習らを促して道を急ぎだした。

湯島の植木屋に入っていったのだ。植木溜の奥に離れがある。近習らは母屋の方に入り家光だけが離れに入っていった。

「——あ、若さま」

とびつくように迎えたのは、一人の娘。清楚だが、しっとりした情愛を感じさせる挙措であった。

「嬉しゅうございます。もう、今宵はお出でないものと思っていました」

「ははは、どうしても来ずにはおれなかった。お楽、逢いたかったぞ」
「わたくしも……今日はお出になれないかと、いつもそればかりが」
「来るとも、どんなことがあっても」
「ああ、若さま！」
二人はひしと抱きあって唇を合わした。
唇を吸いあい、両手がお互いの肌をまさぐり合う姿で、どれほどの深い仲か知れるのである。
離れの丸窓に眼をつけて、明り障子の隙間から一部始終を見守っている影はいうまでもなく鷹である。
家光もお楽ももとより知らぬ。
「お楽、遠乗りの際のふとしたことから、そちとかような仲になったが、わしはもう、そちに偽っていることが心苦しくてならぬ。名も名乗らず、そちを不幸な眼に逢わせているのかと思うと……」
「いいえ、よろしいのです。若さまが、大公儀のお旗本か、お大名の御舎弟さまか、そんなことは、お楽はどうでもいいのです。ふとした御縁も神さまのお引き合わせと思い、こうして、愛しんで頂けるだけで、お楽は倖せでございます」
「だが、余は……」
「仰有らないで！　お名前を聞いてしまったら、もう若さまとわたくしとは、違う世界の別々の者になってしまいますもの！　このまま、このままで、何不足はありませぬ」

影が丸窓をはなれた。風が出て植木を騒がせている。空は暗く、月も、そして星屑もなかった。夜風は妙に生温かく、空に唸った。さあっ、と雨が落ちてきた。ぴかっと、稲妻が光った。
（ちぇっ、濡れて帰る果報者か。あっちは楽しくやっているのにな。忍びの身は、いつも貧乏クジだ）
お茶の水の崖沿いの道に来たときだった。ぴかっと光った稲妻の中に、一人の男が浮かび上がった。着流しに頭巾をかむった武士。朱鷺に聞いた男のイメージが重なった。
また光った。はっきりと見えた。葵の紋どころである。こちらをふりむいた顔。頭巾から洩れた眼鼻に、鷹は記憶を呼びさまされた。
「西条京之介！」
家光とよく似た顔であり、背恰好であった。
「よくぞ見抜いたな」
頭巾のうちで、ふふっと含み笑いがした。
「この淵は将軍献上のお茶の水だとな。うぬの血で汚して、将軍一族の末期の水とするか」
「黙れ、京之介！　将軍家に扮して辻斬りを行なうとは、呆れたわけだ。その狂言も、今夜が終いだぞ」
「どうかな」
青い稲妻と横殴りの雨しぶきの中で、京之介は凄い笑いを洩らした。
「おれは、世が世ならば、将軍だ」

「なんと！」

「前ノ将軍秀忠がおれの父だ。こう言うてもわかるまい。おれの母は奥女中であったが、湯殿で手籠めにされて、おれを生んだ。お屋敷様になるどころか、身重の身をほうり出されてな……」

「その憎しみか。だが、当代には罪はない」

「言うな、徳川将軍家そのものが許せぬのだ、権力が、許せぬ。母は、母は、おれを生むとすぐに歿った。母の怨みだけでも、将軍家を叩き潰さではおかぬ。辻斬り将軍の噂がひろがれば世間が黙ってはいまい。外様大名が、将軍家の屋台骨をぐらつかせるであろう。そうなれば、再び、乱世がくる。ははは、地獄の世が。どうせこの世は地獄だ」

妖剣が奔った。雨は一層はげしく叩きつけてくる。その漆黒の闇を時々稲妻が凄絶な蒼い光であたりを照らす。

その一瞬の光芒を鷹の秘剣が受けたとき、西条京之介は泥濘の中に死骸を横たえていることになるはずであった。

その夜かぎり家光は微行の外出をやめた。数日後に迎えの使者が来て、お楽は大奥に招かれ春日局の部屋子にあがっている。

四代将軍家綱の生母を、お楽ノ方と称ったことも付記しておきたい。

女歌舞伎

1

「――美い玉だな」

と、泥鰌ひげは言った。

「掘り出しものだ」

「で、ございましょう。この一座は、あの美里で保っているようなものですよ」

座頭の阿久里という中年女は、さぐるような眼で、泥鰌ひげを見た。この男は勘進元の岡村九郎右衛門という。でっぷり肥って、見るからに好色で吝嗇で残忍な感じがする。あぶらぎっているだけでなく、厚く黒い唇と泥鰌ひげがそう思わせるのかもしれない。

「いや、美里じゃない、あれさ」

顎をしゃくった。

肌脱ぎになって化粧をしている女だった。

「あ、あのあやめでございますか」

「そうそう、あやめと言ったな。もう一人の新顔の方は」

「楓……あやめの姉なんですよ」

「あれも悪くはない。どこで拾うた？」

「拾ったなんて、お口の悪い。神様からのお授かり、ほほほほ、これァ冗談ですけどねえ、あの妓たちにしたって、あたしとめぐりあったのが倖せというもの」

「ふふん、そうかいの」

「そうですともさ。あれだけの踊りが出来ながら、何も飴売りなんかしているこたァないでしょ……」

この女歌舞伎の一座は数日前、上方から下ってきて小田原の城下で客を集めた。酒匂の河原に簡単な丸太組みの舞台をこしらえて、木戸をあけたがお客がまるきり入らない。

聞いてみると、宮前に若い姉妹の飴売りが来て踊りを見せる。それが評判で、客はみんなそっちに行っているという。

「ふん、素人の踊りがなんだい」

腹が立って見にいったのだ。どうせ素人の踊り、せいぜい、色気を売りものにして好色な男の客を集めているのだろう。場合によっては赤恥かかしてやろう。その心算が、見ているうちに、惹きつけられた。

姉妹とも容色がきわだっているところに、踊りがうまい。手の動き足の舞い——

「——まるで蝶々の舞いさね、あんな軽やかな身ごなしの女、見たこたァない」

飴売りなんかしないで、一座にお入りよ、大した売れっ妓になるからさ、と口説いて入れたという——

「——なるほどな、美い玉だ」

「もう眼をつけなさったのかえ」

「わたしじゃない、あちらさまさ、正面の三番の桝の御方」

阿久里は暖簾の隙間から見た。

その桝で大杯を傾けながら舞台を眺めているのは高身の旗本だった。赧ら顔でえらの張った顎に自信があふれている。まわりに五、六人の供侍がいる。

「ああ、服部主膳さまかえ」

「存じ上げているだろう、御作事奉行で大した羽振りの方だ。お城の工事は一切、あの御方の存じ寄りで左右される。木場の連中が取り入って甘い汁を吸おうとするわけさね」

あやめと楓が支度が出来て、傍を通った。

念仏踊りが終わって僧形の女たちが戻ってくるのと入れ違いに、派手小袖の二人が舞台に上がった。

わっと拍手が起こる。まだ新顔なのに大した人気だ。服部主膳は飲みさしの杯を手にしたま

ま、舞台に眼を奪われた。

〽離れ〳〵の契りの末はあだ夢の〳〵
　面影ばかり添い寝して
　あたり淋しき床のうえ……

桜の小枝を両手に持って、打ち振りながらの艶麗な舞いであった。ゆるやかに着た襟のうちに乳房のふくらみがちらちらし、大きく脚をあげると内腿の白い部分が、客の眼をどきりとさせた。

〽涙の波は音もせず
　袖にながるゝ川水の
　逢う瀬は何処になりぬらん〳〵

殆ど呆然として見惚れていた服部主膳の耳に、そのときこう囁く者があった。

〈酒がこぼれまする、お過ごし下され〉

うむ、と生返事で主膳は杯を口に近づける。

眼はあやめから離れない。がぶりと飲んだ。が、口の中に何を感じたか、

「うわっ」と叫んで、吐き出した。酒と一緒に、毛蜘蛛が一匹、もんどり打って落ちた。

「げぇっ、く、蜘蛛じゃ」

主膳は腰を抜かさんばかりに仰天した。足のひろがりが三寸もある大きな奴だ。

「なんということじゃ！　酒の中に蜘蛛が」

「踏み殺せ」供侍たちが血相変えて、足をあげた。

蜘蛛はするすると、隣の桝へ移った。わッと隣の町人風の男女が立ち上がる。蜘蛛はさらに隣の桝へ。

そこにいたのは、異風頭巾をかむって眼ばかり出した浪人風の男であった。

蜘蛛が来たのに驚きもせず、むずと摑んで、

「いぶせき小屋だの、舞女は来ずして蜘蛛が来るか」

と、立ち上がった。主膳の方を一瞥もせず、出てゆくのである。

「なんじゃ、あやつは……」

醜態を演じたことを悔んで、主膳は、酒！　と、供侍に当たり散らした。

「誰だ、おれの酒に蜘蛛を入れたのは」

「滅相もないこと」

「――では、あの、酒がこぼれる、と奨めたのは、誰だ」

「存じませぬ。左様なこと」

供侍たちは首を振った。

主膳はまだ毛蜘蛛が口の中に居るような気がして、そこらに唾を吐き散らしながら、舞台に眼をむけた。もう美貌の姉妹は舞台から姿を消し、やや子踊りに変わっていた。

2

「――いずれあやめかかきつばた、姉妹とも抱きたいといったら、姉のほうを先にするのが順序だとな」

「……」

「ははは、そう差しがらぬでもよい」

服部主膳は楓の手をつかんで引き寄せた。

浅草の隠宅だった。このころの江戸は狭い。東は大川が限りで、北は神田川まで。浅草橋を渡るともう辺鄙な郊外だった。

戸を叩くような水鶏の声が聞こえている。

広大な別墅である。近所では、誰の屋敷か知らぬ。浅草川の水をひき、邸内には四季それぞれの花が咲き乱れ、奥御殿は二重三重の中仕切りがある。

贅を凝らした造作や家具調度で、料理も京の堂上風の庖丁人などがいて、鼓や三弦などの音が、時折り風に乗って聞こえてくる。

「――明日はあやめの方を抱くから、今日は、そちをたっぷりと可愛がってやるぞ」

主膳は、楓を抱きすくめ頬ずりした。その片手は襟をかきひろげるようにして乳房にのびている。

「ねえ、お奉行さま」

と、楓は身をくねらして、その手に抵抗しながら、

「このお部屋は、どなたさまのものですかえ、大層御立派な」

「ははは、悪くはない」

「まるで夢のようでございます。あの牡丹の美しいこと、あんな大きくて美しい牡丹など見たこともありませぬ」

「わしは、そなたのような美しい女を抱くのははじめてさ」

「まあ、お口のうまい」

楓は、酒をついだ。少しでも主膳の手を酒の方にやろうとする。

「もう酒はよい。それより、そなたを」

「あれ、お弱い。お奉行さまは、酒にかけては、比類のないお強さだと伺っていましたのに」

「ははは、なに、それほどでもないわさ」

主膳は頬をなでた。小鼻をひくつかせて、杯をあけると、

「楓、そちも飲まぬか」

「はい。いただきまする」

「――強いな」

「いいえ、お相手に少々……ねえ、お奉行さま、こんな夢の御殿で、こうやって、天下一の御料理で、極上の酒を飲み、花を眺めているなんて、まるで極楽に来たような」

「極楽はここにあるわさ」
主膳の手は素早く、裾から入った。
「あッ……ねえ、お奉行さま、このお屋敷は、どなたさまの」
「どなたのものでもええわい、わしはもう待てぬ」
腿の柔らかい皮膚に触れると、主膳はかっと血がのぼって、荒々しく、挑みかかり、楓をその場に押し倒した。
「あれ、こんなところでは」
拒むように、言っているが、嫌っているのではない。女の手管であった。
「ふふふふ、褥でゆっくり抱かれたいか」
抱きあげて、次の間に運ぶ。そこにはまるで夜のように夜具が敷きのべられ、くくり枕が二つ並んでいる。
主膳はごくりと生唾をのんで、
「さ、早う……」と、促した。
楓が帯を解く間も待ち遠しく、おのれはさっさと裸になると、からだを横たえ、衾に下半身をさし入れる。楓はちらっと、盗み見た。主膳の前は、すでに、あられもなく、ふくらんでいた。白絹の下帯が、いまにも破れんばかりだった。かなり大きく、自慢の物らしい。
とたんだった。ぎゃっと叫んで、はね起きた。
「うっ……何かいるぞ」

「え？」
「何か、わしの足に触った虫がいる。いや、何か……この家の用人を呼べ。虫だ、何か虫が」
主膳は裸のまま仁王立ちになると衾を蹴上げた。
何もいない。真新しい夜具である。練絹の手ざわりも豪華な蒲団だ。
「それ御覧なさいませ」
「うむ、気のせいか」
おかしいな、とは思ったようだが、気が急いている。眼の前に、熟れた肌の艶な姿を見ているのだ。下着姿になった女のからだから、甘酸っぱいような、男には毒な匂いが立ちのぼっている。主膳は、堆偉な獅子鼻の腔をひろげると、
「惚れたあまり、わしもどうかしておる」
早く、と、楓を抱いて横になった。まだ女は腰のものを巻いたままだった。
だが、その女の全裸にお眼にかからないうちに、主膳は気を失ってしまったのである。
「上になれ」
その体位が好きなのか。主膳は仰臥した。まるで、それを待っていたように、スーッと何か天井からおりてきた。
愕ッとした。毛蜘蛛だった。愕然とした顔の上におりてきたのである。払いのけようとした手は虚しく空を搏った。蜘蛛は、がばっと、主膳の顔に貼りついた。
動顚して叫ぼうとする口に、二匹目がおりて来て、口を封じた。

無気味さと驚愕で、主膳は虚空をつかみ、四肢を突っ張ったまま動かなくなった。

3

「――うまくいったぞ、朱鷺」

ひらりと天井からおり立ったのは鷹である。

「あら、もっと早く来てくれると思っていたのに」

「朱鷺の裸を見たかったのでな」

「意地わる」

朱鷺はあわてて、ゆるんだ腰のものを強く巻きつけた。

「明朝になれば、こやつ息を吹きかえす。〝蜘蛛手仮死〟のワザだ。朱鷺もかかったことにしておくのだ」

「あい」

朱鷺は用人の部屋に忍びこんだ。

この広大な屋敷の管理者である。誰が聞いても持主の名は言わぬ。この屋敷に招かれるのは、これまで御作事方や御納戸などから寺社のお係りなど要路の役人たちで、以前は町奉行まで、忍び来たこともある。

そこには、金と女が動いているという噂だった。女は吉原の大夫から、屋敷のやんごとない

姫もいたし、色香の失せぬ後家もいた。

いずれも、駕籠でこっそりと訪れ、酒食の饗応と、それぞれの身分や立場から、多額の金品が動いて、役人たちは、金と女の極楽を味わうのである。

町奉行までが、忍びで愉しみに来るのでは、妖異の浅草御殿の噂が立っても、内実を暴露されることもなく、司直の糾弾を浴びることもなかった。

まだ当時は乱世の余風を受けて、侍屋敷と町屋の階級差なども判然としてはいなかった。金のある者なら、屋敷作りも出来るし、名義は引き込み浪人の届けで充分だし、そこで何が行なわれようとも、殺人や謀叛徒党の充分な疑いでもないかぎり、取り締まりの対象にならなかった。

ある意味では、おおらかな時代だった。

吉原の遊廓から、花魁たちが、給仕のために、千代田城内の奥深い評定所に上がるという、後世の良識からは信じられないようなことすら行なわれていたのである。

それだけ公認遊女の地位が高かったせいもある。

吉原遊廓の開所当初は、専ら武士が客であり、町人は容易に行けなかった。値段のこともある。お国侍の異郷の淋しさを解消する機関としての了解が、認可の意味に含まれていた。

しかし、町奉行ほどの身分になっては、取り締まり当局の立場から、遊びにはゆけない。この屋敷の謎の主がその仲介をとるという噂があった。

『謎の主を探れ』

と、松平伊豆守信綱は、鷹に命じた。

フリーランサーの不知火忍者にしてはじめて出来る仕事だ。公儀忍びたる伊賀者を、信綱は信用していなかった。現実主義者である信綱は、直接報酬で〈鷹〉を雇う。

気のむかぬときは千金を積まれても動かぬ鷹であるが、その卓抜した忍びのワザは、信綱の望む政治の土台固めの役に立った。それは、また信綱自身の野望と秩序への理想と相容れぬものではなかった。

〝悪〟を取り締まる町奉行までが、その屋敷の常連とあっては、信綱も手が出せなかったのである。

「――ないか」

「何もないよ。書いたものは何もない」

証拠を残さぬためであろう。

「小判だけは凄いよ。何百両もある。あれを賄賂に使っているのかしら」

「儲けは数十倍だろう。その儲けの方の金は謎の主の懐中でギラギラ光っているわけだ」

用人から聞きだすのが手っとり早い。が、無駄だった。鷹はこころみて失敗している。忍びのワザにはむろん催眠により自白させることも出来る。が、用人は事実知らなかった。かれも高給で雇われているだけで、書状で命令は来た。その書状は読後すぐに焼き捨てるので、証拠は残らない。

「――無駄だったね」

朱鷺は失望した。

「明日、百舌鳥を抱きにくる。そのときに別の手で吐かしてやる」

だが、その明日は、服部主膳はおぞけをふるって、百舌鳥のあやめをここで抱くのはとりやめにしたのだ。

朱鷺の楓の肌はとうとう味わえなかった。主膳は、アツモノに懲りて、ナマスも吹かずに、手をひっこめた。蜘蛛の恐怖が、かれを竦ませた。

翌朝、この屋敷から倉皇とおのれの駿河台にある屋敷に帰った主膳は、登城前の僅かしかない時間に、駕籠を芝居町に走らして岡村九郎右衛門に何やら囁いている。

「――どうしたのかしら、お前はいかなくてもよくなったよ」

座頭の阿久里は、百舌鳥のあやめに言った。

「楓が御機嫌損じたのかしら。でも、岡村さまの話ではそうでもないらしいんだけど」

あやめと楓のからだを提供して阿久里は幾ら儲けるのか。とりやめになっても、その金が減るわけでもないらしかった。

〈なんだか妙だよ〉

朱鷺は百舌鳥に囁いた。

〈泥鰌ひげが何か知っている〉

4

その泥鰌ひげの岡村九郎右衛門は朝風呂が好きで、人形町の銭湯へ出かけたが、出てきたときはまるで別人になっていた。泥鰌ひげは付け髭だったのか、着物も尻端折りにくけ帯で前かがみになって、そそくさと歩く。

泥鰌ひげの出てくるのを柳の蔭で見張っていた百舌鳥も、あやうく見落とすところだった。

（あいつ……岡っ引だったのね）

十手の柄が懐中からのぞいている。女歌舞伎の勧進元は表むきで、裏では町奉行所の御用をつとめているのか。

この男が行った先は木場の材木問屋遠州屋吉兵衛方だった。百舌鳥は夥しい材木を浮かした濠割の水をくぐって、屋敷の内に侵入したが、主の吉兵衛と密談しているのを遠くから目撃しただけだった。手代や番頭から人足などの警戒が厳重で、それ以上は近寄れなかったのである。

（吉兵衛が何か握っている。鷹に知らせなければ）

鷹なら探れるだろう。

だが、鷹に急を告げる閑はなかった。一度帰らないと怪しまれる。百舌鳥は、しかたなしにひきかえした。

「どこにいっていたのだえ」と、阿久里がはじめて女夜叉の地金をだした。「勝手な真似をされちゃァ困るよ。え、何処に」

お風呂です、と誤間化した。濠割に潜ったからだを銭湯で洗い流してきたのだ。

その場はどうやら誤間化したが、あるいは百舌鳥の行動が阿久里に疑惑を抱かせたのかもしれない。突然、この日の暮れ方、町奉行所から町役人が出張ってきた。

「隠し売女お改めじゃ」

「まあ、そのようなことは」と、阿久里は仰天して、「わたくしどもは御覧のように女歌舞伎、出雲の阿国の流れを汲む者でございます。変なことはいたして居りませぬ。決してそのような」

白々しい言い訳は、馴れているらしく巧みだったが、神保という同心は耳を藉そうとはせず、多勢の岡っ引手先などを指図して、十一人の女役者を数珠つなぎにしてしまった。

朱鷺と百舌鳥もむろん含まれていた。いや、気のせいか、彼女たちが本命だったようである。

「あたしたち、どこへ連れてゆかれるの？」

「吉原の廓さ。隠し売女は、吉原で三年間タダ働きさせられるのさ、地獄だよ」

〝敵〟が彼女らに狙いをつけていたことは、特殊地帯である吉原遊廓にほうりこまれて判然とした。

「ここァ、お江戸の地獄だ。どんなに泣き喚いても、誰も救けに来ねえところさ」

泥鰌ひげをとって岡っ引の九兵衛に戻った男は、百舌鳥を共通の会所というお仕置場に連れ

こんだ。両手両足を縛して梁から吊るすエビ吊りにして、竹を割ったササラで殴りつけるのだ。

「さあ吐いちまえ、飴売りとは嗤わせるぜ、誰に頼まれて女かぶきの一座に入りこんだのだ。今朝は一体、どこへ行っていたのだ。何もかも吐きな。強情張ったら五本指の爪を剝いで蒲団針を刺してやる」

「ああ、堪忍して、あたし、何も知らないよウ」

「ほざくな。指を腐らしちゃ、商いモノにならねえと廓のおやじが泣くから、いっそ、ヨガリ泣きさせてやるぜ」

九兵衛は百舌鳥の着物をびりっとひき裂いた。腰のものも容赦なく剝ぎとった。よく締まった腰から腿の線が一瞬、男たちの眼を眩ませた。

「ふふ、勿体ねえような滑っこい肌だ。一ト晩に三十人もにナニされりゃ、あんまりいい気持ちで、饒舌りたくなるだろう」

「そんな、ひどい！　そればかりは堪忍して」

男たちの眼は舐めるように秘所を見た。百舌鳥は吊るされたまま身を揉んだ。

そこへ、ぞろぞろと人相風体の悪い一見して浪人者たちが廓の男衆に案内されてやってきた。

「おぬしが九兵衛か。話は聞いているだろう、あちらから頼まれて来た」と、一人が代表して言った。「あやめと楓という歌舞伎売女を見張るようにな」

「御苦労さまですな。へえ、一日幾らで雇われなすったか知らねえが、オマケをつけてあげますぜ」

「なんだ、それは。酒代をくれるのか」

「この女でさ。こいつをマワしましょう。こたえられねえ尻をしてやがる。まず、わっちが一番乗りしやす。あとはクジ引きでもして愉しみなせえ。女が吐くまでだ。強情張ったら、おまはん方が済んだあと、またわっちがやる。何回でもそうやってマワセばいいやな。いくらかァこたえるだろう」

九兵衛は汚ない褌をはずそうとした。話のうちに昂奮してきたのか、前が大きく膨んでいる。

「待て」と、一人の浪人者が出てきた。頬に凄い刀傷があり、顔がひっ吊れてスガ目が気味悪い。

「そいつァ不公平だ。みんなクジ引きにしよう。いやさ、腕で順番を決めるとしようぜ」

「う、腕だと！」

「たとえば、これさ」

浪人者の袖が翻った。九兵衛の頸すじから血が噴き、がくりと皮一筋残した首が肩へ倒れた。巧みな窶しで刀傷のひっ吊れも細工だった。スガ目と見えた眼から魚鱗が奔り、〈鷹〉の顔が出た。

血刀が一閃して百舌鳥の縛めを切り放つ。

「鷹！　うれしい！」

「マワスには勿体ねえ、美い肌だぜ」

「いやだよ、鷹までそんなことを」
「早く、着ろ」
百舌鳥が着物をまとう間に、鷹の刀はさらに何人かの血を吸っていた。
「味をやるな」
同じ食いつめ者でも、この時代、まだ戦場で乱刃をくぐり抜けた生き残りが多い。恐れを知らぬ連中だった。抜きつれてかかってきた。
一瞬、鷹の影が消えた。
「や、天井だ」
ぴたりと天井に貼りついていた二人。
「走れ、百舌鳥」
傷つき疲れた百舌鳥を逃がすべく、ひらりと飛びおりる。殺到する敵の渦中へ飛びこんだと見るや、その手裡から黒い一塊が行燈を目がけて飛んだ。ぼわッと鈍い爆発音とともに、閃光が浪人者たちの眼を射た。
かっと吹きあげる炎。その烈々たる明光の中で、鷹の白刃が閃いた。おのれを光りに投じて影と変じ、刀身光を吸って、敵の眩暈を誘う。光の走るところ、孤影なく、光りの在るところ、噴血散って死骸を生ず。秘剣かげろう斬りに血路をひらいた鷹は、よろめき逃れる百舌鳥を抱いて、宙を翔けた。

御作事奉行に取り入って江戸城中の一切の普請を独占し、木場に君臨しようとした遠州屋吉兵衛が、罪状発覚により、鈴ケ森で打ち首になったのは、それから間もなくのことである。
女歌舞伎は淫行の故をもって廃されたが、これに代わって野郎歌舞伎が、生まれた。必要が生じさせたのである。若衆歌舞伎だ。だが、世人が、華やかな舞台に、好色の対象をもとめるのは、変わらない。女歌舞伎がなくなれば、それを女に見まほしい若衆にもとめるだけのことだった。世間の歌舞伎への期待は、女なしでは、存在しない。女に見まほしい若衆が女を演じるようになった。女形である。今日の歌舞伎の源流がここにある。正常な淫色が廃されて、変態的な淫色に移行しただけのことだった。

くノ一御殿

1

「――上様のお命を狙ったやつがいた」

松平伊豆守信綱は言った。日暮れの大川である。橋場のあたりの瓦焼く煙が初夏の空にゆるやかに立ちのぼっている。広い川面には漁り舟が時たま往来するだけで、誰もこの孤舟を注目する者もいない。

伊豆守は鷹に逢う場所を常に変える。秘密の指令には、秘密の場所が必要であった。忍者は、常に、別の忍者によって見張られていることを認識している。伊豆守は、徳川幕府を動かす中枢であるだけに、反対派が、その動静に、執拗な眼をむけているのは、想像に難くない。その眼をさけ、耳を遠ざけての密会であった。

時には、こうした大川を利用したり、あるいは、御朱引外へ出ることすらある。かれらの会話は、徳川家の飼犬たる服部半蔵麾下の伊賀、甲賀の忍者にも聞かれてはならぬことだった。

ギイッと艪が忍びやかに音を立てる。

「城内に忍び入ってか？　呆れたな、天下の将軍を狙うとは」

艪を漕いでいるのは、忍者〈鷹〉である。この広いところなら、誰も二人の対話を盗み聞く者はない。

むろん、手放しで安心はしていない。時々、鷹はするどい眼を、海中へむける。舟の重みも計っている。水中にひそみ、舟を尾ける者があればすぐわかる。あとは、都鳥だけであった。

いつになく、伊豆守の表情は冴えない。重い心を抱いている証左である。

「忍び入ったのではない」

と、吐息とともに、かれは言った。凝っと視線は暗い海上にむけたままである。

「御中臈の千代と申す者。上様を寝所に迎えて刺そうとした……幸い取り押さえはしたが、この千代、誰の命を受けたか白状せぬ。取り締まりの春日局が責めておるが、背後のことは一切不詳じゃ」

「大奥は忍びには鬼門だな」と、鷹は気のない声で、「男のおれには手にあまるようだ」

鷹が一度こう言いだしたら、仲々、伊豆守の頼みは聞かぬ。伊豆守は眉をひそめて、振りかえった。

「おぬしのほかにないから、頼むのだ」と、声を強めた。「誰にでも出来ることではない。城

中のこと、うかつに動けば」

「将軍のいのちか。ふん、天下人か」

この気まぐれ忍者は、天下人の権威など、なんとも思っていないのだ。伊豆守は焦り気味になって、

「くノ一とやら申す術があるではないか。大奥は表と違うて、われらが容喙することも何かと面倒なのじゃ。さりとて上様のお命に拘ること、放置はならぬ」

「それで、おれに頼むのか……黒鍬ノ者やお広敷伊賀者などのほうが大奥のことは心得ているのではないか」

「伊賀者も安心ならぬ。御中臈を指嗾するほどの奴じゃ、如何に網を拡げているか、内部の者は、誰が敵か一切判らぬのだ……」

伊豆守の面は苦悩の皺をきざんで見えた。残照に背を向けていたのは、憂悶に昨夜は一睡もならなかったのであろう。

鷹は黙って艪を動かしている。舟は大川を下っていく。

まだ後の本所や深川は江戸の外で葦と沼であり、したがって橋もなかった。奥州街道の千住大橋があるくらいのもので、川下は舟で往来するしかない。

「――引き受けよう」と、暫くして鷹は言った。

「だが、少し高いぞ」

「承知した。上様のお命のことだ、金にいとめはつけぬ」

「五百」

「うむ……」

「それと、老中には一役買って貰わねばなるまい。くノ一をおくりこむ請人としてな」

「よかろう、なんでもする。わしで出来ることならな。とにかく背後の手を突き止めることじゃ」

ほっとしたようであった。伊豆守は鷹が引き受けたことで、やっと曙光を見たように、表情を弛めた。

「あんまり気は進まねえがまあ、引き受けようぜ。じゃアいまの条件は忘れるなよ」

「くどく申すな。万金を積んでも、切り抜けねばならぬ事態じゃ」

「では、万金を貰おうか、ははは、冗談さ。そこまでおれァ図々しくはねえ、働きの分というやつを心得ている」

「頼むぞ」

「よし。では消えるぜ。家来たちを呼ぶがいい、奴ら、ハラハラしてやがる。胃病になるぜ」

「そこまで心配してくれずともよい」

漸く、伊豆守も、破顔した。

合図を見て、近習やお小姓を乗せた船が近づいたとき、すでに、鷹の姿はなかった。

数分後に鷹は神田川の河口にある植木溜の小屋で着代えていた。

忍びノ者が変幻出没を可能にするには、鼠のように迷路を自在に疾走できる土地勘を養うこ

とであり、多くの巣と、変装の用具を備えておくことである。跳躍・飛翔のワザはそれを助長させるにすぎない。

〈鷹、土左衛門があがった〉

なかまの声がした。

〈女だよ、御殿女中らしい〉

〈何処だ、場所は〉

〈三ツ叉。まだ役人は来ていない〉

同じ不知火忍者の〈朱鷺〉だった。偶然ということがある。その時と場所が偶然に作用したことは、鷹にとって望外のことだった。

鷹は三ツ叉に飛んだ。内濠から日本橋を流れて、大川に注ぐ、このあたり、三ツ叉と呼ばれて、堆積の中洲が出来ている。葦が生い茂り、屋形船をとどめて、男女が密会したりする。饅頭舟があらわれて、客を咥えこんだり、乞食が寝ていたり、まだ、当時の治安の手も、こうしたところまでは及ばない。

三ツ叉の中洲に女の溺死体があがっていた。近所の者が数人見守っているだけである。

〈——千代という御殿女中だよ〉

鷹に囁いたのは、朱鷺ではない。同じくノ一の〈百舌鳥〉だった。

将軍家光を刺そうとした御中臈が溺死体になっているとは。

（この千代が、将軍家光を殺そうとしたのか？）

鷹は近よって見た。むろん、通りすがりの野次馬という顔である。どこに〝眼〟があるかしれないのだ。

〝中臈〟というのは平安朝の女官の身分で、上臈、小上臈、中臈、下臈とあったが、江戸時代幕府のそれは違う。やはり、大奥女中の職制として、上臈、小上臈、御年寄、中年寄、中臈、御坊主、お小姓、表使、御次、御祐筆、御錠口衆、御切手等々、きわめて、複雑だった。下の方にゆくと、お末（お端下）からお犬小供などと蔑称される雑用係りまである。この大奥の中臈は、中老とも書く。同じ意味である。将軍附と、御台所附がある。その身のまわりの世話をする、秘書のようなものだ。したがって、いつも、将軍のそばにいるから、自然気心が知れて、心を移すようになる。

もっとも、並みの家とは違うから、だからといって、将軍が、いつでも好きなときに手をつけるわけにはいかない。恐ろしい春日局の眼が光っている。ちゃんと、しかるべき手つづきをとって、抱かれる。御台所附の中臈を将軍が抱きたくなったときは一層、複雑だ。ところで、逆に、下賤の者も将軍の妾となれば、身分も中臈になる。この区別をするために、お手つきの中臈とお清の中臈と言い分けられていたのである。

美しい顔が眼を吊り上げ歯を食いしばって、濡れ髪が顔にぺったり貼りついて、凄じい形相だ。そのあらわになった肌には無数のみみず腫がある。背中などは皮が剝げて肉が見える。水でさらされ白くなっているだけに無気味だった。

鞭や笞で打った上に、ササラなどを用いたに違いない。見るも無惨な姿だったが、鷹は、女

の手に、異様なものを見た。毛である。黒い毛が数十本からみついている。しっかり握りしめているのだ。

苦しまぎれに、自らの髪をひき千切ったのだろうか？　鷹はうずくまって胸をおしてみた。その胸に耳をつけた。水を呑んでいる気配はなかった。紫色の腫れが一条、頸を走っている。これは紐か何かで頸を締めたあとだ。

〈締めたな〉

鷹は頷いた。

そのとき、まわりの野次馬が、どっと道をひらいた。

どけどけ御出張だ、と自身番と五人組の者が町同心を案内してきた。鷹も百舌鳥もたちまち群衆の中にまぎれた。

2

江戸城の大奥といえば、春日局の名が浮かぶほど、彼女の蔭の権力は偉大であり、それは屢々、表（政治）を動かすほどのものであった。

徳川将軍家がその威厳と名誉のために、武家作法を完成させてゆくに従い、京の宮廷に対して江戸の作法を整えるには、春日局の力が大いに稗益している。後の大小名の奥向きの作法は春日局の生前に於てかたち作られたものといってよい。

春日局が権力をふるったのは、彼女の数奇な運命もさりながら、三代将軍家光の乳母としての威勢によるものだ。

〝その奉ずること母の如し〟とまで言われた家光の敬慕が自然と御用部屋をも雌伏させて、意見の通らぬことは一つもなく、〝将軍の権威のため〟に、大奥には男の手は一切介入させなくした。大奥に一たん入れば将軍家光も、がんぜない襁褓の赤児にすぎなかった。

その大奥は御錠口だけが唯一の表との通用口で、四六時中お広敷番（伊賀者）が周辺を見廻り、猫の子一匹自由に往来させない厳しさだ。

百舌鳥が潜入したのは、夜陰に忍んだのではない。松平豆州家出入りの呉服問屋の娘〝小夜〟という名での御殿奉公。お末の女中としてあがったのである。

御殿女中は身元の詮索が厳しい。当然のことだが秘密の漏洩を慮るために、一生奉公が原則であった。もっとも侍も一生奉公である。が、身分の軽い者は一期半期の奉公がある。大奥女中の中でも又者と呼ばれるお目見得以下は比較的その禁足もゆるやかで、御宿下りもでき、ことにお末などの端女中は拘束も少ない。

前にも述べたように、お末は雑役であり、お湯殿の掃除とか水仕事とか、つまらぬことばかりだが、それだけに、情報の蒐集には一番だ。口さがない連中だから、上役の眼がないと、ぺちゃくちゃ、お饒舌りばかりしている。お饒舌りがストレス解消に役立っているのだろう。そうした下っ端は、身元を詳しく詮索されないのだ。

百舌鳥の小夜はお末の女中として働くことになったが、段々様子がわかってくると、大奥の

勢力図は、春日局と、前将軍秀忠の側室お静ノ方附の老女だった祖心尼の二人によって分けられているのを知った。

祖心尼が春日局と不仲なのは当然の感情であろう。春日局の勢力が日々に強まるほど、祖心尼は益々陰にこもっているが、その勢力は隠然として侮れぬものがあるという。女の園は、香気よりも、男子禁制のいびつな抑圧症状からくる醜悪なものが満ちていた。

その夜、百舌鳥はお末部屋から脱け出している。

複雑な大奥の間取りは容易に憶えられない。長局のお廊下には火ノ番やお芯切りなど見廻っているし、鶯鳴きの廊下も随所にある。殊に御中臈部屋や取締の部屋の近くは、忍び寄ることが難しい。百舌鳥は〝肌聴き〟の術を用いた。

大奥の女中たちは、男を堰かれた淋しさから、張形などの道具をつかって、女同士慰め合うことが少なくない。

異様な呻きが夜になると、あちこちで聞こえる。夜具をかぶって裸身がからみあうのが、障子の外まで聞こえてくる。淫らな同衾も少々は大目に見るというのも、抑圧が過ぎると発狂する女が少なくないからだった。

百舌鳥の若さは、肌聴きの忍法には、効果的だった。たいていお末などに奉公するのは、不縹緻な女が多いので百舌鳥ほどの美貌はいやでも目立つ。

「小夜と申すか、聞くことがある。来や」

年寄の重野の眼を見たとき、百舌鳥は〝成った〟と思った。

重野の豪奢な調度の飾られた部屋で二人きりになると、この三十そこそこの年寄は、鼻あぶらを光らせて、百舌鳥に挑んできたのである。

「そなたは可愛い、わらわを慰めてくりゃれ、の、の、何でも欲しいものをとらすぞよ」

百舌鳥を抱きしめて唇を吸った。牛角の男根を桐箱から出して百舌鳥に握らせようとする。あらあらしく胸をあえがせて、火のような息を吐いているのだ。

（やれやれ、いやな役目だよ）

百舌鳥は不快を押さえた。女忍の身は耐えねばならない。むろん女体を随喜させるワザには通じている。百舌鳥の手にかかると、百と数えないうちに、老女重野は喜悦の声を放って悶えはじめた。

牛角だけではなかった。その途中にはめられた山羊の睫毛が柔らかい部分に刺戟を与え、乳首を巧みに舌先で転がされると、老女重野の渇えた肉体は火のようになった。

あ、あ、いい……とうわごとのようなうつつの叫びが、声も失い、唇だけがわななき、白眼を剝いて、百舌鳥の背中に爪を立てた。

〈お中臈の千代を責めたのは、だれ？〉

「あ、あ……わらわじゃ、お局さまの申しつけで、あっあっ、いい……お菊に責めさせたのじゃ、白状せぬゆえ、鞭で、あーっ、いい、いい」

〈何処で責めたの？〉

「かもじ部屋じゃ、ひいひい泣いたが、白状せなんだ……あ、もっと、もっと、でも、殺しは

しない、殺したのは、わらわではない、お局さまも御存知のこと」
嘘ではあるまい。すでに正気ではない。夢幻のうちに告白する言葉に虚構はない。

3

〈疑われなかったかえ〉
〈御老女から？　大丈夫〉
〈でも、このかもじ部屋のことまで聞きだしたのでは〉
〈うつつさ、女歌舞伎の話で消した〉
夢幻の語りをさらに重野に女歌舞伎の役者と痴愚の時を過ごしたことを饒舌らせたのである。夢に夢を重ねさせて、記憶を消す。残滓をとどめぬワザであった。
〈お前のワザはまだ危っかしいから〉
と、朱鷺は言った。朱鷺も忍んで来たのではない。錦小路なにがしの姫のお付きとして乗り込んできたのである。春日局は将軍のお世嗣には素姓卑しい女の腹に出来た男児であってはならぬとして、京の公卿の血ならばと白羽の矢を立てたのだ。
千代がその美貌のゆえにお中臈たることに、春日局は不本意だった。かねがね、露骨にその態度を見せていた。あるいは千代の行為には、そうした不安定な立場が作用していたかもしれない。

百舌鳥はかもじ部屋が折檻の場だったことから、こう言った。
〈お中臈千代が握っていたのは、ここの毛じゃないかしら〉
〈そうだとしても、殺したのは誰かしら。責め殺してしまっては、黒幕がわからなくなるのに〉
〈千代が生きていては都合が悪い者……饒舌られては困る者が〉
ふいに、戸が開いた。二人は一瞬、かもじ棚の蔭に隠れている。異様なほどの長かもじの棚である。奥女中たちは、正式な場では背丈ほどの長かもじをつけて礼装する。いわゆるおすべらかしで、そのための用意だった。奥女中たちは上下、千五百人に近いといわれた。
かもじ部屋をのぞいたのは、お菊だった。
お菊は猜疑ぶかい眼で仄暗い部屋の中を見まわすと、小首をかしげて出ていった。
朱鷺は暫く間を置いて、かもじ部屋を出た。気になっていたのか、またお菊がやってきた。もう一瞬遅かったら、かもじ部屋の板戸を閉めるところを見られたかもしれない。
「待ちゃ」
お菊のするどい声が飛んだ。
「そなたは、ここで何をしていました」
「ここで？　何のことでございましょう、いま綾姫さまの御用で参るところでございます」
朱鷺は恐れ気なく見返した。古参をかさに着ているが、身分からいえば、何も咎められる筋はない。

お菊は、まだ何か言いたそうに、狐のような眼を光らしていたが、朱鷺は微笑すると、裾を蹴って歩きだした。

（あいつ、ひょっとすると……くノ一ではないかしら）

朱鷺の疑念は当たっていたかもしれぬ。その夜、入浴している間、誰かに衣類を調べられた。だけではない、持物も見られた形跡があった。それも、普通の者が見たのではない。忍び細作の心得のある者の手だった。

相手がくノ一では百舌鳥が重野をたぶらかしたようにはならぬ。いや、あるいは重野のその痴態から、お菊は、百舌鳥へ疑いをかけているかもしれない。

（このことは百舌鳥へ知らせなければ）

鷹の手がほしい、と朱鷺は思った。

あの女がくノ一だとすると、家光暗殺の手に関係があるはずだった。

その疑惑が判然としないうちに、嘉祥の祝宴の日が来た。東照神君家康が天下統一を祝う嘉祥の宴は毎年大奥で行なわれる。これまでも将軍は病気をおしても行なってきている。大奥で不穏のことがあるからと、とりやめや延期をするわけにはいかなかった。

「したが、万一ということがある。特別のおはからいを願うて日延べにした方が」

と、春日局が提案するのを、祖心尼が押しきった。

「並みの行事ではありませぬ。何をおいてもこればかりは。万一のことを御心配なれば刀女どもを常より増やし警備を厳しくなされればよろしいかと存じます」

ところが、その祝宴の最中に、不祥事が起こったのである。大奥の庭では幔幕を張り野立の傘が美しく、家光は御中臈の点てる茶を賞味したり、奥女中の踊りを見たりする。能舞台では、特に風流踊りが演じられる。家光は風流踊りが好きで度々招いて観賞している。

家光が綾姫の点前で一服のんだときであった。突然、幔幕のところから飛来したものがあった。

「危い！」

さっと百舌鳥が飛びだした。家光の身を護った。叢に潜んでいたのである。

その袖に吹矢がぶっつり突き刺さった。臨機応変は兵法の一であるが、忍びに於てもまたこれを重視する。お菊がそのとき見せた素早いワザは、鮮かなものだった。

「くせ者！」とかん高く叫んで、百舌鳥に摑みかかったのである。

「あれ、何をするの、くせ者はあそこの樹蔭に……」

と、もがく百舌鳥の帯の間に手を突っこむと見えたが、さっと、吹矢の筒をとりだしたではないか。同時に百舌鳥の袖に突き刺さっていた吹矢もとりあげて、

「上様のお命を狙う不所存者！　これが何よりの証拠じゃ、お刀女衆、こやつを引っ立てい」

「違う、あたしは何も……」

「お黙り、早く、こやつを」

百舌鳥の抗議などたちまち打ち消されてしまった。百舌鳥の両手をその場で縛りあげた縄目は、〝十六結び〟という絶対不脱の緊縛で、関東忍者が編みだしたものである。

（このお菊は、あるいは風魔くノ一……）

百舌鳥は背骨の痛みに耐えながら、そう判断している。

4

百舌鳥がどのような拷問を受けたか詳述する紙幅はない。春日局と祖心尼は冷たい眼でその責め様を見守っていた。祖心尼が何を思っていたか、お菊とときどき眼を合わせて何やら計る様子を、百舌鳥は折檻のうちにも察したのである。

（祖心尼の素姓を調べないと……）

お菊が風魔くノ一だとすると、将軍家光の命を狙う理由がわかる。

風魔の忍者は伊賀や甲賀の雇われ忍者ではない。北条五代の鼻祖、早雲長氏のころから、その蔭の臣として乱破の活躍を通じて仕えてきた者である。その北条氏は天正十八年、秀吉の関東征伐で潰滅した。その所領の殆ど全部をそっくり受領したのが徳川家康だ。天下を狙う家康としては本貫の地、東海地方よりさらに東北へ追いやられることは快しとしなかったが、秀吉は敢て関東へ封じた。結果的には、これが精強の兵を養うのに幸いしたのであるが、この徳川氏の移封は、北条氏にとっては劫掠にひとしく感じたようである。北条氏の遺臣の待遇に疎漏もあったろう。その恨みが、草創期には、随所にあらわれた。度々の家康・秀忠暗殺未遂事件である。遺臣としての風魔一族が、すでに三代目となった家光までも狙うのは、乱世の感情を持続させた忍びノ者として、異としない。

風魔の忍びは、鉄の規律で結ばれている。その責め方も独特の残忍酷薄なものだった。

だが、祖心尼との関係は、どうなのか。その考えがまとまらないうちに百舌鳥は気を失った。激痛に耐えるに自ら仮死せしめるのは、拷問に破れぬためだ。何処の忍びもそれぞれの秘法がある。

――その昏い奈落の底から百舌鳥が甦ったのは、ゴリッゴリッという苦無の床板を切る音だった。音は耳の傍でした。

（助けに来た！）

その眼の前にがくりと床が四角に開き朱鷺の顔がのぞいた。

〈さ、早く！〉

苦無が十六結びを切り放つ。

〈今宵は、上様が綾姫のもとにお成りになる。用心をしないと〉

〈鷹に知らして。あのお菊は風魔じゃないかと睨んだのだけれど〉

〈あたしも思った。そのお菊が綾姫のお添い寝を申し出たの。祖心尼が春日局を無理矢理、納得させていたよ〉

〈お添い寝なんて……〉

〈厚かましくも、上様の御身を守るなどと口実かまえたのさ。あの吹矢の一件があるから、春日局も拒めなかった〉

〈早くそのことも鷹に知らさなければ〉
〈鳩を飛ばしたよ〉と、朱鷺はしたり顔に囁いた。
〈鷹は必ず、くる〉
男子禁制の大奥へ、鷹と雖もどうやって入ってこられるか、不知火くノ一たちにも見当がつかない。
ところが来たのである。綾姫が綸子の白無垢に着代え、それがしきたりの長い髪の髷を解いて櫛巻にして、おどろになる胸をおさえながら、寝所で待っていると、家光がやってきた。
御錠口で御小姓から太刀を受けとった女中たちが従ってくる。閨房に入るにも武将としての身分は太刀を離せない。家光は寝所に入ると、羞恥と不安で固くなっている綾姫を一瞥して、
「姫……今宵を待ちかねたぞ」
情熱が言葉に奔る。日ごろになく力強い男の臭いがある。お菊も、ふと不審を感じたようである。が、その不審も、処女肌を目前にした男の昂りと解釈できたのではないか。お菊は平伏した。
家光はちらりとお菊を見たが、さり気なく、
「添い寝、大儀」
と言っただけで、錦の褥に身を横たえた。綾姫が羞恥に戦きながら、
「御免下さりませ……」
そっと丸い腰をすべりこませると、家光はふふっと含み笑いで、待ち兼ねた、と、また言った。夏の夜である。衾もかけず、家光の手は綾姫の寝衣を剝いだ。帯もはじめからつけないし、腰のものもない。輝くばかりの姫の肌が、絹行燈の優美な明りのもとに浮き上がった。家光の手が、そのまろやかな乳房を掬うように撫で、乳首をつまんだ。
「あ……」
綾姫がかすかな叫びをあげて身をよじる。家光は女体の下肢を手荒くひらいた。
「ふふふ、案じるな、痛うはせぬ」
背後にそれを聞いたとき、お菊が、家光のうつつの状態を想像したのは無理もない。男も女も虚となる隙は、交合の際か、たかまりを放つ瞬間である。お菊はその後者を待つことが出来なかったのであろう。ふいに飛び起きるや、さっと刀を家光の背へ——
刹那、家光は綾姫の裸身を抱いて跳ねた。鞠のようにはねていた。虚しく、刀は褥に突き立つ。
「ははは、正体あらわしたな、風魔くノ一」
愕然としてお菊は、家光と思っていた男が、実は卓抜した忍びノ変形だったことをはじめて知った。
いうまでもなく不知火ノ鷹。
お菊はさっと身を翻した。次の部屋へ走りこむ。鷹は追った。さらに次の部屋へ。お菊がそのとき叫んだ声は、なかまだけにわかる風声だった。女中たちが手に手に薙刀や小太刀を持ってあらわれたが、これはお菊とその一味だったのである。

「風魔くノ一、千代田城中で根絶やしになるか」
閃々と白刃が奔った。行燈の灯を利して鷹の影が右に左に動くごとに、風魔くノ一は次々と仆れていった。不知火剣法かげろう斬りは、紅闇に妖しい影を舞わせ、鮮血で豪華な調度を染めた。

祖心尼はこの失敗を知ると、自ら命を絶っている。嘗てお取り潰しになった蒲生氏郷の倅忠行の側室だとわかったのは、その後のことだった。

幻の連発銃

1

「――女と鉄砲は同じようなものだ」
語尾に笑いを含めて伊豆守信綱は女の下腹部に手を伸ばした。
信綱の別墅であった。さらさらと水の音が聞こえる。谷川のせせらぎのようなその音が信綱を多忙で煩瑣な日常から解放してくれるのである。
「――鉄砲放しは威力はあるが、面倒なものじゃ、撃ち火薬をこめ、弾丸を詰め、点火薬をそそぎ、火縄で点じなければならぬ」
「……」
「そなたの肌も同じだの、わしの指と舌がなければ、火がつかぬ」

「でも……」

と、女は怨じるように、身をくねらした。信綱の指は、秘所に触れている。

「こんなからだに、誰がなされました？　むしろ、お怨みに存じまする」

「ははは、申すな。その方がヨガルゆえ、そうしてやったのではないか。いやさ、わしはその面倒さが楽しいと申しておるのだ」

「秋の夜は長うございます……ああ」

指が入った。女はあえぎ、枕をはずして、

「あ、もっと……」

「時間がかかるほどよい。その方のここが濡れてくるまで、時間がかかる。いかにわしが急いても、濡れておらねば、容れるに難かろう、されば、濡れてくるまで、指と舌を使わねばならぬ」

信綱はその楽しさを倍加するために、日ごろにない饒舌を弄しているようであった。

「鉄砲もそうじゃ、手間がかかるゆえ、軽々には用いられぬ。一人で瞬時に何人も撃てるような鉄砲が発明されたら御政道を乱し、天下不軌を計る者が出てくるに違いない」

「ああ、あたし、もう……」

とろりとした眼になって、女はかわいた唇から熱い息を吐いた。

「よくなったかの、ふふふ、もう少しじゃな」

信綱はずるずると、身をずらして、女の剝きだしになった下半身を抱きしめると、臍に唇を這わせ、下腹部に頬をつけ、茂みの感触を楽しみながら、舌でそれをわけた。

そのとき、潺湲たるせせらぎの音が、ふと、熄んだ。

川の水が止まったのである。

（はて？……）

間違いかと思った。顔をあげるとまた水の音は聞こえた。が、信綱が、そこに舌をすべりこませると、また、はたりと、流れが止まった。それは明らかに、信綱の意識へのはたらきかけであった。

（面妖な?!……）

漸く気がついて、信綱は女体を離れた。われながら迂濶だった。日ごろの信綱にないことであった。

信綱は寝所を出た。厠へ行った。

庭は幽邃の渓谷を模して、かたち面白い岩や築山があり、不忍池から引いた水が小さな滝となり谷川のように流れていた。

その水がどうして、はたりと止まったのか。

見返す信綱の眼の中に、黒い影がにじむようにあらわれた。

〈大坂よりの急使にござります〉

影は言った。

淡い月が空にあったが、影の姿は、その月の光りも吸収したように、地上におぼろだった。

信綱は寝所の方をふりかえった。女が起きてくる気配はない。
〈いささか面妖な話にござりますが、お耳に入れておくほうがよろしかろうとの組頭の〉
「申せ、早く」
〈実は、堺の浜に、南蛮人一人、溺死体があがりました〉
「ふむ」
〈ところが、発見せし漁師が浜役人に注進している間に、その死体が消えましたそうで〉
「なんと?!……」
〈実はその死体、鉄砲を抱えておりました由〉
「鉄砲を!」
それだけなら、堺の奉行の一存で処理されたかもしれない。
堺の鉄砲鍛冶芝辻理右衛門の一番弟子、竹次郎という者が失踪した、という。
両者の間にどういう関聯があるかわからないが、火術に就いては治安上、厳重な達しが出ている。老中の耳に一刻も早く入れておくべきだとして大坂の隠密方から、伊賀者の組織を通じて報じてきたわけであった。
伊賀者が報告を済ませて、姿を消すと、伊豆守信綱は凝然と佇んでいた。
「鉄砲……舶来の鉄砲、南蛮人の死体芝辻の竹次郎……」
看過すべきではなかった。鉄砲のことは、さっき、女体をまさぐりながら、思ったばかりであった。

信綱の脳裡に、その情景が浮かんだ。鉄砲を固く抱きしめた南蛮人。その鉄砲はおそらく、かれがこれまで見たことも想像したことすらない、新式の精巧なものであろう。
重くて扱いに不便で欠点の多い火縄銃とは違い、軽便で精巧な、操作のし易いものかもしれぬ。
信綱は、寝所へもどらず、供部屋で寝ている若党を起こしに行った。
(不知火ノ鷹に探らせねば)

2

ギギ、ギギ……忍びやかに、あたりを憚りながら、木を切る音がした。
芝辻理右衛門は眼をあげた。痛むからだを起こした。高い明り窓に人影が動いたような気がした。しんとしずまりかえった堺の町奉行所の牢舎である。
ギギッギギ……と、また鋸の音がする。
明り窓には太い格子がはまっている。その格子の二本がぽろりとはずされた。黒い影が、するするとおりていた。
〈理右衛門だな〉
「は、はい……」
〈助けに来た。早く〉

明り窓から縄梯子が下りている。馴れない者には扱い難い。

〈早くせい。見廻りがくる〉

「はい、はい」

連日の責め問いで、背中は傷つき足も萎えていたが、理右衛門はこれで地獄から逃れられるかと、苦心して縄梯子をのぼった。

理右衛門は明り窓から這い出て、さらに向こう側に下がった縄梯子を伝っておりた。

そこから、もう一つ高塀を越さなければならないのである。だが、同じように頭巾をかぶった者が下に待っていて、

〈こっちだ〉

と、先に立った。

「あの、あなたさまは、どちらの……」

〈黙って来い〉

助けて貰うのに、一々質問するな、という横柄な態度だった。

ところが、牢内に入った黒装束の男は理右衛門が出てから、身軽く、また明り窓に姿をあらわした。

すぐに登らなかったのは、縄梯子が、二人の体重を支えきれないと見たからであろう。

この男は、しかし、生きて牢内から出られなかったのである。明り窓に姿をあらわしたとたん、どこからか、一箇の礫が飛来した。

礫はもろに頭巾の下を——咽喉を打った。殆ど呻きもなかった。ふたたび、牢内にもんどりうって転落している。

四半刻ほど後に牢番が見廻りにきて、理右衛門の代わりに死んでいる男を発見した。

咽喉に深く手裡剣が突き刺さっていたのだが、なぜ、この男がここで死んでいたか、むろんかれらには判じようがないことだった。

一方——

その男が転落するや、物蔭から同じような装束の男が飛び出して、理右衛門たちのあとを跟けたのである。

二人は不浄門から出た。詰所に門番はいたが、だらしなく眠り呆けている。

あとから跟けた影は、ここを過ぎるとき、

〈眠らされたな〉

と、呟いた。

理右衛門は肥満体だ。その上、ササラ打ちされた肌の皮がまくれ、血が吹いている。ろくな手当てもされていなかった。

〈しっかりしろ、捕まると獄門だぞ〉

黒装束は叱りつけて、先へ立つ。

浜辺に来た。小舟が用意してある。そこへ、漸くあとの男が駈けつけ、

〈遅かったぞ、失敗ったのかと思うた〉

〈なんの〉
〈さ、早く。舟を出そう〉
小舟に理右衛門を乗せて、漕ぎだす。沖へ出ると、針路を右へ向けた。堺は周辺に濠が掘られていて、乱世には、いわゆる納屋衆の合議制によって町が運営された日本には珍しい自由市（楽市）だったのである。
その遺溝がまだ残っていて、出入りには、二ヵ所の木戸によらねばならなかった。
昔日のように一々身分や目的を調べられることはなかったが、それでも伝統というものは、一朝に絶えるものではなく、木戸には番人がいて往来を見張っている。何かあると、すぐに閉めてしまう。
江戸や大坂の町にも木戸が出来たりしていて、夜の往来は、誰何されてもしかたがなかった。
理右衛門を救い出した連中は、この木戸を嫌って、小舟にしたのであろう。
小舟はやがて大坂の木津川河口近くの小島の葦の中についた。博労淵の狗子島であった。
〈上がれ〉
先の黒装束は、理右衛門に顎をしゃくった。
「は、はい……ここは何処でございます。大坂の？」
〈そうだ、お前を救けてやったのだ。こちらへ来い〉
葦の生い茂った水際から上がると、ひょろひょろした松の樹が生えていて、漁師の家などまばらにあり、少し離れて、ぽつんと隠宅ふうの家が見えた。冠木門に柴垣をめぐらしてあり、中には灯りもなく、真暗だったが、理右衛門が入ってゆくと、闇の中にうごめく影があった。
〈田村、舟をもやっていてくれ、干潮になると流されてしまうからな〉
先の男はそう言い捨てていったのだが、
〈心得た〉
言葉短に合点して、あとへ残った男は、立ち去るのを待って舟を川上へ漕いでいった。
二丁ほど上につないでから頭巾をとって、夜気を吸った。これは不知火ノ鷹だったのである。

3

暗い室内には、七、八人の武士がいた。
いずれも頭巾で面を隠している。
「理右衛門、危いところだったな」
正面の男が、同情するように言った。初老の恰幅のよい男だった。
「ひどい責め問いだったそうだの」
「はい、おかげさまで、助かりました」
この連中の好意を感謝しながらも、なぜ頭巾をしたままなのか、それがいぶかしく理右衛門は、まだびくびくしている。
「もう安心だぞ、ここはもはや堺ではない。町奉行ずれの手は届かぬ」

このとき、一人の影が入ってきて、みんなの端に、ひそりとうずくまった。
首領とおぼしい男は、ちらりと、そのほうを見た。
これは、いうまでもなく、田村某にとって代わった鷹だったのである。が、人数に増減はないのだ。別段の不審も感じられなかった。
首領は、理右衛門に視線をもどし、
「町奉行や与力は、もののわからぬ奴らばかりであったろう。何を問われたのだ？」
「はい、あの……」
言っていいものか、どうかと迷ったが、
「竹次郎の行方でございます」
「それで」
「はい。竹次郎が姿を消したのは、南蛮人の持っていた鉄砲を盗んで……それをひそかにこしらえるためであろうと」
「ふむ、それで？」
「それだけでございます」
「白状しなかったのか、竹次郎の隠れ家を」
「隠れ家と申しましても……知らぬものを、申し上げようが。はい、殴られても殺されても、知らぬものは……」
「知らぬ？……ほんとうか」

失望が流れた。
「こりゃ理右衛門、そちは救けられたのだぞ、有難いと思うたら、包み隠さず申し上げることだ」
わきから肩の張った、いかにも兵法の使い手とおぼしい男が、威すように言った。
「有難いと思いまする。したが、これが、お白洲のお訊と同様で、知らぬとお答えするよりありませぬ」
「そうか、手を見せて見よ」
首領は頷いた。
何気なく、理右衛門は右手を出した。
とたん、さっと脇差を抜いた。ひっこめるひまを与えぬ速さだったのである。
掌を上にむけたまま、ガッと、脇差が垂直に——掌を床に打ちつけていた。
ぎえっと、理右衛門は悲鳴をあげた。
「片方の掌で済んだな。白状すれば、だ」
「痛う……し、知らぬものは……」
「鈴木、結城、こやつの左手を」
命令に応じて、肘をつかまれた。
「あ、お、お宥しを、そんな、むごい、むごいことを……」
「申すがよい。どこだ」

「知らぬ、知らぬのでございます」
「思いだすさ、両手を打ちつければな。鈴木、抜け」
恐怖と痛みで理右衛門は呻き声をあげ肥満体を転がして、叫んだ。
「ほんとうじゃ、何も知らぬ。ただ、心当たりが……」
「どこだ」
「く、九度山の村に、遠い親戚があるとやら、聞いたことが……」
「よし、そのことは、奉行には」
「まだ、何も……」
「理右衛門、死なずに済んだな」首領は大様に笑ってから、「竹次郎が、そこにいたら、帰してやる。それまで、そこで泣いていろ」
「むごい御方じゃ」
「いなかったら、今度はその胸に穴があく。せいぜい、他の場所を思いだしておくことだ」
ただちに、輩下に九度山村へ行くように命令している。
鈴木、結城ほか三人が立ち上がった。刹那、突然、しゅるしゅるっと、白煙が部屋の隅から走った。
遅れてきた田村某――鷹のいたあたりからである。白煙は、部屋をとり囲むように、壁に沿って走った。
「わっ！」

「火事だ！」
「いや、あれは……」
理右衛門を連れてきた小柄な男が、きっとなって、片膝立てるや、手を翻した。その白煙の先頭で、鼠の悲鳴がした。
「明りだ、明りを……」
あわてて燧石の音をさせて紙燭に火を点じる。
黒装束の男たちの影が浮き上がった中に白煙がたちこめ、手裡剣を打ちこまれた鼠が苦悶しているのが見えた。
「さすがは、疾風どの、風魔の忍びは眼が利くのう」
「静かに。忍びが入っておる」
風魔の疾風は、褒められたことよりも、この人数の中にまぎれこんだ忍者に、愕然としたのである。
「忍びが？……」
鼠をもって白煙筒を曳かせる濁煙遁法のワザは、伊賀か甲賀か。疾風が、じろりと、みんなを見まわしたとき、突如、旋風が室内を席捲した。その強風は如何なる忍法に拠るものか、一瞬に、紙燭の炎を吹き消し、この古びた床の埃をまきあげ、数人を薙ぎ倒していた。
「追え、彼奴！」
叫んで室内から飛びだしたのは、さすがに疾風には、鷹の影が見えたのであろう。

が、戸外へ出たとたん、待っていた一颯の白刃にあざやかに胴斬りされて、二つになって転げ落ちた。

「やられた、疾風が……」

恐怖にうわずった声が、追跡しようとした連中の出鼻を挫いて、たたらを踏んだ。

抜刀はしていたが、つづいて飛びだす勇気がなかったのだ。

「ええい、気弱な奴めら、追え、追わぬか、奴に先に九度山に行かれては」

首領の罵声に漸く、胆を据えて、刀から先に飛びだしたとき、もはや淡い月の光りの下に、鷹の姿は探すべくもなかった。水際へ走った者たちも、そこに小舟がないのを知って地団駄踏んだのである。

4

三月ほど後——

鳥の声だけが、あたりを占めた山中で、静かに鉄砲をかまえる男がいた。

そこは九度山村ではない。山を越した紀州根来村に近い僧正谷。遠目には炭焼小屋とおぼしい崩れかけた小屋の前であった。

木の枝にかけた標的は一蓋の菅笠である。

「漸く出来たこの新式鉄砲。うまく撃てれば……」

祈るように呟いたのは、竹次郎であった。

引金に指をかけた。その鉄砲は幾つもの弾丸を装填した、連発銃であった。当時、連発銃というのは、まだ誰も見た者はなかったのである。

引金を引いた刹那、轟然たる音とともに火が噴いた。銃口からではなく、手もとであった。暴発したのである。竹次郎は絶叫を噴いてのけぞり倒れた。火は不完全な弾倉の閉塞部分を吹き飛ばし、銃床を砕き、竹次郎の肩をも砕いたのであった。

凄じい爆発音を聞いて駈けつけた樵の介抱を受けた竹次郎が、傷の治癒後、さらに意欲を燃やして新しい工夫をこらして、その新式連発銃を完成するまでに、さらに三ヵ月を経ている。

かれは、あの南蛮人の死体と鉄砲を浜辺で見つけるや、死体を隠し、鉄砲を抱えて、九度山へ逃げた。

新式の鉄砲に魅せられた竹次郎は、おのれの手で、それを作ろうとしたのである。

いうまでもなく、海水に洗われて、南蛮人のものは使用に耐えなくなっていた。それを模したのであるが、閉塞部分がどうにも理解できなかったのである。

「出来た——」

漸く完成した品を前にして竹次郎は躍りあがった。引金の具合をためしてみ、あらためて、絵図面と見くらべた。南蛮人の革袋の中に鉄砲の分解図があったところを見ると、かれは日本の侍に売りつけるべく渡来して、南蛮船か唐人船か、途中で難破したのであろう。

「さあ、こんどはもう、撃ち手が負傷をすることもないぞ」

竹次郎は、すっかり治癒した肩をさすって、外へ出た。

連発銃は素晴らしかった。木の枝に下げた菅笠は、瞬時に発射された六発の弾丸で撃ち抜かれ、ぼろ布のようになって草むらへ落ちた。

「出来た！」

竹次郎は、濃煙のなかで躍り上がった。とたん、また一発――

竹次郎は歓喜の表情のまま、ばったり仆れた。硝煙のたゆとう火縄銃をひっ下げた男が樹蔭から出て来た。あの肩幅の広い、丈の高い兵法者と、数人の武士だった。

「ははは、連発銃を作って、火縄銃で仆されるか、こやつもついていないの」

「いや、お手並です、左右田どの。あの連発銃を型にして国友鍛冶に作らせれば江戸へ攻めこむのも夢ではありませぬな」

「左様、半年、凝っと辛抱した甲斐があったというものよ。ずいぶんと探したからな。だが、ここで暴発の話を聞いてから三ヵ月、完成を見張っているのも大変だったな」

「その苦労も、漸く報われたというわけです。殿もお喜びであろう。これで天下は、殿のものに……」

その語尾が消えた。左右田は、風を剪るするどい音と、ぶすっと鈍い肉の呻きを聞いている。侍は、両手を大きくあげて、のけぞった。深々と手裡剣が胸に刺さっていた。

「何やつ！」

ふりむいた左右田の視線の彼方に、太陽があった。その太陽は一瞬、白刃を影のように見せた。梢の上から、怪鳥のように飛び降りた影の手にした白刃は左右田兵庫を斬り下げるや、血汐を舞わして一人を斬り、逃げようとした男を背後から逆袈裟に斬って、ふっと太い息をついたのである。

「一人で一気に六人を殺傷する鉄砲か……」

鷹は血刀を拭いておさめると、連発銃をとりあげた。図面を焼き捨ててから、小屋を出た。

鷹の姿が消えてから、小屋は凄じい爆発とともに炎上している。

この後、雷管が発明され、後装式連発銃が国内を戦乱に巻きこむまで二百年の歳月を要したのである。

御朱印紛失

1

忍法草カマリの三ノ条に、〈地ニ在ルヲ蛇ノ眼ト称イ、天ニ在ルハ梟ノ眼ト為ス〉とある。

地に伏し草の間から敵を視る。樹上に隠れて見張るとき、蛇の眼は梟の眼になるのである。

樹木が深い。鬱蒼としている。まだ武蔵野がそのまま残されていた。上野寛永寺裏、日光御隠殿。まるで深山の中に在るような静寂が占めている。その樹林がきれたところ、池がある。屋形作りを折衷した豪華な造作であった。

梟の眼は、池を見ていた。

暁闇が漸く晴れたところであった。その白々明けの池の中に動くものがある。

白い肌である。

「女人か？……」

梟の眼は、場所を変えた。

樹が僅かに動いた。見易い位置に移ったのである。

身軽い。眠りからさめた朝鳥の羽ならしのように、軽く移ったのである。

池の中に動いたものは、波紋を破って首だけ出た。

四辺を見まわしている。

が、誰も見ている者がないと思ったのか、するするとあがった。一糸まとわぬ裸身は、若鮎のようにしなやかで、朝ぼらけの中に白く浮き上がった。

贅肉の一片もない、ひきしまった肌であった。

その手に何やら包みを持っている。金襴の袋に包まれた懐剣のようであった。

（はて、あれは？……）

梟の眼が凝っと見守っているとも知らず、裸女は素早く水気を拭い、着物をまとった。岩蔭へ隠されていたのである。

衣裳から見ると、侍女のようであった。

着物を着終わって歩き出したとき、打掛姿の女性がゆっくりと、通りかかった。

朝露を踏んでの遊歩と見えたが、池にかかった小橋のあたりで、ふとふりかえった。

「お中﨟さま……」

声は低い。

常人なら耳にはし得まい。樹上の梟だから、その囁きに似た声を聞きとったのである。

「おお、ありましたか」

「はい、これに……」

金襴の袋ごと、差し出した。

女はまたあたりを見廻すと、人眼をはばかって、小走りに立ち去った。

お中臈は、帛紗でその袋をくるんだ。それから、何食わぬ顔で歩き出した。

（あのお中臈は……お美和ノ方）

梟の眼は頷いた。

お美和ノ方は、何やらもの想いに耽りながら池を廻ってくる。

この日光御隠殿は、日光東照宮の御門主が、江戸へ来たとき宿泊するためのものだった。

現在、前将軍逝去の三十五日の法要のため京都から下向した慶光院という堂上出の尼僧とその一行が宿舎としている。

別殿の桔梗殿が慶光院の寝所になっていて、樹間にその破風がちらちら見える。

お美和ノ方は、そちらへ行こうとしているのか樹林の中の小径を辿った。

ひらり――

頭上の梢が音もなく折れたように黒い影が落ちてきた。

「あっ!?」

お中臈の前である。仰天して二三歩退った。

重い緞子の打掛を纏っているのだから、進退は不自由だ。影は軽やかに前へ立った。

その黒ずくめの影は、あの梟ノ眼であった。

〈――委細は見た〉

頭巾の中で、含み声が、観念させるように言った。

〈池の中から拾いあげたもの……こちらに貰おうか〉

手を出した。

お美和ノ方は、思わず、その包みを握りしめた。

右手は懐剣の紐を解いている。

「無礼者！　おさがり」

〈さあ、無礼かな。それはたしか、御仏間から紛失した将軍の御朱印……違うか？〉

「お退り！　その方などには関りのないことじゃ」

〈そう睨むことはない。美しい顔が台無しになる。関りがないといえば、将軍の朱印がそこにあるというのも面妖ではないか〉

「こ、これは違います、そのようなものではない」

〈ほう、違うなら、退散もする、詫びもしよう。だが、面妖だな〉

と、また、その影は、くりかえした。

〈この眼で見たことに、これまで、見誤りがあったためしがない〉

「……！」

〈間違いかどうか、その包みを見せて貰おう〉

「いやじゃ！」

〈池の中から拾いあげた、あの女は誰だ、そなたの家来か、手先か、忍びノ者か。昨日、御仏間から前将軍の朱印が紛失、御中臈方も、すっかり調べあげられたはずだが、御朱印は出て来なんだな〉

〈池の中に投げこんでいたとは、御用部屋のお歴々も気がつかなかったろう。こう見られたからには諦めたらどうだ〉

「知らぬ」

お中臈、お美和ノ方はあくまでシラを切って、あと退りする。

声をあげないのは、いま役人たちに駈けつけられては、件の物を隠しおおせないからではないか。

〈よし。あくまで隠すつもりなら、容赦はせぬぞ〉

かよわい女——将軍の寵愛を受けるくらいだから、眼のさめるような美女である。頸も鶴のように細く、小さな唇など誇張ではなく花びらのようだ。

その手弱女を力ずくで圧えるのが、非情な忍びノ者にも、ためらわれたのであろう。

だが、これ以上、愚図愚図してはおれなかった。

〈奪るぞ〉

と、手を出したとき、その手を打ち砕くように、ひゅっと飛来したものがあった。

黒い礫——と、一瞬前に手を引いている。

礫は虚しく指先を掠め、傍の大欅にぶっつり突き刺さった。手裡剣であった。

きっと振りかえった影に向かって、さらに、二本目、三本目と連打が来た。

その間にお美和ノ方は、走り去っている。

女たちも、悲鳴を聞いて出てきた。もう、これ以上、お美和ノ方を追うことは無理だった。

「くそ！」

いまいましく、吐き捨てるように言って影は、ふたたび、身を跳ねた。あざやかな跳躍であった。跳ねる——姿に向かって、飛びかかった者がある。白刃が閃いた。が、足をちぢめた影に一傷をも与えることは出来なかったようである。

二撃を送ったのも虚しく、ハラハラと小枝が落ちた。

一瞬、影の姿は視界から消えている。

「ちいッ！　何処に」

ふり仰いだ眼を、かッと旭光が灼いた。梢を洩れた朝の赤い陽光に眼が眩んだ。その眼は、そして二度とものを見ることが出来なかった。脳天から、凄じい血を噴いていた。転瞬に、身を翻した影が、梢から舞いおりざまに忍び刀を抜き討ったのである。

侍女たちが薙刀を持って駈けつけたとき、まだ虫の息の男は、苦しげに自ら鼠装束の頭巾をひき剝いた。

色を失った唇がかすかに動いた。

「――鷹め……」

そう呟いたのを、しかし、侍女たちは聞いたかどうか。

2

御朱印は、ただの印鑑とは違う。将軍が特に認めた海外貿易の許可書や国替の際の命令書や加増や処分など、大名の生活に由々しい関りがある。

将軍代替わりになれば、文様も少し変えて新しく造られるが、前将軍の朱印状というものは、それがあると遺命としてその効力を発するのだ。

紛失が盗難であれば、これは意図があってのこととしか思われない。

不知火忍者〈鷹〉への密命を授けた松平伊豆守信綱は、

「手が動いておる」

と、言った。

「外様大名の手だ、何を企んでいるかもしれぬ」

〈たとえば？〉

「如何様にも考えられよう、御遺命と称して、外様大名の御取り潰しなど命じられていたかの如き文書でも偽造すれば、怒りを買うこと必定じゃ、外様大名の大どころ、五六軒寄れば、数十万の軍勢を動員出来る。天下の大事となる」

〈戦か……面白いな〉

「こりゃ、他人事のように申すな。天下の騒乱が起きれば……」

〈忍びノ者には、悪くない。不知火忍者が、また陽の目を見ることになろう〉

「申すな。その方はいつも不知火一族の再興ばかり申しておるが」

〈それしかない。それだけさ、他人のことは知っちゃいねえ、そのために危険をおかして報酬にありつく、いつもいのちを賭けているんだ〉

「……」

〈お前さんだって、何もしねえおれには一文だって払う気にはなるめえ、え？　どうだ〉

「お前の立場はわかっておる。だが、わしは違うぞ、天下の将軍として、よりよい政治を行なう上様の蔭の力として、一身を捧げている」

〈偉いよ、伊豆守は、偉い〉

「茶化すな。人それぞれだ。わしにとってその方は役に立つ手足。仕事だけの金は払う。どうだ、今度もやってくれるか？」

〈相手が女ばかりたあ、気がすすまねえが……朱印捜しというのも面白い、やろう〉

「四人の御中臈とその部屋子ども……まず、ここに網を絞って間違いない……」

仏間から御朱印が消えたときの、前後の事情を考えても、その他の〝手〟は浮かばなかったのだ。

「――四方とも、いずれも外様大名の家から出ておる」

〈なるほどな……〉

それだけ聞けば充分であった。鷹は伊豆守の言葉を聞き流して姿を消した。

仙台伊達一族から召されたお喜和ノ方、加賀前田家ゆかりのお里久ノ方、阿波蜂須賀家のお葉津ノ方、そして、薩摩島津家の分家から来ているお美和ノ方――この四人が容疑者であった。いずれも前将軍の御寵愛を受けている。

徳川将軍家へ対して不利を計るとは思えないが、お中臈にあがったことも大名たちの巧妙な手が動いていないとはいえないのだ。

大名と幕府の関係は、殊に外様大名の場合、いつ国替えされるか、いつ取り潰されるか、そのことがもっとも大きな問題であり、もしも、少しでも幕閣にそういう動きがあれば、早く探って、手を打たねばならぬ。

その為に、将軍の寵妾にスパイさせれば、情報も入手出来る。すべては政略であった。

乱世の政治とは権謀術数は日常なのだ。その気持ちが、まだ相互に働いている。

「こういうわけだ、やっぱり女の方が入りやすい」

〈鷹〉は同じ不知火のくノ一、朱鷺と百舌鳥を潜入させた。

女は口さがないし、隙が多い。女同士だとすぐ心やすくなって、べらべら饒舌る。

朱鷺と百舌鳥は巧みに潜入して、隙を見ては、お中臈たちの持ち物を探ったが、御朱印は出て来なかった。

ただ、お美和ノ方に不思議なことがあった。

部屋子が二人、代わったのである。

こうした際だ。

「何かある」

朱鷺はその一人の部屋子の行方を突きとめた。病気ということだったが、薩摩藩邸に戻って、何もしていない。

仮病をかまえて男とあいびきしたり御殿づとめの憂さ晴らしに遊び呆けるというのはよくあるが、その様子はなかった。これは、別の女を入れる必要があったことだ。

「それでぴんと来たのさ、あたしたちがよくやるように……」

「くノ一を入れたか」

「その女が、御朱印を」

不審だというだけで、充分だった。

「お美和ノ方を見張るのだ」

毎朝、庭を散策するという。そして今朝、朱鷺が、その現場を突き止めたのである。

「せっかく見つけたのに、逃がしてしまうなんて、鷹らしくもない」

と、朱鷺が口をとがらせた。

「だが、お美和ノ方ということが、はっきりしたのだ、すぐに手を打とう」

「でも、もう、どこかへ隠したかもしれないよ」

と、百舌鳥も、絶望的に、自慢の大きな眼を曇らせた。
「そいつを探るさ」
「あ、その鷹に斬られた忍びは、薩摩の忍びかしら」
「薩摩に忍びノ者はいないはずだ。あの手裡剣わざ……風魔かもしれぬ」
「風魔？　では、あの薊が……」
「かもしれぬな、池中にもぐって御朱印を拾いあげてきたのは、尋常の女のよくせぬところだ、遠くてよくはわからなかったが、薊かもしれぬ」
「顔は見えなかったのかえ」
「一糸まとわぬ裸だ。見るところは、ほかにある」
「鷹！　またそんな……」
二人のくノ一に詰めよられて、鷹はさっと天井に跳ねた。
「男というものはしかたがない。埋め合わせはする」
――その埋め合わせか。
鷹はその夜、お美和ノ方の寝所に忍びこんでいる。

3

はじめ、お美和ノ方は、夢を見ていた。夢の中で、甘美な思いに浸っていた。

南国薩摩に生まれたせいもあろうか、寝るのは、いつも裸だった。腰のものも身につけない。将軍の中臈となると、そうはいかない。寝間にも作法がある。髪のかたちから着るものまできまりがある。
そうした窮屈さに耐えてきたのも、すべては使命の為であった。
将軍の死は、お美和にとって、ほっとすることであった。
（これで裸で寝られる……）
解放的な南国に育った娘には、とても窮屈なことはつとまらない。
お美和は早熟だった。男を知ったのは十三のときだった。ある日、それは初夏だったが、梧桐の花の蕾を、近所の女房がうたた寝している股間に差したことがある。
三つ年上の悪童が、面白かこつやりもそ、といって、暑い陽ざしの縁側でうたた寝している女の下肢をひらいてさした。
小半刻もしないうちに、戻ってきてみると、蕾は豊かに開いていた。
お前さのあそこは……といって悪童はお美和を押し倒して、指を触れてきたのである――
全裸で寝ているお美和ノ方は、その夢を見ていた。夢の中で、いやいやをしていた。
男の手が、花の茎を彼女の局部に差そうとしていた。
その男の顔が、長い間忘れていた、あの悪童の顔と思うと、将軍の顔に変わったり、また彼女に今度の難しい役目を強いた薩摩藩の重役の顔になったりした。
〈いやなことはない、な……いいことだぞ〉

耳もとで男の声がする。お美和の心を蕩かす性的な声であった。

花の——蕾の茎が、ゆるやかに局部に入ってくるのを、拒みながら、お美和は脚をひらいている。

拒んでいるのだ。自分は拒んでいるのだ、と思いながら、腰をゆすり悶えていた。こみあげてくる快感には逆らえなかった。

「あっ……いや、そんなこと……あ、お花が……」

花に悪い、と思った。イメージにある梧桐の花はあまりにも柔らかく、白紫の美しさを湛えていた。

〈悪いことはない、花だとて、うれしいわさ〉

「そんな……」

〈そなたの、ここは……愛らし〉

「いや、見ないで」

〈どの女よりも愛らしい……花も喜ぶわな。おれも喜ぶ〉

拒んでいるつもりが、恥ずかしいことに大きく開いていて、そこに、細い茎がするすると入ってくる。その妙なるこそばゆいような、嬉しい感覚に、お美和ノ方は、全裸を悶えさせて、

「いやよ……花のいたずらは」

〈男の方がいいか？〉

「ええ、ええ……」

頷いたとき、待っていたように、男のものが入ってきた。

大きい。それは熱く、硬く、弾んでい、充分に潤ったお美和ノ方のからだの芯を貫き、咽喉もとまで突き上げてきた。

お美和は悲鳴をあげ、しがみついた。

そのとたんに、醒めた。

愕然としたのである。夢ではなかった。夢の中にばかりいると思っていたのだ。それも淫夢を——羞かしい淫夢の中でうごめいていると思っていたのに。

現実だった。男に抱かれていた。

前将軍の三十五日の法要が済んだばかり。髪こそまだおろしていないが、場合によっては尼にならなければならないかもしれない。

そんな立場なのに、いま、見も知らぬ男に犯されている！

「そなたに聞くことがある」

「あれ！　離して！」

「聞けば放す」

と、鷹は女の裡にある余裕を見せていた。

「あの御朱印はどこへ隠した？」

「し、知らぬ！」

「たわけ、隠しおおせるものではないぞ、吐け、吐かねば、吐かしてやる」

鷹は動いた。いたぶるのではない。もっとも女の弱い官能に訴えるのである。快感が女の全身を顫わせ、四肢を痺れさせた。

鷹が動き、生き物のように、その巨大な陽物が、女の呼吸をとらえて動くほどに、薩摩女の意地も張りも、とろとろと蕩けてゆくようであった。

「どこだ、どこに隠した」

「き、桔梗……」

「む？」

「桔梗殿の」

「慶光尼か慶光尼に預けたか」

「は、はい……あ、離さないで」

だが、せっかく、告白した女を満足させてやる閑は、忍者〈鷹〉にはなかったのである。

「急ぐ」

と、身を放した。

「あ、待って、このままなんて……むごい」

「御朱印を手に入れてからだ」

もう使命も何もなかった。薩摩女の情熱は、やはり男との交媾にすべてがかけられる。

この使命の目的は、薩摩が長崎大村辺を飛地として手に入れる劃策だったのである。

前将軍の遺命としての御朱印状の偽造――それが狙いだったのだ。そうしたことは知らぬお

美和ノ方は、ただ御朱印を入手することだけを念頭に入れていたのに、それも失敗したのだ。

鷹が姿を消してからも、お美和ノ方は放心したように、全裸を横たえていた。その手は、おのれの秘所をなぶり、乳房を弄んで、見果てぬ夢を追っているのだった。

慶光尼は、何も知らなかった。ただ、お美和ノ方から仏像を預けられていただけである。

侵入した鷹は、目ざす仏像に近より、

「これか」

と、仏像を手にしたとき、しゃっと、一条の投げ縄が飛んできた。鷹の手に絡んだ。一瞬、鷹は左手で抜き討っている。

「畜生！　一足ちがいで」

切歯した影は、どこに潜んでいたか、風魔の薊だった。

「愚かだったな、池の中から拾いあげて、なぜ持って走らなんだのか」

「あたしではない」

「そうか、あの裸、きれいだと思ったが、そうか薊にしてはきれいすぎたようだ」

「雑言！」

手裡剣が、連打された。その一本一本が虚しく柱に刺さり、壁に刺さった。〈鷹〉の影を最後の一本がとらえた。薊は走り寄った。それが、かれの衣裳にすぎなかったのを知ったとき、鷹はすでに寛永寺の坂を風のように駈けおりていた。

闇公方

1

忍びノ者は孤独といわれる。多くの場合、これは当てはまらない。大体、乱世の需要で発達した忍びのワザと、それを生業とした忍びグループは、上忍下忍の組織による強みで、その存在価値を高めた。産業スパイと暗殺請負の混成集団である強みである。

徳川家康のお抱えとなった伊賀服部と伊賀多羅尾の一党、また古くは後北条の風魔、寺院の根来等々、すべて強力なグループ活動であり、大小の違いはあっても組織の背景あってのものであった。

一匹狼としての忍者は少なかった。

いても、たいていグループで叩き潰され抹殺されてしまったのである。もともと寒冷痩地の伊賀などの生活手段（地理的条件もあったが）による発生進歩の過程から見てもわかるように、おのれの一家一門が食うための生業であれば、他の生息は許せない。少しでも邪魔になれば潰す。邪魔でなくても潰す。弱ければ潰す。

すでに室町時代、商人でも職人でも〝座〟が出来て組合は権利擁護に狂奔している。どの職業でも一匹狼で過ごすことは難かった。

組合に入るなら許すが、入らないならその職業も許さないという、ユニオンに似ている。忍びの場合、死と隣合わせの行動だけに、よほどの連携がなければ、一人前の働きをすることも難しいのだ。一人でやれるワザ者が憎しみの対象になる。

その夜、不知火ノ鷹が襲われたのは、松平伊豆守信綱と逢っての帰りだった。

いつもの仕事の依頼ではなかった。

「用心せい、狙われている」

と、言った。

不忍池に舟を浮かべて、釣糸をたらしながらの話であった。

「おれが？」と、鷹は暗い池に向かって苦笑を投げた。「そのために、わざわざ、天下の御老中がお出ましになったのか」

「笑い事ではないぞ」

「笑いはせぬさ。ただ……」

面妖だと言おうとしてやめた。忍びは無駄口は叩かぬ。言葉に代えるに、耳目をはたらかす。

六感が闇の中で何かをとらえた。
「用心するに越したことはない」
「……」
「自信はあろうが、慢心は怪我のもとじゃ」
伊豆守は、たしかにそれだけを伝えに来たらしい。
釣竿を片づけはじめた。魚籠には一匹も入っていない。
釣竿は、そのころ珍しい、五段にちぢまるものであった。これは忍びノ者の手内職で、節が生かされ、伸びきったところで、ぴたりと止まるようになっている。
工夫改良されたものに管槍というのがある。穂先が随意に伸びる。それの応用であった。
「おれを狙うというやつは……」
「多分、風魔であろうな……」
「なるほど、わからぬではないが」
「気をつけい。わしも持駒が少なくなると困る。御政道を支えるには、お前のようなワザ師がいなくてはな」
「おだてなくともいい、臍がむずがゆくなる。池の蛙も笑っているぜ」
「その憎まれ口ともお別れだな」
伊豆守は、あわてて、語を継いだ。
「いや、もし殺られでもしたら、だ。淋しくなるということだ、気をつけてくれ」

日ごろ、そうした気づかいなどしたことのない男である。天下の幕府を動かす御用部屋の実力者。まだ壮年の域を出ないが将軍家光の絶対の信任を得てその実力は大老をしのいでいるといわれる。
これまで、鷹はこの伊豆守の〝隠し目付〟であり〝陰ノ忍者〟である。
忍者はすべからく、陰に生きるが、幕府には前述の服部半蔵の輩下たる伊賀者甲賀者がいる。お庭番として、あるいは諸国探索に、あるいは旗本の素行など探ることもある。お広敷番というのは大奥の門番のようなものだが、男子禁制の警備だけでなく、大奥女中たち数千人の素行から親族関係などすべて調べるというようなことをする。
こうした役人化した忍者では、万一の際、幕府が困ることが起こる。
大名には外様、譜代、家門と徳川家の成立時からの関係によってわけられているが、乱世では敵であったり、味方であっても、仕官の年月に差があったり、さまざまな関係からなり立っている。
封建の世は、力によって作られたものである以上、血を流して築かれたものの宿命として、血によって転覆崩壊する憂いを内蔵している。
乱世の荒々しい血は、巨大な敵であった豊臣家が叩き潰されてからも、人々の体内から消えたのではなかった。
休火山でしかない。いつ爆発するかしれない危険があった。
嘗ては家康にしろ三河の一大名にすぎなかったのだ。

それが天下の将軍となり、二代三代と世襲してきて、人の上に君臨している。祖父から、あるいは父から、乱世の様子を聞いて育った者たちには、

「昔は、われらの方が大々名であった」

などという不満もある。

譜代の親藩だから、御三家だからと、安心ならない時代であった。親が子を殺し、子が親を、あるいは兄弟が攻めあい、権力に妄執するのは、権力の歴史が証明している。

つい先ごろまでも、家光の弟の駿府大納言忠長や、結城秀康の子である忠直や家康の第六子忠輝などは、いずれも、宗家への叛逆を理由に配流されている。

身内から出る叛逆者くらい、始末に悪いものはない。

幕府体制のぐらつきを世間に印象づけることになる。

この処分は、いずれも発狂とか、病気とかいうことで済ましているが、ともあれ、これらの内情を探るのに、忍者が必要なのはいうまでもない。

が、万一、発見されたりしたら、

「将軍家が、身内のおれを疑うのか」

と、逆ねじ食わされる。

そのためには伊賀者よりは、フリーランサーたる鷹を使ったほうがよい。

たとえ発見されても、

「当方の知らぬこと」

と、突っぱねればいい。

「存分になさるがよい」

いのちの代償はそのつど莫大な金を渡している。

そういう立場の鷹であった。非情冷酷な為政者である信綱は、これまでも鷹を利用して、死の淵に赴かせている。

(いまさら、何を思ってか……)

忍びの身として、常に危険は覚悟の前なのだ。

あらためて仰々しく信綱が忠告することはない。

「信綱め、やきがまわったか?」

信綱が去ってゆく蹄の音を聞きながら鷹も釣竿を片づけた。

鷹の巣は市中に散らばっている。湯島の天神前もその巣の一つだった。そこへ帰る途中、襲ってきた者があったのである。

2

池の端から入った幡随院わきの道である。土塀越しの樹が頭上を蔽っている。その暗がりから突然、礫が飛んできたのだ。

本能的に身をひねって避けた。と、逆側からも飛んできた。

夜気が悲鳴をあげた。この礫を躱したところに、樹上から影が数箇、ばらばらと飛び降りてきた。

「ぬ？」

咄嗟に鷹の手は件の釣竿を一振りして影を薙いだ。

釣竿はするすると伸び、一人の脛を払い、一転するや、眼を突いている。

もとより頭巾をかぶって面を隠していたが、眼はあいている。夜目が利く鷹には、襲撃者の双眸が猫の眼のように見えた。

襲撃者たちにとっては、鷹の釣竿は予期しない武器だったことである。

三人目の咽喉にぐさッと突き刺すや鷹は地を蹴って幡随院の塀上に跳びあがっていた。

その姿へ向かって斬りかけた男は、異様なわざで壁を駈けのぼっている。

（風魔！）

と、感じたのはそのワザを目睹してからである。

相州足柄山中に遺る風魔忍法にこのワザありという。さながら竜巻の地上を席捲するが如く、壁面を駈けのぼること、雲起こりて昇天する竜のそれにひとしいという。

かほどのワザも、鷹の剣の前には虚しかった。

土塀の上に達した刹那、鷹の抜き討ちが真っ二つにしている。血けむりが夜気を染めた。

転瞬の間に四人を仆された襲撃者たちは、するどい口笛を合図にさっと退いた。

残りの影は三人。

鷹が素早くその中で一人を選んだのは、馴れた行動だった。常人なら、瞬間、三人に三方に岐れられたことに戸惑いをおぼえる。

鷹が選んだのは、小柄でそのからだつきを、

（女忍！）

と、見たからである。

全く、一瞥の判断であった。暗いし、死闘の間のことで、その眼が的確だったかどうかはわからない。

その影を追う鷹の前に、突然、蜘蛛手が舞いおりてきた。背後から蜘蛛玉を投げたのであろう。組織的な行動は、いよいよ風魔にちがいない。鷹が一人をマークしたとき、あとの二人はいったん別々の方向に逃げると見せたが、追われるなかまを助けるためにさらに鷹を追撃してきたのだ。

この蜘蛛玉は、背後から投じて、樹木の枝などに打ちあてる。拳大のものだが破裂するや、蜘蛛手がぱっとひらいて敵を包みこむ。

鷹は、しかし、これを一刀で切り払って飛び出している。刀を咥えるや、ばらりとうしろ手に菱を撒いた。

こうした場合、狙った獲物を断念して背後の敵に向かうのは、みすみす敵の術に乗せられるようなものである。

ひたすらに、狙いをしぼった。撒き菱に狼狽している間に、距離はひらいた。

湯島の鳥居前からまっすぐ走った影は、寺町へ折れたところで、忽然と消えてしまった。
突き当たりは雲仙寺という、かなり大きな寺で、これは神田明神の裏にあたる。
鷹はその脇門のところの茂みに、妙に光るものを見た。葉っぱが濡れていた。夜露であろうか。指を触れてみると、べっとり粘い液体だ。
（血だ……）
いまついたばかりではないか。
あの小柄な忍者に刀は触れていない。傷を与えた記憶はない。すると、この血は、なかまの血しぶきが附着していたのではないか。夥しい血汐が吹いたのだ。
鷹は身を翻して、茂みの中に潜んだ。黒い影が二つ、急いできた。
〈大丈夫か〉
〈うむ、あきらめたのではないか〉
〈用心せねばならぬ〉
あたりに注意を配りつつ、中へ入ってゆくと、本堂から離れた一棟に近づいた。馴れた足どりだった。
一人が手を口に添えたと思うと、ほう、ほう、と梟の啼声がした。
あたりは立木が多い。昼間でもこのあたりは暗い。梟が棲むのは珍しくはない。
僧房の小窓に仄明りが動いたと思うと白い顔がのぞいた。
〈おお、無事だったな〉

梟の声を作った男が言った。
〈奴はどっちへ行った、幸い、ここは知られなかったようだな〉
〈私の方はよい〉
と、小窓からのぞいた顔は言った。
〈早く、この由をあちらへ〉
〈うむ、失敗したことは、言い難いが、隠しもなるまい〉
〈次の手を考えねばなりませぬ〉
そんな会話のあとで、また二人は寺を出ていった。小窓の明りが消えた。
鷹は二人をうち棄てて、僧堂へ近づいている。
（女か、やはり女忍か）
ここの和尚が隠している女であろうか。
女が寺にいることは、きつい法度である。見つかれば、和尚は曝しで打ち首か、軽くても遠島になる。
鷹は僧堂の入口の方へまわった。そのとき、灯が動いた。手燭の灯であった。
僧堂から出てきたのは、なんと大振袖に角前髪の寺小姓ではないか。
小柄で色白の顔がととのっている。眉もほそく、唇も小さい。女にしたほうがいいくらいだ。
手燭をかかげた手もしなやかに細い感じであった。
（どこへゆくのか）

小姓が出たあとで、中を探るか。そう思ったとき、青坊主が急いでくるのが見えた。
「菊弥どの、お待ちかねですがの」
「はい」
頷いてゆくのを、青坊主はそっと手を握って、
「これさ、わしが気持ちも、もうわかってくれているじゃろが」
「お戯れを」
ぴしっとふり払って、方丈のほうへ行く。
方丈には、すでに客が待っていた。でっぷりと肥満した男で、錦の頭巾をかぶっている。贅を尽くした身なりであった。大名ならば大々名だ。
その姿を見たとき、鷹は記憶の底からある一つのものが浮き上がってくるような気がした。
「待ちかねたぞ、菊弥」
「はい、お許しを」
「首尾は如何であったぞ」
「はい、それが……四人仆されてしまいました」
「なに、取り逃がしたか」
かっとなった。
その声を聞いたとき、鷹ははっとした。
(闇公方!)

3

その正体は不明だ。が隠然たる勢力を持ち、将軍に拮抗するゆえを以て、闇公方と呼ばれている。これまで、度々、鷹に死の手を伸ばしてきている。
幕府の転覆をはかり、大小名に謀叛の兆があればそれを煽動し、もしくは陰に陽に援助して、動乱を起こさせようとしていた。
鷹は、外様大名の反骨のあるやつと思って、ずっとこれまで探ってきたのだが、該当する者はいなかった。当主とばかり限らぬ。若隠居した前藩主ということもある。が、それもいない。譜代の大名にも眼をむけたが、こちらはますます範囲がせまかった。
権力と財力がある。援助をして叛乱を起こさせようとし、それが成らぬと、関係者を抹殺して、証拠を湮滅させる。その辺の手ぎわは鮮かであった。
むこうから言わせると、鷹には煮湯を度々、呑まされているということになる。
(そうか、こいつが、おれを消そうというのか)
菊弥は闇公方ににじり寄った。
「お許しを、次には必ず」
「アテにしたが、役立たぬやつじゃ」
いまいましげに舌打ちを聞かせて、

「脱げ」

と、命じた。

菊弥は、はい、と口の中でいうと唯々として袴の紐に手をかけた。袴を脱ぎ帯を解き、大振袖を脱いで、しだいに裸になってゆく。

（――やはり）

眩しいばかりの双の乳房が出てきたとき、鷹は呻いた。

寺小姓は、昔から、寺院では常識だった。女をお小姓に仕立てて隠していたのか。いや、これが女忍だとすると、わざとそういう立場に身を置いているのであろう。

明るい灯のもとに、一糸まとわぬ女人の裸身があらわされると、闇公方は、うう、と咽喉を鳴らせて、近う、と言った。

「こ、これへ」

「はい……」

裸身で羞恥の面を伏目がちに、にじり寄ってくる姿は、艶なものであった。

闇公方はわななく手で、女体をかき抱き、唇を吸った。執拗に両手が女体を愛撫し、軽々と持ち上げて乳房を揉んだり乳首を含んだりした。それから、うすい翳りの部分から谷間の泉へと舌を這わせて、女性が悶えるのが面白そうに、よいぞ、よいぞ、と言いながら、おのれの袴の紐をひき千切るようにして手荒く脱いだ。

そこはすでに怒張していて、袴を破り裂かんばかりになっていたのである。

「喰え」

ぬっと突きだすのを、菊弥――いやお菊は受けた。含んだが、あまりの大きさに、迪送することもできないようであった。

「せ、せぬかい」

闇公方は焦立って、

「舐めろ、し、舌を用いるのじゃ」

「う、う、……」

そのようにしたのか。女の顔は苦しげだった。鷹は天井の一角から、これを見守っている。

とうとう業を煮やしたように、女の唇からひき抜くと、闇公方は白い下肢をひき裂かんばかりに左右におし拡げた。

そして、入れようとしたとき、さりげなく、女はこれを導くように、手を持ち添えた――とたんに、闇公方は頭から飛び出すような声をあげて、のけぞった。悲鳴というには凄じく、けものの咆哮にも似ていた。

ぶるぶるっと両手を顫わせたと思うとばったり、仰向けに倒れた。もがいている。かっと瞠目したまま唇をふるわせ、四肢をふるわせているのだ。

行燈の明りが、股間のものを奇妙に照しだしていた。

キラキラ光るものが三つ――睾丸と陽物の先端とに、キラッと鋭く光る、それは針のようであった。

玉に一本ずつ、亀頭に一本、針を打ち込んだのである。

（あいつ！）

鮮かであった。

鷹は飛びおりている。

女忍は何といっても全裸なのだ。針は髪の中にでもひそめていたのであろうか。

鷹は殆ど、女忍を無視して、近よるとさっと頭巾をむしりとった。そこに、眼も鼻も大ぶりの特徴のある顔があらわれた。

「む、頼宜か！」

紀州大納言頼宜の顔であった。

「こやつが闇公方か……」

外様でも、譜代でもない、御三家の一、現将軍家光の叔父になる男であった。

「御三家の頼宜が、大公儀転覆をはかっていたのか」

わからないではない。忠輝や忠直や忠長などにも宗家への不満があった。乱世の気骨を受けついだ頼宜にしてみれば、甥である家光にとって代わることも、夢ではなかったのであろう。

そのとき、突然、前後にじわっと影が浮かび上がったのである。

いつの間にか、全裸の女忍はなかまのうちへ隠れ、十人以上の黒装束の影が周囲に集まって来ていた。

それだけではなく、平服の侍が灯の下に顔をさらしたのである。その顔を見たとき、鷹の驚きは、前に倍した。

「伊豆！」

「――鷹、と……呼ぶのは、これでおしまいだの。そちにはやはり死んで貰おう、その方がよい」

「そうか、こんなことだったのか。すべては囮だったか。おれをここに誘い出し、闇公方殺しの下手人にしようってのか。なるほど、御三家の頼宜、こんな手段ででも消さなきゃならねえってわけか」

「死ね！」

忍びたちが、一斉に抜刀したとき、鷹のからだは、あたかも、吸いこまれるように一跳して天井のもとの穴へ帰っていた。

「おい、伊豆守、おめえとの縁もこれまでだな。こんど逢うときは、位牌を持っていた方がいい。おめえの戒名もつけておくことさ」

「鷹！　きさまは知りすぎたのだ、だから死なねば……」

「あいにくだ。死にたかねえさ。儲け口が一つへったが、まあかえってサバサバしたぜ」

鷹の声は遠去かった。雨あられと手裡剣が飛んだが、これは虚しく格天井に突き刺さっただけであった。どっと忍者たちは走りだした。が、所詮、鷹に追いつくべくもないことを、松平伊豆守信綱は知っていた。かれが呆然と佇んでいる足もとで闇公方はまだ苦悶のもがきをつづけていた。

怨霊根来塚

1

闇の中に女は坐っていた。四月の上旬で、もう八重も散り、葉桜の季節だったが、まだ裸になるほど暑くはない。

夜気はむしろ爽やかなくらいだった。女は身に一糸もまとわず、裸で坐っていたのである。きちんと膝を揃え、入口に背をむけていた。それは、まるで、どこからでも自由にしてくれ、という態度だった。

鷹の〝巣〟であった。帰ってくるなり、はっとした。女の匂いを嗅いだ。忍びノ者の鼻は異常なほど、敏感なのだ。

（女が……）

自分の留守に、見も知らぬ女が、勝手にあがりこんでいる。それも、裸身でかしこまっているとは、どういうことか。

江戸市中に幾つかある、隠れ家の一つであった。忍びノ者は常にこうした〝巣〟を用意している。その出没が、常人の眼に変幻自在に見えるのは、ただに超人的な鍛錬のゆえばかりではない。そのための万端の用意が必要であった。忍びの七ツ道具のほかに、抜け穴や、塀を飛び越えるための竹竿や、踏み台にするものなど、何気なくほうり出してあるように見えて、万一の際の役に立つのである。

小石川の伝通院裏。大欅が数本立っていて、柴垣で囲まれた、一見僧庵ふうの隠宅である。

（何かの罠か……？）

鷹は油断のない眼を走らした。

闇は、仄白く裸身を浮かび上がらせている。女は何を考えているのか、少なくとも殺意は洩れていない。鷹が入って来たのは気がついたはずである。が、無言だった。無言で裸身をかたくしている。若く、美しい肌だけに、意表を衝かれたのである。

周囲の闇にも、殺気はなかった。鷹は黙って、中へ入ると、刀を置いてどっかりと坐った。

「――驚いたな」

「……」

「そなた、気狂いか」

「いいえ」

と、はっきりした返事がかえってきた。それから、これも、はっきりと言った。
「悪心はありませぬ。あなたさまにお願いがあってまいりました」
「裸で？」
「悪心のないところを見て頂きたかったのでございます」
女は、くるりとこちらをむいた。美しい姿体であった。仄白い肌の黒いかげりの一筋一筋で夜目の利く鷹にはよく見える。女の肌は男の手に荒されていない。乳房もかたちがよくつんと上向いていたし、贅肉もついていない。十七か八か。よく締まった五体には、だらけた生活のひずみというようなものはなかった。
（こやつ、忍びの……）
鷹は感じた。
「抱いて下さいまし」
まっすぐに女は見つめて、かわいた口調で言った。
「お話はそれからにしたいと思います」
「抱く？　その肌をか」
「はい」
「ふむ……男なら、誰でも、女を抱きたいと思っているのか。おれにその気がないと申したら」
「お嫌でございますか、わたくしを」

「嫌とは申さぬ。が、素姓も知れぬものを、ただ抱く気にはなれぬ」
「わたくし……まだ、一度も」
さすがに、女の言葉は冷静を欠いた。その一瞬の羞じらいが、忍者と見えた女を、ただの娘に還した。
「男の方をまだ知りませぬ。……あなたさまの手で、女にして頂きとうございます」
「――目的がそれか」
「……」
「他に目的があろう、それを聞こう、抱くのは、そのあとだ」
「でも……」
女は哀しげに首を振った。見ず知らずの仲である。ここまでしても無駄だったのかと、諦めたようであった。女は一揖すると、のろのろと立ち上がり、着物に手を伸ばした。鷹が黙って見ていると、小袖をまとい、帯をしめた。
無言の動作には、哀しみがあふれている。こうした手段に訴えてきたのは、よほどの決意でなければならなかった。
その小袖をまとうときの腰つきに、鷹はふっと欲情した。おんなを感じたのである。
「名は？」
「お若」
そう答えたとき、お若のからだは、急に立ちくらみしたように、よろめき、鷹の上に崩れか

かった。鷹と眼があい、その眼がお若をとらえたのである。一種の催眠術であろう。

お若は気がついたとき、男の腕の中にいた。下肢が大きくひらかれ、鷹のものが、ゆるやかに入ってくるところであった。

「あ……」

「静かに、すぐによくなるぞ」

優しく囁き、鷹は唇をおとした。女の唇はかわいてい、皓いきれいな歯並の間から、桃色の舌が、ふるえているのがのぞけた。久しぶりに鷹は、女を抱く愉悦を感じた。

眠ったまま犯すのは容易である。が、そこには感動がない。感情の交流がなければ、愉悦はない。女の眠りを醒ましたのはそのためであった。

鷹の舌がすべりこむと、待っていたように、女はあえぎ、舌をからめてきた。白い脚が、ごく自然に、鷹の足にからむ。

はじめてとは思えない応えかたであった。が、それは女の知識が、速やかにその姿態をとらせたというにすぎない。

女忍でなくとも、男女の交わりへの知識はこの年齢になれば、たいていの者が持っている。鷹は、おのれを容れた女の秘所が、男のものをはじめて納れる歓びに顫えるのを、はっきりと知った。粘膜に感動が伝わり、女のあえぎと甘い唾液が口の中にひろがり、鷹は、この思いがけない女肌に、愛着をすら感じた。

女を抱いても、心を移さないことが、忍びの心得であった。如何なる場合も、情に惹かれない。そのかわいた心が忍びノ者の生業を支えているはずであった。

鷹は、とろけるような歓喜をおぼえると、さらに、そのまま、女体を放さなかった。〔不知火拾遺〕に、〝くノ一離れ〟なる語がある。これは忍法ではない。一種の戒めである。即ち、女体に溺れることを避けるには、三つの方法ありとする。一は、その女体を斬る、一は、その女体に溺れ切る、一は、おのれを斬る。おのれを斬るとは、羅切である。男根を切断することによって、妄想を払い捨てるのである。

この溺れ切る——すなわち、惑溺することによって、忘却の彼方へ追いやる。とことんまで溺れてしまう。その行為そのものまで、嫌になるまで行なえば解脱できるとするものであった。

鷹はこのとき、三度行ない、三度放った。おのれのものは、女の裡で外気に触れることなく怒張し、そして、溢れる女の愛液のうちで快を叫び、放つのである。

漸く、三度にして、それは常態にもどった。

鷹は身をひこうとした。そのとき、女は、恍惚として弛んだ唇で、熱い息を吐きながら、

「おねがい、このままで……もっと、このままで」と、喘いだ。「凝っとしていて……そして、聞いて下さいまし」

何を聞け、というのか。鷹は余炎の中におのれを置いた。そして、女の唇をゆるく舌で愛撫した。

2

二代将軍秀忠が、日光社参に江戸を発したのは、その翌日のことである。東照宮七回忌を修せんがためであった。

数日前に布令だされた予定では、十六日に日光山に登り、十九日に下り、宇都宮へ立ち寄って、本多正純の城へ一泊して二十一日に帰城ということであった。

この布令はかなり厳しいもので、細目に至るまで、指示があり、後々の日光社参の際の条例になったほどであった。

煩瑣にわたるがその一端を書き留めておくと――

今度御供する時脇道すべからず、並に市街においては家の左右をよけて供奉すべし、若違背の族あらば過料として銀一枚出さしむべし。喧嘩、争論、火災をはじめ、いかならん事ありとも、番頭組頭指揮なからんには、その身はいう迄もなし、奴僕までも其地にまからしむべからず、もし違背の徒あらんには曲事たるべし……

云々とあらゆることが、過料銀一枚あるいは二枚など罰金を科して、律してある。

将軍家のお供ということで、宿賃を踏み倒したり、無銭飲食したり、ひどいことをする奴もいたらしい。

――宿賃償わざらん者は過料銀五枚たるべし、御出陣御上洛の時は、かかる者は斬に処せらるるといえども、今度は御参詣により、寛容御沙汰も過料に定めらる……等とある。

こうした細目を定めたのも、供奉の人数が多かったせいだ。

旗本らはいうまでもなく、大僧正天海、広橋前内府兼勝、三条大納言実条、水戸宰相頼房、藤堂和泉守高虎など供奉したから、大変な行列になっている。

最初の泊まりは岩槻の城であった。城主青山伯耆守忠俊が饗膳を奉った。

この日、風日和してまた清すがしかったという。

ところが、事件は、その夜に起こったのである。

秀忠は入浴後、按摩をとる。侍女たちが数人次の間に控え、按摩といっても揉み療治で、ちゃんとした医者の資格がある、大沢泰庵という屈強の者である。盲人でも坊主でもない。総髪で俗にいうくわい頭であった。

いい気持ちで、秀忠は横たわっていたが、そのうちに、泰庵の手附きが変わった。

「どうした？」

いつものことなので、その違いが気になったのだ。

「こりゃ、何とした、もそっと強く揉まぬか」

〈贅沢を吐かすな〉

それが返事だった。

秀忠はぎょっとなった。天下の征夷大将軍に対しての言葉にしては、あまりにも、無礼であった。

「う……」咄嗟に、将軍秀忠は声が出なかった。
「そ、そちは……」
やっと、こう言ったとき、
〈将軍家の耳に入れたいことがある〉
「……」
〈聞くがよい〉
これでは、どちらが将軍かわからない。不遜な態度というには、あまりにも放胆に過ぎて、秀忠は唇を顫わすだけだった。
秀忠は、近習を呼ぼうとした。
〈無駄だな〉
不遜な声は言った。
〈みんな眠らしてある〉
むろん泰庵ではない。いつの間にかスリ代わっていたのだ。泰庵に変化したこの男は何者なのか。
虚言ではなかった。近習も小姓も、侍女たちも、ぜんぶが次の間や、廊下や、廊下を隔てた部屋などで、仮眠状態に入っていたのである。
次の間から、一人の女が立った。するすると近づいてきた。
これは、侍女に扮しているが、あのお若であった。

「お目通り、お許し下さいまし」
と、お若は手をつかえた。
秀忠は激怒で赤黒くなっていたが、お若の美貌にふっと、表情を柔らげた。
「直の言上をお許し下さいまし」
こうしたことが、いかに大罪に当たるか、むろん熟知している。が、直訴の方法が他にはなかったのであろう。不知火ノ忍者〈鷹〉に、おのれの処女肌を提供してまで、こうした手段をとらざるを得なかったのだ。
「わたくし、本多家に仕える根来同心杉ノ坊典瑞と申す者の娘でございます」
「……」
「先日、父は他の同心衆百人とともに、上野介が手にかかり果てましてござりまする」
「なに！」
秀忠は眉をひそめた。
天下の将軍ともなれば、下賤の者の言葉なぞに耳をかさぬ。言葉を交わすだけでも大変なことである。お目見得できるかどうかというだけでも身分の違いが出る。
直訴とは、体制の制度を認めぬ越権行為ということで、大罪とされるわけだが、したがって、同心などのことで、一々、将軍が耳をかしていては、秩序が狂ってしまう。
同心というのは、ずっと身分の低い者の職である。一人前の侍ではない。漸く大小をさしているというところで、陪臣もいいところだ。乱世のころの足軽に毛の生えたようなものである。

宇都宮城主本多上野介のところに、根来同心が百人抱えられていた。根来同心というのは、僧兵はなやかなりしころ、紀伊国根来寺にいた僧兵の後裔である。太閤秀吉によって、根来寺が焼討ちされたとき、成真院大納言坊といえる坊主が、一山の生き残りを率いて、浜松へ逃げてきた。家康の袖にすがった。家康はこれを足軽として取り立ててやった。それだけに家康の恩を感じている。伏見城の守りに配したり、それぞれお役に就いている。この同心衆が一夜にして、百人ぜんぶが殺されてしまったのである。

正純はいうまでもなく、正信の子である。

正信は徳川幕府創立の功労者の一人であった。若年のころには一向宗に帰依し、家康に敵対したこともあったが、剽悍なその戦国武将の気骨と智謀を愛して、降人を許し、家康はまたかれを重用した。

それだけ才覚を見ぬいていたのだ。正信が家康に愛されたように、正純もまた、家康の信任を受け、異数の出世をしている。

正信は功臣であるにも拘らず、僅か二万石で我慢したが、正純は、家康に仕えたとき小山三万三千石を食んでいた。

家康が死に、正信が死に——その間わずか五十日の差しかない。正信が殉死したといわれるのも、そのせいだ。しかし七十九歳だったのだから、寿命であろう。

正信が死ぬとき、秀忠にこう言っている。

「正信が奉公の労を忘れ給わで、長く子孫の絶えざらん事を思召さば、嫡男上野介が所領、今

の儘にてこそ候べけれ、必ず余多賜べからず」と。

上野介の所領はいまのままで結構ですから、必ず沢山加増するようなことはしないで下さい、と遺言したのだ。

後の西郷隆盛の子孫の為に美田を残さずと、よく似ているが、炯眼の正信は、加増が結局は、身を亡ぼす原因になることを憂えていたのであろう。

秀忠が、その言葉を忘れたのか。不肖の子、上野介正純が欲を出して、加増を運動したのか。福島正則を改易にしたりした功労もあったのかもしれない。四年後に、正純は十五万五千石に、一躍、のし上がっている。

ほかの加判衆など、大久保、榊原、酒井、土井などから見れば、それほど、高禄すぎることはない。が、家康べったりで、権力をふるった本多父子は、秀忠にとって、好ましい家老というわけにはいかなかったはずである。

社長が交替すれば、秘書はもとより重役も入れ替えたくなるものだ。入れ替えられないときは、なんとなく疎遠にして、更迭の機会を狙うものだ。天下の将軍たる秀忠にもっとも取り入っているのは、酒井忠世、土井利勝らであった。かれら自身、当代将軍側近として権力をふるうためにも、本多正信の子である正純は邪魔な存在であった。

それにしても、秀忠には、この女性の直訴は、あまりにも唐突で、信じかねることであった。根来衆は、幕府からの口添えで付けられたものだ。いうなれば、本省からの出向社員である。たとえ身分は低くても。

「さ、左様なことが……」

「宇都宮には根来衆百人の首が埋めてござりまする。塚をあばいて御覧じられませい」

秀忠の眼の前で、お若の姿は、すーっと消えた。

寝所は急に暗くなり、秀忠は声をあげようとしたが、舌が痺れたように声が出ない。そのまま、両手の指をふるわしながら溷濁にのめりこんだ。

3

夢かうつつか、秀忠は醒めてからも判然としなかった。現実のようでもあり、夢の中の出来事のような気もした。意外だったのは、夢精を洩らしたことである。

何やら腰のあたりが気持ち悪いと思い、下着をとり代えさせた。小姓は、それを見て赤面している。秀忠の股間のものは萎れ、べっとりと白濁の液体が附着していた。

「あっ、これは……」

のぞいた者たちも、一様に、絶句した。

もともと、秀忠なぞは、幼年から、多勢の家臣にかしずかれている。おのれの褌をとりかえるようなこともしない。入浴すればまわりで世話をやいてくれる。

後世ほどは甚しくはないから、尻まで拭いてくれるということはないが、それでも、将軍が手ずから、着たり脱いだりするようなことはない。したがって、裸になることに羞恥はおぼえない。

秀忠は幼年のころから寝小便の悪癖があった。その始末はして貰いつけている。成長してからもときどき、洩らしている。それでも、羞恥はなかった。

しかし、夢精の経験はなかった。

御多分に洩れず、まわりには色小姓もいて男色の味を早くにおぼえていたし、侍女にも手をつける。色ごとには不自由をしない環境だった。夢精を洩らすほど、たまっていることはない。だから、その年齢にして、はじめてのことであった。

（いつ洩らしたのか？）

あの奇妙な混沌のうちにおのれの意志ではなく眠りにおちたときであろうか。呆然として、秀忠は、羞じた。

あの眠りが奇怪なほど快美な感覚だったがゆえに、そして、おのれが夢精したことを知らなかったがゆえに。

「彼奴！」と、つぶやいた。

温かい湯でしぼった布で、拭われているうちに、あの泰庵に扮した〝影〟に怒りを感じてきた。

（あの女は、悪くはなかった……）

とも思った。

侍女たちのなかにはいない。侍女たちのように、上様の顔色を窺って、おどおどしている女

たちにはない、自由に活き活きとしたものがあった。
（あの肌なら……）
楽しめるような気がした。
「根来……」
のと、言いかけて、秀忠は口を噤んだ。
いやしくも将軍たる身が、陪臣の軽輩のことを口にするなど、破天荒なことであった。
翌日は古河泊まり、奥平美作守忠昌十一万石の城であった。
この夜、また、お若があらわれたのである。
入浴しているときであった。秀忠は侍女たちによって、糠袋でみがきあげられていたが、自分の脚を洗っている女が、昨夜の女であることに気がついた。
ぎょっとした。
「そちは！」
と、思わず口にした。
お若は顔もあげずに応えた。声だけが聞こえたのである。唇も動いていたかどうかわからない。
〈はい、根来同心の娘でございます〉
「う……ま、また、なんとして」
〈御用心を……宇都宮のお城には、上様に危害を加えんとのからくり仕掛がございまする〉

たしかにそう言った。そう聞こえた。
ほかにも侍女たちはいた。いながら、侍女たちには、そのお若の言葉は聞こえないものの如くであった。
ふっと、秀忠は、眼の前に靄がかかった。湯に逆上たかのようであった。
「あ、あっ、あッ……」
秀忠はぶよぶよしたからだをふるわした。
股間のものは、急にまったく、突然に、欲情したようにぶるんとそそりたち、その赧らみ怒張した先端から、音を立てんばかりに白濁のものを噴きださせていた。
秀忠は四肢を突っぱって、のけぞり失神している。
異様というほかはない。
湯殿には、侍女たちが五人いたし、板戸のところには小姓らも控えていた。かれらは、お若の姿を見ていない。
「何が何やら、わかりませぬ。ただ、突然、上様が……」
その変異のような勃起の状態を説明するとき、侍女たちは、苦慮した。どう手真似でしても、これは不敬に当たることであった。
そのころ、古河の城から脱出しようとしたお若は、闇の中に、ある気配がうごいたのを知った。

（不知火ノ鷹か？）

鷹は、昨夜、助けてくれただけであった。あれ一度の援助を望んだだけなのである。

今夜のことは、いわば、念を押しに来たのだ。鷹は、そのまま、江戸へ戻ったはずであった。わざわざ、また古河まで、助けに来てくれるはずはない。

（とすると、別の……）

と、思ったとき、しゅしゅしゅッと、草叢を何かが走った。さながら、蛇が獲物を狙っての素走りのように。たっとお若はとんだ。梢に飛びついた。そこから、内濠へ——と思った瞬間、宙を飛ぶお若のからだに、びしっと、何かが巻きついた。

「あっ！」

隼に飛びつかれたようであった。お若の手は梢にとどいていた。が、からだに巻きついた分銅縄のほうが、強かったのである。

梢の下枝が折れた。お若のからだは、はげしい勢いで、揺れて、ぶら下がった。

「畜生！」

逆廻りして、ふりほどこうとしたとき、もう一すじ、小さな分銅が、びゅびゅッと、巻きついた。

お若のからだは、松の梢から濠の上に宙吊りにされてしまったのである。

足の下は濠であった。満々と水を湛えた濠は、お若のからだが落ちてくるのを待っているようであった。

二本の縄が左右からお若を縛っている。これが地上ならば、束縛を断ち切ることもできよう。

「ちくしょう！　誰が……」

お若には、吊るされたことより、その梢に潜む〝影〟への不審が重大だった。その相手が、何者かによって、お若の運命が変わる。

この古河の城に雇われている忍者か？　二代将軍秀忠の宿泊のために、特別に設けられた警戒網であろうか。

お若はふりほどこうとした。が、左右からからんだ分銅が自由を奪っている。

〈往生したらどうだ〉

頭上で声がした。

〈もがいても解けぬ。地獄縛りじゃ〉

聞いたことのない声だった。

突然、縄が切れた。それは、あまりにも突然だった。お若のからだはもんどりうって転落した。

濠水はすさまじいしぶきをあげた。お若の両手は自由がきかない。水をかくこともできない。ぐるぐる巻きにしばられているのだ。足で水を蹴った。やっと浮上した。

〈こっちだ〉

髪をつかまれ、ずるずると引き上げられた。そのまま男の肩に担がれ、夜の城下を風のように走った。

その疾走が止んだのは林の中に入ってからである。何処かわからない。担がれたまま、お若は距離を計った。速さと時間と——城下を北へはずれたあたり野渡の疎林がある。その疎林だとするとたしか破れ堂があったが、そこにちがいない。

お若は堂内の埃っぽいところに転がされた。

「殺せという命令だがな、勿体ない」

男は言った。お若はたちまち裸にされている。抵抗を許さない男のわざである。縄をほどかれはしても、両手と両足ははね起きるひまもなく縛られた。

「愉しませて貰うぜ、これも儲けのうちだわな」

暗闇も埃も、そこらに転がっている鼠の糞も、意にかいさない。それよりも、眼の前に横たわる女の肌のほうが興味が深かった。根来くノ一だとわかっているだけに、一層、興味をそそられたようである。

「おれはくノ一を犯すのは、はじめてじゃ」

「ちくしょう！」

「わめけ、泣け、誰も来ぬわ」

「……」

「根来の娘か、ふむ美い肌をしておる、こりこりしておる」

男は、無遠慮にお若の胸に手を伸ばしてきた。

かたちのいい乳房を掌におさめた。くノ一の肌はその超人的な鍛錬のゆえに、ひきしまっている。ぶよぶよした贅肉がない。乳房もこりこりしてて、つんと乳首は上をむいている。忍者の掌は、動くともなく動いている。

「いいぞ、いいぞ、ふふふふ、まだ男を知らぬな……」

不知火ノ鷹によって、すでに開花されていることを、この男は知らぬ。

男は乳房を愛撫しているうちに、昂ってきたように、前をはだけた。お若は眼をそむけた。不愉快な生物のように、むくむくと動いている。すでにそこは猛っていた。

「これをくれてやろう、喰うがよいぞ」

お若の口へ近づけた。

が、暗い中で牝猫のように眼を光らせた女忍に、ふっと危惧を感じたように、

「おっと、危ないところじゃ、ぱくりと嚙み切られてしまうかもしれんでの」

それでも惜しいように、猛りを慰さめるように、あるいは、さらにそそるように、忍者はおのれのものを弄んでいたが、女のからだを裏返しにすると、大きく引き裂くようにひろげてのぞいた。

乱暴でけものめいた行為だった。入れるまえに、唇をよせている。べとべとに卑猥な感情で濡れた黒い唇だった。はっはっと犬のように荒い息を吐いて、花芯を舐めようとした。

そのとき、都合の悪いことに、外で梟の啼き声がした。

はっと、忍者は顔をあげた。舌打ちした。その口から、鳩の声が洩れた。

〈小廓でお呼びじゃ〉

梟の声は言った。

「おう、安食ただいま参上」

急に人が変わったように、この男は身づくろいした。せっかく味わおうとしていた馳走をみすみす捨ててゆくのが残念げに、手足の縄を結びなおした。

「あとからくる。それまで温和しくしていることじゃ」

結び直すのに、特殊な術を用いている。お若の首にひとまわりさせて、奇妙な結びかたをすると、壁に一端をかけ、これを輪にかけて、お若の股をくぐらせた。お若は立たされた。縄が股間に食い入った。

容赦ない手は、ぐいと下肢をひろげさせて、さらに秘所に咬みこむようにした。

奇妙な快感がお若を一瞬、くらくらとさせた。

「これでよし、あまり男のことを思うなよ。濡らすと、自分の首をしめることになる」

陰険な緊縛術であった。縄は秘所に食いこんでいる。小用はもとより、情念が湧けば、自ら潤う。濡れてくれば縄が弱まる。麻縄や細鎖ならその心配はないが、この縄は特殊なものであろう。忍びノ者は紙縒りを三本編み五本編みなどと目的に使いわけして用いる。

濡れ、切れると自ら首をしめることになる結び方こそ、縄脱けに慣れた忍者の陥穽であった。柔よく剛を制すという。固いものなら切ればよい。関節をはずして縄脱けする忍者を拘束するには、逆手を用いるしかない。

濡らすなといわれても、股間に強く食い込んだ縄はまるで生き物のように、男の手のように、お若を苛むのだ。どういう縛りかたか、しだいに強くなるようであった。それにともなって巧緻な男の指に愛撫されるような疼きと羞恥心と、そして、おさえようもない快感がこみあげてきて、お若はとろとろと溢れるものをおぼえた。

4

〝安食〟と称する忍者は、ほどなく小廓の御殿にいた。

この御殿は数年前に新しく造営されたものである。

「まいったか。戸を開けよ」

嗄れた声が命じた。

明り障子が左右にひらかれた。安食は、暗い土の上に平伏している。忍者の平伏は爪先がえしといって、きちんと膝は揃えているが、両足の爪先が反りかえって、土についている。これはイザといえば、坐したまま、跳躍するためである。熟練した者は右に左に自在に跳ぶ。

豪華な金屏風の前に、螺鈿の脇息に寄っているのは、老女であった。

「これ、怪しの者が潜入したとやら、始末してか」

「は……女一人。たしかに」

「女？　忍び入ったは男女一名ずつと申すが、なんとした」

勝気な老女であった。まるで男のような調子なのである。

この老女は、実は将軍秀忠の姉であった。若きころは亀姫と呼ばれていた。結城秀康と同じ母に生まれただけに気の強さも一入であった。

嘗て乱世のころ、長篠の役では、夫奥平信昌を助けて籠城し、長巻とって斬って出たといわれるほどである。

彼女の生んだ家昌は大坂冬ノ陣のさなかに死んだ。その子十福（すなわち忠昌――この忠の字は秀忠に貰っている）が後を嗣いだのだが、幼年であることを理由に、宇都宮城からこの下総のくに古河に移封されたのである。〝当代の御姉君におわしませば、こと更優待あつくわたらせたまいしにより、おのずから威権もつよく、その上御本性おおしくまし〳〵〟と幕府の記録にあるほど、この老女は持てあまされた存在だった。

亀姫としては、忿懣やるかたない。上野介が宇都宮ほしさに運動したものと解した。事実、宇都宮は奥州街道の要衝であり、東照神君家康の御廟たる日光東照宮の守護の意味もある。

「本多上野めが！」

と、憎んだ。そのほかにも怨みがある。亀姫の娘は大久保忠隣の子加賀守忠常に嫁している。ところが、大久保家は上野介正純のために、罪を申し立てられて改易になっている。二重の怨みがある。

転封に際して、亀姫は、意地悪な老婆のよくやるように〝立つ鳥、あとを濁し〟た。すなわち、

――御自ら命ぜられ、当城藩士が居宅の竹木、悉く伐とらせ、家財屏障戸板まで、皆な当

所へ引取せしめられ……

と、徳川実紀にある。

ところが上野介正純も捨てておかない。それと知るや、

「何たる婆アじゃ、すぐ追え、直ちに国ざかいに木戸を立てろ」

早馬が飛んだ。

国ざかいに急造の矢来を設けて、その小荷駄を止めた。そして、奪い返してしまったのである。上野介のやり方も乱暴だったが、これは上野介の方に分がある。幕府では大名の国替えなどを頻繁にやったが、そのたびに、城内を空っぽにされては、費用もかかりお互いに難儀するので、法度を設けている。

一、城中之諸具、城付の分は総て在来の通たるべき事。一、竹木一切剪取るべからざる事。

社宅を出るも入るも、調度から庭木など動かしてはならぬというのだ。亀姫には、将軍の姉という誇りがある。それが強引に行なわしめたのだが、この勝負は亀姫の黒星になった。

今度の日光社参に秀忠の古河泊まりを運動したのも、亀姫である。亀姫としては秀忠に訴えたいことが沢山ある。

「――どうじゃ、上野介謀叛の証拠はまだ手に入れなんだのか」

「はア、その儀は、今宵中に、なんとか」

「ええい、遅いわえ、上様は明朝御出立だと申すのに。しかたのない雑人じゃ、いま一人の忍びこんだ奴を、早々に探し出せ」

安食は拝揖して退った。

（うるさい婆さまじゃ、公方の姉なんぞでなかったら、蹴倒して、梅干をひん剝いてくれるのに）

安食はなかまの〝夜鼓〟を探した。

〈ここだ〉

と、梢で呼ぶ者がある。

安食は宙へはねた。

〈夜鼓か〉

〈おれだ〉

眼の前に影があった。咄嗟に夜鼓ではない、と感じた。あわてて転瞬に身を翻えしたとたん、ぐいと、耳をつかまれた。

〈女を捕えたそうだな〉

「う……離せ」

〈女はどこだ？〉

「うぬ……し、知らぬ」

〈よかろう、おれは面倒なことは好かぬ。もう一度だけ聞く、女はどこだ〉

「し、知らぬ……げえっ!!」

語尾は悲鳴に変わった。安食の片耳はひき千切られていた。すぽっと音がして、ぐわーんと、頭の芯を何かが貫いたようであった。安食は一瞬、眼が眩んだ。視力まで失ったかのようであった。

生温い血が噴き出し、しゃあーっと、片面にしぶき、えりくびから胸へ流れた。激痛だけではない。安食は、脱出もできなかったのである。不知火ノ鷹の手は残る一方の耳を掌におさめていた。

〈次はこっちだ〉

「う、う、ううむ、こ、殺せ……」

〈殺すのは、あとだ。まだ色々とある。さあ、もう一度聞くぞ、耳と相談して返事することだな、女はどこだ〉

「し、知ら……」

ぬ、とは、さすがに言えなかった。安食は激痛のために、ひん歪った唇で、野渡の阿弥陀堂のことを洩らしている。

〈早く吐いて助かったな、次は、うぬの臭い、海鼠摩羅をひき抜くところだったが〉

鷹は飛び立った。あとに安食は、両足くび両手くび両肩を、関節をはずされて草むらでもがいていた。忍者は自ら関節をはずして、穴くぐりや縄脱けをする。だが、任意ならば、元通りになおせるが、手足、肩まではずされては自分一人の力では、治しようがなかった。

「よ、夜鼓、どこじゃ、早よ、来て、こ、これを……」

と、喚いているだけだった。顎まではずされなかったのが、目っけものだったのである。

5

本多上野介正純は落ち着かなかった。小山まで行列を出迎えたのだが、秀忠は寝不足のようにむくんだ顔をして、機嫌がよくなかった。

かすかな不安が正純の胸を翳らした。

だが、その夜は宇都宮城に一泊した。翌日は今市泊まり、十六日には日光山へ着き翌日にかけて御宮御祭礼で、諸物頭以下、悉く神輿に供奉し諸役をつとめた。秀忠は桟敷でこれを見物している。翌日は中禅寺へ詣り、伶人の舞いや舞楽などを見て、天海僧正などの導師で四箇法要を執行、十九日、山をおりた。

この夜ふたたび宇都宮泊まりの予定であった。が、急遽、予定が変更されたのである。

「このまま、江戸へ御帰城に相成る」

そう聞かされて正純は顔色を変えた。

「なんと！」

御宿泊のため饗応の準備はすべて整っている。ここで、将軍が予定を変更するということは正純の面目を失うことになる。いまだ乱世の余燼が燻っているのだ。安心して泊まれない、という事実が残れば、これは、

「上野介謀叛の疑いあり」

と、とられてもしかたがないことであった。

「な、なんとして、左様な……」

「御上意なれば」と、老中奥掛り井上主計頭正就は突っぱねて、「御疑いこれあり、御旅館を調べたい」

高飛車なのは将軍の権威を着ているので当然のことであった。

正純は狼狽し、蒼くなったり赧くなったりした。

「御旅館営造のさま奇巧を極め、蔟簇を数多く設け、御旅館を高く作り、その下を自由に数人往来すべく構え、剰え、この営造深夜に急ぎて構造せしとか、その模様、とくと拝見したい」

主計頭の口吻には、明らかに糾問の調子がある。

「その御不審は些か、異様に存ずる。上様のおん為、湿気少なく、御快適ならんことを専一に営造いたしたもの。遣り戸ごとに又戸一ずつを設けましたるが、これはもし地震なんどありて、地傾き、戸の開かざらんときには、遣り戸より出させ給うに使いまつらんと存じてのこと。深夜に及びしは、一部見苦しき箇所あれば、急ぎ改築いたしたるまで、なんら御不審のあることではござらぬ」

「案内されたい」

「いかにも、御案内仕る。とくと御覧あれ」

よく見て貰いたい。不審を露らして貰わねば、一分が立たなかった。それに、先日は泊まったのだ。その折、別段のことがなかった。正純はいささか、気張りすぎた。秀忠が日光山にの

ぼっている間に、急改築して、秀忠を驚かせ、歓ばそうと思ったのである。かれは三万三千石から、十五万五千石に急上昇したことの、それにふさわしい威容と内実を表現することに、苦慮していた。それが、裏目に出ることに気がつかなかったのだ。

身上が増えれば、それだけの権威を持つのは当然だった、武門とはそういうものだ。が、それはあくまでも、乱世の場合だ。余燼消えやらずとはいえ、為政者は、〝平和〟の実証をもとめる。そこに正純の浅慮があった。父正信の杞憂通りになった。

正純は鉄砲組が少ないために、鉄砲を作らせようとしたが、鉄砲鍛冶が藩内にいないため堺に発注して作らせ、これをひそかに、通常の荷物の如く装わせて送らしめた。が、このことも、正純の〝謀叛〟を裏づけることになったようである。

もしも、正純に秀忠暗殺の意図があったら、最初に泊まったときにやっている。何も、二度目にやる必要はない。

が、その解釈も悪くとれば、

（一度目は安心させていて、二度目に御警固の弛んだ隙に）

と、いうことになる。二三日の留守の間に改築したのは、そのためであろう、というのである。

ともあれ、案内した。謀叛の意図のないところを、よく見て貰わないと大事になる。

「高楼の下に蒺藜を設けるなどと、左様なことは一切……」

案内して、ぎょっとした。

「あれは何じゃ」

主計頭が眼ざとく見つけた。

「何やら……何じゃな、あれは」

正純の顔色はなかった。あるはずがない、塵一つとどめず清掃したところに、鉄のマキ菱が無数に刺さっているではないか。

愕然となって立ちすくんだ。

「なんじゃな、あれは？」

「知らぬ。われら存ぜぬ……」

「ほう、この城は上野介どの、おてまえの城ではなかったか」

「誰が、誰かが、仕組んだのだ」

「左様か」

主計頭はとりあわなかった。旅館の寝所に入ったとき、異様なことに気がついた。その気がついたというのも、突然、天井の一部、格天井だったが、白鑞張りの板がはずれて落ちてきたからである。

「わあっ、こりゃ何と！」

主計頭の頭上である。

ただちに天井を調べた。格天井は、秀忠が泊まった夜は、花鳥風月が華麗に描かれていた。これを二、三日のうちに、白鑞張りに代えた。上野介としては、その趣向と、それだけの誠意

を見て貰いたい気持ちからであろう。

工事を急いだために、構造上、仮止めにした。この白鑞は、本朝固有の銅合金で、その華やかさを自慢できると思ったのだ。が、板と違い、重い。充分な工事ではなかったのが、命とりになった。

「これは、上様を押し潰そう所存か！」

おのれが頭の上にけがしそうになっただけに、主計頭の憤りはすさまじかった。

「かような有様なれば、いま一つ、もっと糺したいことがある」

城外に新塚を築いたというが、そこを調べたい、と言った。

この様子を、白鑞天井の上で、鷹とお若は聞いている。もとより一枚故意に落としたのは、かれらの仕わざだった。

〈お若、塚へ行け〉

〈はい〉

〈根来衆の仇が討てるな〉

マキ菱も、かれらの所為だとは知らぬ。

城外に新しい塚が出来ていた。そこまで、正純が案内したときである。もう宵闇がおりていたが、塚から、異様な火が燃えでているのが見えた。

闇に火が飛んでいる。ゆらりと燃えあがった炎が、ふっと消え、また、ふわっと上がる。闇の中の新塚でのこの怪火は、主計の頭を慄然とさせた。

「この塚の中に、何が埋まっているぞ、あの火は正しく、燐火と見たが、かように夥しい燐火は尋常ではない」

正純は口がきけなかった。

その耳に、塚の下からもれてくる呻きが聞こえてきた。

〈上野介謀叛じゃ……〉

〈われら根来同心を殺したは、上野介謀叛の証拠を摑んだからじゃ……〉

〈この怨み必ずや霽らして見しょうぞ〉

地下からの声であった。

呆然として正純は、ただ、唇をふるわしているだけだった。もはや何と弁解しようとも、とりかえしがつかなかった。主計頭は塚を掘り起こすことを要求している。塚の中には、根来同心衆百人の死体が埋まっていることを誰よりもよく知っていたのである。

急ぎの工事のため、本多の家来たちは一人残らず出て働いた。百人の根来足軽同心にも、その工事に出精するよう命じたのだが、（大公儀より御附属ありし所にて、私の役に従うべきに非ず）とはねつけたので、正純は怒りにまかせて誅戮したのだった。

それが、こういうかたちであらわれようとは。

「――根来同心百人、大公儀よりの御附人たるに、異様なる普請つとめるよう強要し、それを拒んだことを怒って悉く首切って棄てたりとの世上の噂、まことか嘘か、この眼で見たい」

主計頭は、昨夜入手した差出人不明の密告の書状が、すべて真実だったなと思った。塚が掘

りかえされ、夥しい腐乱の死体が発見されたのは、煙草一服する間のことであった。

秀忠の行列が古河に近づいたとき野渡の林の中から、異様なけむりが上がっているのが見えた。不審火と見て先供が駈けつけてみると、阿弥陀堂の中に、全裸の男が縛られていた。異様な縛られかたでその縄の一端に、古河城小廓奉公人安食ト申者ニ候、罪障有之……云々とあった。

供の一人が、その縄を切ったとたん、どういう仕掛けがあったものか、安食のからだは宙にはね、首吊りのかたちになった。

「――気が済んだか、お若」

大利根の流れに孤舟が浮かんでいる。鷹は瓢の酒を美味そうにのみながら、言った。

「百人衆の仇討ちが済んだな」

「はい……でも、上野介が改易になるまでは」

「それも近いうちだ。秀忠もあそこまでやられては、許せまいからな。しかし、お亀婆アの手助けをしてやることになってしまったのは、本意ではないな」

鷹は哄笑した。

はるか川下の栗橋のあたりを、夥しい行列の渡河がはじまっていた。

白蛇の女

1

危険な仕事に携わっている者は、ジンクスを気にする、いわゆる縁起を担ぐ、というやつである。

朝起きたとき烏の声を聞いたから、今日は縁起が悪いとか、夜の蜘蛛は祟りをするとか、土瓶がひっくりかえったから、今日はろくなことはないとか――非科学的な心配をする。

むろん凶事だけでなく、反対のことも多い。茶柱が立ったから、何かいいことがある、とか、右の耳がかゆいから、吉報があるだろうとか、そういった吉凶への暗示を、すごく気にするのである。

生活と人生の、不安定さは、社会が存在する以上、免れないことなのだが、それを予知した

い気持ちが、そうしたちょっとしたことにも、吉凶の前兆というふうに感じたいのだろう。

その宵、不知火ノ鷹は、隠れ家の〝巣〟から出たとき、蛇がするすると道を横切ったのを見た。

（不吉な！）

咄嗟に思った。

どちらかというと、鷹は、そうしたものを信じない。おのれの力だけが頼りの一匹狼の忍者である。

多くのなかまと連携して行動する者たちのように、安易な日常ではなかった。四面、常に敵の眼を感じずにはいられない凄絶な生き方をしているだけに、漠然とした生き方などはできない。

おのれに対しても冷静であらねばならなかった。

おのれのワザを的確に見つめ、可能性を識ることが生死の淵を歩む者にとって、絶対的に必要なことであった。

吉凶の通俗的な判断に頼っていては合理的な行動はできない。常人の眼をくらまし、鍛錬による迅速の行動と体験が育んだ感覚が、異常なほどの力を与えるのである。

鷹は恥じた。

そんな蛇を見ただけで、不吉と思うような愚鈍な一面が残っていたことを、恥じた。

（いかんな、おれもヤキがまわったか）

宵闇の中で苦笑した。

だが、その日、蛇が横切ったことは、必ずしも無関係ではなかったのである。

吉原廓に近い堺町に来たとき、鷹はまた蛇を見た。

それは、一見、蛇とは見えなかった。何かの白い紐に見えた。

一尺ほどの短いものであり、宵闇の中で、妙に白く鈍い光沢を放って見えたのである。

普通ならば見すごしてしまうところだ。鷹は拾った。

まさしく、白蛇であった。まだ死んではいず、ひくひく息をしている。

ちょっと見たところ、外傷らしいものはない。土の上で悶えたらしく、腹のあたりが、汚れている。

心ない者に踏まれたのであろう。わざとやったにしては、まだ生きているのが、不思議であった。ちょろちょろと、それこそ道を横切ろうとして踏まれたのかもしれない。

鷹は何かの因縁を感じた。懐中に入れて三歩と歩き出さないうちに、息せき切ってきた女がある。

御殿女中らしい若い女だった。堺町角に、たばこを売る店がある。はな紙、小袋なども売っている。この角からあらわれた。

御殿女中は急ぎ足にくると、地面をきょろきょろ見まわしていて、鷹の傍を通りすぎた。

（さては、この女……）

ぴんときた。こういうときの直感はまず、はずれない。

（白蛇をさがしているのだな）

鷹は足をとめ、女にそのことを問いかけようとした。

が、やめた。こちらから、そこまで親切にすることはない。

その女の真剣な表情を見たとき、鷹の胸にあらたな興味が湧いている。

ことに、御殿女中だったことが、一層その思いをそそりたてたのである。

白蛇と御殿女中――

まるで判じ物だった。が、何か謎を感じさせたのである。

鷹は何気ない様子で立ち去ろうとした。

その一瞬の感情が、女には察知されたのだろうか。

「卒爾ながら……」

と、呼びかけていた。

「お待ち下されませ」

鷹はものうくふりむいた。

「おれか」

「はい」

「知らぬな、そのほう。見たことのない顔だ」

「はい、お許しを。不躾とは存じますれど、お訊ねしたいことがございまして」

「ふむ、おれは先を急ぐ」

「でもございましょうが……」

ほかに通行人はなかった。宵のこの時刻。夕餉のときであろうか、軒端を何やらものの煮えるいい匂いが流れている。

女は、他に通行人がない以上、鷹が知っている、と睨んだのではないか。

「人にものを尋ねるときは、まず、おのれの姓名を名乗るものだ」

「はい。ゆきえ、と申しまする」

「御殿の……」

「はい、お年寄多賀野さまにお仕えしておりまするが」

「面妖だの」

「え？」

「御殿仕えの者が、かかる時刻に、かかる場所にあるとは、いささか……」

「はい、その御不審は当然ながら、実は御宿下がりの……」

女はちらと、美しい額に焦立ちを見せた。

鷹の口調が、逆に彼女の素姓を詮索していると気がついて、きっと女は口をひきしめた。

「それで、その、実はおとしものをいたしましたゆえ」

「……」

「このあたりだと存じまするが、お見かけにならなかったでしょうか」

「そのものは？　金か、簪か」

「いいえ……」ちょっといい澱んだが、思いきったように、言った。「蛇でございます」
「……」
「白い蛇でございます」
「生きたやつか？」
「はい」はっきりとした返事だった。「生きております。元気のいい悪戯もので、これくらいの、可愛い」
「生きているなら、このあたりに間誤間誤はしていまいの。とっくに、そこらの溝の中か、家の床下にでも入りこんでいよう」
「――それで、お見かけしたかどうかを」
「知らぬなあ、元気のいい悪戯ものの白蛇か、知らぬなあ」
死にかけたやつなら知っている、と言い添えるほど、鷹は親切ではない。その女のために尽くしてやることはない。それよりも、この堺町と、御殿女中という組み合わせも、興をそそることとかなかった。

堺町は、当初上堺町、下堺町にわけて呼ばれていたが、たいていは堺町で通った。
江戸御開府のとき、泉州堺の出身者たちに地所をただでわけてやった。といえばていさいはよいが、このあたり沼地であったので、埋め立てさせた。
泉州堺は戦国と呼ばれた時代からの貿易港で、有得人（富豪）が多かった。

いわゆる会合衆、納屋衆などによって、合議制の自治体だったから御開府とともに直轄領となり、資本投下させたのだ。天正十年の本能寺ノ変のとき、家康は堺見物をしていた。
当時の日本では、もっともバイタリティにあふれた街だったから、家康は驚嘆し、堺人を高く評価したものだ。
それはさておき、この江戸の堺町は、埋め立てられたあと、堺の商人たちが地所持ちとなり、やがて、吉原遊廓が近くにひらかれたおかげで、繁昌の地になった。盛り場である。
芝居小屋が、次々とできた。
はじめ観世太夫一代能興行が元和七年に行なわれているし、それまでの社寺の境内や河原などが、興行の場所だったのを、掛け小屋から、ちゃんとした町中の興行に移したのが、この堺町である。
ついで中村勘三郎芝居が、中橋より禰宜町に移り、村山又三郎芝居が、葺屋町で興行された。
葺屋町というのは、屋根葺き職人が多かったから、命名されたというが、堺町の方は地所が高かったから、隣接地に移ったのだ。この葺屋町は上堺町である。
ところで、下堺町である堺町には、芝居小屋は天下一下り興行との名を喧伝している薩摩太夫の芝居がある。
紫の幔幕を荒木戸に張り、人形衣裳結構を尽くし、歌舞伎役者の衣類なども美々しく市中の人気を集めていた。
こういう芝居役者が、好色の対象となっているのはいうまでもない。

今日でこそ歌舞伎は芸術だが、当時は好色趣味の対象だった。男も女も、そこらの遊女と変わらない。

もともと、その発生からして、好色の存在だった。

河原者という蔑みは、そこからきている。理由は、それだけではないが、ともあれ、出雲の阿国にはじまって、唄や踊りを見せて、銭をかき集める大道芸で、それも、それのみにとどまらず、つまりは、〝顔見せ〟であった。

顔見世というと、吉原などの格子や、近代の写真を表に貼って、客に名指しさせた形式などと通じているが、事実、踊りを見せるというのも、からだの線のやわらかさ、媚る女の表情などで、

「今夜は、あの女を抱いたろ」

「なんぼかいな、あっちゃより、こっちゃの女のほうが色っぽいでえ」

「そら、寝て見んことにはわからへんわな、寝間のよい女は、存外、腰ぶりのどっちりしている方がな、それ、たこつぼだわいな……」

などという品定めの場になったわけだ。

その風潮は、この寛永の時代もむろん変わらない。いや、江戸に及んでいよいよ隆盛と、したがって淫靡さを増した。

女歌舞伎といえば、イコール遊女といっても、間違いのない存在になっていた。そのために、幕府では、女歌舞伎を禁じた。

以来、この国では、女歌舞伎というものが、公的に失われた。

女芸人の芝居をする者はいたが、それは傍流にすぎない。いなかや場末の小屋で、こそこそやる分には、お目こぼしという程度であった。

しかし、興行主などにしてみれば、それだけ、うけているのを、このままやめてしまうのは勿体ない。

そこで、女を男に代えた。

〝若衆歌舞伎〟である。これは野郎歌舞伎などとも呼ばれるようになった。

女が男になっても、大した変わりはない。何しろまだ、戦国の蛮風を受けて、男色が流行っている。

みめよい男が、女装して、あでやかに踊ったり、男姿のままの立ち役と濡れ場を演じる。

つまり、宝塚少女歌劇の逆である。

よほどこの国の人々は、変態的なものが好きらしい。あるいは、女歌舞伎が許されていたら、完全に遊女と同化し、今日の歌舞伎の形態も残らなかったかもしれない。

そうやって、若衆歌舞伎が誕生したわけだが、男も女も、また熱狂した。

泰平ということが、淫風ますます熾烈になるということは、現代の風潮を見てもわかる。

武江年表に、次のような注記がある。

〝女かぶきというは遊女なり、勝れたるを称して和尚と呼べり、男かぶきになりては、美少年を選て舞わしむ〟

この短文でも、その間の消息、歴然たるものがある。また元和年間記事に、〝女歌舞伎やみて若衆歌舞伎となる、男かぶきと云う名目見えず〟と。

役者たちは、まともな〝男〟ではなく、若衆――色若衆だったことが行間に判然している。客は、したがって、女にかぎらなかった。

男も多い。いわゆる、男色で、陰間遊びである。

この舞台子、色子らを買うのは、男色ではあるが、衆道とはまた違うそうだ。古文献にその違いが説いてあるが、ここで述べるひまはない。

それにしても、男が男を買うのは、いささか異常だが、女が男を買うのは、必ずしも異常ではない。

金の授受の立場が、反対というだけで男が女を買う売春は、人類の歴史始まって以来、ずっとある。

その女も、したがって、別段、珍しいわけはない。

ただ、世間ていを憚かるだけでなく、身分上からも、大奥の御殿女中というのは、拘束されていた。

けがれがあっては、大奥に上がれない。

若衆歌舞伎の色子を買うことは、むろん、けがれる行為と見られる。

（あの女も……）

と、立ち去ったと見せて、鷹があとを跟けると、その若い奥女中（厳密には、奥女中に仕える部屋子）は、一軒の茶屋に入っていった。

その茶屋は芝居小屋の裏手にあって、役者が顔を隠して、こそこそと出入りする、桧屋という家だった。

2

「ただいま立ちかえりました」

その若い女は、奥まった部屋に通されると、襖の外から、声をかけた。

「――ゆきえか」

きんきんと、かん高い声がした。

「はい」

「して、あれは？」

「はい、申し訳ございませぬ。見当たりませなんだ」

「それは……ええい、困ったことを。もう一度、見てくるがよい、どうあっても探すのじゃ」

「でも……」

「見つけ出すまで、戻ってはならぬ。如何ようなことがあっても探してまいるのじゃ」

「は、はい……」

しかたはない。上役の命令である。当時の上下の差というものは、現代の労使の関係や上司下僚のそれとは違う。

絶対的な命令権がある。いうなれば生殺与奪の権を持っている。

ゆきえは、うなだれて、しおしおと出ていった。

「――困った子じゃ、気が利かぬ」

中の老女は、こう弁解げに呟いて盃をとりあげた。

老女といっても、まだ三十になったかならぬかの、うば桜である。色は白い。顔立ちも悪くない。金と閑にあかせて手入れしているから、ちょっと見には、二十代半ばにしか見えない。

「――お年寄さま」

と、酒をついだ男は、薩摩太夫の人気役者で、むろん女形の菊三郎という若者。

十九歳という評判だった。年齢は本当かどうか。役者というものは、実際の年齢よりもずっと若くいいたがるものだが、その十九歳というのは、かけねを考えれば、二十は過ぎているのだろう。

色子のほんとうに女形ぶりによいのは十四から十六といわれる。十七になればまず、誰でも生えない者はいないし、大きくなる。十八ならもうのどぼとけが目立ってくるし、そうなるとまず、女形としても、もう薹立ち草で、したがって、それから、男役に転じるか、肌売り専門になる。

専ら、浮気な人妻や、尻軽娘、閨淋しい後家などに買われる。

つまりは、売春夫というわけだ。芝居の立ち役などが、それをつとめる者が多いのも事実だが、これは、男っぽさが売り物で、薹の立った女形とは、はじめから違う。女役の後身が、立ち役にはなれない。

歩き方から挙措動作、すべて女風が身につきすぎているのだ。

ところが、この女とも男ともつかない薹立ち草を喜ぶ客がいる。少なくないのだ。

男なら強い者がいいはずだが、粗野なのは嫌という者が多い。

粗野で乱暴な男なら、そこらの折助や鎌ひげ奴など、ごろごろしている。路傍の石ほど、ありふれている。

やはり大金を出して買う以上、眉目やさしい男のほうがいいと思うようになる。

この老女、多賀野も、そんな客の一人だった。

「そのお年寄だけはおやめというのに、わからないのかえ」

「あら、ごめんなさいまし」と、女形は身をくねらせて、「つい、忘れてしまって」

「多賀野とお呼び」

「恐れ多うございますものを」

「お呼びよ、わらわは、ここへ来たときばかりは、大奥も身分もすべてを忘れて、裸になりたいのじゃ」

「ほんに、お美しい裸ですもの」

「にくいことを」

多賀野は、女形の掌を、きゅっと、つねった。
「まあ、ひどい！」
「痛かったかえ、痛かったかえ、菊三郎え」
多賀野は、菊三郎の手をとって、唇で吸ってやっている。
そうするうちに、しだいに酔いもまわってきて、昂ぶってきたのか、
「ああ、菊三郎、あたしは……」
と、しがみついた。
「お菊と呼んで」
菊三郎のほうも、その情感の中にひきずりこまれている。
金で買われる身では、どんな大年増でも、いやな顔でも我慢しなければならないだろうが、この多賀野くらいだったら、我慢ということはない。
豊満なからだだし、名香をふんだんに使っているし、菊三郎のほうでは男になれる。
二人は抱きあって、唇を吸いあい、そのまま、からみあって、横倒しに倒れると、もう、女の手は、男の股間にすべりこんでいる。
菊三郎の、白粉を塗った手も、むろん黙ってはいない。多賀野の裾をはげしくかきたて、ふとももを剝きだしにして、上へすべりのぼる。
その痴態を、さっきから、鷹は、天井の一隅から見おろしていた。
（なるほどな、あれが、ゆきえの旦那の御老女か）

白蛇をペットにしていたのであろうか。
大奥の女というものは、異常な世界だけに、趣味も変態的なところがある。白蛇というのは、少々変わりすぎていた。女の中には、蛇をおのれの股間に遊ばせ、入れたり出したりするという。
よく馴らされた白蛇は、心得ていて、女の花弁の中へわけ入って、ほどよく昂奮させては、出たり、又入ったりするというが、鷹はまだ目撃したことはない。
（ひとつ、この白蛇を戻してやるか、そうすれば、わかるが）
と、見おろしていた。
それとは知らず、この部屋では、菊三郎の手が白蛇のかわりに花芯に到るや、多賀野が身もだえして喜悦の声をあげていた。
「あ……いや、いやじゃ、左様な、あ、いやじゃと申すに」
拒んでいるのは、プライドとそして声だけである。
なんと、その手は、男の手くびを握っているが、させまいとして、引き出そうとするのではなく、逆に、ぐいぐい、そこへ押しつけているのだ。
「お、およしッ、無礼な！」
何が無礼なものか。もう多賀野のそんな気質は百も承知している色子である。
ここで、女の言う通りに、手を離したら、殺されかねない。
「嫌じゃ、無礼者、わらわを何と心得るかや、何と、あーっ」

悲鳴をあげ、苦しみ、悶えて楽しんでいる。

男に犯される楽しみを味わいたいのであろう。その夢の中が、しかし、現実になろうとは、思いもしなかったにちがいない。

ぬすみ見ている鷹が、はっとしたのである。

どこからか飛来した短刀が、女に馬乗りになった菊三郎の背を貫ぬいたではないか。

3

好事魔多し、という。男女のあまりにも濃厚な痴態に嫉妬してのことであろうか。

そのまぐわいのさまは、いささか見馴れた眼にも正視し難いほどのものであった。

女は下になっていた。豊満なからだの半ばは剝きだされ、顔からくび、胸もとまで、べったりと塗りこめた濃い白粉が、肌の色とのちがいを明らかに見せていた。そのちがいは、女の目尻のしわや、のどくびにあらわれた年齢を隠すもので、みにくいはずのものだった。

常態の男ならば辟易するが、菊三郎は平気だった。というより彼自身が、また白粉に包まれているからである。

この女おとこが上になっていた。

お年寄多賀野は、大奥で権力を振るい、若い奥女中たちや、部屋子などをいじめている。それだけに、かえって、こういう陰間に逆に虐めてもらいたいのではないか。被虐的であるほど、愉悦が増すようであった。

「あれ、およしな、無礼な、そこをそんなに、なぶらないで、あっあっ……」

そんな自分の悲鳴に、陶酔しているようだった。

菊三郎は、金になるから、この豊満なうばざくらを思いきりいじめている。馬乗りになり、はげしく攻め立てるのも、この臺の立った色子にしてみれば、男の客からいじめられるお返しのようなものだった。

淫靡な声をあげ、悶えて楽しんでいる女のからだと、男のからだの交わりは、異様なばかりだった。まるで舞台で演技しているかのような大仰さだった。

その愚かな痴態に終止符を打つような兇刃の飛来だったのである。女に馬乗りになった菊三郎の背に、ぶっつりと短刀が突き刺さったのだ。

天井のふし穴から見おろしていた不知火ノ鷹は、はっとした。その飛来した方を見た。が、あいにくと死角になっていて見えない。

（誰が……）

愚かな男女にはちがいないが、殺されねばならないほどの、何をしたというのか。たかが、芝居の女形である。

鷹は天井からおりた。押入れにおりた。隣の部屋であった。廊下へ出ると、ふっと、前を女の影が走った。

それは一瞬、黒い風のように見えた。

（こやつ！）

追おうとした背に、

〈おれだ〉

と、声がからみついた。

〈殺ったのは、おれだ〉

その声を〝木霊返し〟と悟ったときは遅い。その影はすでに視界から消えている。

巧みな忍び遁法であった。おのれは去りながら、声だけうしろへ投げる。声を投げるというが、忍法ではこれを〝打ちつく〟という。さながら、鞠を飛ばすが如くで、声の鞠ははねかえってくる。

馴れた鷹ですら、壁の向こうに、誰かいる、と思ったほどである。が、瞬後に木霊返し、と悟ったのだ。

ただの怨みの兇刃ではなかった。忍びノ者が投げた刀である。単純な事件とはいえない。

芝居茶屋は大騒ぎになっていた。半裸の多賀野が、鮮血に胸を染めて、恐怖の悲鳴をあげて走り出したのだから、茶屋の中は混乱した。

菊三郎の胸を貫いた短刀の尖先は一寸ほども突き出し、血を噴いたのである。

「殺される、殺される、助けておくれ」

多賀野は、裾を合わせるどころか、胸をはだけたまま、まるで狂女のようになっていた。

お供の女たち陸尺たちが、おろおろしているし、柊屋の亭主夫婦もすっとんできたが、この場の有様に、口もきけない。

座元の薩摩太夫に知らせにゆく者、町奉行所に注進に行く者、大騒ぎであった。

この間に、ゆきえはてきぱきと指図して、

「内聞に済ませるよう、取り計らって下さい」

と、柊屋の亭主に頼んだ。半ば威しである。

「大奥のお年寄が、かような場所で、役者買いしていたと知れたら、お咎めは必定」

「でも、てまえどもでは、左様な嘘を吐くなどとても」

「何を言うのです。お咎めは恐ろしいですよ。家財没収、家族一統所払いの上、おまえは遠島」

「え、遠島！」

「三宅島か八丈島への島流しは、一生戻って来れませぬ。あるいは佐渡の金山で一生苦役……」

「左様な目におうたなれば、死んでしまいまするわい」

役者とひいきの男女のあいびき茶屋だ。金の使いみちに困っている連中の楽しみごとだから、存分にふんだくって濡れ手で粟の色茶屋しょうばいで、亭主はぶくぶくに肥っている。美食の上に遊んでいれば、誰でも、こういうからだになるだろう。こんなからだで佐渡の金山にやられたら、三日と保つはずがない。

「よろしいですね。知らぬ存ぜぬで、通すのですよ」

「は、はい」
「こう答えるがよい、菊三郎が、気分が悪いといって来たので、寝かしてやった。そこで起こったことで」
「へえ、一人で」
「そうです、菊三郎は一人だったと。かまえて、旦那さまの名前を出してはなりませぬ」
大奥の身分ある御女中たちは、こういう茶屋にとっても、いいおとくいなのだ。
それに男女の楽しみの最中の兇行ということになれば、二度と客は来なくなる。
ゆきえは強く念を押すと、多賀野を乗物に乗せて、急いで出立させた。
お代参を口実に城を出ての楽しみは、半ば公然たるものだったが、こういう事件が起こっては、いやでも明るみへ出てしまう。
不知火ノ鷹は、この騒ぎを高見の見物していたわけだが、行列が去ったと思うと、ゆきえだけが引きかえしてきた。
「御浪人さま」
凝っと鮒のような眼が、笠のうちの鷹の眼を見上げて、
「のちほど、お訪ねしたく存じます。御住居をお教え下さいまし」

4

そのとき、鷹は懐中の白蛇を弄んでいたのである。
白蛇はまだ死んではいなかった。
ひくひく動いていた。懐ろ手をしたまま、掌にのせていると、ひくひく動いているのが面白かった。まるで、それを見透しているように、ゆきえは言った。
「教えて下さいますね」
「――男一人の住居だぞ、それでも、くるか！」
「ええ、伺いまする」
これも白蛇の取り持つ縁か。出しなに蛇が道を横切ったのは、凶ではなく吉だったのか。
鷹は飯田町の隠れ家を教えた。それは馬借小屋の裏手にあり、不潔な一帯だったが、そのために、いい隠れ家になった。敵に尾行されたとき、専ら、籠抜けするのに、用いている。
そこを指定したのは、御殿づとめのゆきえが、外濠を脱けるのは、面倒だろうと慮ったからである。ゆきえの身分も、大奥でどういう役目かわからないが、後世ほど、大奥の制度はきびしくない。
その〝巣〟へ戻ってきた鷹は、部屋の中に入ったとき、
（……!?）異変を感じた。

あの女か、と思った。直感である。何がどうなっていたのではない。そのときは、何の異常もなかった。ただ、空気だけだ。気配といい直そうか。誰かが潜んでいる気配がした。

しかし、それも、きわめて、僅かなものだった。はっきりと明言できるほどのものではない。

鷹が全身の神経を集中したとき、するすると、何かが這いだすのが見えた。

蛇だった。白蛇ではない。青蛇である。一尺あまり、小さなものだ。

鷹はむずと、その蛇をつかんだ。

「どこから入りこんだか……」

ぱっと一隅に投げた。そこに呼気があったのである。蛇が飛んだあとを追うようにして、手裡剣が走っている。もんどりうって窓から転落した影の上へ飛んでいた。

「何やつだ！」

手裡剣を顔面に浴びて血だらけになっていた男は、忍び刀を抜き放った。鷹へ斬りかかると見せて、ぱっと、おのれの首を斬った。異様な逆手斬りであった。一気にかき切ったのである。星型手裡剣三箇を面上に突き立てたままの首は、すぽっと、宙へはねた。

かなわぬと見ての、いさぎよい自刎であった。

「――なかなかのやつ……死を以っておのれの口をふさぐとは」

よほどの組織であろう。そこは馬小屋との間のせまい人目につかない場所であった。馬の小便などが流れている。この悲惨な忍者の最後は、他に誰も見た者はない。おそらく、その死体が腐敗臭をまき散らすようになるまで、誰にも気づかれないだろうが、鷹は、

（この巣も今日までだな）

と、思った。

いさぎよく、この隠れ家を捨てることで、面倒を避けるのである。忍びノ者はトラブルから身を躱さなければならない。良きにつけ悪しきにつけ、世上に名と顔を知られては、飯の食い上げになる。この隠れ家を捨てることに、未練はなかった。

「だが、なぜ、蛇を？……」

菊三郎を殺った奴か、そのなかまにちがいなかった。

なぜ、鷹を狙ってきたのか、あの現場を目撃されたからか。しかし、目撃したのは、老女多賀野と菊三郎の情事と、その死だけで、下手人を目睹したわけではない。

（ここまで執拗におれを狙ってくるとは）

その真意はどこにあるのか。

鷹は、白蛇をつかみだしてみた。爬虫類は一体に生存本能が旺盛なものだが、この白蛇はまだ死なない。ひくひく動いて尻尾を動かしているのだ。

そのとき、訪う声がした。女の声がした。ゆきえだ。やはり来たのである。

鷹は白蛇を戸袋の中に入れてから、

「待っていたぞ」

と、言った。

ゆきえは、入ってくると、きちんと坐って一揖した。

「わたくしがまいりました用向き、おわかりでございましょう」
「わからぬ」
「――御礼はいたしまするゆえ、是非とも」
「何の御礼だ」
その言葉をどう受けとったのか、ゆきえは膝でにじり寄ると、ふっと灯を吹き消した。
しゅるしゅると、帯がすべり解かれる音がし、闇の中に、香が匂いたった。女は着物を脱いでいる。
闇になっても、鷹の眼は冴えている。女のすべてが見える。ゆきえの若いからだは均整がとれ、白い肌があまりにも美しい。
鷹は、その肌に眼を奪われながらも、闇の周囲にも警戒を怠らない。殆ど習性化した感覚は一つのことに奪われるということはなかった。
ゆきえは、一糸まとわぬ裸身を、その場に横たえた。
「――おねがい……」
と、羞じらいの声で言った。
「そっと、ね、おねがい……あたし、はじめてなんです」
女は、鷹を迎え入れようとしているのである。
何の御礼だ、と聞きかえしたのは、女の目的を問い詰めようとしたのだが、それを男の要求とうけとったようである。

鷹は女を抱いた。
かれが興味を持ったのは、指先を女の秘所に延ばしたとき、その肉襞の感触と反応のさまに、
(はじめて……)
というには、いささか、馴れすぎたものを感じたからだった。
情感の豊かな女は、道を歩いていても濡らすことがある。男のことを思うだけで、眼が潤んでき、しとどになってくるのだ。
鷹が触れた花弁は、情事を識っていた。が、それは、男を知っていたのではない。女同士のそれであった。大奥に於ける女同士のはげしい淫らな行為は、男との交渉などよりも、もっと影響を受け易い。
殆どが口淫に及び、ために陰唇を咥え、しゃぶり引くことが多く、奇型的にはみ出すからである。
それにしても、ゆきえが、鷹の男らしさにうたれて来たとは思えない。
女同士の行為を倦きたというよりは、この役目が、からだを投げ出さねばならないことを予期してきたのではないか。
むしろ、そのことに犠牲の喜びすらおぼえていたかのようである。
鷹を受け入れると、狂ったように全身をふるわせて、抱きしめてきた。
「ああ、こんなに、いい……こんなにも、いい……」
同性との情事では味わえなかった感覚であった。ゆきえは、叫び、泣き、そして、溢れさせた。

「も、もう、いいえ、もっと、いつまでもこうしていて下さいまし、もっと、ね、ゆきえが、死ぬまで……」

うつつになっての言葉は、本人の意識にあるまい。が、夢中であるほど、真実を洩らすものだ。

「もう、もう白蛇のことなど、ああどうでもよい」

そうか、と、鷹は納得した。この女、あの白蛇をとり戻しに来たのか。

鷹が知っているはず、と睨んできたのであろう。それほどまでにして、なぜ、あの半死の白蛇を欲しがるのか。

5

おちての後——余燼のなかで、ゆきえは、鷹のものを弄びながら、縷々として饒舌った。

大奥に於ける、御老女の対立のことだった。浅岡ノ局というやはり年寄がいて、多賀野の権勢を憎んでいる。前から卑劣な術を用いては、失墜させようとしているという。

多賀野も尻尾をつかまれぬために、役者買いも控え、女同士の慰めあいで我慢していたのだ。それがとうとう、たまらなくなって、お代参を口実に菊三郎を買った。

「あの菊三郎殺しは、浅岡がやらせたことに相違ありませぬ」

と、ゆきえは断言した。

忍者を指嗾するほどの権力者か。大奥の費用は、贅沢きわまるものだ。御年寄となれば、いくらでも自由になるのだろう。その金で、多賀野の蹴落としを策謀しているのか。

「——すると、白蛇は？」

「はい、あの白蛇は、旦那さまの可愛がっていたものなのです」

「……」

「芝居所へゆく途中、お乗物から落ちたらしく、それで、夢中で探していたのでございます」

「白蛇は珍しいが、しかし、そなたがからだを張ってまで探さなくても」

「いいえ、大奥では、旦那さまの白蛇寵愛のことは、知らぬ者とてありませぬ。それゆえ……」

もしも、あの白蛇を証拠として、柊屋で菊三郎と密会していたなどということになれば、多賀野の言い逃れは利かなくなる。

それを案じてのことだった。

柊屋には何も証拠になるようなものは残していないから、菊三郎との仲をいくら責められても、言いぬけできるのだ。が、白蛇をあの部屋で見つけた、ということになれば、万事休すであった。

「——なるほどな、そんなことなら、白蛇はもどしてやろう」

「まあ、ほんとうに」

ゆきえは喜悦の声をあげ、身を起こした。そのときはじめて、鷹の股間から手を放している。

「あそこだ」

と、戸袋に顎をしゃくった途端、何を見たか、鷹ははね起きていた。

鷹が、その場所を告げるのを待っていた影が、さっと、戸袋に飛びつくのが見えた。

最初に自刎した男は、鷹がゆきえに教えたこの〝巣〟へ先廻りしてきていたのであろう。群集の中にいたら容易に聞きとれたはずである。

この二人目の影はゆきえを尾行してきた奴かもしれない。戸袋をあけるや、白蛇をつかんで、空を翔ける——その右腕に、しゃーっと、鷹の抜き討ちの一刀が走った。

血の雨が勢いよく降りそそいだ。宙にとんだ片腕は、しかし、落ちなかった。

白蛇をしっかりつかんだ右腕は、落下寸前に、左腕がつかみとっていたのである。

それも、しかし一瞬だった。その忍者はぱっと右腕を咥えると、左手で忍び刀を抜き放って、鷹の二撃を鏘然と切りかえしたのである。

そのまま飛びだしている。

鷹の三撃が触れたのは、この男の踵であった。

あるいは、その僅かの傷も負わなかったら、逃走に成功していたであろう。重心を失って、よろめき、落下した。

鷹はその影を追うが如くに、拝み討ちの一刀を浴びせている。後頭部から背すじを割って、刀身の半ばを血に染めた斬撃であった。

自刎した男の上に折り重なって、その死体が崩れたあと、鷹は、咥えられたままの右手から、白蛇が、にょろにょろと這いだすのを見た。

御老女の浅岡はその夜落ち着かなかった。若い部屋子を裸にして、なぶっていたが、心はそぞろであった。大金をつかませて頼んだ甲賀者の吉左右がないので、いらいらしていたのである。

「あ、旦那さま、そこは、お許しを」

娘が悶えるのを、聞いていなかった。娘の花芯をまさぐって、心は別のところにある。その指の荒々しさは、おとめのその、未通の証拠である美しい花弁を、さながらむしりとらんばかりであった。

「あ、やめて！」

とうとう、たまぎるような悲鳴をあげている。

「ええい、大仰な」

浅岡は舌打ちすると、娘の髪をつかんで、おのれの下腹部に顔を押しつけた。

「さ、犬におなり、男におなり、上手に唇を使わねば許さぬぞえ」

「は、はい……」

「舌もじゃ、舌を長う、長う……そして奥へ」

双眸がぎらぎら油を流したように、異様に輝いてくる。

と、その眼が何を見たか、ぎょっとしたように、瞠かれた。

屏風のかげから、ちらちらと、白い紐のようなものがすべり出てきたものだ。

「あ……」

白いものは、一尺ばかりの生きている紐のように、するすると、近寄ってきたではないか。

「し、白蛇！」

それも一匹ではなかった。二匹、三匹、四匹……行燈のわきから、部屋の隅から、蒲団の下から、ちろちろ、するするとあらわれてきたのだ。

見る見る白蛇の数は増え、十匹、二十匹、三十匹と増えてきた。まるで、多賀野の怨念のように、それらは、浅岡めがけて這い進んでくると、膝にのぼり、手にのぼり、背中に、腹から胸に、とのぼってくるのだった。

「あ、これ、お松、お松、この蛇どもを早よう……」

と、部屋子の女を呼んだが、口淫を命じられていたお松は、いつの間にか居なくなっていて、そこら中、白蛇ばかりだった。仰天して逃げまわる浅岡の髪の中に耳の中に、蛇は入りこもうとする。

「あれ、助けておくれ、へ、蛇が、蛇が、この蛇どもが……」

無礼な蛇たちは、のたうちまわるからだにまつわりつき、一匹は頭を振りながら、股間の濡れたところに入りこもうとする。浅岡は殆ど無毛に近かった。蛇が入りこもうとするのは、前だけではなく、うしろもそうであった。浅岡の菊座は蛇の小さな歯で嚙み破られてゆくような激痛に、彼女は四肢を突っ張って悶絶した。

彼女が、介抱されて正気にかえったとき、すでに閨房には一匹の蛇もいなかった。

「へ、蛇どもは……」

あわててあたりを見まわしながら、

「蛇どもはどうしたぞ、殺したかえ、何十匹も、何百匹も……あの蛇どもは、何としたかえ」

きょときょとしている浅岡の頭には、あのみごとな長い頭髪が一毛も残っていない。蛇狂いの間に剃りおとされてしまったのである。

奥女中たちも、医師も、顔を見合わせて、首をかしげた。

誰の眼にも、御老女浅岡は発狂したとしか見えなかったのである。

「――白蛇を可愛がるとは、いささか異常だな。多賀野もこりたろう」

と、鷹はゆきえを愛撫しながら言った。

「はい、でもあたしに懲りないで」

ゆきえは甘えて鷹の胸に顔を埋める。あたしは鷹に愛されて倖せだけれど、旦那さまは、いつまでも男なしで過ごせるか、二、三ヵ月もすれば、菊三郎に代わる役者を探すのではないかと、ゆきえは考えながら、忍者を恋人に持つことができて果報者だと思うのだった。大奥の部屋にまで忍びこんできて抱いてくれる男は、他にはのぞめないのである。

色絵皿

1

忍びノ者は、武芸十八般をよくするが、本来的に、それはいわゆる兵法者とは相違がある。兵法は必ず〝攻め〟である。禅と結びついた兵法は鹿爪らしい活人剣などと称するが、言葉の綾にすぎない。所詮剣は人を斬る道具だ。忍びノ者の刀法は、しかし、用間を本命とする以上、おのれを護るために多く使われる。

不知火ノ鷹が、その男を斬ったのも、攻撃の鋭さゆえである。肥前平戸の街であった。その男とは、オランダ坂ですれ違った。平戸の港が閉鎖され、貿易港は長崎と指定されたのは、数年前である。それまでポルトガル船の入港にはじまって、大いに栄えた平戸は火が消えたようになっていた。

平戸の港の入口に、オランダ商館が広い敷地を占めていたが、それは海辺の波止場から、山手へかけて、山腹を利用してあり、五尺ほどの厚い塀が、中をのぞけぬように囲続している。城下の者は、このオランダ塀に沿って急坂をのぼって、ぐるっと遠廻りしなければならないのである。

鷹はそのとき、坂をおりてくるところだった。

下から駈け上がってきた者が、なぜか提灯もなく、急いでいて、鷹を見て、あっと、たたらを踏んだ。

片側は藪で、木の枝が道を蔽うように張りだしていたし、すでに日が暮れたばかりというのに、他に人通りはなかった。

曲りくねった急坂のせいもある。急いでいた眼に鷹の姿が、行手を遮ったように見えたのだろうか。疑心暗鬼がそうした行動に駆りたてたのかもしれない。その男は、やにわに脇差を抜いて、突っかけてきた。

鷹は反射的に身をひねった。このときはまだ抜刀していない。腕をつかんだ。

「何をする」

突き放した。狙われるおぼえはなかった。

相手はオランダ塀にぶつかったが、ひるまずに、更に斬りかかってきた。鷹は飛んだ。オランダ塀の上に立った。身軽い。そのまま、相手が逃げたらそれきりであったろう。逃げようとはした。が、そのとき、何か落とした。けたたましい音がした。

落とし物をしたことが、踏みとどまらせたのである。鷹が塀から飛びおりようとするのを掬い斬りにきた。

この殺気が鷹を攻勢に転じせしめている。鷹がひらりと舞いおりた一瞬に、噴血の異臭が夜を染めた。

「愚かな……死なずに済んだものを」

ゆきすぎようとした足に、それが触れた。

包みから白いものが、出ている。皿だった。絵皿であった。

夜目の利く鷹には、その絵柄が一目でわかった。

はみだしていたのは、半欠けである。落としたときに割れたのだ。

「色絵ではないか……」

妖しい秘戯図であった。

うすく藍のひかれた皿面に、女の肌が、目に眩しいほど、白い。男女のからみあいである。女の表情も、快楽をあらわにしている。

好色絵は、屏風や書物や、扇面にまで、見ることが多かったが、皿のおもてに描かれたのは、はじめてだった。

包みには二枚入っていた。一枚は落ちた拍子に割れ、一枚だけが無事だった。

「どうしたのか、この色絵皿を？」

男は脳天から斬り割られて、即死に近い。まだ手足はひくひく動いていたが、断末魔の痙攣だった。

鷹は坂を下がっていった。厚いオランダ塀に裏木戸がついている。

そこから出てきたのかどうかわからない。

鷹が通りすぎると、しかし、その暗がりに白い顔が浮いた。一つ、二つ、三つ……

女であった。夜気に甘い肌の香が流れた。忍びノ者は嗅覚が鋭い。

（――女が？）

うしろに眼があるように、鷹は首をひねった。確かに、女の匂いだった。

2

一度寝た女の匂いは忘れない。感触もそうである。同じ色白のキメのこまかい肌でも、ひたと掌に吸いつくような肌から、ぬるりとしたのまで色々ある。

匂いも違う。処女の肌と男を識った女とは、すでに肌ににじむ粘液が違った。滑らかさは、男を識って潤ってくる者もいたし、荒れてくる者もいた。その生活如何によって、女の肌は変わってくる。

（だが、匂いは変わらぬ……）

動物のように鋭敏な忍びノ者の嗅覚は、化粧水や白粉では誤間化せない。その底の匂いの記憶を、甦らす。

その夜、丸山で抱いた女には情愛はわかなかった。ただ、排泄のためだけのものであった。が、丸山からの戻り道、民家の戸口に女が立っていて、なぜか惹かれたのである。その女は小袖をゆるりと着て、綾織りの細い帯を弄ぶようにしていた。軒端には糸瓜が下がっていた。

「――お帰りかえ」

と、笑いかけた。

見知らぬ女である。が、夜のなかで艶然と微笑んだ顔は、蠱惑的であった。いま遊女を抱いて来たばかりなのに、鷹は湧然たるものをおぼえた。

「――一人か？」

「ええ」

「茶を振る舞ってくれぬか」

「茶などよりも……」

と、女は流し目をし、ひらりと蝶の舞うように戸口に消えた。

見も知らぬ女。女の方で誘いかけたのにも、特別の意味にとらなかった。このあたり、そうした女が多い。

オランダ屋敷の長崎強制移転にともなって、この丸山の遊女の半分が、移動してしまった。後年、著名な長崎の丸山の地名は、この平戸の丸山から遊女とともに移っていったものである。

平戸の郊外にある丸山は、岬のように突き出たこんもりと丸い山で、その形態から呼ばれたものであることは、誰の目にも明らかだ。平戸に杖を曳いた人なら、誰もが認識したろう。当時遊女屋は、この山裾にびっしりと立っていた。海べりである。波の音が旅情を感じさせたであろう。

オランダ屋敷が、南蛮文化の搬入口となって、南蛮船や唐船が一目千本に殷賑をきわめたころ、女たちは、そうした異人の囲い女となった。

風向きしだいの帆船は、貿易風に頼らねばならないので、半年は駐留することになるからである。

そうした女たちは、たいてい、次の船が入ると、別の男に囲われる。過分な金を貰って孤閨を守る女もたまにはいる。

そのオランダ船がさびれて、丸山の灯も半減したあとになっても、温和しい平戸の女たちは、居着いている者が尠くなかった。

それらの女の一人かと思った。

眠れぬ孤り夜を、男を誘う気になったか？

一穂の灯がともり、夜具が延べてあった。

女は破れ屏風の前で向こうむきになって、小袖を脱いだ。肌の香が部屋に充ち、鷹は記憶が浮かび上がってくるのを知った。

「ねえ、こんな女はおきらい？」

誘ったことを言っているのであろうか。鷹は、これに行為で応えている。

口を吸い、手を延ばして、女の柔らかい部分をまさぐる。女の手をおのれのすでに熱くなったところに誘うと、おどおどしたように、ためらい、それでもかれの硬くなったものを握った。しんなりと握って、ゆるやかに上下させ、それから指先が微妙にふぐりを弄んで、さらに淫靡なほうへとおりてゆく。

女の呼吸が荒くなり、肌がねっとりしてきたとき、鷹は思いだした。あのオランダ坂の夜気に、この匂いがあった。

廃墟となったはずのオランダ屋敷の暗がりからのぞいていた女——

(あの女が……)

なぜ誘ったのか。

その疑問は、女に通じたようである。鷹が不知火ノ忍者としての緊張を放棄していたのは、何かを探るための平戸行ではなかったためである。

「おかしい？」

と、鷹の疑惑に応えるように、女は問いかけた。

「好きなのさ、お前さま」

それで充分だと、裸身をくねらせ、女の語尾は、悦びの喘ぎに変わっていった。

むろん、女には狎れている。女の言葉や態度を鵜呑みにするほど、鷹は単純ではない。

女が、淫奔になればなるほど、妖しい姿態を見せるほど、その行為の裏にあるものに眼がいく。

女は、心底から、好きそうであった。

感度は敏く、死ぬような声を奔らせ、濡れた。そして、何度も何度も、もとめて飽きる様子がなかった。

自分のほうから、いろんな姿態となり、そのしなやかな四肢や、まだ崩れていない胸や、汚点一つない肌を誇らしげに伸々と見せた。

それが、何のためだったかは、夜を徹しての行為のあとで、はじめてわかった。

女が、あの色絵皿の女とそっくり同じだったことを。

「そうか、そなた!?」

「ええ、そうなの。ねえ……」

「あの皿絵の、人型(モデル)だったのか」

「だから……」

と、甘えた口調になって、女は言った。

「返して下さいましな」

「……」

「他人に見られたら、羞しい」

皿の絵には、双の乳房はむろん、陰毛まで、一本一本、丁寧に描きこんであった。さらに、秘部のうす紅までが、鮮明であった。

「——皿は、他人に見せるものではなかったのか」

「そげんこと」と、怒ったように、女は言った。
「事情があって……ええ、だから、他人さまには、とても」
「……」
「ねえ、返して下さいましな」

3

返すのは勿体ない、と思った。鷹もその種のものは嫌いではない。ことに、この女が、あの人型かと思うと、奇妙に執着が湧いてきた。
そういうと、女は身も世もなく、ほろほろと泣いて、
「では、売って下さいまし、お金で、買います」
そんな女のひたむきな態度が、鷹を挫いた。拾ったものだ。理不尽に斬りかけて来た奴の身元を識る手がかりになると思っただけのことだったが、金を出してもといわれると、鷹は迷った。強請りになる。
(そこまで落ちぶれてはいないからな)
よかろう、と、言った。
「返す」
「まあ、うれしい」

「だが、半欠けの方は貰っておきたい。よいな」
そう言われると、それも、とは女は言えなかった。
夜はうすれていた。女は、これで肩の荷がおりたように、さらに鷹をもとめ、はげしい声をあげて憚らなかった。
半欠けの皿には、女の裸身がそっくり残っている。
(——どこで焼いたものか?)
中野村か。この平戸の中野村の上椿坂に窯場がある。文禄の役に、松浦法印が韓人百余名を連れて帰ったが、その中に陶工がいた。巨関頓六及び高麗媼という者で、これに窯をひらかせたのである。
その窯へ行ってみようと思った。
女と別れて城下を出たとき、しかし異変が起こった。突然、物蔭からとびだした男が、鷹の懐中を狙った。欠け皿を摑んで走る。
鷹の手裡から白光が虹を描いた。白光は鮮血をしぶかせている。色絵皿を摑んだ手が宙へ舞い、白い埃の中に、件の男は突んのめった。
「馬鹿な奴だ」
鷹は皿をもぎとった。
役人たちが飛んできた。男の素姓はすぐにわかった。この平戸の者ではない。が、先ごろから、この港ではよく見かける。有田の者で、仙八というのが本名らしい。

「有田の？」

中野焼ではないのか。

同じ肥前でも有田は西松浦郡で、鍋島領内だ。鷹が不審を感じたのは、昨夜のオランダ坂の死体のことを役人が、口にしないことだった。

「なぜ、おれを襲ったのか知らぬ」

と、鷹は欠け皿を懐中にして、嘯いた。

「昨夜から、妙なことがある。オランダ坂でも襲われたが」

かまをかけてみた。が、役人たちはけげんな顔をしただけである。

（――あの死体を、隠したのか）

女の力ではとてもできるものではない。唐竹割りにしたのだ。流血だけでも夥しかった。

いつの間にか、妙な事件に深入りしていることに気がついた。

有田へゆくのは伊万里の港からで、ここは、松浦党の根拠地の一つでもあったが、いまでは佐賀の鍋島藩の領有となっている。

鷹は船便で伊万里に渡った。

「――伊万里ははじめてのごたるの」

恰幅のいい、立派な武士が話しかけてきた。供侍が七、八人。槍持ち、草履とりの小者などを加えると十人以上で、船には馬まで乗せている。

「――左様、風景の美しいところだと聞き及んでいるが」

「なに、それほどでもなかたい。ま、あげなところに寄らんでちゃ、唐津か博多に行きんさったほうがよかろ」

なぜ、この武士がそんなことをいうのか。

「鍋島藩老職、坂口刑部」

と、名乗った。

「ほう、身分のある方が、何しに、辺地へ」

「こりゃ、浪人。口が過ぎるばい」

何人も斬ってきたような男が、左右から寄ってきた。

「身共は水田源八郎」

「拙者は生駒三之助」

二人とも肩を怒らして、すぐにも牙を剝きそうであった。鍋島藩といえば三十五万石、大藩である。老職の付人としては、人相が悪すぎる。すでに天下は徳川幕府三代将軍家光の治政だ。故実典礼を重んじ儒教が浸透して、武家も格式と風格を備えて三民の上に立つ存在になっている。この二人の人相は、どう見ても乱世の野伏という感じなのである。

鷹は軽くあしらっていたが、いよいよ船が伊万里湾へ入り、波止場に役人の姿が見えてくると、

「おぬしは、このまま、他国へ行って貰おう」

と、水田と生駒が、左右から肘を摑んだ。

「なに!?」
「他国者は有田に入れぬ」
「……」
「そういうことだ、お若いの」
と、刑部は黒い唇を歪めて、蔑みと嘲りを含めて言った。
「いずれのくにに於ても、窯場は他国者を入れぬ。この道理は知らぬはずはあるまい」
「……」
「焼物の秘法を盗まれたくないのでの。御当家でもその例に洩れぬ。有田焼は、御当家の産物。めったなことに他家へ知られては収益が減る。の、それでも強って、秘密を探りたいとあれば、窯の灰になる覚悟でくることだ」
「容赦はせぬぞ、浪人」
生駒が吠えた。
鷹はうすく笑った。ここでこのような連中と争ってもつまらぬ。放せ、と腕をふりはらってから、
「なるほど、遠慮しておこう。かようなところで灰になるよりは、博多小女郎でも抱いた方がいい」
かれらは、ほっとしたように、相好を弛めた。
「その気持ちを忘れぬことだ。他人の臍の胡麻を盗もうとするやつは、首っ骨を折られる。ははは」
小舟が群がってきていた。取り締まりは厳しい。役人たちの数も、眉をひそめるくらい多いのである。鷹は、胴の間に腰をおろして、瓢の酒をとりだした。

4

その夜、鷹の姿は博多船から消えている。明朝早くに解纜するという前、鷹は暗い水の中にすべりこんでいた。
沖に錨を投げていたのだが、鷹は深く潜って、湾の中央にある越木島に上がって息を整え、警戒の眼を避けて多々良の浜へ上がった。
この伊万里から有田までは、およそ十六、七キロ。有田川沿いに遡ってゆけばいい。忍びノ者は山谷を走ること、一日に百二十キロ、平坦地なら、楽に百四、五十キロをゆく。
途中に幾つか木戸があった。むろん夜間は閉ざされている。鷹はこれを抜けて走った。忍びノ者が潜り抜ける限度は頭の鉢の大きさである。両肩の関節、腰の番まで弛めて、潜り抜けることがある。
有田と一口にいっても、窯はあちこちに散在している。有田の町は、この焼物で成り立っているようなものだが、これも捕虜の韓人が先鞭づけたとされている。
ともあれ、この有田に来た鷹は、身を窶して、様子を窺った。

刑部たちの一行は庄屋の家に泊まっていた。かれらは、有田の多くの窯を見廻るのではなく、黒髪山のある沢にある窯に行っていた。生駒たちの後を尾行して、そこを突き止めたのである。

（彼奴らが、秘密を守ろうとするのはわかるが……）

尋常の警戒ではない。皿小鉢は一たん売り渡されてしまえば、食膳に供され、日常生活となるのであり、秘密も何もない。土と焼き加減、絵付けの色合いの出し方などに秘伝がある。その黒髪窯に忍び入った鷹は、色絵皿の出来上がる工程を眼にしている。

（面妖だぞ、この窯元でしか、色絵皿は作っていない……とすると）

鷹ほどの男も、この窯ではしかし失敗している。秘密を探りに入りこみすぎて、罠に嵌ったのである。沢には仕掛けがしてあり、鷹は山蛭の群れの襲撃を受けて、谷川へ飛びこまねばならなかった。その谷川には無数の針床が設けられ、鳴子が獲物のかかったことを知らせた。

「かかったな、秘法盗ッ人め」

生駒の命令で八方から縄が飛び、蜘蛛網でからめとられた鷹は、刑部の前に引き据えられている。

「あれほど申したのに、よほど死にたいと見える」

「遅かったようだ」

と、鷹は嘯いた。

「おぬしの奸策は見抜かれたぞ」

「なに!?」

「この色絵皿の秘密は、すでになかまの手で佐賀へ知らせたところだ」

愕然として、刑部はよろめいた。図星だった。

「秘密秘密というから、鍋島家の秘密と錯覚させられたが、きさまが私腹を肥やすための色絵皿作りではないか」

「黙れ」

「この黒髪窯だけで色絵皿を作り、村人にまで秘密にしているのが、その一つ。ひそかに積み出して、平戸から諸国へ散らし売りしているのが、その二つ。あの平戸のオランダ屋敷址が、色絵皿の集積所になっているとは知らなかった」

「うぬ、そこまで察したか……」

「あそこから二枚盗んで逃げだした愚か者がいたのが、刑部、きさまの運の尽きとなったわけだ。が、それにしても、あの女、恥ずかしい人型となっただけに、美い女だったな、心映もよい。おれに抱かれてまで、取り返そうとしたが……」

生駒がしきりに斬れ斬れと喚くのを刑部は制して、そこらを黙々と歩き廻りはじめた。佐賀の城へ報告がいったとすれば、たとえ、ここで鷹を抹殺し得たとしても、かれの首は危くなる。

「――きさま、忍びノ者か。左様であろう、生半の隠密などでは、そこまで探り出さぬはず」

「だとしたら」

「頼みがある。佐賀へ走った者に、追いつくこともできよう。どうだ、五百両出す。それで了簡せい」

「刑部、往生際が悪いぞ、もう諦めたらどうだ」

と鷹は容赦ない口調で言った。

「色絵皿を売って何千何万両儲けてもそいつは、おめえさんの勝手さ。だが、そのために、何も知らねえ村人たちを殺すのが許せねえ。この黒髪山に迷いこんで生きて帰らねえ村人は、二十人や三十人じゃねえという」

「黙れ。そこまで知られては、生きてここから出せぬ。おい、こやつを、隠し蔵へ入れてしまえ」

刑部の命令で、水田と生駒が、鷹の縄尻をひき立て隠し蔵に押しこんだ。そこには、山のように色絵皿の荷が積まれ、運び出されるばかりになっていた。

刑部はその一つを手にとって眺めていたが、いまいましげに投げ棄てると、

「焼いてしまうのじゃ、惜しいが痕跡を残すな。一枚も残すな。油をかけて焼いてしまえ」

柴が積まれ、火を点じられて、囂々と隠し蔵が燃えあがったとき、早くも縄抜けした鷹の姿は、刑部の頭上、巨松の梢に在った。

「刑部、佐賀へ知らせたなどとは、空事よ。これから突っ走ってもよいが、おれには鍋島にそこまでしてやる義理はねえ。おめえの小面憎い首と胴を生き別れにするだけでいい」

鷹の影が宙に舞う。炎々たる劫火の明りに、その影は宙を舞う枯葉の如くに見え、キラリと赤い光が走り、刑部は双眸の裡に一杯に白刃を感じた。

隠し蔵の積荷を売れば二万両にもなったのにとの思いが、脳裡を掠めた。次の瞬間、鷹の気合と白刃が頭頂を割った。

断末魔の刑部の眼に残った赤い色は、おのれの血か、紛々たる火ノ粉か、あるいは、色絵皿の女の秘部の色だったろうか。

忍びの果て

1

その里では、桃と桜が同時に咲くという。

季節が遅れる東北の山里では珍しくないらしい。が、聞いた者は誰も一笑に附した。

「あれ、ほんとうなんですよ、梅が咲くのは、そりゃ少し早いけど、ええ、桃は桜と、そう、それも八重桜と一緒なんだから」

女はむきになった。

浅草寺前の茶飯屋の赤前垂れである。いわゆる料理屋など当時は殆どない。ここで売りだした奈良茶が評判で、日本橋や芝の方からまで食べにくる。

不知火ノ鷹もぶらりと立ち寄った。そのときに、耳にしたのである。そんな山奥から出て来たにしては、女は訛りが少なかった。

鷹がふと注意をひかれたのは、その女が薪を割りはじめたときである。

茶屋おんなといっても給仕ばかりではない。竈の火を加減したり薪を割る。

その薪割りが目についたのだ。

ナタではない。庖丁でもない。刀でもない。

(クナイではないか)

忍びの七つ道具だ。大小さまざまであるが、彼女が手にしているのは、尺物であった。刃渡り一尺。両刃である。もともと、忍者が土を掘ったり土蔵をえぐったりする。そのために刃の鍛え方が刀とは違う。忍びはときに鎧通の代用にもする。

その形態も、素人にはわからない。ただ研ぎ減らして一見、両刃の剣のようにしているが、さすがに切れ味がよく、さして力を入れるとも見えないのに、すかっすかっと切れる。

「珍しいものを使っているな」

と、鷹は声をかけた。

「見せてくれ」

「へ、ああ、これでございますか」

女は笑いながら、前垂れで、ちょっと拭って差し出した。

「田舎から出るときに、道中不用心だからと、はい……」

山奥という話だった。何故、この女の家にあったのだろうか。

忍びノ者は、おのれの道具を捨ててくるということは、めったにしない。足跡や行動を極力隠蔽するし、七つ道具にはそれぞれ特徴がある。

そこらで市販されているものではないし、たいていが手作りだ。市販の材料を用いて改造することもあるが、たとえば手裡剣一つにせよ、手にあった重さ、大きさ、形とそれぞれ違う。多くは玉鋼から鍛え製するのである。

縄梯子でも、棕梠を打ったり、女の黒髪を混ぜて縒ることもある。装束など荒染め、柿渋染めなど、流儀によっても違い布地も違うし、深夜とか月下とか、用いる場所によって着かえることもあるほどだ。

したがって、すべて手作りといってよい。目利きが見れば、流儀も、所属も一目でわかる。不知火ノ鷹が、そのクナイを手にとって見て、

(甲賀か!?)

甲賀者の手づくりの特徴を見た。だけではない。

その柄に深く彫りこまれた刃物のあとが、かれを愕然とさせた。

(乙次のものではないか!)

針乙次は徳川の忍者である。服部半蔵が最初徳川幕府の臣として、忍びの総帥になったとき、多羅尾四郎兵衛の忍びたちをも召抱えた。その中に針の一族も入っていた。いわゆる甲賀五十三家の一である。

不知火ノ鷹が、この男と知りあった理由は後述する。

とにかく、あまりの意外さに、息を呑んだ。

世の中は広いようで狭い、こういうこともあるかもしれないが、

(それにしても……)

鷹は、その傷あとをなでながら言った。

「この刃物は、いつごろから、お前の家にあったのだ?」

「いつごろって……よくは知らないけど、あたしの小さいときから、見ていたよ」

無邪気に、女は言った。

「お前の故郷というのは何処なのだ、その桃と桜が一緒に咲くというところは」

「すももね」と、女は目を輝かして、

「南会津の檜枝岐という村さ」

「このクナイがどうしてお前の家にあったのか、それが知りたいのだ」

「源爺が知っているかもしれない」

その老人は、遠縁にあたるという。浅草新堀に住んでいる。喜代というこの娘が檜枝岐から出てきたのも老人を頼ってのことである。

鷹はその足で新堀に行こうとした。もう夕暮れだった。

「どうせあたしも帰るから、御案内しますよ」

その好意に乗ったのが間違いだった。

別に一刻を争うことではない。そう思ったばかりに、先を越されてしまったのである。

新堀のその家に着いたとき、ふいに物蔭から刃が走った。

同時に、するどい口笛が起こった。二間と離れないところだ。それが家の中の同志へ知らせる合図だということは咄嗟にわかった。

（三人！）

中にいる奴も含めて、少なくとも三人はいたのである。

「何をする」

初太刀をひっぱずして、鷹は横に飛んで、

「喜代、逃げろ」

影はものも言わずに斬りこんでくる。するどい太刀風だ。常に敵を持つ忍びの身である。それがどういう敵であるかを考えるよりも、身も守らねばならなかった。鷹は抜き合わした。

口笛を吹いた奴も斬りこんできた。鷹は身を転じた。その影が一転したとき、黒風がかれを竜巻のようにさらった。鷹の姿は屋上にあった。

あざやかに逃げられたことで、追うことの無駄を知ったように、また口笛が聞こえた。これはなかまを呼んだのである。

一人ではなかった。三人も家の中から飛びだしてきたのだ。都合五人。その影はいずれも筒袖、目ばかり頭巾で足ごしらえも厳重だった。

このとき、鷹が慮ったのは、喜代のことである。が、機敏に、身を隠していた。

五人の理不尽な忍びが、風のように宵闇に溶けてから、鷹は、源蔵が殺されているのを発見している。

源蔵は、曲物を作っていた。

それが手職であろう。檜のうすいへぎ板があり、小さな鑿や、桜の皮などが散らかっていた。

へぎ板を曲げて底をつけ、面桶を作ったり、箍の輪を作る。これは絹網をつけるのである。

桜の細皮はつなぎになる。

その職人である源蔵が、なぜ、忍びに襲われねばならなかったのか。

鷹は死体を見下ろしたまま、呆然となった。

喜代が泣いてとりすがっている。慰める言葉もない。

（なぜだ？）

その疑問が先に立った。

源蔵は背中から、一突きにされていた。心ノ臓を貫いている。おそらく、声もあげなかったろう。手練である。

〝片附け〟た。

そういう感じだった。人間の殺し方でおよそ動機がわかる。怨みを含んでの殺し方と、ただ口をふさぐだけの場合と違う。もの奪りの場合は尚更である。これは居直りではない。はじめから、殺す目的で忍びこんだ。

が、源蔵のような老人を殺るのに、なぜ五人もの忍びを動員したのか。

それが解せなかった。

（偶然であろうか、おれが源蔵を訪ねるということと）

偶然にしては符合が合いすぎていた。

いつまでも泣きじゃくっている喜代をなだめて、鷹は疑問を口にした。

「いままで、このクナイについて何か訊かれたことはなかったか？」

はじめてだという。だが、クナイと、針乙次のことに関連していることは、もはや疑いを容れなかった。

誰もいままで関心を持った者はないという。

（おれが目をつけたのが誘うことになったのか？）

鷹は、常に自分を見つめる眼があることを知っている。

嘗て老中松平伊豆守信綱の〝影ノ手〟として、働いていたことがある。一匹狼のフリーランサーであった。

忍びのワザは卓抜しているし、不知火ノ忍者という自由な立場（伊賀や甲賀などの伝統と集団外の）の存在が、その活躍を濶達にした。

徳川幕府草創期には、外様大名や譜代でも血の荒い連中の叛乱の兆しが多かった。

表立っての制圧が難しい事件の場合など、陰に手を廻すのが、幕府閣僚のやり方であった。

旗本の不正や、不穏な場合には、服部半蔵とその輩下の伊賀甲賀の者は使い難い。

万一の際、痛くもない腹を捜られたことで、忠誠心を失わせてしまうことになる。

捜られた本人だけでなく、その話を耳にした者すべてを不快にする。

これがフリーの忍者なら、どうにでも言い抜け出来るのだ。

そうした点で鷹の存在は、貴重だった。鷹は割り切っていた。相応の報酬が、かれを割り切らせていた。

が、それにも限度があった。伊豆守信綱の非情冷酷さ、政府権力の保持のためには、庶人を虫ケラのようにしか思わない、その命令に反撥し、手を切った。

信綱は狼狽した。これまでの秘密の漏洩を恐れたのである。

伊賀者の手練れや、根来者、あるいは時には、幕府転覆を計る風魔忍者まで逆用して鷹を抹殺しようとした。

もとより、手を切るには、それだけの自信があってのことだ。鷹は、これらの凶刃によく拮抗した。

鷹をとうてい仆すことが出来ないと悟ってからも、しかし、信綱は、目を離さなかった。

常にその〝目〟が身辺にうろついていることは、やはり鷹の行動を牽制するものだった。

そんな目には左右されないつもりだがやはり、

（邪魔だな）

斬ろうとすれば、逃げる。決して、敵対して来ない。そこにも、信綱の卑劣なやり方があった。

鷹のいさぎよさは、信綱が恐れるように、幕府の秘密を、反幕勢力へ売るというようなこと

は一切しないことだった。

当初それを恐れた信綱は漸く鷹のその潔癖さを認識するようになっていた。

敢て攻撃させないのも、その故であろう。

だが、これは考えてみると、まだ危険を孕んでいる。信綱や幕府に対して、これ以上、鷹が怒りを爆発させたら、その恐れも出てくるのである。そのためにも〝陰の目〟は、当たらず触らずでなければならなかった。

泣きじゃくっている喜代を慰めようがなかった。鷹の卒爾から、こうした結果になったと思うと、言葉がなかった。

(はてな……)

ふっと、殺気を感じた。

鷹が喜代の肩に手を置き、源爺にとりすがった喜代を引き起こそうとしたときなのである。

「……!?」

まだ、誰かいるのか。この部屋の中にいる！　一度では位置はわからぬ。が、その殺気には、妬心が含まれていることを、鷹は悟ったのである。

鷹が女の肩に手を置いたことで、ふと洩れた殺気は、女のものにちがいなかった。

(くノ一がひそんでいる)

女には女だ。鷹は喜代を抱え起こすと、

「死んだものはしかたがない、思いきりよく忘れることだ」

と、唇を吸った。

突然である。泣きじゃくっていたところをふいに抱きしめられて、驚いた。もがいて、突きのけようとした。

「静かに、悪しゅうはせぬ」

その場に押し倒すと、股の間に、膝が割りこんでいる。

あざやかな行為であった。喜代は茶屋女をしているが、まだすれてはいない。

この男の行為に、どう抗っていいものか、混乱があった。

「すぐに、よくなる……」

鷹は、下肢をおしひらくと、手をさし入れた。春草の丘に触れた。まさか処女ではあるまいが、そう何人も男を知っているというのではない。

その女の肌であった。鷹の手は、女の股間の泉をさぐりあて、それを知った。肉襞の柔らかさ、羞恥の緊縮で、およそのことはわかる。

鷹は、それくらいで、止めておくつもりだった。

喜代はもう、抗うどころではなく、しがみついてきて、耐えきれないような声を放っている。感度がいいのであろう。

その中におのれを容れるには、しかし鷹は、背中に刺してくる視線を無視できなかった。

(いまくるか……早く、かかって来ないか)

相手の出方を見守ってのことだ。が、なかなか誘いに乗ってこない。

これは鷹が、並々ならぬ腕前であることを知っているからではないか。

（ええい、ままよ、おれが痴愚にならねば、かかって来ないか）

思いたつと、鷹はおのれの一物をあてがった。喜代のほうは、鷹にしがみつき、全身をくねらせて、官能の疼きに耐えかねていたのである。

鷹を嫌いではなかったのであろう。この若い娘を、そこまで積極的にしたのは、源蔵の死から受けた衝撃であろうか。

鷹もまた、背後に手裡剣が飛んでくるか、白刃が振ってくるか、その危機の中で、女と交わるスリルを味わっていたことになる。鷹の怒張した一物は、女の中にゆるやかに入っている。

男の隙は、三つあるという。これは兵法全般にわたっている。つまり、小用をたすときと、女の中に入るとき、それから射精するときである。

〝陰の目〟は、そのどれを狙っていたのであろうか。

耐忍の時機は一つはずすと、おのれの命とりになる。

この場合も、くノ一はいま少し、鷹が女の膣にはさまれて、射精する一瞬を狙うべきだったかもしれない。が、それが待てなかったのか。あるいは、喜代がその名のように、喜びの声をあげて、白いふとももを露わにし、狂乱したさまが、正視出来なかったのかもしれぬ。

とすれば、女忍としても、未だ、腕はひとり前とはいえまい。

風をきる礫の音が聞こえた。鷹は身を転じている。天井、と思ったのは、偽音に瞞されていたのだ。礫は、破れ唐紙の彼方から来た。押入れの中である。

鷹が、身を躱して、抜刀するのと、その押入れから飛びだした影が抜き討ちに斬りかけたのと同時である。

「何やつ！」

鷹はその刃風を、〝甘い〟と見た。やはり女忍か。

さっきの連中と同じ装束なのだ。男女の区別はつけ難い。この咄嗟の間に、それを見分け得たのは、跳躍の軽やかさであった。

やはり身軽な男でも、女とは、感じが違う。猫のようなしなやかさで、女忍は一撃に失敗したとみるや、そのまま、風の抜けるように、走り出たのであった。

「待てい！」

鷹も追った。

が、さすがに、女の中に入れたばかりの逸物をおさめる時間を要した。その時間だけ、女忍は逃れ出ていた。

距離、およそ三間。風のように走る。振りかえって、邀え撃つには、敵対する腕の隔りを知っているのであろう。

「逃がさぬ」

走りながら、鷹の手は手裡剣をつかみ出している。

が、走りながらの手裡剣撃ちは、よほどの名人でも命中率は低い。止まる。撃つ。走る。こ

の三拍子を呼息の間に行なわねばならない。

一撃は、女忍の腕を掠め、二撃は、足を傷つけたようであった。

河岸沿いの道へ出ていた。女忍が、思いあまって、身を躍らしたのは、三撃を恐れたのであろう。

凄まじい水しぶきがあがった。大川の渡し場に近いあたり。つづいて、鷹も飛びこんでいる。

季節は、陽春とはいい難い、そろそろ桜が二分咲きになろうかというころだ。あの茶店での話も、そこから出たのである。

冷たい水が、一瞬、からだを凍らせるようだった。

女忍は傷ついていただけに、距離が短かった。鷹が飛びこんだとき、女忍は水中に潜っている。が、水中でふるった一刀も虚しく、鷹はその腕をねじあげて抱き寄せていた。

水中である。呼吸が苦しく、女は四肢をばたつかせた。こうなると、もはや、女忍もただの女だった。

「面を見てやる」

鷹の手は、頭巾をひき剝がした。女はさからったが無駄だった。

「あっ、やはり！」

見た。甲賀の女忍、千穂だった。

十年も隔っていた。が、その名をおぼえていた。記憶は深く、きざみこまれていたからである。

「千穂、そなただったのか」

「殺して！」

「殺さぬ。なぜ、おれを襲った？」

言いながら、鷹の手は、女忍の袴の紐を解いている。

水中である。泳ぎながらであった。忍びノ者は、誰でも水練をよくする。殊に鷹は、陸上と同じように、水の抵抗を感じない。

女の紐を解くと、足で袴を脱がせた。身軽なために、女忍は、忍び装束の下にはあまり、着込まない。装束を早替わりするためには、近くに置いておくのである。

鷹の手は、女の剝きだしになった股間をひたとおさえている。

その拇指は前をおさえて、肉の裡に入り、高指は、うしろのほうまで及んでいる。

千穂は悲鳴をあげた。

「殺して……堪忍」

「殺さぬ。放しもせぬ」

水中であろうとも、容赦はしない。女はもがいた。水を打ち、ずるずると沈んではまた浮かびあがる。

ふっと、鷹の手がはずれた。はずしたのか。女忍は泳ぎだした。と、いっても二、三間だ。渡し舟が、もやってある。葦の間である。

漸く、女忍の手は、ふなばたにとどいた。

が、身をおどらせて、舟へ乗るには、鷹の手が許さなかった。

女の秘所から手を離したのは、この姿勢にさせるためだったのか、女忍がうしろむきになるのが目的だったようである。

鷹の手は、小さくしまった臀部から両の大腿部をささえるようにひらき、ふたたび勃起したものを、入れた。

不安定なかたちで、男に犯される。

夢にも思わぬ行為だった。千穂の顔が歪んだ。鷹のおとこは確実に、彼女の中に入っている。彼女の足は漸く、水底につくかつかぬくらいである。

手を離せば、沈む。

その不安定さのなかでのまぐわいは、男の優越感と、そして、はっきりと、女に敗北を齎すものだった。

「ゆ、許して……鷹、おねがい」

「十年目だぞ、千穂、あのとき、そなたはまだ女ではなかった」

「いや！　もう、許して」

「まだ十三か十四か、くノ一になりたてであったな、すると、いまは二十三、四か、これまで、何人、男を瞞した？」

その間も、鷹は動いている。鷹の一物は動いている。千穂のからだは二つに裂けるようであった。水が音を立てた。千穂は、腰から下の感覚を失いながら、胸は張り裂けるように、おどろに鳴り、かっと、頭が灼けている。その灼熱のあとに理性を失わせる激情が訪れることを知っていた。

「針……」

うつつの口が、そう叫んだ。

「針乙次が……乙次が」

「乙次を殺ったことを思いだしたか？」

さらに奥深く、突き上げるように、鷹のものは入った。何か言いかけた彼女は、その男のものが、咽喉まで突き上げてきたように、うっと、声を詰まらせて、その瞬間、ふなばたから手を放していた。

甲賀のくノ一千穂のからだは、ずるずるっと水の中に沈んだ。鷹に背後から犯されたままである。

「あ、いやっ……」

叫ぶ口が、がぼっと水を吐いた。鷹は抜かない。なお、逞しく勃起したまま、女の裡にある。

肉襞の温かさが、萎縮させなかった。ふぐりが冷えれば、情感と意志の有無に関らず凋むという。

不知火ノ鷹の忍びノ者としての鍛錬が、常人よりも、よく耐えさせていることは、推測に難くない。

千穂は悲鳴をあげ、手足をばたつかせた。それは、まるで水練の心得がない女のように見えた。女忍としての計算があったとまでは考えなかった。演技ならば、堂に入っている。鷹ははじめて、抜いた。とたん、千穂は、水を蹴って身を翻えしている。鮮やかな水中翻転である。さながら、いるかのように水中を逃がれた。

その動きは、彼女自身、

（成功した！）

と、思わせた。

夜の川である。巧みに泳いで、顔をあげ夜気を吸っては、また潜った。追泳してくる気配はない。

それが千穂を安心させた。

方角は水の流れでわかる。やがて千穂が身をはねて、上がったのは、浅草川に神田川が流れこむあたり。向こう岸に植木溜がある。

雁木にとりつくと、はじめて、深い息をつき、植木の中に入っていった。

小屋がある。藁が積んであり、荒縄や手桶や箒や、雑多なものが置いてある。

千穂は、あたりを見廻し、はじめて、着物を脱いだ。

水でぴったりと貼りついていた着物は、もとより、上下からなる忍び装束だが、水中で鷹に袴は剝ぎとられて白い尻は丸出しになっていた。簡便で軽捷を目的とするために、上下別々になっていたのである。

裸になると、千穂は強引に剝がれたまま、首にまといついていた頭巾を絞って、顔を拭き、からだを拭いた。

ごしごしと乱暴なほどの手つきで拭っていく。その手が股間に触れたとき、千穂はふっと、さっきの感覚を甦えらした。

水の中で交接したこともはじめてだし、それも背後から、犬のように犯されるなど、夢にも考えられないことだった。

それだけに、感覚は強烈だった。

思いだすだけで、下半身がとろけるようであった。

「ああ……にくい、鷹」

千穂は両の乳房を抱えるようにして、うずくまってしまった。

そのとき、四囲の夜気が微かに揺れた。

〈鷹にやられたか〉

〈左様なことではないかと思うていたぞ〉

〈甲賀者の恥さらしめが……〉

じわりと闇ににじんだ影、影、影――。

千穂はぎくりとして、眼をあげた。

〈――女忍にして心得ねばならぬこと、一ノ条より忘れたらしいな。まず、男に心奪られざること、一つ、女であることを忘れること、一つ、同志を裏切らざること……〉

「裏切ってはいない！」
千穂は飛び立つように叫んだ。
〈十年前のこともか？〉
「……」
〈鷹のことでは、十年前から失敗している。どうやって、罪をつぐなう気だ、千穂！〉
〈鷹に目をつけていたればこそ、こたびの収穫があった、これも忍びの輪廻であろうな、裏切り者は、自ずと、馬脚をあらわす。千穂よ、この神の摂理を怖ろしいとは思わぬか〉
説得するような威嚇するような、なかまの言葉の矢を浴びて、素っ裸になった女忍は、おのが身を抱くようにして、藁の上にうずくまり、脅えているようであった。
この異様な審判を、
（何を言いだすか？）
と、また見守っている眼が屋根の上にある。
板屋根の上である。雨腐りした屋根は、すぐに音を立てる。鷹が千穂を水中で捕えなかったのは、行先を見届けて、謎を捜るためであった。
鷹の最初の疑問は、かれの突発的な行動が、甲賀者によって先廻りされていたことである。どうやらわかったことは、鷹を日ごろ尾行している影が、あのクナイに同じ関心を持ったということであった。
〝源爺〟のところにゆくという鷹と喜代の話を盗み聞いて、なかまを呼んだのであろう。

〝針乙次〟の遺品——
忍びの七つ道具の一つだからという理由では、稀薄だ。すでに研ぎべりされて、さしたる価値はない。郷愁などという常人の感覚はない。是非とも源爺から聞きださねばならなかったのではないか。
（彼奴！……ひょっとすると？）
鷹は、甲賀五十三家の一、針和泉守の流れを汲む針乙次の風貌を甦えらせている。

2

十年前——
鷹は松平伊豆守信綱の密命で、日光に潜入した。
家康を神に祀る東照宮の造営に関して、異様な噂が流れていたのである。
それは結局、揣摩臆測の域を出ないものではあったが、草創期の幕府としては、大変な問題を孕んでいたのである。
もともと、家康を神にするか仏にするかという点からして幕閣は揉めた。
秀吉も神になっている。この国では、神の方が仏より偉い。仏教は千二百十二年に新羅国より入ってきたが、それまでは、神道が絶対だったゆえでもあろう。したがって神にすることに決したが、また神道にもいろいろ流れがある。それぞれの立場に勢力争いがからむのもまた珍

しくないことだ。

勢力争いは、黒衣の宰相といわれる二人の怪人物の角逐に端を発している。即ち、天海僧正と金地院崇伝である。

この二人の経歴については、複雑多岐をきわめるので短文では説明し難い。一説には、天海は明智光秀の後身というほどで、不明の部分も多い。

乱世から治世への過渡期ほど謎の人物が跳梁する。大胆で果断に富んでいるからである。

この二人は黒衣の僧ではあるが、家康、秀忠の、いうなれば秘密参謀で、家康はむしろ天海に操られていたという見方もあるほどだ。

それだけ家康が寄りかかっていたのは事実である。

死後の葬祭に、天海の発言権が強かったのも当然だが、父子の間でも、政権交替による閣僚らの勢力争いは、はげしい。金地院崇伝は秀忠にとり入って、おのれの意見を貫こうとした。

崇伝は唯一宗源神道の吉田梵舜と組んだ。天海が推したのは山王一実神道の式による、両部習合の神として権現と崇めんとするものであった。

天海が勝った。

秀忠が天海の説に賛成したからである。ただちに勅許を得、遺命通りに日光に改葬された。

もともと日光山は、弘仁年間に勝道上人が二荒山に登って、大己貴命と味耜高彦根命の二神の外に田心姫命を祀って、これを男体山三社権現と称したのがはじめである。

東照権現はこれに依るわけだが、その社殿など粗末なものであったのは否めない。

勅許を得るや、ただちに神廟の建設をはじめ、元和三年久能山から霊柩を日光奥院の廟塔に改葬し、いわゆる神霊を仮殿に鎮め、宣命使の参向によって東照大権現の神号を授けられた。

さらに正一位の神位を授けられた。

家康を正一位の神に祀り上げることは幕府の基盤を固くする政治目的があったのだ。

だが、この当時の神廟は、まるきり貧弱なもので、今日のような壮大華麗なものにしたのは、後年のことだ。

寛永元年から十三年に及ぶ大事業で、諸大名に工費を分担せしめた。

このとき、伊豆守の命をうけて、不知火ノ鷹が、日光に潜入したのは、不穏な噂が流布されたからであった。

伊賀者を用いず、甲賀者をして、鷹と協力せしめた。伊賀者が崇伝の密命で動いている気配があったのだ。そこには、天海と崇伝の陰湿な争いがあり、明るみに出せない幕府の悩みがあった。

幕府の内部抗争は、倒幕を狙う外様大名たちには、願ってもないことだったからである。すべて隠密裡に処理されねばならなかった。

フリーランサーの鷹の起用も、その点にかかっている。

このときの争いは主題から外れるので省略する。忍びノ者には汚辱となる恋であった。

忍びは男も女も、常に醒めていることを要求される。恋に心を動かすことは、役目をおろそかにするだけでなく、失敗を招き、死に至る。

千穂はまだ少女だった。

少女であることを、役目が要求した。まだ一人前の女忍ではなかっただけに、千穂は鷹に惚れたのだ。

鷹ははねつけた。フリーランサーだから、役目ではない。成功報酬である。請負った仕事をやりおおせることだ。そのころ、鷹もまだ若い。気持ちにゆとりもなかった。

千穂は針乙次に気を移した。鷹への当てつけであった。

乙次は千穂に唆かされて、鷹を陥れようとした。鷹が斬らなかったのは、女に惚れた男の心情を憐んでのことだが、甲賀の掟はそれを許さない。

「自ら蒔いた種だ、その手で刈れ」

千穂は命じられた。

日光から二荒山へ——その千穂と乙次の死の道行がどんなものであったか、誰もしらない。尾行や陰走りには長けた連中ではあったが、千穂も針乙次もれっきとした甲賀五十三家である。

掟にはしたがうはずであった。そのために、恣にさせた。ただ一事をのぞいて。

「乙次をその手で始末せよ」

千穂がもどってきたのは三日目である。

「殺ったよ」

憔悴した顔で言った。

証拠は、乙次の右手であった。手首からすっぽり斬ったものを持っていた。

「底なし沼に沈んだ」

と、千穂は言った。

尾瀬は水芭蕉や日光きすげなどでいまでは有名であるが、当時は知る人も稀な地獄沼といわれた。随所に底なしの部分があり、一度、沈んだら、浮かび上がらない。

千穂は、手をつかまれ、ともに引きこまれかけたのを、手首を切って逃がれた。

「ずるずると沈んでしまったよ」

千穂のその言葉を誰も疑わなかった。その右手首は、確かに針乙次のものに違いなかった。

尾瀬沼の底に横たわっているはずの乙次のクナイがどうして、檜枝岐の女の手にあるのか。

源蔵から、それを聞き出すために甲賀者たちは浅草新堀にいった。そのとき、すでに源蔵は死んでいた。

〈——源蔵がむかってきたので、殺してしまったといったな、千穂〉

甲賀者の一人が言った。

「そうだよ、あの爺いが……」

〈ではあるまい、口を塞ぐつもりであろう〉

「……」

〈吐け、千穂〉

「な、なにを、何も、あたし……」
〈吐くのだ、ふたたび掟を破るか〉
一人の手から、蛇のように黒いものが飛んだ。
きりきりっと、千穂の裸の腕にからみついた。
「あっ！」
〈それ！　こっちもじゃ〉
つづいて、また左腕にからみつく。その縄の端が天井の梁にかけられ、ずるずるっと、引きあげられた。
両腕の血が止まるかと思われるばかり、その余勢で裸身はきりっと独楽のようにまわった。縄が両腕から首に巻きついた。
一糸まとわぬ裸身が、爪先のつくかつかぬかに吊り上げられたのだ。
〈さあ、吐くのじゃ千穂〉
忍びの掟には仮借がない。たとえ腕がひき千切れ、関節がはずれても、かれらは悔いないだろう。
千穂の顔は真っ蒼だった。両腕の血が止まれば、やがて心臓が止まる。
〈針乙次をどうした、尾瀬沼に沈めたことだ〉
「……」
〈ぬ、強情な！〉

絞りあげろ、と、指導者が言った。とたんにずるずるっと、裸身はおそろしい勢いで上がった。
屋根板がばりっと剝がれた。あっと仰天した皆の前に、しゅしゅと煙の尾をひくものが落ちてきた。地上に落ちるや轟然たる音響とともに炸裂し、黄濁の濃煙が、ぱっと一面に拡がった。
〈屋根だ、何ものかが屋根に〉
〈千穂を、やるな、屋根にのぼれ〉
そんな狼狽の声が煙の中で右往左往する間に、裸女を抱いた鷹は、夜空に羽搏く怪鳥のように、翔け去った。

3

南会津の檜枝岐――
現在でも、この地へゆくには、大変な時間がかかる。鬼怒川から入っても車で三時間半はかかる。尾瀬沼から山越えするには足に頼るしかない。会津盆地から通じている車道は、山腹に吸いこまれるように消える。
檜枝岐の村は、現在でも二百戸たらず、およそ七百人ほどの人口である。劃然と俗から離れた秘境をなしている。千二百メートルの高所にある盆地だけに、寒気が厳しく雪が深い。
季節は初夏である。江戸ではすでに青葉で衣更えしたというのに、この山では、八重桜が咲

き、桃の花が濃く、すももや梨の花が、黄ろみを帯びた白さで、目を驚かした。

「あの女の話は本当だったな」

峠に立って、鷹は、汗を拭った。

尾瀬沼から、山越えしてきたのである。途中でも水芭蕉を見た。風は肌に涼しく、この花に埋もれた平和な村里は、話に聞く桃源境そのものだった。

「美しい……」

千穂は、素直に感動していた。

「この世の中に、こんな美しい、静かなところがあるなんて」

「忍びの修羅の場とは違うな」

都会とは、人間の修羅の場であった。忍びノ者は、その欲望の相剋が生んだ奇型児だった。

「この地にひょっとして……」

「はい。でも、信じられませぬ」

千穂は鷹に救われて、はじめて告白した。

針乙次の死を見届けてはいない。右手首を切ったのは乙次自身であるという。

「おれは沼で沈んだことにしてくれ」血のあふれる傷口をおさえて、乙次は凄い笑いを洩らして、

「生きられるか、この血が止まらず死ぬるか、おれ自身にもわからぬ。が、せめての情じゃ、この一分に賭けさせてくれい」

火を熾してクナイを突っこむのは見ていたという。が、それから先は、千穂は知らぬ。クナイを焼いて、傷口の血を止めたのか。思うだけでも凄惨である。

その情けの一分が、十年後に千穂を苦しめようとは。

身から出た錆には違いないが、こういうかたちで迫ってこようとは考えられなかったことである。

駒ケ嶽にはまだ雪が残っていた。目の下の盆地の間を美しい清流が流れ、その両側にかたまるようにした二、三十戸の集落に向かって、二人は小径をおりていった。

川の畔りで魚をとっている男がいた。

二人が近づいても、格別怪しむふうもなかった。

「何をとっているのだ」

「山椒魚だ、汝ら、食うか」

四寸ばかりの家守りのような魚を見せた。あっと思う間に、それを口の中にほうりこんだ。生きたままである。

「腹の病気に効くが、どうだな」

「檜枝岐の者だな、人を尋ねてきたが、案内してくれぬか」

「へえ、誰かの」

「針乙次という男だ」

山椒魚とりは、ちらりと鷹を見、それから首をふった。

「この村はのう、星と平野と橘の三家だけだのん」
乙次が生存しているとすれば、名前は変えているだろう。たしかに恰好の隠れ里なのだ。
「とにかく、案内してくれ」
男は、また首をふった。
「帰るがん、帰らねえがん、まァだわかんね」
とりつく島もなかった。意外だったのは、ここは岩代のくにであり、会津弁も知っているが、訛りはかなり違ったものだったことだ。
この里の言葉の思いがけない美しさは会津若松城下でも、鶯言葉といわれているということを知ったのは後のことである。
あきらめて、二人は村里へおりてきたが、すももと桃の花に囲まれた一軒の家の前で、一人の女が、子供をあやしながら、蓆の上の干草のようなものをかきまわしていた。
忍びノ者には薬草の知識がある。野生の食用草もよく知っている。
ぜんまいを干しているのだとわかった。
〽ねんねこっこ　ねんねこっこ
　ぼうのおかかは　どこいった
　あの山　越えて　里いった
　泣ァくな　泣ァくな雉の子
　泣くと鷹めにさらわれる

澄んだ声で唄っている。二人が近づいたのを見てふり仰いだが、はっとするくらい美しい顔だった。
鷹は微笑した。千穂も微笑した。
「針乙次という人に逢いたくて来たのです」
千穂の微笑に、女は警戒もせずにこたえた。
「へえ、お江戸から来らったかね」
どうしてわかるのか。
「待っでいらっから、来てくなんしょ」
待っている？
どうしてかれらがくるのがわかったのか。この女が、乙次の妻だということを知ったのは、道々、話してくれたからである。
乙次はいた。
一行が近づいてくるのを、仄暗い家の中で凝っと見守っていた。囲炉裡端に坐って彫像のように動こうともしなかった。
「ま、やっぱり！」
「生きていたのか、乙次」
乙次は騒ぐ様子もなく、
「上がってくんつえ」

と、いった。

「何もねえけんど、山椒魚でも食うてくれ」

炉に串を立てて、山椒魚が黒くなっている。燻製にしてあるのか。ちょっと気味が悪い姿だが、ぼりぼり嚙んでみると、香ばしく鄙びた味が捨て難い。地酒とも合った。

「驚いたろうな、おれはいつかこうなることと思ってた」

右手首からすっぽり切れている。その傷口を左手で愛しむようになでながら、

「あのクナイは、ずっと前に和吉という男にくれてやったものだ。江戸へいった娘が持っていったと聞いたときから……いつか見つかるに違いない、おれの生きていることがばれるに違いないと諦めるようになっていた」

死ぬ気であろう。乙次の眼に覚悟が見えた。

「十年、そうだ、十年になるなあ、この静かな隠れ里で、おれは、ほんとうの人間の暮らしとはどういうものか知ったよ。充分すぎるほど倖せだった」

妻と子供の方をちらちら見るたびに、乙次は、眼を細くした。ほのぼのとしたものが鷹の胸をも温く包んでくる。

「忍びの世界などは、地獄だ。斬るがよい、鷹よ、おれは、おぬしに斬られて死んでも、忍びの誰よりも倖せな気持ちで死ねる」

そんな話とも知らず、妻女は、川におりていって米を研いでいる。この珍客に馳走するためであろう。

「ははは、乙次、何を申す。きさまを斬りに来たのではない」

「なに!?」

「誰のためだ？　断わっておくが、おれはもはや伊豆守の飼犬ではない。甲賀ノ者にも義理はない」

「……」

「あのクナイでおぬしが存生かもしれぬと思ってな、懐しくて来たのだ、な、千穂」

「え、ええ、そうなのさ、乙次さん、それだけなの、決して、そんな……」

「だが……掟は、おれを許すまい」

乙次は、眉をひそめて、戸外を見た。あの山椒魚とりの男が、息せききって駈けこんできた。

「妙な奴らが、汝を捜して来たぞい、六人もじゃ」

「来たか」

こう言ったのは鷹だった。

「おれたちが一足先に来てよかった。乙次、逃げろ、あとはおれが引き受けた」

「大桃に知り人がいるでな。彼方まで、一緒に行ってやるべえ」

顔に似合わぬ親切な男だった。鷹と千穂に訊かれたときにも知らぬ顔をしたが、危険は感じなかったという。こういう静かな里での暮らしは、かえって動物的に、人を見分ける勘が備わるのかもしれない。六人の者には、出作り小屋の方を教えて、注進に来たというのだ。

「有難いな判七。では頼むとするか」

生きる希望がわいてきたようである。平家の落人部落という伝説も嘘ではあるまい。言葉にも挙措にも、雅びなものがある。何よりも、女が美しいと、鷹は思った。

「こういうところで暮らしたいな」

「あたしたちは駄目、もう修羅の血がしみついている」

殺し殺される修羅の渦から抜けきれない運命なのか。

針乙次が妻子を連れて裏から出ていったあと、鷹は雨戸を閉めた。山椒魚をぼりぼり音をたてて、食べながら、酒を呷った。

「千穂、おれはそなたのなかまを斬る。六人の者、生きてはこの山から還さぬ。そなたは、なかまに刃向かうわけにはゆくまい。いまのうちに姿を消せ」

「いいえ、鷹だけを残してはゆけない。もうあたしは甲賀のくノ一じゃない」

悲壮な決意が、千穂に漲っている。死なばもろともという気持ちであろう。鷹は頷いた。同じ死ぬにしても、この美しい山里なら申し分ない。

足音が聞こえた。瞞されたと気づいて村へやってきたのであろう。鷹は手裡剣をつかんで立ち上がった。六人の甲賀の手練れを相手の闘いは、かれの忍びのワザを結集せねばならぬことであろう。

風魔の姉妹

1

（幽霊か？）

と、思った。

暗い夜であった。雨が降っている。もう三日ほど、降りつづけだった。しとしとと、夜も昼も降っている。家の内も外も、湿気た臭いが鼻をつく。

その暗い河岸に女の白い顔が浮いていた。

同じ雨でも、春の雨や夏の雨には、陰気さが少ない。季節の感覚が、同じ冷たさでも、感じかたが違ってくるのか。

暦の上で十月の声を聞けば、もう、雨の音も一層、わびしさを感じるのである。

殊に、この神田川の河岸は、内神田にも屋敷が長い塀を連ねているせいで、日が暮れると極端に淋しくなる。

柳が重く小雨の中で揺れている。その緩慢な柳糸の動きが、夜を一層沈々とさせてゆくようであった。

その柳のかげに、白い顔が浮いていたのだ。

常人なら、無気味に思ったろう。だが夜と闇を生きる忍びノ者には、別段のことはない。

殊に、夜目が利く、不知火ノ鷹は、すぐに、

(引っ張りだな)

と頷いた。

好色な男の袖を引いて、貧しい春を売る女なのだ。傘をさしていたが、秋の雨夜に、寒そうに肩をすくめてちらりと、こちらを窺い、それから、媚びるようににっと笑った。

はじめに見たのは、役人かどうかを探ったのに違いない。本能的に、こういうしょうばいをしていると、それを嗅ぎわけるようになる。

一つ間違うと御牢入りとなり、悪くすると、吉原送りになる。

鷹は、その日、着流しだった。下駄は利休歯である。

通常の姿にも、忍者の用意は周到になされている。普通男は朴歯を穿く。敢てうすい利休歯を用いるのは、その鋭角が武器になるからであった。朴歯だと重く鈍い。忍びノ者は、扇子一本、印籠一つにも仕掛けと、応用のための工夫が凝らしてある。

「ねえ……」

女は、鼠鳴きをした。

その呼びかけも、ぎごちないものだった。

「寄っておゆきよ」

伝法な調子は、こうした女の常套語だが、それもわざと使っているような、どこか馴れない幼さがある。

「遊んで……ねえ、遊んでいって」

語尾がふいに泣き出しそうに、顫えを帯びた。

鷹は足をとめ、凝っと女を見た。

「いいだろ、ね、安くしておくから」

このうそ寒い雨の中に佇んで、役人の眼を恐れながら、あてもなく客のくるのを待っていたのだ。

ふと、鷹は情につまされるのを憶え、

(いけねえ)

と、そんな情感をはねかえした。

忍びノ者が、夜の女に哀れさを感じていたのでは、緊張を強いられる命がけの仕事に差しつかえる。どこまでも、忍びノ者は非情にならねばならなかった。

だが、その女のほうは、もうほかに客がいないと思ったのか、哀願してきたのである。

「ねえ、お客さま、おねがい、遊んでいって」
「……」
「ね、安くしておきますから」
「あいにくだが……」
と、振りきろうとしたが、女の手は、必死に袖をつかんで、
「お願い、お武家さま、あたし……困るんです。お客をとらないと、叱られるんです」
夜の女にひもがついているのは常識だ。こういうしょうばいでは客に悪戯をされることも多い。ひもでも居れば役に立つのだ。男に生血を吸われるようなものだが、つまらない男でも、身近にいてくれるというだけで、生きる支えにはなるのだろう。
夜の女にかぎらず、岡場所の女にはたいてい、男がいる。間夫か紐か、そんな男の眼が、どこかにあるのか。
意外だったのは、この女が、普通の夜の女と違って、近くのしもた家に案内したことである。むろん、雨夜だから、そこらの草むらに、茣蓙を敷いて、というわけにはいかない。
鷹が、ふと、この女を抱きたくなったのも、夜の女らしくないところに、惹かれたからだった。闇に浮かんだ顔は、なぜか汚れがなかった。
生活の翳りはその白い面の頬に窶れを見せていたが、眼が澄んでいた。
鷹の好みの顔だったせいもある。顔が小さくて、眼が大きく、睫が濃い。鼻は細く小高くて、唇は小さく可憐な感じに惹かれるのだ。えらの張った女は気が強く独りよがりで始末に悪い。

遊ぶよりも、こういう女には遊ばれてしまうことが多い。
「うれしい」
鷹が客になろう、といったとき、女は傘をとり落とさんばかりに喜んで、胸に手を合わせた。
「たすかりますわ」
そんな言い方が、夜の女ではなかった。
案内した二階家は、しもた家に見えたが、ちゃんと内所があって、無双の小障子から、五十がらみのでっぷり肥った狸のような女がじろりと見る。
「泊まりかえ」
と、嫌味な調子で聞こえよがしに言った。
「いいえ、あの……」
「おや、泊まりじゃないのかい、この時刻に、おまえ、遊びじゃア間尺に合わないよ。泊まりにして貰いな」
「でも……」
女は目顔で、早く上へ、と知らせた。
何が間尺に合わないのか。この時刻といっても、まだ八時ごろである。深夜というわけではない。
「泊まりはだめなのかい」
まだ女将は怒鳴っている。

ぼそぼそと、女は何か詫びている。鷹は泊まりでいいぞ、と叫んでやろうかと思った。欲深な婆アを見ると腹立たしい。若い女の血を絞っているくせに、阿漕な稼ぎをしようとする。

僅かな金のことで、女が虐められるのが哀れだった。

「――チョンの間じゃだめだよ、半夜だよ、いいね半夜だよ」

女将はさらに念を押して、急いで線香に火をつけた。

鷹の濡れた傘と、下駄を持って、二階にあがってきた女は、出窓をあけて、そこへ置き、振りかえって、

「すみません」

と、詫びた。

「無理にお願いして、いやなことをお耳に入れて」

「気にするな。それより、おれは泊まりでもいいのだぞ」

「よろしいんです、これ以上、無理は言えませんもの」

半夜は銀三匁ということだった。鷹は黙って、十匁だした。

「まあ、泊まりを……」

「いいんだ。今夜ア用がある。とにかく下へ持ってゆきな。あの婆アに何のかのと、うるせえことを言われると、気分が悪くなるからな」

「済みません。でも、こんなに沢山頂いては」

「なあに、吉原の太夫は九十匁だぜ、それに比べりゃア」

「吉原の花魁と、濡れ辻君とじゃ、月とすっぽんより甚いですわ」

女は哀しげに微笑した。

2

吉原遊廓で、御職を張る花魁は、大名相手だといわれるくらい、格式があり、値段も高く、それにふさわしく豪奢をきわめている。百文二百文の夜鷹とは、あまりにも違った。

同じ女でも、表面に飾るもので、値が違いすぎた。

が、この夜抱いた女は、鷹には、

（花魁よりもいい）

と、思われた。

まだ、肌は荒れていない。鷹を受け入れる動作にも、こういう生業に堕した、狎れと不潔さがなかった。

「まだ、半月くらいなんです」

と、女は恥ずかしそうに言い、鷹の胸毛に埋めるのだった。

女の体毛はうすかった。鷹の手がまさぐると、身をちぢめるようにして、それを避けようとし、羞かしさに耐えているのが、赤面した頬や、眼を開いていられない有様でもわかった。

鷹の指は、女体に狎れている。一指を容れて二指を柔襞が拒むのを知ると、陰唇を巧みに他の指がまさぐる。高指は入ったままで、これも、ゆるやかにうごめいて、奥へのびてゆくのだ。技巧も何もなかった。女は、からだを顫わし、熱い息を吐いて、鷹にしがみついているだけだった。

その幼さは、あるいは技巧をもとめる男には、物足りなさを感じさせるかもしれなかったが、鷹は、その指の腹でなずり捜った膣壁の、ほどよく湿り、ひくひくといのちの鼓動を伝えるような動きに誘われた。

忍びノ者が、女体を愉しむとき、すでに忍びの意識はない。そこには、日常の緊張からの逃避と、それだけに、惑溺への欲求があった。

鷹がこの偶然の出逢いに溺れたのは、この女に〝敵の影〟がなかったからである。

不知火ノ鷹のように、常に多勢の敵を持っている身には、迂闊な女遊びはできない。どこで狙われているかしれないからである。

だが、今宵、雨と闇のこの夜の女には〝忍びノ影〟はなかった。

ただ女の情感が、かれの足を止めたにすぎぬ。これは、もし、かれを狙う者がいたとしても、予測以外のことだった。

忍びのワザに、〝奇の虚〟なる語がある。字句だけでは解し難い。

忍びと忍びのワザが火花を散らすとき奇手、奇策、縦横に用いる。その〝奇〟の虚を衝くという。狙い狙われる身には、行動と思考の常態を如何にデフォルメするかで勝敗が決まる。

忍びは、常に敵の意表を衝くことで、目的を達し、闇に生き延びる。夜の底に死骸を横たえる者は、奇を弄するも凡庸に過ぎた結果である。

忍びのワザも常に進歩してきている。乱世には妙手とされていたことも、新しい道具、もしくはワザも、それが敵と味方とを問わず、ひとたび、眼に触れ、五感に触れたとき、すでに模倣がはじまっていると思わねばならなかった。

それだけ、忍びの世界の秘術の開発は真剣だったのである。

したがって、乱世はすでに昔となり、徳川の治世、漸く三代を数えた寛永の世には、忍びノ者は、多くの流れを経て、それぞれに秘技秘術を会得していると見なければならなかった。

鷹が、この雨夜の女に、その忍びノ影も〝匂い〟も感じなかったのは、はじめから、かれには夜の女と遊ぼうという気がなかったからにほかならぬ。

いまや、ワザ長けた忍びの間にあっては読心の術も珍しくはない。闇中を歩く姿から、思考を嗅ぎとり、対応するのである。

たとえば、酒を欲して歩いているか、満腹して、あとは女をもとめているか、足つき腰つきによって看取する。

鷹が、偶然の女との出逢いに、意外な拾いものを悦び、溺れたのは、罠を仕掛けられていない確信からくるものであった。

鷹は、この女を買おうと思ったときも、溺れるつもりはなかった。

汚れを感じさせない肌に溺れて、鷹は悔いがなかった。指先に識った女の襞にほどよい中締

めと百千の蚯蚓のうごめきを感じた。

「ああ……いや！」

女は背をのけぞらせた。指だけですでに情意は昂ぶり、満ちていたようである。身悶えするごとに、その蚯蚓たちが一斉に熱く愛液を吐いた。それは指を濡らし、潮の満ち干のように、二度、三度とあふれてくるのである。

鷹が、雄々しくそそり立ったおのれを容れると、女体は狂おしく燃えあがり、あの羞じらいの姿が、けものめいた動きで、かれに応えたのだった。

「――やはり、九十夂の値打ちはあるぞ」

おちて後――余炎の中で、鷹は言った。

「いやッ、羞かしい」

女はあらわな肌を掻巻で隠して、それでも尚商売気抜きで、余情を愉しんでいるようだった。

「あたし、こんなになったの、はじめてなんです」

まだ、胸は波打っていた。かたちのいい乳房に汗が流れていた。

秋の雨夜は、肌寒いくらいだったがそれだけ、女は燃えたのだ。肌の甘酸っぱい匂いも、悪いものではなかった。

もう一度、とは、女は口に出せなかった。

が、その表情が、姿態が、希んでいた。夜の雨の中に立っていたときは感じられなかった甘く、柔らいだ女になっていた。

ただ一度のまじわりが、こうも、女体を生々とさせるのか。鷹は、その肌の温みに惹かれるように、ふたたび、女を抱きよせた。

女のからだはまだ濡れていた。鷹は手拭でそこを拭った。燭の淡い明りがちぢれたうすい毛に露を宿していた。

鷹は女の中に入った。

そのとたん、ばすっ、と障子が破れた。星形手裡剣が飛びこんできたのだ。

手裡剣は鷹のぼんのくぼへ――

一瞬、身をひねって逃れた。なまじ、障子越しに自信のあるワザが、機敏な鷹を逃がれさせている。

手裡剣は、女の咽喉へ突き刺さっていた。

障子を破る飛剣の音が、反射的に、鷹を転じさせたのである。

二ノ剣が、さらに、かれを宙に追った。

が、これにも虚しく柱を傷つけさせて鷹の姿は出窓へ。

二階といっても、このころの二階は低い。殆ど屋根裏のような、中二階というほうが当たっている。

素早く大小をつかみとっている鷹。出窓へ出る。その姿へ向かって、隠れていた影がどっと殺到してきた。

三ノ手裡剣を受けとめたのは、利休下駄である。

受けとめただけではない。するどい下駄の歯は、闖入者の顔に、ぼくっと、食いこんでいた。

襲撃者は、そやつを含めて五人。と、一瞥に数えて鷹の姿は一転して、二階の屋根へ。

当然、軒廂を滑って飛び降りると見て、さらに、四ノ剣、五ノ剣が、後追い連打されたが、これも虚しく、雨夜の闇の底へ走り去っただけである。

3

（襲撃者は？……）

鷹は闇の中に潜んでいる。

心当たりはなかった。敵は多いのだ。伊賀者も甲賀者も、それから根来も、そして、風魔はもっとも鷹と宿怨が深い。

長年、鷹を狙いつづけた風魔の女忍、薊を、仆したことが、風魔忍者の一党を敵にまわしている。

伊賀四十九流、甲賀五十三家と称う。

それだけ、流れの違いがある。同じ土地の伝統に生きても、派閥が違い、乱世には、猫額の土地を争って、かれら内部で抗争しあっていた。

したがって、

〝伊賀者〟

が、敵といっても、全部の者と怨恨があるわけではなかった。

ただ、伊賀者の場合、周知のように服部ノ庄の上忍半蔵が、早くから徳川家とつながりを持ち、天正の御難、といわれる本能寺ノ変の際、堺を見物していて一命をも危ぶまれた家康を助けて無事に帰国させた功などで〝陰ノ臣〟から〝表ノ臣〟となって八千石の旗本に取り立てられるなどして、以来伊賀者を糾合して、徳川家の忍者群の統率者となった。

そういう因縁があるので、伊賀者といえば、すべて、服部半蔵の意のままになる連中と思われがちである。

それは大多数には違いないが、全部ではなかった。もともと北伊賀と南伊賀は気候も違い人情も違う。アンチ半蔵の伊賀忍もかなりいたのである。

乱世から治世への大きな転換期には、伊賀のくに人も、それぞれに、その運命が変わってくる。バスに乗り遅れまいとして、服部半蔵の糾合に応じた者たちは、ともかく定職にありつけたわけだ。

えてして、こうした場合、意地を張って、

「忍びノ者が、飼犬なぞになれるものかよ」

と拒んだ者たちは、困窮をきわめて、強盗、窃盗などに落ちていった者も多い。いうまでもなく治世は、忍者の需要が少なくなったからである。

そうした多様性に比べて、相州の風魔は、独特の一族忍者で成り立っている。

北条五代に代々忠誠を尽くして、北条あっての風魔の忍者だったから、天正十八年に小田原落城以来、徳川氏を憎んでいる。

不知火ノ鷹が、老中松平伊豆守信綱に頼まれて請負い忍者だったころに、風魔とは仇敵の間柄になってしまったのである。

相州足柄山中、丹沢一帯の峡谷に隠れ棲む風魔忍者は、武士であるだけに、他の忍びノ者とは、又ちがった意識と執念を持っていたのである。

（一体……誰だ、あの連中は）

忍びであることは間違いなかった。

ただ、あまりにも、タイミングがよすぎたことである。

計画的としか思えない。一度のまぐわいには襲わず、鷹が二度目に女の裡に入ったところを狙って襲ってきた。

なまじの兵法使いならば、あそこでやられている。

計画的であることは、疑う余地がなかった。

（ということは、あの女も共謀だということだ）

鷹は、その夜のうちに、ふたたび、神田河岸へ舞い戻っている。

まさか、半刻も経ぬうちに、引き返してくるとは考えなかったのか、あとには、一人残っていただけであった。

女は、咽喉に繃帯をしていたが、そこには生々しく血がにじみ、苦しげな呼吸が、もう余命いくばくもないことを感じさせた。

あの手裡剣は、星形の軽いもので、なかなか致命傷は与え得ない。

動きを封じ、あるいは、せいぜい眼を潰すくらいのものだ。

が、するどく尖って八方十六角を研いでいれば、頸動脈を切ることも可能だ。

鷹が身をひねって逃れなければ、いまごろ、呻吟しているのは鷹であろう。いや、とっくに命は絶たれている。

雨は一時止んだが、また冷たく夜を濡らして降っていた。

鷹が忍び寄ったとも知らず、一人の男が介抱していた。

頭巾をかぶっていないが、筒袖に軽衫ようの袴で、月代をむさく伸ばしているところも、

（風魔忍び！）

と、見えた。

「お才どの、痛むか」

「ええ……」

答えるのも苦しげだった。

「間もなく良薬が届く、それまでの辛抱じゃ。傷口がふさがれば、すぐにも……」

「いいえ、もう……死んでもいいのです」

かぼそい声であった。

そのとき、カラカラと、板屋根に石でも投げられたような音がした。

風魔の男は外をのぞいた。屋根の上を影が走った。それは、兵法でいうならば〝虚形空ヲ走リテ魚ノ腸ヲ抜ク〟の初歩的なものであった。が、誘われた。誘うだけの巧みさが、その影にあったのであろう。

「うぬ！　鷹か」

刀を摑んで飛びだしている。

影は立ち止まった。雨の中である。影が笑った。風魔は、もっと冷静になるべきだったろう。一人だったことが、焦りを齎らした。猛然と斬りこんだ。その忍び刀は空を徒らに切り、たたらを踏んで、やっと踏みとどまったとき、かれは、おのれのからだから吹き出した血を見たのである。

屋内の淡い灯明りに、噴血が、雨夜に華麗で残酷な虹を描いた。

「し、不知火ノ鷹か……」

鮮かな掬い斬りに、血の虹を見ながら、尚、その正体を確かめたかったのであろうか。凄まじい音をたてて、その風魔の忍びは転り落ちていった。闇の中からあらわれた影は血刀をひっさげたまま、出窓から中へ飛び込んでいる。

夜露が吹きこむように、小雨が影に誘われて舞い込んだ。不知火ノ鷹だった。

「お才！」

「あっ……」

お才は、力ない眼で見た。土色になった顔に、唇も白っぽく、わなわなと顫えて、何か言おうとしながら、声にならない。

――かんにんして。

唇はそう詫びていた。

もう弱っている。風魔の忍びが投げた手裡剣が、鷹が素早く女体から離れたので、誤って、お才の頸を切り裂いたのである。

鷹は血刀を拭っておさめた。

この哀れな女を威す気はなかった。かれとのまぐわいが、たとえ風魔に操られたものであるにせよ、あの一瞬の甘美な時を持った感動は、真実ではなかったか。

「――お才。おれに声をかけたのは、偶然ではなかったのだな」

かんにんして、またその唇は言った。

「罠だったのか」

「……」

「風魔と見た。そうであろう」

「……」

「手裡剣のかたちでわかるのだ。いまさら隠しても詮ない」

「は、はい」

「風魔と、そなたはどんな関係にあるのだ。まさか……」

忍びではあるまい、と言いかけて、言葉を嚥みこんだ。

聞くまでもなかった。

女忍はからだつきでわかる。鍛錬したからだは、痩せていても、筋肉の張りが違う。硬い。骨が太くなるのは避け難いのである。

ために、是非とも女忍をして嬋娟たる美女に仕立てるときには、いまだ一人前にならざる者を用いるしかない。

少女から女へ——まだ開花したばかりにして、忍びのワザも、必要なものだけを習得して、身を挺する。

お才は、それと違った。その柔らかいからだには、鍛錬の証拠がなかった。

骨はあくまでも細く、肌の肉附きはしなしなと柔らかく、その楚々たる風情は作りものではなかった。

「——忍びとは思えぬ」

「……」

「そなたが、なぜ、忍びに手を貸すのだ、そのいわれを知りたい」

手を貸した風魔によって命を奪われる結果になったのだ。

お才の、それが運命だとしても、ひとときの快楽をむさぼったあとだけに、鷹は非情になれなかった。

「あたし……」

苦しい息の下から、お才は何かを言おうとした。

「あたし……小田原の……」

「小田原の城下か？」

「あ……」

お才は喘いだ。致命傷を受けているのだ。唇がかわいている。

「待て、水を貰ってきてやる」

鷹は下へおりようとして、階段のところまで行った。

そのとき、階段に、風の走るのを聴いた。

それは、突風といってよかった。鷹がはっと、振りかえったとき、一陣の黒風のような影が、窓から飛びこんできたのである。

鷹に向かってではない。お才のからだにかぶさるようにして、腕をふりおろすのが見えた。

「何をする！」

鷹の手から、手裡剣が飛んでいる。これはお才に致命傷を与えた風魔の八方手裡剣であった。

忍びノ者は、常に最少の忍具で最大の効果を発揮する。相手の手裡剣を奪っておのれの武器とするのは、当然のことである。耳の下、頸動脈に、がっと食いこんでいる。

のけぞった男の手に、忍び刀が抜かれ、その鍔子がすでに血ぬれているのを、鷹は見た。

飛び込んでくるなり、一刺しし、ふた刺し目の刀を振りあげたとき、鷹の飛ばした手裡剣が頸に突き刺さったのである。

「痴れ者め」

駈け戻るなり、鷹は蹴倒した。
執念ぶかい、そやつは呻きをあげながら、血刀をなおもふるってこようとするのを一颯に斬った。
そして、お才を抱きおこした。
お才の双眸に滴があふれ、美しい涙が流れた。
「しっかりしろ、お才」
「あ、あ……」
何かを言おうとしながら、唇が虚しく動いている。
「何だと言うのだ」
唇を読んだ。声はもう出なかったが、唇は、最後の力でもって、何かを伝えた。
(ゆ、み……)
ゆみ？
弓？
「弓か、弓がどうしたのだ、おい！」
鷹は女体を揺すった。お才は、その声を聞いて頷いたようである。あるいは、人形のように、がくりと頭が動いただけかもしれない。
重く、お才のからだは、鷹の腕の中に沈んでいる。
その死顔には、苦痛の底に安らかなものが見えた。

あるいは、鷹の腕の中で死ねる満足感があったのであろうか。
「お才！」
鷹は、その唇を見た。唇はしだいに色を失っていったが、
(ゆ、み……)
と、動いているがごとくに見えた。

4

(弓か？……)
何を意味しているかわからぬ。
風魔はすでに死んでいる。白状させようがなかった。この家の女将は、まるっきり、お才の素姓を知らない、と言った。
数日前に来たばかりである。岡場所ともいえない、もぐりの女郎屋なのだ。
岡場所は、公娼に対する私娼で、公認されてはいないが、ふだんには、黙認のかたちになっている。
町役人たちのお目こぼしになっているわけだ。吉原から突き上げがあったりすれば狩り込みをやる。
それまでは、酒代を威しとる場所と心得ている。

その岡場所は先ごろまでの公安取り締まりの隠語でいえば青線で、この夜の女などは白線というわけだが、現代でもその夜の女などの素姓を捜るくらい難しいことはない。

女将が知らないというのも嘘ではなさそうであった。鷹を罠にはめるための行動だとすれば、尚更、紐のたぐりようはない。

「何か残したものはないか。お才の手廻りの物はないのか」

着替えの包みがあるだけ、という、いかにも夜の女らしい貧さだが、そこまで窶していたのか。

辻君は普通、茣蓙を抱えていて、星空の下か樹蔭、空小屋などで、春をひさぐ。

しかし、それでは、いくら何でも浅ましいので、屋根のあるところを借りるようになる。

岡場所の局見世というのは、九尺二間の、作りもそのようにはじめからできているのだが、もぐりの家は、したがって、女が男を連れてくるだけの関係だから、一時的な部屋貸しということで、あいびきの宿のかたちをとり、法網を潜り抜けているわけだった。

だから、こんな事件があると、岡っ引きたちに目をつけられて強請られるのがおちだ。

女将にしてみれば、そっちの方が心配らしくぶつくさ言っているのに耳もかさず、鷹はお才の包みをひらいてみた。

着替えや下着があるだけだったが、その中に、小さな包み紙が目についた。風祭社の朱印が捺してあり、中には臍の緒が入っていた。

普通、臍の緒というのは、いわば血縁の証拠資料で、生年月日と、名前、両親の名前などが書いてある。

ところが、この臍の緒の包み紙には、何も書いてない。

「はて、面妖だぞ」

名前が書いてなければ、誰の臍の緒かわからない。持っている意味がない。

(お才のものか?)

そうかもしれぬ。ともかく、この風祭の社が手がかりになる。

不知火ノ鷹はその夜のうちに、相州小田原に飛んだ。小田原の城下から、箱根路を少し登ったところに、風祭の村がある。

社は小さなものだった。早川の渓流を見おろす丘の上に鬱蒼たる樹々に囲まれて風祭の社がある。

雨は、翌日の陽が上がるとともに晴れて、箱根路の緑は山頂の方では楓など紅葉しはじめていたが、このあたりは、雨あがりの陽ざしが、かなり強くなって、残暑のきびしさが感じられた。

人影のない小さな社である。

訪ってみたが、返事はない。裏の方で音がしている。樵でも木を切っているのかと思って、まわってゆくと、白衣の袖を襷でからげた神人が薪を割っていた。

「ほ、お詣りか」

むしろ、呆れたような眼で、ちらりと一礼しただけである。
「ちと、ものを尋ねたい」
鷹は、神人に近づいた。
「御用か」
「この臍の緒だが、こちらの紙で包んであるので、わかるかと思って来たのだが」
神人は斧を捨てて、手にとってみた。
「正しく、当社の奉書でござるな」
「心当たりはないか」
「さあ、何せ、名がないのでは」
たいてい臍の緒は奉納して、無事出産の御礼とか、病魔退散、健康で育つようにとの祈願にあげる。
そうした臍の緒はどう始末するのか知らないが、少なくとも、この社に関係があるのは事実だ。
「氏子も少なくないのでのう」
と、神人は言った。
「いつのころのものかもわからぬし……しかし百姓じゃな、生年も名前も記されてないのはのう」
他人事のように言っている。

不親切かと思うと、そうではなかった。
江戸から来た、と聞くと、
「泊まってゆきなさるがええ」
と、奨めた。
忍びノ者には屋根があろうとなかろうと大したことはない。樹下石上草中どこでも眠れる。
が、神人は、心当たりに聞いてみるから、と言うのだ。
この風祭の社と関係があることは確かなのだ。鷹は泊まることにした。
「こちらにお出でなされませ」
どこからか巫女があらわれた。
白衣に緋の袴、黒髪が腰のあたりまである。愛くるしい娘である。十四、五であろうか。
「世話になる」
女のあとについてゆきながら、鷹が意外に思ったのは巫女の歩きかただった。白足袋が、すっすっと、滑るように歩いてゆく。
「……」
忍びノ者は、表情や饒舌り方だけでなく、動作で推断することが多い。
後のことだが、関所役人と胡麻の蠅は歩きかたで懐中を視る、といわれたが、忍者も、また同じく、懐中を推測することができる。
金や銀や青銅など三貨はいずれも重い、自然、腰つき歩き方も違ってくるのである。

ところで、この巫女の歩き方に不審を感じたのは、
（盲目ではないか？）
と、思われたのだ。
巫女の眼はあいていた。
が、その部屋に案内してから振りかえったとき、眼は見えないことを、はっきりと知ったのである。
「ここでございます。むさ苦しいところですけれども、ごゆっくりとお休みなされませ」
「忝ない。ところで、そなた、眼が不自由なのか」
「はい。生まれたときからです」
巫女は淋しく微笑んだ。
その表情に、ふっと、鷹はお才を思い出した。
似ていたからだろうか。
（似ている！）
と、感じたのは、その夜、巫女を抱いて、しなやかなからだをまさぐっているときであった。
鷹が、巫女を襲ったのではない。女の方が忍んできた。
闇の中に、女の匂いがしたとき、鷹は目ざめている。
咄嗟に、
（巫女か!?）

と、感じたのは、なぜだったろうか。あき盲目の表情に惹かれていたのであろうか。
へやに入ってくると、巫女は、夜具のなかに手をさしのべ、鷹の胸毛のあたりを撫でた。
柔らかい掌であった。それが、何らの危険をも感じさせなかったのは、お才の場合と同じである。
女の掌は胸毛を撫で、その手をしだいに臍から下腹部へおろしてゆく。
（この少女が!?）
驚きが大きかった。
女の掌は憑かれたように、男の肌をまさぐりあてると、鷹の手をつかんで、おのれの秘所へと誘うのである。
それは、緋の袴という意識によって、甘美さを倍加した。
「そなた……」
「言わないで、何も」
女は熱い息で囁いた。
片手で忙しく、袴の紐を解き、足で蹴るようにして、脱ぎ捨てる。白い下肢が眩しいほどだった。
その間に白衣も前がひらき、思ったより、量感のある豊かな乳房が、眼の前に揺れた。

5

男も女も性愛に於ては、同じ執着と欲求があるはずであるが、能動的に創られているという意味で、男の方に負目がある。性器が勃起し、昂奮の極みにあるとき、男はすでに女に負けたといえる。

それに耐えることが至難だからである。

女の掌は、鷹のものをなずって、そのたかぶりを熱く感じると、からだをずらして、唇をつけた。

舌の先がちろちろと、舐める。

少女のくせに、そして、巫女のくせにどうして、そんな技巧を識っているのか。

それは技巧というより、無邪気なほどの少女の性的欲望の発露だと見るほど、鷹は甘くはなかった。

(お才の肌に溺れたとき……手裡剣が飛んできた)

いままた、女体に入らぬうちに、それを感じた。

刹那、快感を断って、鷹は身を転じている。

「しゃっ!!」

鷹のいたところに、刃がひらめいたのである。

女は鷹の股間にうずくまっていた。したがって、刃は鷹を襲って、女を傷つけることがなかった。が、虚しく、夜具を切っている。瞬後に逆の側から、槍の穂先が、伸びてきた。

「や、しまった」

「彼奴! どこへ?」

二人とも渋染めの装束に身を固めた——忍びノ者である。

〈ここだ〉

返事は天井でした。

鷹の姿は、天井にあった。ぴたりと、貼りついていたのである。

「あ、あそこに」

「くそ!」

槍をとりなおす。とたんに、かたりと天井板がずれて、鷹の姿は天井裏へ。

「ぬッ、逃がすな」

槍がざくっと、突き上げる。

ただ、突いただけではない。突くと同時に槍を撓わせて飛び上がっている。天井板を蹴破って、天井裏へ。みごとであった。忍び刀を抜き放っていた方も、咥えるや、そのあとにつづいた。

社家の天井裏である。真暗ななかで如何なる争闘が行なわれるのか。巫女は事態が急変したことで——それは予期されたものであったろうが——急いで緋の袴に足を通そうとした。

と、そのからだがふわっと宙に浮いた。
空を走りだしている。
「あっ、いや！」
もがいた。
鷹は、どこから、どうあらわれたのか、巫女のからだを横抱きにして走り出していたのである。
風祭社の急坂を疾風のように駈けおりて、村の中を走る。緋の色が宙に舞った。
袴が脱ぎ捨てられたのだ。いや、鷹の手が走りながら、剝ぎとり、うしろへ投げたのである。
下半身が剝きだしになり、可愛く、くりっとした尻と、すんなりと長い下肢がもがいている。
飛ぶ。飛ぶ。
軽々と横抱きにしたまま、鷹の姿は、村の中を、疎林を突っ切り、丘の麓をまわり、小田原の城を望む山蔭に来て、漸く、巫女は投げだされた。
裸身はくるくると、叢を転がった。
「眼がまわったか」
と、息をついて、鷹は言った。
「いや、盲目だと、眼がまわらぬか」
巫女は草に突っ伏したまま、無言だった。豊かな黒髪が、ぱっとひらいて、白い背を蔽っている。そのまるく、かたちのいい尻が、波うっている。

その白い肌に、鷹は欲望を甦らした。
かれは、やにわに飛びかかり、下肢をひろげた。すでにして、男のものは前に増して、ふくれ、屹立している。
「女、おれは、ものごとを途中でやめることができぬ性分だからな」
「……」
「持ちかけたのは、その方だぞ」
背後から下肢をひらくや、その熱く硬く雄々しいものをあてがった。女体は待ちかねたようである。とろとろに濡れていた。
横抱きにされ、宙を飛んだ爽快さ。それは理非を超え、女体を陶酔させたのである。
淫らに濡れた部分は、鷹の熱く硬い肉を受け入れた。背後からである。両脚を踏んばり、鷹の手は、恰も、女体をひき裂くかのようにひろげて入れている。
ひとたびやんだ虫の音が、また、しだいに沸き起こっていた。
鷹の動きははげしく、ついに巫女は歓喜の声を奔らせた。
「こ、殺して！　いま、殺して！……ああ、好い、好い、好い！……」
鷹がいのちを絞りだして、身を離してからも、まだ、巫女は草の中で悶えていた。
「――ゆみ、か」
「……」
「ゆみ、というのだな」

「は、はい」
「そうであろう、あの臍の緒は、お前のものだったのか」
「――姉さまは……」
余情の中で、白い肌は、まだうねりをやめず、女の声は、喘ぎを残していたが、それは、やがて涙に変わった。
「風魔に威されたのです、姉さまは……あたしを助けるために、お前さまを殺しに江戸へゆきました」
「そなたを助けるために」
「はい、あたしが、盲のために、風魔の言いなりに……」
小田原の北条氏を支えてきた風魔一党はいまでも、小田原城下に人気がある。風祭の社ともつながりがある風魔の忍者は、しだいに数を減じてきていたが、不知火ノ鷹を仆すには、忍に忍のワザをもってしても敵わぬと悟り、素人を利用しようとして、巫女のゆみを殺すと威して、お才にあのような真似をさせたのであった。
そして、お才が失敗するや、わざと臍の緒書きに〝風祭〟の社の朱印を以て誘いだしたのだ。ゆみが、大胆な振る舞いも、風魔に命じられてのことだった。
「あいにくだが、おれが死んでやるわけにはいかぬ。が、妙な因縁になったな。風魔の眼の届かぬところへ連れていってやろう、安心してこい」
「有難うございます」

その白い肌をまた軽々と抱きあげると不知火ノ鷹は、風に乗った。颯々たる秋の夜風が相模の平原を吹き、すすきをなびかせ、足柄から丹沢の山波を撫でてゆく。その風よりも早く、不知火ノ鷹は飛ぶ。風魔忍びの桎梏から、可憐な女体を助けだしてゆく。忍びに情けは禁物と知りながら、
（また、おれは情けに負けた……）
苦笑するのだった。その腕の中で、女体は、また快感に酔っているようであった。鷹の疾駈では、またたく間に、相模から武蔵へ入るであろう。それから先、この女体をどうするか。そこまで鷹は考えていないのである。

甲賀毒草譜

1

どんな豪胆な男でも、おのれの飲んでいる酒の中に、突然、血がまじったら、一驚する。鼻をつままれてもわからぬ、漆黒の闇の中であった。

そこにうごめく人影は三十あまり——

異様な闇であった。真夏の夜である。その闇の中で、誰もが、頭巾で面を隠し、紫蘇染め黒の筒袖たっつけ袴におなじ色の脚絆足袋色草鞋、黒ずくめの風体であぐらをかき、酒を飲んでいた。

常人なら、この有様を見ただけで背すじが寒くなるにちがいない。

かれらは酒徳利をまわしていた。徳利は闇の中をひとりでに動いているようであった。

徳利が動くはずがない。手から手へ渡され、それは各自の盃へ注がれ、また次の者へまわされているのだが、注ぐのが素早いあまり、それは自由に軌道を描いてまわっているように見える。

忍びノ者は夜目が利く。かれらが同じ甲賀者でありながら、頭巾に面体を隠し、声を変えているのは、それが掟に触れる話しだったからである。

(甲賀襍記)に、

——この地、〝夜さり語り〟なる慣わしあり、忍びを生業となす者、六月朔ノ日、闇夜をこめて物語りをなすと云う云々……

と、ある。

夜さり語りは、徹夜の物語りだ。甲賀山間部信楽ノ里に起こるといわれるが、これが、江戸時代に入って、尚、江戸の地でも行なわれていた。

忍びノ者は、多くの組織の中にある。組織は掟によって統制されている。

近世政治体制の確立された中で、忍びノ者たちだけは、異色であった。

同じ徳川幕府体制のワクの中にありながら、その内奥は、閣僚たちもよく知らない。

伊賀甲賀組と一口に呼ばれ、頭領は伊賀者上忍の服部半蔵、初代半蔵正成亡きのちも、その血をひく者が頭となっていることから見ても、甲賀者は下位に圧えられていることがわかる。

こうした内情に対しては閣僚は一切口を出さなかった。

もともと、忍びノ者などは、

〝人外の魔性〟
であった。
そうとしか見ていない。人間扱いはしていない。
幕府体制を永遠ならしめるための、〝必要悪〟と、かれら自身が思っているのだ。そのために〝飼っている〟存在にすぎなかった。
が、乱世からの伝統が、かれらの間では、尚、生きていた。
伊賀者は加えず、かれら甲賀者だけで持つ、この一年一度の〝夜さり語り〟はその伝統の一つの象徴でもあった。
甲賀者の掟は、伊賀者よりもきびしい。
が、忍びも人間なのだ。乱世の昔ならいざ知らず、天下が泰平を謳歌しはじめているいま、走狗となって、尚、夜と闇に生きていることは、辛い。
時には、人間的な欲望に揺すられることがある。
任務以外に女を抱くことがある。
小さな盗みを働くこともある。
私的な復讐を行なうこともある。
それらは掟との矛盾がありながら、しかし、甲賀者も人間だという証しであり、大目に見ることで、その伝統は保持されていたのである。
政治は四角な重箱を丸い杓子で掬うようなものだと、板倉政要にあるが、事実、些事に拘泥しないことが統率者の必得とされよう。甲賀者たちは、名を隠し、顔を隠して懺悔する。
懺悔することで、その小さな罪は許される。組織に敵対するような行為さえなければ、どんなことでも、たとえ人殺しでも、

〝小さな〟
罪でしかないのである。
そのときも一人の男が、私的な復讐に就いて、咄々と語っていた。
それが咄々たるものに聞こえたのは、声を偽っていたからである。
〈蒲生一族は、わしにとって終生の敵であった……わしの母は、蒲生氏郷に手籠めにあうて殺された、それゆえ、わしは蒲生家に恨みを抱いた。蒲生氏郷とその一族に対してだ。一族を、この世から根絶やしにするまでは、この目がつむれぬと思うた……〉
不知火ノ鷹は、この席にあった。
三十人ほどの黒い影の一つにまぎれこんでいた。
甲賀者の真実の声を聞くのは、一年にこの夜しかない。
夜明けの靄とともに、真実は再び一年にわたってヴェールをかぶる。
したがって、この夜をはずせば、聞くものも聞けないのだ。
不知火ノ鷹が、盃の中に血を見たのは、某の告白を聞いている最中のことだった。
ぽとり、
盃の中に何か落ちた。

どこから——天井から、それは落ちたようであった。
一瞬、鷹は血の臭いを感じた。
（血が……？）
あり得ようことか。
天井から血がしたたるなどということが。
（だが、たしかに……）
鷹はむろん、何の様子もあらわさぬ。
右も左も甲賀者である。態度に異様なところが見えれば、生きては出られない。
いかに不知火ノ鷹と雖も、三十人の甲賀者を相手にしては、重囲を脱する可能性はない。
鷹は何気ない素振りで立ち上がった。
足音も立てず、影のように部屋を出た。
ここは四谷の甲賀町である。崖下の屋敷であった。ぴったりと崖にくっついて建てられている。
（天井裏に、何かある）
鷹は小用から戻ると、小部屋を見て入った。二階で〝夜さり語り〟は行なわれているのである。
二階の裏窓からすべり出る。思った通り、崖の上にかぶさるように屋根がのびていて、そこに、入口があった。つまり崖の上からは、この家の天井裏に入るようになっていた。

（三階ではないか！）
天井裏というよりは、ここは三階家になっていたのだ。
あたりに人影がないのを見て、鷹はその入口から入ろうとした。
「……」
不意に声をかけられた。
何と言ったか、咄嗟のことだし、隠語だったので、意味はわからなかった。
こうした場合は、殺すか殺されるしかない。鷹はふいに身を躍らした。声の方へ一撃をくれた。相手が、合言葉を放ったは味方と安心してのことだった。
水月の一撃で、その男がぐにゃりと崩れると、鷹は草むらの中にひきずりこんで隠した。
天井裏に入ってゆくと、白いからだがうごめいていた。
女体である。生きていた。ううう、と呻いているのは、女が猿轡を噛まされているからだった。
あたりは夥しい血の海だった。天井からしたたり落ちた血はこれだった。
「おい、しっかりしろ、一体どうしたのだ」
猿轡をはずしてやると、女は喘ぎながら、
「あ、和子は、和子は」
闇の中を見まわしている。
「子供？」

「ええ、赤児が……」

鷹は見た。闇の血の中に、肉塊が転がっている。赤ん坊であった。すでに死んでいた。生まれたばかりの嬰児であった。

(甲賀者は、あの嬰児を殺したのか)

鷹は愕然とした。

裸の女を抱えて出ようとしたとき、ひゅっと夜が哭いた。手裡剣が飛んできた。

(見つかったか!)

鷹は風に乗った。

手裡剣だけではなかった。轟然と数発の銃声がし、焼け玉が耳の傍を掠めた。闘っていては、敵は増えるばかりだ。ここは逃げるしかない。白いぐにゃぐにゃした女のからだは、抱えにくかったが、鷹はひたすら走った。

漸く、追走をふりきったと感じたのは青山の原まで来てからである。

「やれやれ、やっとどうにか脱けることが出来たぞ」

丈高い草むらに、女体をおろして、鷹は、その顔をのぞきこんだが、女はもう虫の息だった。

「おい、しっかりしろ、手裡剣でも掠めたのか」

女体は血に汚れている。

そのためにわからなかったのである。生温い血が背中から噴きだしていた。鉄砲の弾丸が、貫いたのだ。

「おい! 気を確かに持つのだ、話せ、仇はとってやる。一体、おまえは、どこの者だ」

青白い唇が動いた。必死に、訴えようとしている。が、言葉にならぬ。

「ひ、日野……蒲生……」

「むう、日野の蒲生の、蒲生家の、おい、ゆかりの者か、おい!」

「と、富乃……」

それきり、がっくりとなった。弾丸は心臓を傷つけていたのである。

鷹は女体をだいたまま、呆然となっていた。

さっきの〝夜さり語り〟と関係があったのだ。あのとき聞いた話を思いだそうとした。

夏草の青い匂いの中である。

「日野か……」

鷹は呟いて立ち上がった。

「甲賀者が……恨みとか言っていたが、この女に何の恨みがあろう、況や、生まれたばかりの子をひねり殺すとは」

危険は承知であった。鷹は、その足でふたたび甲賀屋敷へ戻っている。

これは、かえって、敵の虚を突くことになる。

「――女をさらわれたぞ」

「どこから入ってきたのか、油断するな」
「あちらか、用心せねば」
「いや、まさか、あちらから、左様な手を延ばしてくるような、左様なことはあるまい」
「わからぬぞ、安心してはならぬ。味方とても安心ならぬのじゃ」
「しかし、伊賀者が、そんな」
疑心暗鬼にかられている連中は、馭し易いものだ。何くわぬ顔で、鷹は群れの中に入った。かれが、先刻、悶絶させた男と衣裳を交換したのは、富乃の血がついていたからである。丁寧に頭巾まで換えた。万全の注意をせねばならぬ。
「どうだ、見つからなんだか」
おいおいに、手ぶらで戻ってくるなかまに声をかけるたびに、かれらのうちに失望が大きくなっていった。
「夜さり語りの場に、何者かに潜入されたとあっては、甲賀ノ者として、大いなる恥辱ぞ」
「伊賀でなければ、彼奴は？」
「根来か？」
「風魔か？」
「わからぬ。問題は、あの女だ」
話の様子から見ると、女のことを知っていたのは、数人らしい。私的な復讐とはいえ、一人ではできずに、親しいなかまを語らったのであろうか。

「蒲生の女だ」
と、言った者がある。
これは鷹だった。が、昂奮した者たちには、その言葉は奇異なものとしては受けとられなかった。事情を知っている者も何人かいたせいでもある。
「もう一度、懺悔をさせい」
その言葉に、雷同する者が多かった。
「そうだ、もう一度聞かねばならぬ」
「もはや、夜さり語りでは済まされぬ。甲賀者一統のためだ」
「はじめようぞ」
十数人——過半数がそれを望んだ。甲賀者たちはぞろぞろと、元の部屋へ戻った。
こうなったら、あの告白者は、語りをつづけねばならぬ。おのれ一人の問題ではなくなっている。
甲賀者たちは、また輪となった。沈黙は、あの告白者への無言の催促である。
それが誰であるかは、かれらにとって問題ではなかった。
事件の核心を衝くことによって、女をさらった〝敵〟を知る。
甲賀者の権威のためでもあった。城を犯されたことは許せない。
〈——あの女は、富乃という……〉
さっきの声が、また話しはじめた。

〈蒲生忠知の側室の一人じゃ……忠知の子を孕んだゆえ、殺した〉

闇は沈黙している。今度は、誰も酒に手をつけぬ。

〈この屋敷へ連れてきたのは、白状させるためであった。忠知の女が何人いるかを……これまでも、わしは、蒲生の一族を次々に殺してきた。さればわしの目的を、彼奴らは察した〉

血の臭う言葉であった。

その語りは、しかし、何の哀しみも、悔いも伴っていない。

まるで、蛇を何匹叩き殺したというような調子であった。

〈側室が何人いるか、隠し女じゃ、それをすべて突き止める……生まれる子をすべて殺すことによって、蒲生は潰れる、ふふふ、わしはそう思うた、あと三人、三人いるそうじゃ、孕み女がの、そこまで突き止めたが〉

「すると、入って来たのは、何れの者じゃ、見当はついているのか」

小頭の多羅尾新兵衛が聞いた。

〈それが……〉

「たわけめ、見当もつかぬのか」

鷹はその問答の間、声の見当をつけていた。含み言葉で、頭巾からもれる、声によって、おのれの位置を明確にするのは拙なるものだ。

その男は、巧みであった。が、鷹には漸く見当がついた。右側の五人目の男であった。そこまでわかれば、もはやあとのことは必要ない。

突然、煙が噴きあがった。わっと、甲賀者が総立ちになる。その中で、鷹の飛ばした手裡剣が五人目の男の肩を掠めている。

それだけで充分だった。混乱にまぎれて、鷹は姿を消した。

2

近江のくに甲賀の日野は、蒲生氏郷ゆかりの地である。蒲生家は、氏郷から秀行に移り、秀行の死後、忠郷が継いだ。

が、忠郷の子が次々と死んでしまったために、忠郷が死ぬと弟の忠知が蒲生を継いだ。

幼名鶴松丸。家康の外孫にあたる。慶長十八年中務大輔と称し、元和九年従四位下にのぼり、寛永三年に侍従に任じ、そのとし出羽国上山の城を賜ったが、翌年に、忠知は蒲生を継いだのである。

伊予の松山に移封されたが、累代相伝の地ゆえに日野をも添えて賜ったのである。併せて二十四万石。

忠知は三十歳だった。

この甲賀日野の地に〝御坊〟と称する旧い屋敷がある。土塀に囲まれて、その周辺は濠がめぐり、中の住人の様子は、外からはわからない。

ここの住人は、ただ、御寮人と呼ばれている。

その御寮人は、二十歳ばかりで、黒髪の見事な女性だった。腰を蔽い、なお長くふさふさとしている。

いましも、広い湯殿で、侍女に、その髪を洗わせていた。

腹部は大きい。臨月と思われる。

むろん、かがむなど出来ないから、長々と仰向けに横たわっていて、侍女二人が、その黒髪を丁寧に洗っているのだった。

女の顔は倖せに満ちている。妊った女の幸福感であろう。

身二つになる日を想い、愛らしい赤児を想像して、その時を待っているのである。

「梢や、わらわの子は、御世嗣と思うかえ」

「はい、それはもう」

梢と呼ばれた侍女は、もう一人の女と目を見合わせて、

「ねえ、お若さん、玉のようなお世嗣さまに、ねえ」

「ほんとうに、きっと……」

御寮人は頷きながらも、

「お殿さまは、それはもう、お世嗣を希っておいでだけれども、わらわは、女児のほうが」

「……」

「あの噂を、お聞きかえ」

「……」

「富乃さまが、そして、御子までが……」

そう言いさした言葉が恐怖にふるえて、

「お世嗣を生めば、悪者に狙われて、母子ともに殺されてしまうという」

「御方さま、そのようなことは」

二人は、はらはらしながら、

「そのために、ここは隠し御殿になっておりまする。決して、誰も知りませぬ。ゆえに、決してそのようなことは」

「ええ、そうですとも、世間では、御寮人さまとだけしか。それでは、蒲生家のお殿様の御部屋様だとは、わかりっこありませぬ。それに万一」

「ええ、万一の場合にも、多勢の強い人が、守っているのですもの。こんな安全な場所はございませぬわ」

「そうかしら」

「そうですとも、御安心下さいまし」

二人は口を合わせて、わざと、笑い声までたてたのは、御部屋様の心を和めるためであろう。

「余分な心配をなさると、ほほほほ、心配すると、お頭が禿げると申すではございませんか、御方さま、この美しいお髪が、一本でも抜けるだけ、御損でございます」

「ほほほほ、梢が、おかしなことを」

漸く、彼女は、その心配を忘れることが出来たようであった。

二人が黒髪をきれいに洗い終えたときであった。湯気が濃くなって、湯殿の中は視界がかすんできた。

「おや、どうしたのでございましょう、ばかに湯気が」

「鑵焚きが、薪をくべすぎたのでは」

「火を落とさせましょう」

二人は腰をあげた。が、そのとき、異様な匂いが、漂ってきて、二人の女は、抱きあうようにして、その場へ昏倒している。

御方さまは、その音に驚いて、

「梢よ……」

返事がない。

「これ、お若はいないのかえ」

それにも返事がなかった。

大きなお腹を抱えているのだ。身を起こすことも辛い。

「二人とも、どうおしだえ、これ」

と、言いながら、湯槽につかまって、身を起こそうとしたとき、

「はい、起きなされませ」

女の声がし、そっと抱き起こしてくれた者がある。

「忝けない、そなたは」

「……」

「誰じゃ」

「江戸から参りました者」

女の声、と思った。濃い湯気の中である。

が、御方さまが、手をのばしたとき、異様なものに触れた。

恟ッとなった。女にはないもの、男のものだった。御方さまの手は、その触れたものをつかんだ。

柔らかく、硬く、熱く、そして掌いっぱいの太さで、ダラリとぶらさがっている。

「お、そなたは!?」

ふふふ、と嘲けるような笑い声が応えた。

「江戸から参った者」

男の声になっていた。そして、男のものが、目の前に、屹立した。大きい。湯気の中で、それは、異様なほどに赤く、そして、御方さまの目には、忠知のそれとは違った雄偉なものに見えた。圧倒された。

「ほしいか?」

男は言った。男は下帯ひとすじであった。締めたまま、その巨大なものを突き出しているのである。

「ほしければ、喰え」

あっと思ったとき、それは御方さまの口の中に突き込まれていた。否も応もない。それもワザであったろうか。御方さまの唇は、張り裂けるかと思われた。だけではない。息が詰まった。あまりにも大きく、口中一ぱいになったからである。

「う、う……う、う」

のけぞる顔に、かぶさるようにして、その男は腰をゆすった。

「ふふふ、蒲生の小伜とはものが違うであろうが、さあ、楽しむがよい、あと僅かのいのちじゃ、味わえ、うんと味わえ、そして、地獄へ行って思い出せ」

下帯の結び目のところにさした短刀を男のうしろへまわした右手がぬきとった。

濛々たる湯気の中であった。

その忍びノ者の目的が、殺しのためだということは、ぎらりと短刀を抜き放ったとき、判然としたのである。

突然、湯殿の中にあらわれたときは、そこまでは考えなかった。

女の湯殿だ。痴漢ということもある。おのれの美貌を自惚れているほど、その傾向が強い。殊に、殺意を直感しなかったのは、深く考える暇もなく、男のいのちの勁さと、情感に燃える熱く巨きなものが、ぬっと眼前に突きだされたことであった。

「あ……」

御方さまは声を失った。

何か言いかけた口の中に、それは、ぶすりと突き込まれている。腰が動いた。そのものは、口腔いっぱいにひろがり、咽喉に届き、突き破るかと思われた。

息が詰まった。もし、そのままでも、御方さまは窒息死したかもしれない。

が、男は、仁王立ちになったまま、短刀を抜き放ったのだ。

湯気のこもった湯殿である。侍女二人は、腰のもの一枚で、御方さまのからだを流したりしていたのだが、これは、忍びノ者に軽く眠らされていた。

「地獄へ行け」

短刀のするどい刃が、女の眼の前でおのれの陰毛をすっと切った。

数十本の毛がはらりと落ちた。

「きさまを殺す気はない。用があるのはその腹の子だ」

「あ……」

「だが、腹から引きだすわけにもいかぬ。ついでに死んで貰おう」

左手が、女の髪をつかんだ。短刀が女のふくらんだ腹に突き刺さろうとした瞬間である。

ひゅっ——と湯気を裂いて飛来した星型手裡剣が、右肩に突き刺さった。

「うぬっ！」

よろめいて、ぽとりと落とす。

巧者な忍びノ者にしては意外な脆さであった。

〈やはり、うぬだな〉

湯気の中で声がした。

〈江戸の甲賀屋敷、夜さり語りを聞いたぞ〉

〈さては！〉

〈その右肩の傷が証拠だ〉

傷つきながら、甲賀者は、一隅に逃れている。

手裡剣の飛来したのを、湯気ぬきの無双窓と見た。が、声は天井の一角から落ちてくるのである。

〈富乃の子を殺したのは、きさまだな、許さぬ〉

「何者だ」

相手は声を投げながら、無双窓をぱっと押し破った。

〈名などどうでもよいわ、富乃の仇を討つ〉

不知火ノ鷹の手から、第二の手裡剣が飛んだ。

が、一瞬に、甲賀者のからだは脱けている。無双窓から、飛びだしていた。

〈逃がさぬ！〉

ひらりと天井から剝がれた鷹は、瞬後に無双窓に飛びついている。と、その面前に、ぷすッぷすッと、小さな針礫が飛んできた。

針ではない。二寸釘であった。下帯一すじとなった甲賀者は、下帯のなかにひそめていたのであろう。

伊賀甲賀それぞれに手裡剣には特徴がある。だが、必ずしもそれを使わぬ。窶しに応じ、時によって使いわける。

針よりも釘のほうが、吐き気を受ける率は多い。速度もまた、針の軽さを抜き、命中度もその重みのゆえに高い。

その甲賀者の口からは絶間なく、釘が吐きだされ、それは恰も、唾を飛ばすが如くに、次々と、鷹の顔を襲ってきた。

どれくらい口に含んだのか、十数本の釘が尽きると、身を翻えした。

鷹が追おうとする眼前に、突然、霞がひろがった。それは、左右側面から投げられた煙り玉によるものだった。

甲賀者は一人ではなかった。助ける者がいたのであろう。鈍い音が樹間に連鎖反応するように次々と起こり、忽ちに、鷹の視界を遮った。

「しまった！　逃がしたか」

この凄まじい暗闘に、漸く、警固の者たちも気づいたと見え狼狽の呼応が起こり、駈けつけてくる気配がした。

鷹は湯殿の中の妊婦を見た。

そのときまでは生きていた。呆然として、まだ気抜けしたようであったが、そこには異常はなかった。

鷹には、彼女を助けねばならぬ義務はない。
が、暗殺の手を阻んだというだけでも、あの富乃の最後の哀願に応えられたような気がしたのである。
あの甲賀者の行先は見当がついている。鷹も姿を消した。
執拗な魔手は、しかし、それで終わらなかったのだ。
――一刻ほどの後――
衝撃のあまり、急激に訪れた陣痛に、屋敷内はまた大騒ぎとなって、産婆が呼ばれた。
まだ半月は余裕があるはずだったのだ。だが月足らずでも、無事に生まれるに越したことはない。
「用心せい、まだ、そこらにひそんでいるやもしれぬ」
警固の者たちは、刀の鯉口を切り、切火縄に弾丸をこめた鉄砲をかいこみ、篝火をあかあかと焚いて、甲賀者の侵入に備えた。
侍女たちも懐剣の紐をとき、板戸の外に膝をくっつけるほどにして、産褥の部屋を守っている。
赤児の声が聞こえたときは、侍女たちは喜びで、手を合わした。
「お生まれ遊ばした」
「ああ、よかった、よかった」
板戸を開けて、

「おめでとうございますえ、御方さま、もし、御方さま」
ぐたりとなって、返事もない。侍女たちが、異様に思ったのは、そこにいたはずの産婆の姿が見えないことだった。
産湯の盥の中に、赤児はいた。胞衣にまみれていた。血どろの中の、それは一個の物体にすぎなかった。
侍女たちは、眉をひそめ、声を失った。
恐怖の悲鳴をあげるまで、数瞬の沈黙があった。
月足らずの、その嬰児の胸に、ぶっつり突き刺さった短刀が見えたのである。
そして、あの産婆の死体は、その少し前に、途中の竹藪の傍で発見されていた。
「すると、あの産婆は!?」
忍者の窶しだったのかと、さらに背筋を寒くして、〝御坊〟の人々は、慄然とした。

3

不知火ノ鷹が松山へ姿を見せたのは、数日後であった。
伊予の松山は、蒲生中務大輔忠知二十四万石。
のちに姫路、和歌山と並んで三大平山城の一つとされた松山城を築いたのは賤ケ岳七本槍の一人、加藤嘉明だった。道後平野に孤立する山（当時、勝山と称した）に築城したが、完成を

見ぬうちに会津へ転封されている。

あとに移封されたのが、蒲生忠知である。

忠知は未完成の二ノ丸を築いて、漸く完成したが、当初から数えると、二十六年もかかっている。

山頂の天守閣は五層の優美華麗にして威厳に満ち、遠く海上からも、その雄姿は望遠され、いかにも二十万石の城にふさわしい。

これに日野四万石を併せて、忠知は領有していたのだ。

この留守城に、江戸と日野の惨事が急報されたとき、家臣たちの狼狽と憤激は甚しく、昂奮のあまり、自ら腹に刀を突き立てた者までいる。

「なんたることじゃ、お世嗣を根絶やしにしようというのか」

蒲生忠知は、参覲交代の中途だ。むろん、報告されていたし、その忠知から、

「留守中の大奥、殊の外、警備に万全の手配あらしめる事」

という命令が家老のところに届いている。

国家老の蒲生治左衛門忠友は、すでに六十を越していたが、ただちに腕におぼえのある兵法者たちを集めて、

「大奥に猫の子一匹通すまい。胡乱の者あれば、ひっ捕え、手にあまらば斬れ」

ことは御家の浮沈にかかる。

世嗣がなければ、御家断絶。家臣らは路頭に迷わねばならぬ。家来たちだけではない。その

家族も含めて、数万人の者が、浮浪者になるのだ。

真剣にならざるを得ない。

鷹が松山城下に入ったのは、警備強化の指令が出る一日前だったからよかったが、後になっていたら、飛ばっちりを受けたにちがいない。

(いかに矢来をめぐらしても、甲賀者の侵入を阻むことは難いぞ)

大奥には、二人の御部屋様がいる。

一人は今日明日にも生まれそうであったし、もう一人は、すでに二歳になる男子がある。が、その子は病弱のゆえに山中に湯治させている。

むろん、その真の目的は、甲賀者の毒牙を避けるためであった。その出生をも秘密にしていたのだが、大名の胤を隠すことは困難であった。身分の軽い者たちは口さがないから、秘密が洩れる。

たとえ当歳でも、江戸へ伴って将軍に拝謁させ、引出物と言葉を賜われば、それが家督の段階になる。

その〝捨丸〟と名づけられた子がこういう無理をしているのは、生来蒲柳の質で、江戸までの道中が難かしいからであった。

道中に耐えられるような健康体になるまで、毒牙から守らねばならない。

君側の数人だけしか、その場所は知らされていない。

「甲賀者が潜入すれば、和子の隠れ場所を探し出すにちがいない、用心を重ねることだ」

治左衛門は兵法者の中から、よりすぐった三人に、日の落ちたあと、闇路を辿らせた。
「万一ということがある。念を入れるに越したことはない」
もとより、三人とも氏郷の代から忠義の家の者である。この土地へ来てから召抱えた新参者の素姓は、ふたたび洗い直された。
しかし、それだけでも、安心できない。臨月のお雪ノ方は、大奥の土蔵に入り、外側には、鉄砲衆が見張り、夜昼なしの見張りで、蟻の出入りすることもできない厳しさだった。
「どうやら、黒い手の狙いは、和子と姫だけであり、お腹さまにまでは、直接に危害を加えないようじゃ」
母が殺されているのは、傍杖を食ったか抵抗のためであろう、と判断した。
その判断は正しい。が、正しすぎて、虚となった。
まず、鷹が、それを感じた。
(甲賀者が行動するとすれば、その線だな……)
搦手を衝く。
忍びノ者は決して、無理はしない。無理をするのは、よほどの場合だけだ。
和子を産んだ側室は、
「お銀ノ方」
そちらのほうは、警戒がゆるやかだった。
忍びノ者の狙い目としては無用だと思われたのである。

大奥に忍び入った鷹は、その警備の手うすに呆れたほどだった。
(家老たちも、頭が悪い)
頭が悪いといえば、地盤と設計にどこかミスがあるらしく、天守閣が傾いているという噂も流れている。
肉眼ではよく見えないが、傾いているといわれると、そのようにも見える。
城下では、そのことを、不吉な前兆のように噂して、不安に蔽われているのだ。
この天守閣が、三層に改築されるのは数年後のことだが、地盤の弛みと狂いのせいだといわれている。
ともあれ、世間の噂というものは、妙にそんな不安をかきたてるものである。
(あれが、お銀ノ方か?)
鷹は大奥の庭先から眺めて頷いた。
忠知がもっとも寵愛しているといわれるのは、このお銀ノ方だ。
侍女を連れて、庭を歩いている。
手入れのとどいた庭であった。池の畔りまで来たとき、お銀ノ方は、ふと立ち止まって、
「渚、そなた、香箱を持って来ておくれ」
突然であった。
侍女は、耳を疑った。御方さまの声とは、少し違うような気がした。
「渚、聞こえなかったのかえ」

重ねてお銀ノ方は言った。
「は、はい……」
侍女はあわてて、ひきかえした。
不審を感じたのは、阿舎の蔭から見守っていた鷹である。
（いまのは……）
声である。
お銀ノ方の声ではない。お銀ノ方が佇んでいた姿は、忍法でいう、〝仮死虚体〟
である。朱唇は動いていた。が、それは動いているだけだったのだ。
そして、声は、別のところから、発されたものだったのである。
（さては！）
忍びノ手がすでにして、お銀ノ方をとらえた。
鷹が阿舎から飛びだした一瞬、お銀ノ方はふらふらと、歩きだした。夢遊病者のそれだった。
侍女を巧みに遠ざけて、甲賀者は、お銀ノ方をとらえたのだ。
お銀ノ方は、ずるずると、無表情に、池の中へ入ってゆく。
「あ、待て！」
鷹は宙を翔けた。
が、かれの手が届く前に、お銀ノ方の姿は池中に没している。

蓮の葉が浮いた池は、彼女が沈むや、異様な血の色に変わった。
（殺した！）
と、思われた。
鷹は、その血の池に飛びこんだ。とたんに、ゆらゆらと藻のようなものが全身にからみついてきた。
（甲賀忍法、黒髪縛りか！）
その黒髪が、お銀ノ方のそれと咄嗟に思ったのが、鷹の失敗かもしれない。
かれは、切った。全身にまつわりつく髪が藻が、ねばねばと粘っこく、執拗な百千のそれを、忍び刀で払い、脱出しようとした。
忍びは敵はむろん、味方に対しても非情冷酷を要求されるのは、巧緻な忍法にかかると、その〝情〟を逆に利用されるからである。
時には、おのれに対しても非情になれる。目的のためには、自ら、両手首を切断させて、逃れた者もいる。その男は両手に穴を通され、鎖でつながれていたのだ。
お銀ノ方の黒髪かと思っただけ、鷹は脱出が遅れた。漸く切り払って、池からはね上がったとき、すでに、お銀ノ方は、池中にいなかった。
むろん、かれを〝五体縛り〟せんとした黒髪は、お銀ノ方のものではなく、甲賀者が懐中から繰り出したものであった。
この〝絡み〟を効果的にするには、新仏の、それも処女の髪がよいとされている。

処女の新仏の、いまだ三日を経ぬもの。そこには女の、女にならぬうちに死んだことの執念がなおこめられているからと、老忍たちは口伝するのである。

さて、お銀ノ方は、池中から攫われて、どこかへ連れてゆかれた。

〈死にたいか〉

その不埒な者は言った。時間が惜しいように、はじめから、ものもいわずに、お銀ノ方を裸にひき剝いたのである。

「こ、ここは……」

あたりを見まわして、愕然とした。

屋根の上ではないか。それも、天守閣の上だった。

〈涼しいであろう〉

ひいーっと、悲鳴が洩れそうになった。が、お銀ノ方は、唇が凍りついたようだった。夢中で鯱ほこにしがみついた。

〈足を踏みすべらせれば、地獄だ。どうだ、落ちてみるか〉

「た、救けて！」

〈みんな喜ぶだろうぜ、真っ裸のお腹さまが、天守閣の上から落下する……〉

「あ、あ……」

〈何処にいる？〉

「……」

〈和子を、どこに隠した〉

鬼の手は、しがみついた女の手をひき剝がそうとした。

「ああ……和子」

絶望的な眼を、お銀ノ方は空にむけた。

もう、一糸まとわぬ裸身であることも忘れた。その眼の中ですーっと、流れ星が尾を曳いておちた。

お銀ノ方が救けだされたとき、失神していた。

「大丈夫か」正気にかえったとき、お銀ノ方は、鷹の顔を見た。

「は、はい……あなたさまは」

「おれのことはどうでもよい。和子の隠れ場所を洩らしたか」

「あっ……」

お銀ノ方は慄然とした。が、そこはもう天守閣の屋根の上ではなかった。柔らかい草と大地がどっしりと安定した感じだった。

「あたし……ああ、和子！」

「饒舌ったのか、どこだ、そこは、早く行かねば、和子の命は、ない」

「奥道後です、道後の先の谷の……観音岩というところから、右へ、細路を入ったところ」

しまいまで聞かずに、鷹の姿はその場から離れている。

奥道後の渓流は、奇岩乱岩が重なりあい、両側から山が迫って文字通りの幽邃境である。その観音岩と呼ばれているのは、いかにも観音様が立っているような、突兀たる巨岩が、屹立している。

そこまで鷹が来たとき、河畔に、刃を胸に突き立てられた男が、仰臥しているのが見えた。

「……」

何者か。一目で甲賀者とわかった。誰が刺したのか。警護の者か。

警護の者が、甲賀の忍びを殺る？　その意外さが、鷹を油断させなかったのである。

傍へ近寄った刹那、その死体の苦悶の表情が、突然、にやりと笑った。

〈かかった〉

死体は、飛び上がった。

胸に刺さっていたはずの刀が、逆転して、鷹を襲った。

白刃は、先端が折れていたのである。いかにも刺さっているかに見えたのだ。鷹の姿も、岩上から岩上へ飛び移っている。

〈かかるか、たわけ〉

鷹はさらに翻転した。甲賀者が追うかたちになっている。

が、これは、鷹のワザであった。敗は常に、逆転する。自ら背をむけることで、敵に勝気を思わせる。それは、虚にすぎないのだ。

「くたばれ」

甲賀者は、先端の折れた剣で、一打ち、二打ち、迫った。

鷹が、岩の苔に足をとられたと思った。甲賀者は、斬った、と思った。その白刃が空を切ったのを悟った次の瞬間、鷹の剣がおちた。これを躱して、甲賀者は咄嗟に、突いた。同時に鷹の刀も、甲賀者を突いていた。

同時である。全く、同時だった。鷹の刀の鉦子は、確実に、五寸ほど入った。心ノ臓に食いこんでいた。

そして甲賀者の刃も、鷹の心臓を突いていた。が、それは強い力で、突いたにすぎない。刺さるべき先端は、その刃になかったのである。

ぐたりとなって、今度こそ、ほんとうに、仰向けに倒れた甲賀者は、しかし、それでも、苦笑を口辺に消さなかった。

「や、やったぞ、おれは……」

「……」

「和子を、殺ったぞ、ふふふ、もはや忠知は、いや蒲生は子だねを失った。蒲生一族は、これで絶える……二十四万石は断絶じゃ、ふふふふふ」

その刀の先端は、お銀ノ方の子である捨丸君の胸に深々と突き刺さっていたのだ。甲賀者は、捨丸を殺し、その刃先を折ったあと、追跡してくるであろう鷹に備えた。その甲賀忍法は、おのれのワザによって、おのれが敗れることになったのだった。

甲賀者の血の怨念は、奥道後の清流とともに流れていった。

蒲生忠知が京で狂死したのは、三日後のことである。ために、氏郷以来の名家は断絶した。お雪ノ方が、男児を分娩したのは、その五日の後。すでに忠知の死を知らせる早馬は江戸へ到着しようとしていた。

三成の亡霊

1

女が坐っていた。鎌倉河岸の柳の下である。

蓆を敷き、きちんと正坐している。乞食ではない。身なりも卑しくない。武家娘であった。

柳の幹に、美濃紙二枚をつなげたものが貼ってあり、そこにこう大書してあった。

〝一命売り申し候〟

食いつめ浪人などなら珍しくない。美貌の若い女性だけに評判になった。一人たかり二人たかりして、弥次馬がとり巻いて騒ぎだした。

「なんと美い女ではないけ、命を売るとよ。買わんけ。そこらの湯女にも居らんわい」

「湯女ども顔色なしじゃな。こんな美い女が、いのちを売るとは、面妖なこっちゃ。安けりゃ、

わいでも買うで」
「売物なら買おう。買うたら、たんと楽しめるわな。いひひ、一体幾らかいな」
「高いぞよ、これは。これほどの美い女なら、吉原の太夫になっても繁昌うけあいじゃ、一ト晩九十目の揚げ代があろうにの」
「ふえっ、一ト晩九十目もする女を買いとるちゅうと、いったい何日分出せばいいのかいな」
「そらア、おめえ、勘定してみねえ、あの若さだ。とっても十七。あと二十年は楽しめるわな、一年三百六十日、二三が六の、ええと、十年で三千六百日、その倍で、月のものの日ィ引いても七千日、七千夜は抱くとすると、ええと、ええっと……」
がやがやと、言いたい放題だが、女はそれらに耳を貸すふうもなく、きっと唇を結んで、宙の一点を見つめたままであった。
弥次馬たちが、しかし、それ以上、図々しい真似をしないのは、同じく、傍に但し書きされた文字のためであった。
〝出羽佐竹左京太夫家中小野但馬娘加代十七歳〟
と、はっきりしたためられていた。
出羽の佐竹といえば、秋田で二十万五千石余。大名である。関ケ原の戦に石田三成に与したために、出羽へ追いやられたが、それまでは常陸で五十四万六千石（実高八十万石くらいあった）、徳川家康の百万石に拮抗したほどの大々名だったのだ。
その家中、と明示している以上、うっかり手は出せない。

また、娘――加代は、そのような揶揄する輩は許さぬという顔で、左手には懐剣の袋をはらって握っている。
町人たちが、もしも淫らがましい振る舞いをしたなら、この懐剣が血を噴かせるにちがいなかった。
「ほう、面白いな、美女が命を売るというのか。それは評判であろう」
不知火ノ鷹は、その日、湯女風呂で遊んでいて、この女の噂を聞いたのである。
湯女たちにしてみれば面白くないらしい。悪しざまに毒づいていた。
「ナニ様か知らないけどさ、何も、この河岸であんなアテつけをしないでもいいじゃないかねえ」
「なんのアテつけだ」
「だって、あんな美い女に、あそこに坐られたらあたいたちが、見劣りしてさア、客が来なくなるもの」
「そんなに美い女なのか」
鷹は、ふと興味をおぼえた。
容色が売り物の湯女たちが言うのだから、間違いはない。
事実、人垣のうしろからのぞいたとき鷹は、なるほどな、と首肯した。ただ顔だちが整っているというだけではない。切れ長の眼にも朱唇にも、癖のないすんなりした鼻梁にも、育ちのよさと意志の強さがあらわれていた。

男の征服欲をかきたてずにはおかないものがある。男には美しいものへ憧れるとともに、それを蹂躙することに、異常な興味をおぼえる感情がある。男の持つ闘争心と優越願望のあらわれだろう。もしも、こういう女が湯女にでもなったら、確かに売れっ妓になるに違いなかった。

鷹が近よろうとしたとき、ふいに、騒がしい声が聞こえてきた。

「あそこだ、人だかりがしている。あれにちがいない、ええい恥さらしな」

「早く、追っぱらってしまえ」

「急げ、あんまり噂にならんうちに、始末せねば」

口々に喚きながら、駈け寄ってきた武士たちがいた。七、八人である。その血相を変えた様子から、

「やあ、来やがった」「佐竹だ、出羽の侍だ」「危ねえぞ」弥次馬たちは、あわてて、ぱっと散った。

武士たちは、娘の傍へ駈け寄ると、ぐるりと取り巻いた。

「おい、女、立て」

みんな嚙みつくような顔だった。

「こりゃ！　なんという恥さらしの真似をいたす。うぬは御家の名を辱しめるために、かような真似をしているのかッ」

「許しておけぬぞ、佐竹の御名に関る。屋敷へ引き立てて糾明せねばならん、立て」

娘は無言だった。視線を一点に据えたまま、膝を起こそうともせず、凝っと唇を結んでいるのだ。

「こやつ！　立て、立たぬか」

侍たちは、ますます激昂した。一人が柳の幹に貼った口上紙をばりっと引き剝いて、懐中にしたのは、証拠にするつもりであろう。

「こいつ、お屋敷へ」

別の男が、加代の肩をつかんだ。反対側の奴も、腕をつかんで、立たせようとした。

一瞬、加代はそれをふり払っている。心得があるのであろう。二人の手が、するっとはずれた。

「無礼をすると、許しませぬ」

低いが、ぴしっと、侍たちを圧える声音だった。たたらを踏んだ侍たちは、女手にふり払われたのが、意外そうに、顔を見合わした。

だが、遠巻きの弥次馬たちの視線を感じると、かっとしたように、

「ええい、猪口才なことを」と、ふたたび襲いかかろうとした。

そのとき、笑った者がいる。笑い声は、群集の中でした。

「よせよせ、女が嫌がっているのに、無理に連れてゆくことはない」

ずいと出てきたのは、編笠をかむった一見、浪人者である。不知火ノ鷹という忍びノ者と知っていたならば、佐竹の家中も、軽率な振る舞いはなかったろうが、浪人風とみて、小莫迦に

した。

「なんだ、すっこんでいろ」「わきから口を出すな」刀の柄に手をかけて、睨みかえした。

「口よりも手を出したいのさ」

それが誘いになった。どっと、侍たちは抜刀して駈け寄っていた。

誰が先に抜刀したかわからない。誰も意識になかった。あとから、醒めて、何故、そんな血気にはやったのか、自分自身、理解できないと、誰もが述懐している。

抜刀したのは同時である。侍たちは、鷹の姿を見、その眸に吸いこまれた。

殺気が殺気を呼んだ。無意識のうちに血が騒ぎ、抜刀していた。白刃の光りがかれらを凶暴にして、鷹へどっと襲いかかったのである。

まるで悪夢の中の出来事のようであった。鷹の姿が視界から消え、白刃が白刃を噛んだ。

一点に向かって八本の剣が殺到したのだ。鏘然と、刃が鳴り、火花が散った。味方同士である。さながら、八人とも、悪夢に動かされていたとしか言いようがない。

宵闇が漂いはじめたばかりだったし、暗闇に支配されたわけではなかった。が、何かが八人をとらえ、その濁濁の中から、漸く脱け出たとき、鷹の姿も、女の姿も、消えていたのである。

「何かの術じゃ、まやかしじゃ」

佐竹の侍たちは、ばつの悪い顔を宵闇にまぎらして、屋敷に帰ってきた。

佐竹屋敷は近くの鎌倉町行当たりにある。報告を聞いた江戸家老小羽式部は首をかしげた。

「――その女、小野但馬の娘だと申すのだな」

「事実かどうかは。かように書いてありましたが……」

件の貼紙を差し出した。紙の皺を延べるようにして見やった小羽式部は、暫く沈思していたが、

「このことは、殿のお耳に入れてはならぬ」

と、強い口調で言った。

小羽式部は、昨日受けとった書状を文箱から出して見た。それは、重大な内容であったが、あまりに重大すぎたために、公にせず、胸に納めて、考えがまとまるまで秘匿していたのである。

その書翰は、差出人の名はなかった。普通なら、そういうものは読み捨てる。それをさせない内容だった。

一口に言えば、修理太夫義隆に、佐竹家嗣子たることを辞退することを奨めるものだった。

現当主左京太夫義宣はこの寛永十年で満六十歳を迎えた。正月二十三日、暮に雪が降って寒気きびしく、急に老衰がはげしくなった。先代義重ゆずりの頑健な体軀であったが、めっきり気弱くなって、御代替りも近々のことであろうと、家中では噂している。

すでに嗣子の届けは済んでいるし、義隆は二十四歳。二十万石の大名の当主には若いが、まず順当であった。

義隆は、義宣の子ではない。義宣には子がなく、三弟貞隆（岩城家を継ぐ）の子能化丸（のち四郎次郎）を貰って嗣子としている。十年前、将軍に拝謁して、修理太夫従五位下に叙任、

七年前に侍従にして従四位下に陞っている。

義宣が死ねば義隆が継ぐ。コースはきちんと決まっている。したがって、家臣たちはそのかぎりにおいて不安はない。

その書面は、次のような意味のことが記されていた。

――能化丸どの御家督仕るには不審これあり、東照神君の仰せられ候、長幼ノ序を崩すことこそ国の乱るるの始めなりと、されば、御家督の儀、仙寿丸どのにこそお譲りあるを本道とやせん、修理太夫どの御退隠あるべし……

かなり激越な文章であった。

（仙寿丸のことを、いまさらに……）

小羽式部は、唇を歪げて、書翰を手文庫へ突っこんだ。

仙寿丸というのは、次弟義広の庶子であった。

義広は喝食丸と称い、兵部少輔にのぼって一族の蘆名修理太夫盛隆の養子になった。

だが、蘆名に入る前に、義広はある女に手をつけて、男児を生ませている。

それが仙寿丸であった。その事実は佐竹家の誰もが知っていることではあったが、そういう複雑な家系のことから、仙寿丸は、親子名乗りせず、つまり、義広の認知を得られないままに、捨扶持を貰って、領内六郷村で暮らしている。

能化丸の義隆よりは四歳年長だから、慶長十一年の生まれだ。六郷村は先代の義重終焉の地で、義重は、仙寿丸を憐れみ、目をかけてやっていたのである。

乱世から治世への移行には、単純な戦国武将の感情論だけでは乗りきれない、難かしいものがある。二十万石の家督という問題は、数千数万の藩士とその家族類縁の運命に関るものだから、慎重にならざるを得ないのだ。

その義重が落馬事故で歿ってから、六郷城は破却されたが、御殿だけは残された。御殿と称っても、戦国武将の質素さに馴れ、質実剛健の気風を身を以て、示してきた義重である。

義宣が贈ってくれた綿蒲団を用いず、板ノ間にじかに寝るという頑固な老人だったから、御殿も質素だった。その廃屋のようなところで仙寿丸は暮らしている。

佐竹を名乗るを許されず、六郷三郎と称している。三郎は、先祖の源義光新羅三郎からとったものである。

その不敵な面構えを小羽式部は思いだした。

秋田城下にもどったとき偶然逢った。わざと蓬髪垢面、浪人か山賤かわからない毛皮の胴着をつけ頑丈作りの太刀（これは義重譲りという）を横えた凄まじい姿で、城のまわりを徘徊していた。

むろん、役人たちは、それと知っているから、拘引も、追い払いもできず、はらはらしていると、家士に喧嘩を売ったり、婦女に乱暴したりする。

小野但馬の娘お加代は、たしか、この三郎の身の廻りの世話をしていたはずである。

（――どういうことであろう、この手紙は、三郎どのか、但馬がしたためたものに違いない。そして、加代という娘は三郎に同情して、直訴しに来たのか？）

そう考えるほかなかった。

直訴しても、取り上げるはずはない。義宣は、今日明日という病床にあるし、いまさら家督問題など、もう十年前に、落着していることだ。

義宣の病篤し、と聞いて、三郎が最後の希みをつないでの運動なのか。

（困ったことだ。お加代の奇矯な行動が、市中の噂になれば……当家の家督争いが大公儀に聞こえる、大事になるぞ、これは）

式部が案じていたのは、しかし、家督争いではない。この争いで、ある秘密が表面化することを怖れたのである。

その秘密は、充分、佐竹二十万石を抹殺するにたるものであった。

「知足院殿（義重）さまは、禍根を残されたのう……」

式部は歎息した。

2

その秘密を、鷹が聞いたのは、しかし数日後であった。

お加代は口が固い。恩人の鷹にも、軽々に、事情を話そうとはしなかった。

「お蔭さまで、危いところを助かりました」

神田川河岸まで来てから、あらためて礼を言った。

「危なそうではなかった。要らざる手出しだったかもしれぬな」

「いえ、そのようなことは」

「命売り申し候、が、はじめから、その覚悟なら、危いも何もないことだ」

「お恥ずかしゅう存じます」

お加代の頬に、はじめて、紅葉が散った。

鷹が見せた、めくらましのワザが、お加代には玄妙不思議なものに思えたようである。

「不躾でございますが、あのようなワザ、わたしが覚えたいと思っても、容易なことでは？」

「まず、五年か」

「五年……」悲しげに首をふって、「それでは、とても、一年、いいえ、ひと月でも……」

役立たせることはできない。せっぱつまった気持ちがあらわだった。

「いのちを売るとは、いのちを投げだしても仕とげねばならぬことがあるというのだな」

「――はい」

「事と次第によっては、おれのワザ、役立ててやってもよい」

お加代の表情が、急に、硬いものになった。頼るものとてない身に、突然の好意が、胸を詰まらせたようであった。あまりの嬉しさに、すぐには表情を弛めることができなかった。喜びは、熱い涙となって、双眸をうるませて、盛り上がってきた。

「あ、有難うございます」

そう叫んだとたんに、涙は、あふれ出た。

世間の注意を喚起する。二十万石の権威と闘うには、自分の身をなげだしてするしかない。女の身でいのちを投げだしての行為は、その一点にかかっていた。

漸く、お加代は、鷹にすべてを打ち明けている。前述の家督争いの話であった。お加代が女の身でそこまでするのは、

(三郎に惚れているのではないか)

と、鷹は感じた。

ただの主従の感情では、そこまでしない。武士ならば知らず、女の身なのである。

(難かしい問題だな……)

目的が、しかし、六郷三郎の、家督相続にあるとすれば、佐竹家が取り潰されては元も子もなくなる。

要は、家老や重役老臣たちが、目ざめればいいことであった。長幼の序からいえば、三郎君のほうが能化丸義隆よりも、四歳年長だし、血統も、次弟の方が三弟よりも、筋道が通る。

「家督争いには、興味はない」

と、鷹は、言った。

「誰が大名になろうとも、おれには、事の是非なぞ、わからぬ。だが、そなたの一途の心が、おれは好きだ」

それに、庶腹だという理由で、親子名乗りもされずに、辺境に追いやられている三郎が、哀れだった。

「おれが三郎でも、我慢できぬな、そんな目にあわされては」

しかし、決定的な秘密は、その段階では、お加代は洩らしていない。

「御家中を顫え上がらせることは幾つもあります。それを一つずつ……」

その一つであった。お加代は小さな金の塊りをとりだしたのである。

小羽式部の眼の前に、その金塊が落ちてきたのは、風呂に入っているときだった。

湯殿で小羽式部は、いい気持ちになっていた。かれは近ごろ夜伽をさせている、お直という女のからだを思っていた。

古武士の風格を持ったこの男は、さすがに若い女と入浴して楽しむということはできなかった。それに、老齢である。風呂の中で若い女を抱いたりしていては、そのまま、血がのぼって死ぬかもしれぬ。

(そうだ、一緒に入らいでも、先に女を入れる方がよいそうだな、淡路どのが申しておったな。新湯は老いの身には毒じゃと、若い女を先に入れれば、肌から若気が流れて、老人には、ずんと役に立つそうな……)

そんなことを思っていると、眼の前にするすると、何やら下がってきた。

大きな女郎蜘蛛であった。

「ちいッ、不吉な!」

眉をしかめて、ぱっと払い落とそうとした。と、女郎蜘蛛は、またするするっと天井へ上が

っていった。

「ええい、何ということじゃ、一体どこから……」

湯気が濛々としている。蜘蛛の姿は見えなくなった。式部は、早々に出ようとした。するとまた、するするっと、おりてきたのである。

「ややッ、あれは」

女郎蜘蛛は何かを抱いていた。

壁の金網行燈の灯に、それはキラリと光った。

「き、金ではないか？」

あわてて手を伸ばした。蜘蛛をつかもうとした。が、さっとまた蜘蛛は身を翻えした。抱いていたものが、重く、一直線に落下して、湯槽に落ちた。

（金？……）

金に見えたのだ。そうでなければ、そんな真似はしない。式部は、湯槽の底をさぐった。手に触れた。とりあげてみてはっとなった。あわてて灯に透した。

「き、金じゃこりゃ、なんと……」

金塊であった。それは、鶉の卵ほどであったが、まさしく、金に違いなかった。

透してみると、何やら字がきざんであるようであった。濡れたからだを拭きもせず、上がった式部は、行燈の傍で眼を凝らした。

そこに、はっきりと、

〝出羽院内金〟

の五文字が見えた。

領内の院内で銀が出たことは大公儀に報告してあるが、金のことは隠している。この金塊と文字は、それを暴露するぞ、という脅しだったのである。

「く、蜘蛛が……何ということじゃ」

奇妙なワザのことは、鎌倉河岸の一件でも聞いている。お加代という女が、どこで、そのワザを覚えたか。そのときの浪人者のことも調べねばならぬ。

金山の秘密がばれたら、大変なことになるが、それ以上に、大事なことで、お加代は、さらに脅迫してきたのだ。

翌日の夜だった。式部がお直を抱こうとしたときであった。かれは、まず、女の秘所を丹念に唇と舌で愛撫する。時間をかけるほどいい。老人は勃起までに時間がかかるのだ。

老人の舌でも、唇でも、女の情感をかきたてるには、若者と変わりはない。お直は、老人の舌が、春草の丘や、内股や、肛門の方までさまよい濡らすほどに、漸く春情をおぼえて、悶えてくる。その裸身の動きと喘ぎによって、老人の下腹部にも充血が齎らされるのである。

漸く硬くなったものを、あてがうと、一気におし入れようとして、それが閊えるのを知った。

「はて？」

何か入っていた。式部は指をさし入れた。指先が当たった。硬いもの。二指を入れ、そろそろとつまみ出した。悒ッとなった。

やはり、金塊ではないか。

そして、その金塊に彫られた字を読んだとき、式部の勃起したものは、へなへなと、凋み萎えたのである。

その字は、こう読めた。

〝石田三成いまだ存命〟

いつ、女の秘所にそのようなものが入っていたのか。老人の唇と舌で、丹念に愛撫されて、そこはしとどに濡れていた。

はじめはまるきり、かわいていた。若いお直のほうには小羽式部への情はない。

その若さで、老人のものを受け入れるには、情感の盛り上がりを必要とした。老人もまた、その秘密の部分をたっぷりと時間をかけて、潤おしてやり、眠った情念を呼びさますことが、かれ自身の衰えた気力を、ふるいたたせることにも通じたのである。

凋びたそのものに、いのちが吹きこまれ、漸く、男であることを立証するように、硬く、勃起してくると、式部は、ほたほたしながら、

「それ、若い男には、まだ負けぬぞよ」

と、お直の裡に入ろうとしたのだ。

そこはもう、受け入れるのに不自由はなく、潤おい、むしろ待ちもうけたように、われのものを吸いこむとすら見えたのである。

ずるずると、入る——と、途中で閊えたのだ。

式部のものは、殊更に大きいというほどではない。にも拘らず、途中までしか入らなかった。亀頭が何かに触れた。肉襞の感触ではなく、冷たく硬い。

（はて？）

式部はいぶかしく思いながら、おのれをひきぬき、指をさし入れた。

その間、女体はうつつになっている。お直の表情は弛緩し、恍惚としていた。それは、かれのものを待つまでもなく、充分に感じていることを意味している。

その元凶が、膣の中に在る。二指がそれをつまみ出してきたのだ。

〝石田三成いまだ存命〟

式部を驚かしたのは、その字の持つ事実ではない。明らかに、かれへ語りかけた動機であった。

「何やつが！……」

驚愕は、その金の塊りを、いつの間に膣内に挿入したかということにもあった。

終始、式部はそこを愛撫していた。あるいは指頭もて、あるいは口唇を触れさせた。その間隙を縫って、〝影〟は金塊を入れている。常識では考えられない素早さである。

（誰かが見ている！）

と感じた恐怖が、甦った。式部はまわりを見まわし、金塊を握りしめた。

（——彼奴か、いや、まさか……）

式部の股間は凋んでいた。かれは濡れたまま拭くのも忘れて、下帯をつけた。

「――どうなされまして？」

お直は放恣な姿態のまま、ものうげな声で言った。

そんな女体に、ふと、式部は怒りすら覚えた。

誰かの手で、金塊を秘所に挿入されながら、それに気がつかぬ女の、迂愚さにも腹が立つ。

だが、そんなことで腹をたてているどころではなかった。

（一大事になる！　佐竹家の存亡に関る……）

この出羽秋田で二十万余石、佐竹左京太夫義宣の領内で銀山が発見されたのは、慶長の末年であった。

雄勝郡の院内村の山であるが、この銀山発見は、直ちに、江戸の幕府へ報告されている。

金銀銅など鉱物の発見は直ちに報告するよう義務づけられていた。当時はまだその幕府支配に対して反抗の大名もいたが、何しろ佐竹家は関ケ原で石田三成に与力した罪を問われて、常陸で五十四万六千石の大藩が出羽二十万五千石に移封させられたあとだから、ひたすら幕府の鼻息を窺っていたのである。

公式記録には、千数百万斤の銀が出たとある。

が、実際には、これに金が含まれていたのである。その金の分は、秘密にされた。

財政の苦しい佐竹にとって、どれだけ支えとなったかしれない。

この二度にわたる金塊での脅迫は、

その金のことを、

（幕府へ洩らす）

という意味なのではないか。

そうなっては、佐竹二十万石の存続は難かしくなる。佐渡の金山も採金量が減ったという今日、幕府は激怒するに違いなかった。徳川幕府の成立に与力した譜代大名でも取り潰されることの多い時代だ。外様大名の中でも、殊に幕府から睨まれている立場なのである。

「なんとかせねばならぬ」

式部は、佐竹淡路守や、梅津外記とも相談した。

「大公儀に内通されては、御家が潰されること必定、よほどに考えねば」

「内通するであろうかな？」淡路守は首をかしげて、「元も子もなくなる……されば、二十万石も手に入らぬ」

「六郷なればでござろう。推測にすぎぬ。小野但馬の娘のことと、必ずしもつながっているかどうか」

梅津外記には、まだ、今度のことが理解されていないようであった。

六郷三郎のお守役たる小野但馬とその娘お加代が三郎に同情しての行動は、したがって佐竹の重役たちの翻心をもとめるためであり、佐竹家の改易など希うはずがないと思った。

「いや、それは甘い見方じゃ、人間、おのれがもとめられぬものならば、無になることを望む。二十万石を得るか、ならねば、いっそ改易にと、そこまで思いつめてのことであろう」

お加代だけなら、どうにでもなるが、あの奇怪なワザを持った〝影〟がバックアップしている様子に、式部は容易ならぬ敵を感じたのである。

「――院内金のことと、あの方のことを大公儀に知られたら、佐竹の命運は終わりよ」

「さ、されば、何ぞ方策が」

暫く、式部は思案してみせた。もうとっくに肚裡は決まっていたのである。淡路守と外記の顔を見やって、右手を手刀にして、空を切った。

「これしかない」

「三郎どのを!?」

「左様、それと、いま一人、それ……帰命頂礼」

三人は眼を見合わした。

「なるほどのう、その方がよい、そのことは、大殿も、お心がかりであったことじゃ」

「歳来山帰命寺……こんどこそ、本当の入寂じゃな」

3

意味深げな三人の密談は、誰も近づけぬ屋敷の奥で行なわれたのだが、二人は方針を決めると帰っていった。

そのとき、妙なことが起こっている。二人を送ろうとして立ち上がったとき、床の間の椿の花が、コトリと、おちた。

(不吉な!)

式部は眼の隅で、その赤い色が落ちるのを感じたのである。

椿の花は花弁から散らずに、ぽとりと落ちる。首を斬られたようだといって、武家方では、椿を嫌う者が多い。

幸い、二人はそれに気がつかない様子なので、そのまま送り出したが、とってかえすと、式部は用人をきびしく叱った。

「椿の花は不吉だと申したのを忘れたのか、用いるならば、よく吟味せよと申しておいたではないか」

「はい、そのように致しましたが……」

用人はとりあげてみて、はっとした。

花は落ちたのではなかった。茎はついたままであった。花下一寸ほどのところが、鋭利な刃物のあとを見せて、すぱりと切られていたのである。

(誰が……)

またしても、巧妙の術を使う〝影〟を感じた。

この花斬りこそは、三人の密談を聞いた、という嘲りのしるしではないか。

急がねばならなかった。

(女め! お加代を探し出すことと、そして、たとえ妄動しても、証拠がないようにすること

だ、それさえ始末すれば）

証拠さえなければ、幕府から視察に来ても誤聞化せる。

（鉱山の金を始末することじゃ、記録類を一切焼き捨て、金の痕跡を消す。金の出るところは隠してしまう）

密命を帯びた使者が、出羽へ走った。

九人。

万一を慮った式部は、それぞれの任務をしぼって、集中させることで、完璧を期したのである。

金の隠蔽を主目的とした三人は、無事出羽秋田に到着している。

が、第二班の三人が、出羽六郷へ着いたときは、一人になっていた。

六郷村は仙北の現在の太田市から東南へ十キロほどのところ、かまくらで名高い横手市とのほぼ中間くらいのところである。

往昔、街道の不備なころは、夏は草深く冬は雪に埋もれて、難儀する。遠く海上を秋田へ出て、雄物川を遡るか、陸路は山形から羽州街道を上るか、陸前の方から、奥羽山脈を横断するしかない。

どちらにしても、この正月末の季節は積雪が深い。

三人はそれでも陸前までは、無事に入った。北上川の支流を遡って西進すると、湯田の村々がある。

白木峠、萱峠、笹峠など、幾つかの峠があるが、ともあれ、ここまでくると、あとはひとまたぎだった。

「明日は六郷へ入る。今夜は旅疲れを出湯で癒すとしようぞ」

鍋倉十右衛門、小笹三四郎、長洞藤内の三人は、馬の手当てを宿の者に頼み、手足を伸ばした。

湯田という地名でもわかるように温泉が出る。川沿いに粗末な家が数軒点在して雪の中に湯気をのぼらせている。

むろん、当時は湯治には自炊が普通だが、まれに宿の方で世話をする。供を連れていれば、武家でも自炊したものだ。

三人は刺客だから、供はいない。腕に自信がある。二十歳半ばの逞しい若者たちである。

「万一ということがある。用心を忘れるな」

鍋倉は注意して、湯に入るにも刀を忘れぬようにと言った。

「ははは、案じることはない。出ても熊か狸さ」

「とらえて、狸汁にするか」

小笹と長洞は、それでも大小を持っておりていった。

出湯は岩をたたんだ窪みに湧き、雨雪を除ける簡単な檜皮葺の屋根があるだけだった。

大小は岩かどに立てかけて、脱いだ着物は柱に吊るす。熱すぎれば雪をほうりこめばいいのである。

二人が入ってゆくと、湯気の中に白いものが見えた。
「や、先客じゃ」
「女らしいな……」
二人は顔を見合わして、なんとなく笑いを浮かべた。男同士の好色な感情である。
むろん、山里の出湯で混浴は普通のことだから、憚からない。もっとも、二人とも下帯はしたままだ。
「やあ、いい湯じゃのう」
小笹が馴れた調子で話しかけた。
「ええ、ほんとに……」
女は岩蔭に、身をちぢめるようにして手拭をつかいながら言った。
まだ若い。十七、八であろうか。湯気と宵闇で、目鼻だちはよくわからないが、肌の白さといい、慎しい動作からして、(こりゃ、鄙にはまれな)と、小笹は思ったし、長洞も、(とんだ拾いものじゃて)と舌舐めずりした。
「雪の中で、かような出湯を楽しむということは、江戸では、とんと……」
こういえば、江戸からお出でございますか、と興味を示すかと思ったのである。
宵闇の中で、女は微笑んだようであった。山里の夜は早く訪れる。宵闇には何やら妖しく、胸をときめかせるものがあるのだ。
二人は、いつか、女一人を張り合うようなかたちになっていた。

「どこから来られた」
と、長洞が聞く。
「はい、近くの……」
「左様か」と、小笹が受けて、「この湯に近いとは、羨ましい」
「そなたのような美しい女性となら、草深い山村で暮らすのも、飽きないであろうな」と、長洞は、いっそう甘い言葉を口にした。「わしも浪人して、そなたを嫁女に貰い受けようか、いやさ、金五十両ほども持参して入婿にでも」
「ほほほほ、入婿ならば、こうお出でなさいまし」
女は湯の中で立ち上がると、岩をまたいで上がった。そのとき、くりっとした白い臀部が二人の眼の前で、大きく動き、二人はごくりと咽喉を鳴らせた。
そのときは、もう二人とも、女の姿態に惹かれて、胆を奪われていた。
一種の放心状態になっている。刀をとるのも忘れていた。そのまま、眼をとろんとさせて、のこのこと、女のあとから湯を出た。
裸身のまま、女は、雪の中へ。宵闇の中で、雪の仄白さが異様なばかりだった。湯気に包まれた女体が雪の中を歩いてゆくと、その幽艶さに、二人はもう前をふくらましてしまって、うつつにあとを追おうとした。
小笹は、ふいに髷を誰かにつかまれて引き戻された。
「う……やい、よせ」

そういったとき、長洞も同じく、髷をつかまれて、
「何をする」
「こやつ！　放せ」
お互いを意識したせいだ。邪魔をしたと感じた。小笹は拳を固めて、長洞の頬を殴りつけた。長洞はのけぞり倒れたが、はね起きると、武者ぶりついていった。雪を蹴散らしての友達同士の組んずほぐれつの格闘を、その〝雪女〟は、ほほほほ、ほほほほ、と嬌声をあげながら見まもっている。
雪風のようにも、その声は聞こえ、樹々の触れあう音のようにも聞こえた。
いつまでも帰ってこない二人を怪しんで、鍋倉が刀をつかんで出湯へおりてきたとき、雪の中で、二人はすでに冷たくなっていた。
「どうしたのだ、こんなところで、おい」
抱き起こそうとした鍋倉はぎょっとした。
長洞の口の中に、何やら赤い血のしたたる肉塊が見えた。それは異様なかたちをしていた。男の陰茎のようであった。
「まさか、そんなことが……」
小笹も同じく、血に染まった陰茎を咥えていた。二人のからだは半身が雪に埋もれていたので、一見したときはわからなかったのだが、長洞をひき起こしてみて、判然とした。その股間にあるべきものが、ざくりと、噛みとられていた。

お互いの陰茎を噛み切って同じく果てたと見えた。だが、翌朝、湯田を出発するとき、鍋倉に医者が囁いたのは、
「なんとも奇妙なことでござりました。お二人が咥えていた摩羅はの、なんとお二人自身のものので」
「まさか、左様なことが」
「いえ、食い千切ったあとがな、ぴたりと合わさりましたわい」

4

そんなことができるだろうか。おのれの摩羅をおのれの歯で食い切るなど、不可能なはずであった。が、実際に血のしたたるそのさまを目のあたりにした鍋倉は、ただ言い知れぬ恐怖にとらわれたのである。
翌朝、雪もやみ、美しく陽のさした白木峠を越えて出羽におりていった鍋倉はとにかく、一刻も早く、と焦った。
（六郷三郎どのを討たねば）
先代義重の屋敷を訪れた鍋倉は、廃屋の中に、ひっそりと坐った影を見て、声をかけた。
「三郎さまか」
「……」

「六郷三郎さまか」
「何しに来た」と、背中は応えた。「おれを斬りに来たのだな」
「は……上意にござる」
「よせ。おれには、かなわぬ」
蓬髪であった。熊の毛皮の胴着を着た男が炉端でふりかえった。鍋倉は三郎の顔を見るのははじめてである。が、この家と耳にした風貌と合致したと思った。
「御免！」
鍋倉は一跳した。抜き討ちの一刀が、しかし、三郎のからだに届く前に、かれは、おのれの血を見た。鍋倉の首は凄まじい血を噴いて、数尺飛び、それから、囲炉裏の中に落下した。
「済みましたぞ」
血刀を拭って声をかけると、ほうけた髪を撫でつけて胴着を脱いだのは、不知火ノ鷹であった。三郎に扮していたのである。
板戸をあけて三郎とお加代が出て来た。
「あざやかな腕じゃの、お蔭で助かった」
と、三郎は、鷹に礼を言った。
「いや、礼には及ばぬ。おれは、ただ社稷の安泰のために非情になる為政者どもが嫌いなだけだ。おぬしも、佐竹二十万石など欲しがるな」
「……」

「お加代にかしずかれて、猪狩りをしたり魚を釣ったりして安気に暮らせることが一番ではないか。いや、余分なことを言ったようだ。まだ、おれの用は済んではいなかったな」
「不知火さま、御案内仕ります」
お加代は先に立った。
急がねばならなかったのである。第三班の刺客たちもすでに平鹿郡に入っているはずであった。
「帰命頂礼……この謎の言葉を解くのに随分と苦しんだぞ」
と、道を急ぎながら鷹は言った。
「まさか、石田治部少輔三成が生きているなどとは、信じられなかった。いまでも半信半疑だ」
「はい、御家中でも存じ寄りの方は少ないはずでございますから」
不知火ノ鷹が、お加代に聞いたのは、あまりにも、耳を驚かせることだった。
関ケ原で死んだはずの石田三成が生きているというのである。
佐竹義重にとっては石田三成は恩人だった。人口に膾炙しているエピソードは多いが、真偽のほどはわからない。はっきりしていることは、佐竹義重、義宣父子が常陸の地豪らを平げ、勢力を築いたが、豊臣秀吉の力は北条とともに佐竹を亡すおそれがあった。五奉行の一人石田三成にとり入った佐竹義重は、悉く、その奪った土地を併せることが許されて、三十万石をもうけた。一躍五十四万六千石の大々名になった。当時、徳川、毛利、上杉、前田、島津につ

ぐ大々名として天下六大姓の内に入った。その恩を深く感じていたのである。関ケ原に味方したのも、そのせいだが、伊吹山中から敗戦の身を逃がれた三成は、常陸に来て、義重に匿われ、出羽転封となるにつれて、また出羽へ来た。義重は北郊八幡村に一寺を建てて、三成を置いた。歳来山帰命寺という寺号で、三成は薙髪して、ここで余生を過ごしていたのである。

あの関ケ原戦後伊吹山中で下痢しながら捕われたのは影武者だったのだ。家康は、かれが影武者だったことを知っていたと伝えられる。影武者であっても、その首を三成のものとして、四条河原にさらすことで、天下は安心する。その見せしめが必要だったのだ。そのため、家康の生存中、度々、佐竹のところへ、調べの手が伸びている。

大坂の役で、完全に天下は徳川のものになり、家康が死に、秀忠から家光の代になったが、なお、三成は、枯木のようなからだになって、生きつづけた。

徳川幕府の繁栄を怨みつつも、嘗て天下を二分した石田三成が、生き延らえていること自体に、せめてもの徳川の鼻をあかしているという、自己満足があった。

三成生存の噂が江戸に何度も聞こえたことがあり、佐竹家では、帰命寺の僧は入寂したことにして、三成を山中に潜伏させた。

釣瓶山と三森山の間の雄物川を遠望する景勝の地に、その隠れ家があった。

不知火ノ鷹は、お加代に案内されて来て、眼の前に枯木のような老人を見ながら、この男が石田三成のなれの果てとは、どうしても思えなかった。棗の凋んだような小さな老人であった。風月を俱にして、ただ生きているというだけの枯骨であったが、その双眸はどうかすると、キラリと異様な光りを放った。

「――左様か、佐竹二十万石の安泰のためには、わしを始末した方がいいと――刺客がくるのか」

三成は首をふりながら、もぐもぐと言った。義重は恩を知っていた。義宣もその父の心を重んじた。が、義隆の代になると厄介ものでしかないのだ。

「――わしはどうやら生き過ぎたらしいのう」

くくくっと、鳩の鳴くような笑い声を洩らした。

鷹たちが江戸を発ってすぐに義宣は死んでいる。たしかに三成は生きすぎた。だが、家中から狙われようとは。そのことが、些か口惜しかったようである。

三成が切腹したのは、それから半刻ほどの後であった。

刺客三人がこの隠れ家に近づいたと知って、鷹が返り討ちにすべく立ち上がったのを、おしとめて、三成は次の間にひっこんだと思うと、うっと、息を詰めた呻きが洩れた。

三成は、肋骨の浮いた胸に鮮血を散らせて、みごと鏃腹をかき切っていた。

「ふふふ、当家には、随分と世話になったでのう、これ以上、生きて迷惑をかけてまでながらえるのは、詮ない。鷹とやら、礼を申すぞ」

「御立派だ。治部少輔三成どの」

「治部少輔か、ふふふ、遠い夢だ、遠い昔の……南無、帰命頂礼……」

その声がしだいに小さく消えてゆくのを、不知火ノ鷹は呆然と見まもっていただけである。雄物川に冬の陽がおだやかに光り、数十年の歳月を夢のように感じさせる雪の山の静寂であった。三人の刺客の雪を踏んでくる足音だけが聞こえていた。

解説

縄田一男

徳川幕藩体制の確立期でありながら、その一方で戦国の気風いまだ醒めやらず、一朝ことあらば、天下を覆さんとする者が虎視眈々とその機会を狙っている——世の中がまだどこかキナ臭い雰囲気を持っている元和から寛永にかけての時代は、歴史・時代小説の作者と読者の双方にとって、実に蠱惑に満ちた時代といえるだろう。

本書『忍法かげろう斬り』では、元和後期を皮切りに物語が展開されていくが、「日本史年表」の類を繙いてみても、元和五年に福島正則改易、同六年、将軍秀忠の娘和子入内、同八年、秀忠、家康の七回忌に東照社に参詣（宇都宮釣天井伝説が生まれる）、本多正純改易、同九年、秀忠、将軍職を辞して家光嗣ぐ——という様にお馴染みの事件が並んでいる。また、この時代を彩る史上人物も多彩を極め、従来、伝奇的な色彩の強い時代ものでは、細かな考証に捉われることなく、様々な人物を紙上に躍らせてきた。

すなわち、余は生まれついての将軍なりと宣言して武断政治を押し進めた徳川家光をはじめとして、知慧伊豆と呼び称せられた松平伊豆守信綱、家光の乳母春日局、そして多分に講談化された存在である大久保彦左衛門、柳生宗矩・十兵衛、そして悲劇の女徳川千姫等々。彼らは

既に私たちにとっては、虚実を越えた親しみのある存在となっている。

そして、彼らの中に、権力を握る者にとっては、正に両刃の剣ともいうべき一つの毒＝フリーランサーの忍びノ者を放り込んでみたらどうなるか？　ここから、早乙女貢の傑作忍者長篇『忍法かげろう斬り』は、スタートするのである。本書は、「週刊サンケイ」の昭和四十七年四月十四日号より同四十八年十一月十六日号にかけて連載され、後にサンケイ新聞社から〈風の巻〉（同四十八年一月）、〈火の巻〉（同年三月）、〈地の巻〉（同年五月）、〈水の巻〉（同年七月）の四分冊として刊行された連作を再編成して、文庫化したものである。週刊誌の読切連載というかたちをとった大部の痛快忍者小説で、渡哲也主演（のち、渡、急病のため弟の渡瀬恒彦に交代）、近衛十四郎、天知茂らをゲストに迎えたテレビ・ドラマにもなり、『くノ一御殿』『忍びの鷹』といった改装版も刊行された早乙女貢作品の中でも人気の高いシリーズとして知られている。

主人公の鷹は、辺土に在り、無人の小島や海をおのが縄張りとして鍛練した不知火一族の忍びであり、伊賀・甲賀、或いは風魔の忍びの手だれも瞠目するほどの忍びの業と、女殺しのテクニックを持つクールなナイス・ガイとして登場する。彼は、服部半蔵配下の伊賀者たちとは異なり、その伊賀者たちが行なっては差し障りがあったり、もしくは彼らの手に負えない事件を解決するために松平伊豆守に雇われた、臨時雇いの忍びである。従って、常に普通の忍びより非情かつ危険な立場に佇立せざるを得ず、仕事を引き受けるか否かも金次第、「黄金の光りが俺の気を変えるかもしれぬ」とうそぶき、松平伊豆守の威光など屁とも思っていない。鷹のパートナーとして、二人のくノ一、朱鷺と百舌鳥がおり、彼女らにいわせると、鷹が金を稼ぐのは一族再興のためだというのだが、果たして本人はどう考えているのか――そのクールな面貌と非情な行動からは何人たりとも彼の真意を容易にうかがい知ることは出来ない。

つまり、従来の忍者ものでは、忍びが権力の飼い犬であるが故の非情さ、残酷さといったものが強調されていたが、その構図を逆手にとった大胆な設定が、まず第一の読みどころであるといえよう。彼が松平伊豆守の命を受けて探る事件は、ぼるとがるの鉄砲密輸に絡む加藤肥後守の陰謀（不知火の忍者）に端を発し、千姫乱行の真相解明（ふたり千姫）、大納言忠直卿の密書の奪取（大納言発狂）、快楽に満ちた謎の伏魔殿の探索（女歌舞伎）と、様々だ。そして、幾多の陰謀の陰に見え隠れしていた黒幕の正体が暴露される「闇公方」以降は、かつての雇い主であった松平伊豆守すら敵に廻しての縦横無尽の活躍が強いられることになる。

そうした展開の中で、三葉葵の辻斬りの謎を追う「辻斬り将軍」は、夜毎、辻斬りに出かける将軍家光を柳生十兵衛が諫めるという講談「柳生二蓋笠」を、また「怨霊根来塚」は、将軍暗殺の大陰謀をテーマとした、やはり、講談「宇都宮吊天井」を斬新な趣向によってシリーズに取り入れたものだし、スリリングな忍びの場面の中に、綿密な考証を盛り込み、幕府の対大名政策から各藩の対応、旗本奴や歌舞伎者、湯女の実態等、当時の政治・文化・風俗の諸相を浮かび上がらせていく手法も秀逸である。

また、伊豆守とのパイプが切れた後半からは、鷹が人間臭く情にもろい行動をする話が増えていくのも面白い。忍びの掟から逃れ、平家の落人聚落に住む忍者を暖く見守る「忍びの果

て」等は、冷酷な権力抗争を中心としたこの作品の一服の清涼剤といえるだろう。そして、一巻目の本書は、関ケ原で死んだはずの石田三成が登場する伝奇色濃厚な「三成の亡霊」で幕を閉じる。

早乙女貢といえば、近頃ではすっかり吉川英治文学賞に輝いた『會津士魂』の作者ということになってしまった。しかし、そうした本格的な歴史小説を書く場合でも、本書の様な忍者ものを書く場合でも、作者の視点は、歴史の中に存在した名も無き者たち、もしくは不当に歴史の裏面に追いやられていった者たちを描くという点において、常に一貫している。私は、常々、大衆作家を、大衆の側＝非権力者の立場に身を置く書き手と定義しているが、その意味で、早乙女貢は、紛れもない大衆作家の一人である。

漢語を多用したメリハリのきいた文体の中、忍びのスリルと女体のエロティチズムが横溢する『忍法かげろう斬り』——第二巻以降の鷹の活躍が待ち遠しいものである。

一九九一年一月

徳間文庫

忍法かげろう斬り

© Mitsugu Saotome 1991

さ-7-7

1991年2月15日　初刷

著者　早乙女貢

発行者　荒井修

東京都港区新橋四—一〇—一〇五

発行所　株式会社徳間書店

電話〇三三四三三・六二三一（大代）

振替　東京四—四四三九二番

印刷　凸版印刷株式会社

製本

〈編集担当　前島不二雄〉

ISBN4-19-599263-X（乱丁、落丁本はお取りかえいたします）

〈歴史時代小説〉

おれが天一坊《全二冊》 早乙女貢
見習い同心獄門帳 早乙女貢
残映 早乙女貢
新選組銘々伝 早乙女貢
八丈流人帖 早乙女貢
忍法かげろう斬り 早乙女貢
淀どの覚書 澤田ふじ子
黒染の剣 澤田ふじ子
七福盗奇伝 澤田ふじ子
夕鶴恋歌 澤田ふじ子
闇の絵巻《上下》 澤田ふじ子
けもの谷 澤田ふじ子
森蘭丸 澤田ふじ子
逃げ水《上下》 子母沢寛
からす組《上下》 子母沢寛
父子鷹《上下》 子母沢寛
おとこ鷹《上下》 子母沢寛
昼の月 子母沢寛
駿河遊侠伝《全三冊》 子母沢寛
花の雨 子母沢寛
河内山宗俊 子母沢寛
お坊主天狗 子母沢寛
剣侠阿ノ一番《上下》 富田常雄
忍者 猿飛佐助《上下》 富田常雄
勝海舟 高野澄
西郷隆盛 高野澄
伝宮崎滔天 高野澄
戦国名将伝 檀一雄
真説石川五右衛門《上下》 檀一雄
新説国定忠治《上下》 檀一雄
三代将軍家光 徳永真一郎
後醍醐天皇 徳永真一郎
伊賀者始末 戸部新十郎
伊賀組同心風盗 戸部新十郎
総司はひとり 戸部新十郎
総司残英抄 戸部新十郎
鳴門太平記《全三冊》 富田常雄
風雲真田軍記《上下》 富田常雄
天狗往来 富田常雄
寛永独妙剣《上下》 富田常雄
剣侠阿ノ一番《上下》 富田常雄
柔《上下》 富田常雄
江戸無情《全三冊》 富田常雄
山中鹿ノ介 中山義秀
塚原卜伝 中山義秀
新剣豪伝 中山義秀
伊達藩征服 南原幹雄
いろの罠 南原幹雄
箱崎別れ船 南原幹雄
江戸妻お紺 南原幹雄
廓祝言 南原幹雄
剣聖伊藤一刀斎 仁田義男
荒木又右衛門《上下》 長谷川伸
相馬大作と津軽頼母 長谷川伸

紅蝙蝠 長谷川伸
戸並長八郎 長谷川伸
殴られた石松 長谷川伸
国姓爺《上下》 長谷川伸
西郷隆盛《全二巻》 林房雄
青年《上下》 林房雄
維新の烈風 古川薫
幕末長州藩の暗闘 古川薫
柳生十兵衛 峰隆一郎
柳生十兵衛《龍尾の剣》 峰隆一郎
柳生十兵衛《逆風の太刀》 峰隆一郎
柳生十兵衛《剣術猿飛》 峰隆一郎
風流あじろ笠 村上元三
鎮西八郎為朝《上下》 村上元三
千姫 村上元三
天保六道銭 村上元三
千両鯉 村上元三
八丁堀同心加田三七《上下》 村上元三
加田三七 捕物そば屋 村上元三
加田三七捕物帖 村上元三
三界飛脚《全三冊》 村上元三
海を飛ぶ鷹《上下》 村上元三
天馬往来《高杉晋作》 村上元三
足利尊氏《上下》 村上元三
勝海舟《上下》 村上元三

〈エンターテインメント〉

極道 青山光二
蝶の骨 赤江瀑
春喪祭 赤江瀑
海贄考 赤江瀑
荊冠の耀き 赤江瀑
天皇賞への走路 阿部牧郎
海の放浪者 阿部牧郎
商社崩壊 阿部牧郎
情事の追跡者 阿部牧郎
情事の目撃者 阿部牧郎
情事の脅迫者 阿部牧郎
夜の息づかい 阿部牧郎
金曜日の寝室 阿部牧郎
ニッポン野球株式会社 阿部牧郎
ビル街の官能 阿部牧郎
狼たちが笑う日 阿部牧郎
蜜月新報 阿部牧郎
白い肌の神々 阿部牧郎
抱擁カレンダー 阿部牧郎
夜の肌ざわり 阿部牧郎
天使の寝室 阿部牧郎
20時の誘惑者《上下》 阿部牧郎
娼婦の町の蜜月 阿部牧郎
ドン・キホーテ軍団 阿部牧郎
裸体家族 阿部牧郎
キャリアガールズ《上下》 阿部牧郎
熱い夜の旋律 阿部牧郎
白夜の妖精たち 阿部牧郎
1/2の誘惑者 阿部牧郎
オフィスガールの更衣室 阿部牧郎
ある朝の戦雲 阿部牧郎

週末の交際《上下》 阿部牧郎
快楽の製作者 阿部牧郎
昼休みの情事 阿部牧郎
虹の野望 阿部牧郎
シャワールームの女 荒木一郎
走れホース紳士 石川喬司
競馬聖書 石川喬司
馬家物語 石川喬司
本命 石川喬司編
紳士は競馬がお好き 石川喬司
ホース紳士奮戦す 石川喬司
空海 稲垣真美
徳川女系図《全二巻》 岩崎栄
秘本西遊記 宇能鴻一郎
金髪 宇能鴻一郎
すわっぷ団地 宇能鴻一郎
むちむちぷりん 宇能鴻一郎
むれむれ夫人 宇能鴻一郎
おんな体育教師 宇能鴻一郎
疑惑株 江波戸哲夫
小説通産省 江波戸哲夫
小説郵政省 江波戸哲夫
企業内棄民 青梅浩
ある補充兵の戦い 大岡昇平
わが復員わが戦後 大岡昇平
小説電通 大下英治
ドキュメント 三越の女帝 大下英治
修羅の群れ《上下》 大下英治
渡辺美智雄の総裁選 大下英治
流星企業 太田俊夫
骨肉決算書 太田俊夫
株主総会殺人事件 太田俊夫
虚飾の城 太田俊夫
社長失脚 太田俊夫
悲将ロンメル 岡本好古
日本海海戦 岡本好古
登龍門 岡本好古
蒼海の零戦 岡本好古
最後の艦隊 岡本好古
徐福渡来伝説 移郷の人 岡本好古
揚州の幻伎 岡本好古
ファントム・バルーン 岡本好古
不沈戦艦 岡本好古
東京大空襲 岡本好古
総務部長憤死す 小高根二郎
会社再建腕比べ 小高根二郎
色魔《全三冊》 梶山季之
ミスターエロチスト 梶山季之
かんぷらちんき《上下》 梶山季之
みんな黙れ《全二冊》 梶山季之
どないしたろか《上下》 梶山季之
すけこまし《上下》 梶山季之
名人にて候《上下》 梶山季之
銀座遊俠伝 梶山季之
銀座ナミダ通り 梶山季之
ノンフィクション選集① 日本の内幕 梶山季之
ノンフィクション選集② 実力経営者伝 梶山季之
ノンフィクション選集③ 日本事件列島 梶山季之
ノンフィクション選集④ 昭和人物伝 梶山季之
ノンフィクション選集⑤ ルポ戦後縦断 梶山季之
京都の女 梶山季之
銀座の女 梶山季之
札幌の女 梶山季之
博多の女 梶山季之
知能犯 梶山季之
虚栄の館 梶山季之
甘い樹液 梶山季之
白い廃液 梶山季之
彫辰捕物帖〔一〕～〔六〕 梶山季之
乗取りの背景 梶山季之
嵯峨野の宿 加堂秀三
春雨物語 加堂秀三
愛の空恋の森 加堂秀三
夜より遠い闇 北方謙三
馬賊戦記《上下》 朽木寒三
馬賊天鬼将軍伝《上下》 朽木寒三
救世主第4号 胡桃沢耕史
六十年目の密使 胡桃沢耕史
旅人よ 胡桃沢耕史
太陽の祭り 胡桃沢耕史
危険な旅 胡桃沢耕史
新宿裏町流し唄 胡桃沢耕史
天山・絲綢之路行 胡桃沢耕史 正木信之
動乱の曠野 胡桃沢耕史
ぼくの小さな祖国 胡桃沢耕史
天山を越えて 胡桃沢耕史
情炎つきるまで 胡桃沢耕史
ヒネモス・のたり氏は名探偵 胡桃沢耕史
小説天皇裕仁 小泉譲
女は強く男も強い物語 駒田信二
河内カルメン 今東光
河内ぞろ 今東光
愛染地獄《上下》 今東光
弓削道鏡 今東光
武蔵坊辨慶《全四冊》 今東光
北斎秘画 今東光
太平記《全四冊》 今東光
左遷 咲村観
人事課長の憂鬱 咲村観
三等管理職 咲村観
鉄騎兵、跳んだ 佐々木譲
死の色の封印 佐々木譲
頭取を罠にかけろ 笹子勝哉
赤い絨毯 清水一行
巨大企業 清水一行
ふてえ奴《上下》 清水一行
札束時代《赤たん禅》 清水一行
一億円の死角 清水一行
すげえ奴 清水一行
女相場師 清水一行
不敵な男《上下》 清水一行
派閥渦紋 清水一行
サラリーマン直訴 清水一行
太く短かく《上下》 清水一行

取締役候補 清水一行
擬制資本 清水一行
問題重役 清水一行
事件屋悠介 清水一行
ダイヤモンドの兄弟 清水一行
証券恐慌 清水一行
天から声あり《上下》 清水一行
投機地帯 清水一行
毒煙都市 清水一行
寄生虫 清水一行
最高機密 清水一行
匿名商社 清水一行
大物《全二冊》 清水一行
燃え盡きる 清水一行
砂防会館3F 清水一行
社命 清水一行
株の罠 清水一行
逃亡者 清水一行
時効成立 清水一行

新黙示録北辰の秘宝 志茂田景樹
新黙示録飛龍の秘図 志茂田景樹
新黙示録銅鐸の秘曲 志茂田景樹
新黙示録龍宮の秘画 志茂田景樹
新黙示録北海の秘祭 志茂田景樹
新黙示録安曇野の秘宮 志茂田景樹
冷血の罠 志茂田景樹
制覇 志茂田景樹
邪馬台国の神符 志茂田景樹
悪魔の棲む館 志茂田景樹
桜桃忌殺人事件 志茂田景樹
聖徳太子の神歌 志茂田景樹
戸隠霊峰の神魚 志茂田景樹
悪魔の宿る森 志茂田景樹
黄金の葉茶壺 志茂田景樹
熱き魂の復活 志茂田景樹
首狩りの海上路 志茂田景樹
復活の盟約 志茂田景樹
魔黙示録魔界の裁き 志茂田景樹

魔黙示録魔界の逆襲 志茂田景樹
魔黙示録魔界の慟哭 志茂田景樹
新黙示録卍篇 魔修羅、怒る 志茂田景樹
首領を継ぐのは俺だ 志茂田景樹
拳銃と命 志茂田景樹
隠密ジャイアンツ 新宮正春
小説日米自動車戦争 宗田理
ガラスの靴 宗田理
地下鉄殺人ゲーム 宗田理
破滅への疾走 高杉良
欲望産業《上下》 高杉良
商社審査部25時 高任和夫
ライン河の白い霧笛 高柳芳夫
ベルリンの女 高柳芳夫
摩天楼の弩 高柳芳夫
津軽富士殺人事件 日本大使館殺人事件簿 高柳芳夫
白夜の弔鐘 高柳芳夫
皇帝がのこした影 田中芳樹
谷克二